

南河内郡美原町所在

丹上遺跡・真福寺遺跡

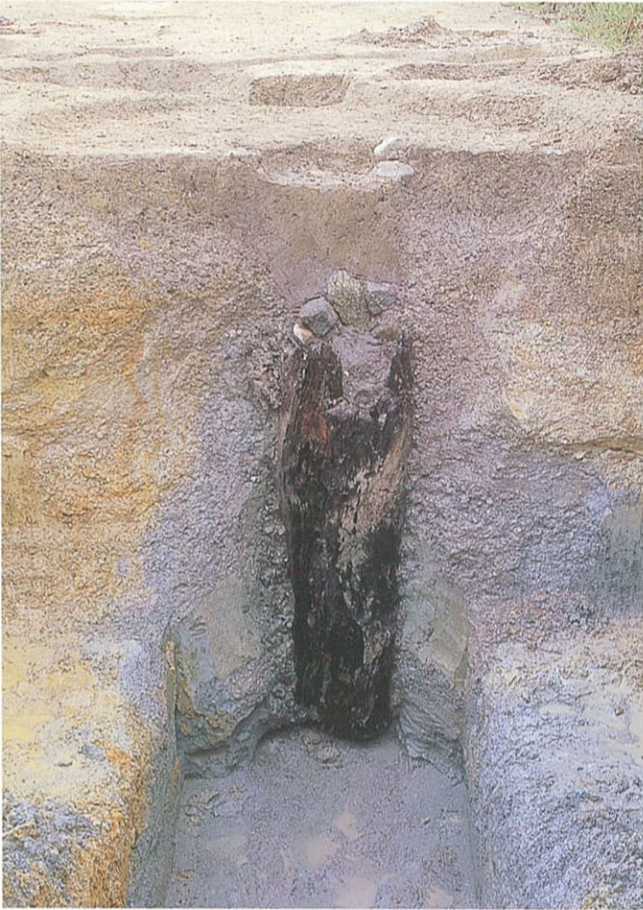
— 南阪奈道路美原ジャンクション
建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



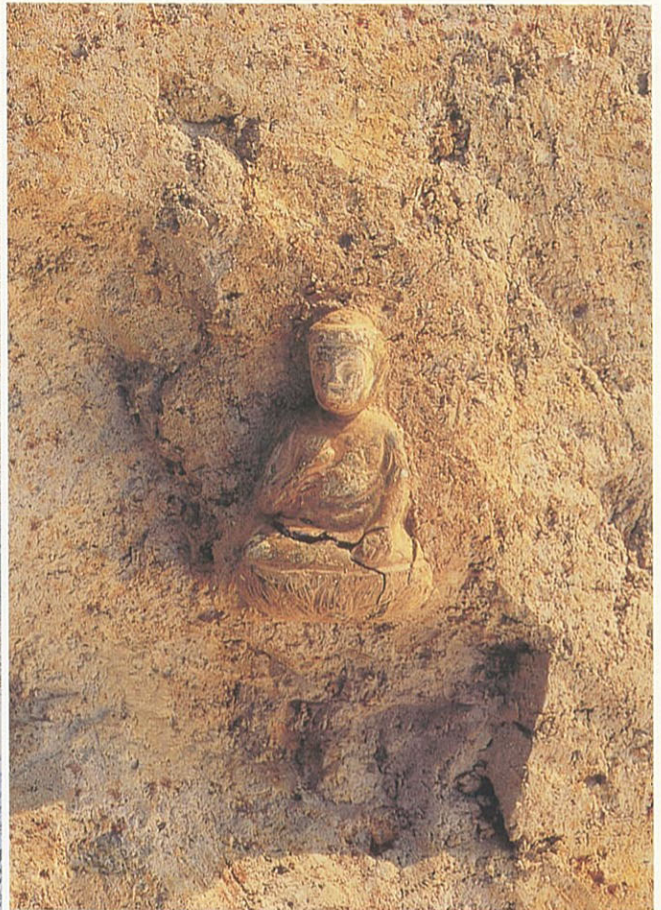
調査地遠景（西から）



3 E トレンチ 掘立柱建物群検出状況（西から）



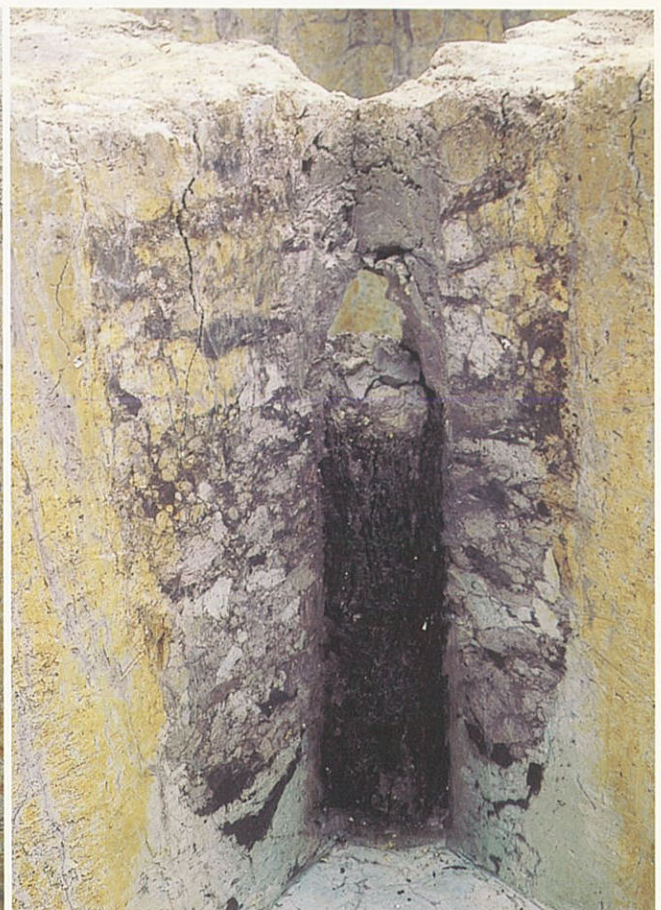
井戸42 断割り (東から)



3Eトレンチ 懸仏出土状況 (北から)



建物12 柱穴118断面 (東北から)



建物12 柱穴113断面 (北西から)

序 文

丹上遺跡と真福寺遺跡が位置する南河内郡美原町は古代河内国丹比郡に属し、平安時代末期から室町時代にかけて朝廷の庇護の下、全国で活躍した「河内（丹南）鋳物師」の里として良く知られた地域で、難波と大和を結ぶ幹線道路の一つ竹ノ内街道に接した交通の要衝の地にあります。

町内には丹比神社や平城宮式の瓦が出土した黒山廃寺・丹比廃寺があり、初代権鑄銭司丹比真人三宅磨呂や造長岡宮司丹比宿禰真浄などの人物を輩出した「丹比真人」や「丹比宿禰」氏の故地とされ、古代から中央との深い繋がりがあったことが窺えます。

阪和自動車道建設に伴う調査では、丹上遺跡からは奈良時代の官衙施設と考えられる大型掘立柱建物群や、官人・識字層の存在を示唆する石銚帯・墨書土器が検出され、真福寺遺跡からは「河内（丹南）鋳物師」の活動を彷彿とさせる梵鐘鑄造遺構・白炭窯や隣接する「黒山廃寺」の創建時の瓦を生産した窯が検出されるなど重要な成果が得られています。

今回の調査でも、新たに飛鳥時代の集落跡や、条里型地割に一致し、半町四方の範囲に計画的に配置され、官衙施設と考えられる平安時代の掘立柱建物群などが検出され、陶硯・墨書土器・緑釉陶器・灰釉陶器・越州窯系青磁などの遺物も出土しており、周辺地域が、飛鳥時代から平安時代を通じて重要な位置にあった事がより一層明らかになりました。

また、「河内（丹南）鋳物師」集団の中に、金工技術を用いる職能集団が存在していた事を裏付ける金銅製懸仏や筭などの遺物も出土しています。

これらの成果は、当地域の歴史を考える上において貴重な資料と言えます。

最後に、発掘調査の実施にあたり、多大な協力を賜った大阪府教育委員会・大阪府土木部富田林土木事務所・大阪府道路公社・美原町教育委員会をはじめとする関係各位の方々に深く感謝するとともに、今後とも当センターへのご支援を賜るようお願いします。

平成14年2月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

理事長 水野正好



例 言

1. 本書は、大阪府松原市立部・南河内郡美原町真福寺地内に所在する丹上遺跡ならびに真福寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大阪府富田林土木事務所松原建設事業所（現、大阪府土木部富田林土木事務所）より財団法人 大阪府文化財調査研究センターが委託を受け、以下の体制で実施した。

調整課

- 参事兼調整課長 中西 靖人（平成12年3月まで）
課長 赤木 克視（平成12年4月から）
係長 藤永 正明（平成13年3月まで）・森屋 直樹（平成13年4月から）
技師 岡戸 哲紀（平成14年1月まで）・山元 建（平成14年2月から）

調査部

- 南部調査事務所所長 瀬川 健（平成14年3月まで）
調査第2係長 阪田 育功（平成12年3月まで）・金光 正裕（平成12年4月から）
同第1係主任技師 立花 正治〔写真〕
同第2係技師 三好 孝一・後川恵太郎（平成13年3月まで）
同非常勤専門調査員 森本 裕美（平成12年7月まで）

3. 木器・金属器類などの保存処理および、樹種鑑定については、中部調査事務所調査第3係主査山口 誠治、同調査第1係非常勤専門調査員立花るりこ（平成13年3月まで）、仁田〔旧姓下山〕 恵子（平成13年4月から）が行った。
4. 現地調査は、平成11年6月5日から平成13年6月28日まで実施し、引き続き南部調査事務所古市分室（平成13年8月まで）および、南部調査事務所（平成13年9月から）で整理作業を行い、平成14年2月28日、本書の刊行を以て完了した。
5. 調査の実施にあたっては、地元美原町教育委員会、丹上自治会・真福寺自治会、大阪府教育委員会、大阪府道路公社南阪奈有料道路建設事務所をはじめとする関係諸機関を始め、下記の方々にご指導・ご協力を賜った。記して謝意を表したい。

【調査指導】〔順不同、敬称略〕

萩原 守・庖丁 道明・泉谷 友博（美原町教育委員会）、森村 健一（堺市立埋蔵文化財センター）、河内 一浩（羽曳野市教育委員会）、南 孝雄（財団法人 京都市埋蔵文化財研究所）

6. 調査の実施にあたっては以下の自然科学的分野からの分析を実施した。

金属器関連 株式会社 第四紀地質研究所 井上 巖

7. 本書の作成にあたっては、各担当者がそれぞれ起稿し、執筆分担は目次に示すとおりである。なお、石器類の図化・観察・報文に関しては奈良大学文学部文化財学科井上雅善氏によるものである。
8. 本書の編集は三好が行った。
9. 本調査に係わる写真、カールスライド、実測図などの記録類は、財団法人 大阪府文化財調査研究センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

- ・遺構実測図の基準高については、すべて東京湾平均海水位（T. P.）を用い、メートル単位で表した。
- ・遺構平面図については、平面直角座標系第Ⅵ座標系による国土座標に則り、挿図における座標数値はすべてメートル単位で表す。
- ・遺構平面図に表す方位針は、座標北を示す。
- ・遺構断面図を作成した位置については、平面図に鉤形で示し、方向は矢印で表す。
- ・遺物等の取り上げに使用した地区割については、『遺跡調査基本マニュアル』財団法人 大阪文化財センター1988年に基づいた。その中で表記が義務づけられる第Ⅰ区画はF-6、第Ⅱ区画は5である。
- ・土色については、小山正忠・竹原秀夫編1997年『新版標準土色帖』第17版 農林水産省農林技術会議事務局監修・財団法人日本色研事業株式会社色表票監修に依拠した。
- ・遺構番号については、現地調査時に付与した番号を基本的に踏襲するもので、序列的なものではない。
- ・掘立柱建物の主軸方向については、棟の方向に関係なく北からの長短軸の角度で表す。
- ・遺物実測図の縮尺については、土器類を4分の1、石器類を3分の2、木器類を6分の1、金属器類を2分の1とした。
- ・遺物実測図の上・下端の外郭線が途切れているものについては、口縁部の残存が6分の1以下であることを示し、調整の変換位置を示す場合には須恵器においては実線、それ以外のものについては1点破線を用いた。
- ・文章中における表現法や仮名遣いなどについては、執筆者の意向を尊重して、敢えて統一していない。
- ・写真に掲載される各遺物の縮尺率は、不同である。
- ・遺物の観察・器種分類・記述に関しては、以下の文献を参考とした。

田辺 昭三 1981『須恵器大成』 角川書店

西 弘海遺稿集刊行会 1986『土器様式の成立とその背景』 真陽社

古代の土器研究会編 1992『古代の土器1 都城の土器集成』 真陽社

古代の土器研究会編 1993『古代の土器2 都城の土器集成』Ⅱ 真陽社

古代の土器研究会編 1994『古代の土器3 都城の土器集成』Ⅲ 真陽社

古代の土器研究会編 1998『古代の土器5-2 7世紀の土器』（近畿西部編） 真陽社

古代の土器研究会 1994『古代の土器研究-律令的土器様式の西・東3 施釉陶器』 真陽社

古代の土器研究会 1997『古代の土器研究-律令的土器様式の西・東5 7世紀の土器-』 真陽社

奈良国立文化財研究所 1978『平城京発掘調査報告書』Ⅶ

古代学協会・古代学研究所編 1993『平安京提要』 角川書店

中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社

横田賢二郎・森田 勉 1978「太宰府出土の輸入陶磁器について-型式分類と編年を中心として-」
『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館

森村 健一 1998「福建省厦門碗窰系白磁碗（Ⅳ-2類）について」『2. 百舌鳥 高田下遺跡発掘調査概要報告書-TDS-4地点-』堺市文化財調査概要報告 第72冊 堺市教育委員会

目 次

巻頭図版

序 文	財団法人 大阪府文化財調査研究センター 理事長 水野 正好	
例 言		i
凡 例		ii

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	金光 正裕	1
----------------	-------	---

第Ⅱ章 位置と環境	(金光)	3
-----------	------	---

第Ⅲ章 調査の方法	三好 孝一	8
-----------	-------	---

第Ⅳ章 調査の成果

第1節 丹上遺跡

第1項 1 Qトレンチ	(三好)	11
第2項 2 Qトレンチ		17
第3項 3 Qトレンチ		23
第4項 1 R・1 Sトレンチ		24

第2節 真福寺遺跡

第1項 1 Eトレンチ		27
第2項 2 Eトレンチ		28
第3項 3 Eトレンチ		56
第4項 4 Eトレンチ		86
第5項 5 Eトレンチ		87
第6項 6 Eトレンチ		91
第7項 7 Eトレンチ		96
第8項 8 Eトレンチ		98
第9項 1 Fトレンチ		100

第3節 金属器・鑄造関連遺物		101
----------------	--	-----

第4節 石器・石製品	井上 雅善	105
------------	-------	-----

第Ⅴ章 まとめ	(三好)	111
---------	------	-----

付 章 丹上遺跡・真福寺遺跡出土鉍滓・金属分析	井上 巖	113
-------------------------	------	-----

目 次

図 1	遺跡周辺図	1
図 2	遺跡位置図	3
図 3	調査区位置図	4
図 4	周辺遺跡分布図	5
図 5	地区割概念図	8
図 6	調査区地区割図	9
図 7	トレンチ配置図	10
図 8	1 Q トレンチ 土坑17・28平・断面図	11
図 9	1 Q トレンチ 平面図および溝 7 断面図	12
図10	1 Q トレンチ 土坑平・断面図	13
図11	1 Q トレンチ 土坑・溝・その他出土遺物実測図	15
図12	1 Q トレンチ 包含層（2 から 5 層）出土遺物実測図	16
図13	2 Q、3 Q・1 R・1 S トレンチ 土坑平・断面図	17
図14	2 Q トレンチ 平面図および溝断面図	18
図15	2 Q トレンチ 包含層（2 層）出土遺物実測図	19
図16	2 Q トレンチ 包含層（3 層）出土遺物実測図〔1〕	20
図17	2 Q トレンチ 包含層（3 層）出土遺物実測図〔2〕	21
図18	2 Q トレンチ 溝、3 Q トレンチ 包含層・溝・ピット出土遺物実測図	22
図19	3 Q トレンチ 平面図および溝断面図	23
図20	1 R トレンチ 上層遺構平面図	24
図21	1 R・1 S トレンチ 平面図および溝断面図	25
図22	1 R・1 S トレンチ 溝・土坑・包含層（2・3・4 層）出土遺物実測図	26
図23	1 E トレンチ 包含層（1 から 3 層）出土遺物実測図	27
図24	1 E・2 E トレンチ 土坑平・断面および遺物出土状況図	27
図25	2 E トレンチ 溝392平・断面図	28
図26	2 E トレンチ 溝断面および遺物出土状況図	29
図27	2 E トレンチ 溝出土遺物実測図	30
図28	2 E トレンチ 土坑平・断面図〔1〕	31
図29	2 E トレンチ 土坑平・断面図〔2〕	32
図30	2 E トレンチ 土坑平・断面図〔3〕	33
図31	2 E トレンチ 井戸42平・断面および遺物出土状況図	35
図32	2 E トレンチ 井戸42出土遺物実測図	36
図33	2 E トレンチ 建物 1・2 平・断面図	37
図34	2 E トレンチ 建物 3 平・断面図	38
図35	2 E トレンチ 建物 4・5 平・断面図	39

図36	2 Eトレンチ	建物 6 平・断面図	40
図37	2 Eトレンチ	建物 7 平・断面図	41
図38	2 Eトレンチ	建物 8・9 平・断面図	42
図39	2 Eトレンチ	建物10平・断面図	43
図40	2 Eトレンチ	建物11平・断面図	44
図41	2 Eトレンチ	建物12平・断面図	45
図42	2 Eトレンチ	建物13平・断面図	46
図43	2 Eトレンチ	建物14から18平・断面図	47
図44	2 Eトレンチ	建物19平・断面図	48
図45	2 Eトレンチ	建物20・21平・断面図	49
図46	2 Eトレンチ	建物22平・断面図	50
図47	2 Eトレンチ	建物23・45平・断面図	51
図48	2 Eトレンチ	土坑・柱穴出土遺物実測図	53
図49	2 Eトレンチ	包含層（1層から4層）出土遺物実測図	55
図50	3 Eトレンチ	溝568・569平・断面図	56
図51	3・4・6 Eトレンチ	溝950・自然流路平・断面図	57
図52	3 Eトレンチ	土坑570・572平・断面図	58
図53	3 Eトレンチ	土坑平・断面および遺物出土状況図	59
図54	3 Eトレンチ	建物24平・断面図	60
図55	3 Eトレンチ	建物25平・断面図	61
図56	3 Eトレンチ	建物26平・断面図	62
図57	3 Eトレンチ	建物27平・断面図	63
図58	3 Eトレンチ	建物28平・断面図	64
図59	3 Eトレンチ	建物29平・断面図	65
図60	3 Eトレンチ	建物30・31平・断面図	66
図61	3 Eトレンチ	建物32平・断面図	67
図62	3 Eトレンチ	建物33平・断面図	68
図63	3 Eトレンチ	建物34平・断面図	69
図64	3 Eトレンチ	建物35平・断面図	70
図65	3 Eトレンチ	建物36平・断面図	71
図66	3 Eトレンチ	建物37・38平・断面図	72
図67	3 Eトレンチ	建物39平・断面図	73
図68	3 Eトレンチ	建物40平・断面図	74
図69	3・6・8 Eトレンチ	建物41・42・44平・断面図	75
図70	3 Eトレンチ	建物43・46平・断面図	76
図71	3 Eトレンチ	建物47・48平・断面図	77
図72	3 Eトレンチ	土坑出土遺物実測図	78
図73	3 Eトレンチ	柱穴出土遺物実測図〔1〕	79

図74	3 Eトレンチ	柱穴出土遺物実測図〔2〕	80
図75	3 Eトレンチ	柱穴出土遺物実測図〔3〕、包含層（5層）出土遺物	82
図76	3 Eトレンチ	包含層（1から5層）出土遺物実測図	84
図77	4 Eトレンチ	土坑948・949平・断面および獣骨出土状況図	86
図78	4 Eトレンチ	2・3層出土遺物実測図	86
図79	5 Eトレンチ	溝952出土遺物実測図	87
図80	5 Eトレンチ	包含層（1から3層）出土遺物実測図	88
図81	5 Eトレンチ	包含層（4・5層）出土遺物実測図	90
図82	6 Eトレンチ	4層上面平面図	91
図83	6・2・3 Eトレンチ	溝19・892平・断面図	92
図84	6 Eトレンチ	溝・土坑・ピット平・断面図	93
図85	6 Eトレンチ	溝・包含層（2から4層）出土遺物実測図	94
図86	7 Eトレンチ	ピット・土坑平・断面図	96
図87	7 Eトレンチ	土坑1004・1024・1033平・断面および遺物出土状況図	97
図88	8 Eトレンチ	溝・土坑・包含層（2・3層）出土遺物実測図	98
図89	8 Eトレンチ	溝1010平・断面図	98
図90	1 Fトレンチ	溝断面および土坑平・断面図	99
図91	1 Fトレンチ	溝・井戸・落込および包含層（3・4層）出土遺物実測図	100
図92		金属器・鑄造関連遺物実測図	102
図93		石器実測図〔1〕	106
図94		石器実測図〔2〕	108

表 目 次

表 1	錢貨一覧表	101
表 2	石器一覧表	110

付 図 目 次

付図 1	丹上遺跡	遺構平面図
付図 2	真福寺遺跡	遺構平面図
付図 3	真福寺遺跡	掘立柱建物群平面図

写真図版目次

- 図版1 丹上遺跡・真福寺遺跡
1. 調査地周辺空中写真（1961年撮影）と主要道路
- 図版2 丹上遺跡・真福寺遺跡
1. 遺跡から二上山をのぞむ（西から）
2. 遺跡から枚方・男山丘陵をのぞむ（南西から）
- 図版3 丹上遺跡・真福寺遺跡
1. 調査地周辺（東から）
2. 同上（北東から）
- 図版4 丹上遺跡 1Qトレンチ
1. 中央部東半 全景（西から）
2. 中央部西半 全景（南から）
- 図版5 丹上遺跡 1Qトレンチ
1. 中央部西半 溝7（東から）
2. 西部 全景（東から）
- 図版6 丹上遺跡 1Q・2Q・3Qトレンチ
1. 1Q・3Qトレンチ北部 全景（東から）
2. 2Qトレンチ北・南部 全景（西から）
- 図版7 丹上遺跡 2Qトレンチ
1. 中央部 全景（北から）
2. 中央部 溝群（北東から）
- 図版8 丹上遺跡 2Q・3Qトレンチ
1. 2Qトレンチ南部 溝群（北東から）
2. 3Qトレンチ北半 全景（西から）
- 図版9 丹上遺跡 3Q・1R・1Sトレンチ
1. 3Qトレンチ南部 全景（西から）
2. 1R・1Sトレンチ全景（南から）
- 図版10 丹上遺跡 2Qトレンチ
1. 北部 3層上面溝検出状況（西から）
3. 南部 溝47〔左〕、溝48〔右〕（北東から）
2. 南部 溝群全景（北から）
4. 南部 溝65-1から5〔畑〕（北西から）
- 図版11 丹上遺跡 1Qトレンチ中央部西半
1. 土坑28完掘状況（南から）
3. 土坑28遺物出土状況（南から）
2. 同上 断面（南から）
4. 同上 細部（南から）
- 図版12 丹上遺跡 1Qトレンチ中央部
1. 東半 土坑5完掘状況（東から）
3. 東半 溝7全景（西から）
2. 同上 遺物出土状況（東から）
4. 西半 溝7全景（南東から）
- 図版13 真福寺遺跡 1F・2Eトレンチ南半部
1. 1Fトレンチ全景（南から）
2. 2Eトレンチ南半全景（北から）
- 図版14 真福寺遺跡 2Eトレンチ南半部
1. 飛鳥時代掘立柱建物群（北西から）
2. 同上（北から）
- 図版15 真福寺遺跡 2Eトレンチ北半部
1. 全景（北から）
2. 同上（東から）
- 図版16 真福寺遺跡 2Eトレンチ北半部
1. 全景（西から）
2. 飛鳥時代掘立柱建物群（北東から）
- 図版17 真福寺遺跡 2Eトレンチ北半部
1. 北側全景（南東から）
2. 溝群（南から）
- 図版18 真福寺遺跡 3Eトレンチ北側
1. 全景（南から）
2. 全景（西から）

- 図版19 真福寺遺跡 3 Eトレンチ北側
 1. 北側全景 (西から) 2. 中央全景 (西から)
- 図版20 真福寺遺跡 3 Eトレンチ南側
 1. 全景 (南から) 2. 同上 (北から)
- 図版21 真福寺遺跡 4 Eトレンチ
 1. 全景 (南から) 2. 同上 (北西から)
- 図版22 真福寺遺跡 5 Eトレンチ
 1. 全景 (北から) 2. 上面全景 (南から)
- 図版23 真福寺遺跡 6 Eトレンチ
 1. 全景 (北から) 2. 同上 (北から)
- 図版24 真福寺遺跡 6 Eトレンチ
 1. 上面ピット列検出状況 (北から) 2. 南側開析谷全景 (北東から)
- 図版25 真福寺遺跡 7 E・8 Eトレンチ
 1. 7 Eトレンチ全景 (南から) 2. 8 Eトレンチ全景 (南東から)
- 図版26 真福寺遺跡 掘立柱建物群
 1. 2 Eトレンチ掘立柱建物群空中写真 (上が北)
- 図版27 真福寺遺跡 掘立柱建物群
 1. 3 Eトレンチ掘立柱建物群空中写真 (上が北)
- 図版28 真福寺遺跡 掘立柱建物群
 1. 2 Eトレンチ 建物1全景 (南東から) 2. 2 Eトレンチ 建物2全景 (南西から)
- 図版29 真福寺遺跡 掘立柱建物群
 1. 2 Eトレンチ 建物2全景 (南東から) 2. 2 Eトレンチ 建物3全景 (南東から)
- 図版30 真福寺遺跡 掘立柱建物群
 1. 2 Eトレンチ 建物4全景 (南西から) 2. 2 Eトレンチ 建物5全景 (南東から)
- 図版31 真福寺遺跡 掘立柱建物群
 1. 2 Eトレンチ 建物5全景 (南西から) 2. 2 Eトレンチ 建物6全景 (南東から)
- 図版32 真福寺遺跡 掘立柱建物群
 1. 2 Eトレンチ 建物6全景 (北西から) 2. 2 Eトレンチ 建物7全景 (南東から)
- 図版33 真福寺遺跡 掘立柱建物群
 1. 2 Eトレンチ 建物7全景 (北西から) 2. 2 Eトレンチ 建物8全景 (南東から)
- 図版34 真福寺遺跡 掘立柱建物群
 1. 2 Eトレンチ 建物9全景 (南東から) 2. 2 Eトレンチ 建物10全景 (南東から)
- 図版35 真福寺遺跡 掘立柱建物群
 1. 2 Eトレンチ 建物11全景 (南西から) 2. 2 Eトレンチ 建物12全景 (南東から)
- 図版36 真福寺遺跡 掘立柱建物群
 1. 2 Eトレンチ 建物13全景 (南東から) 2. 2 Eトレンチ 建物14全景 (南東から)
- 図版37 真福寺遺跡 掘立柱建物群
 1. 2 Eトレンチ 建物15全景 (南東から) 2. 2 Eトレンチ 建物16全景 (北西から)
- 図版38 真福寺遺跡 掘立柱建物群
 1. 2 Eトレンチ 建物17全景 (北西から) 2. 2 Eトレンチ 建物19全景 (北東から)
- 図版39 真福寺遺跡 掘立柱建物群
 1. 2 Eトレンチ 建物19全景 (南東から) 2. 2 Eトレンチ 建物20全景 (南東から)

- 図版40 真福寺遺跡 掘立柱建物群
 1. 2 Eトレンチ 建物21全景 (北東から) 2. 2 Eトレンチ 建物22全景 (東から)
- 図版41 真福寺遺跡 掘立柱建物群
 1. 2 Eトレンチ 建物23全景 (南東から) 2. 3 Eトレンチ 建物24全景 (西から)
- 図版42 真福寺遺跡 掘立柱建物群
 1. 3 Eトレンチ 建物24全景 (南から) 2. 3 Eトレンチ 建物25全景 (西から)
- 図版43 真福寺遺跡 掘立柱建物群
 1. 3 Eトレンチ 建物25全景 (南から) 2. 3 Eトレンチ 建物26全景 (西から)
- 図版44 真福寺遺跡 掘立柱建物群
 1. 3 Eトレンチ 建物27全景 (南から) 2. 3 Eトレンチ 建物28全景 (西から)
- 図版45 真福寺遺跡 掘立柱建物群
 1. 3 Eトレンチ 建物28全景 (南から) 2. 3 Eトレンチ 建物27全景 (南から)
- 図版46 真福寺遺跡 掘立柱建物群
 1. 3 Eトレンチ 建物29全景 (西から) 2. 3 Eトレンチ 建物30全景 (南から)
- 図版47 真福寺遺跡 掘立柱建物群
 1. 3 Eトレンチ 建物31全景 (西から) 2. 3 Eトレンチ 建物31全景 (南から)
- 図版48 真福寺遺跡 掘立柱建物群
 1. 3 Eトレンチ 建物32全景 (南から) 2. 3 Eトレンチ 建物33全景 (南から)
- 図版49 真福寺遺跡 掘立柱建物群
 1. 3 Eトレンチ 建物34全景 (南から) 2. 3 Eトレンチ 建物35全景 (南西から)
- 図版50 真福寺遺跡 掘立柱建物群
 1. 3 Eトレンチ 建物36全景 (西から) 2. 3 Eトレンチ 建物36全景 (南から)
- 図版51 真福寺遺跡 掘立柱建物群
 1. 3 Eトレンチ 建物37全景 (南東から) 2. 3 Eトレンチ 建物38全景 (南東から)
- 図版52 真福寺遺跡 掘立柱建物群
 1. 3 Eトレンチ 建物39全景 (北西から) 2. 3 Eトレンチ 建物41全景 (南東から)
- 図版53 真福寺遺跡 掘立柱建物群
 1. 8 Eトレンチ 建物42全景 (南東から) 2. 3 Eトレンチ 建物43全景 (南東から)
- 図版54 真福寺遺跡 掘立柱建物群
 1. 3 Eトレンチ 建物38全景 (北西から) 2. 3 Eトレンチ 建物47全景 (南から)
- 図版55 真福寺遺跡 掘立柱建物 柱穴
 1. 建物21 柱穴422石検出状況 (西から) 2. 同上 断面 (西から)
 3. 建物33 柱穴700土師器出土状況 (南から) 4. 建物32 柱穴703瓦出土状況 (北から)
- 図版56 真福寺遺跡 掘立柱建物 柱穴
 1. 建物33 柱穴699瓦出土状況 (南から) 2. 同上 細部 (北から)
 3. 建物36 柱穴658須恵器出土状況 (北西から) 4. 同上 細部 (西から)
- 図版57 真福寺遺跡 掘立柱建物 柱穴
 1. 建物25 柱穴612瓦出土状況 (東から) 2. 建物25 柱穴602瓦出土状況 (南から)
 3. 建物25 柱穴898瓦出土状況 (南から) 4. 建物25 柱穴623根石検出状況 (北から)
- 図版58 真福寺遺跡 掘立柱建物 柱穴
 1. 建物12 柱穴118断面 (東北から) 2. 建物12 柱穴115断面 (南西から)
 3. 建物12 柱穴113断面 (東北から) 4. 建物19 柱穴432断面 (北西から)

- 図版59 真福寺遺跡 掘立柱建物 柱穴
1. 建物2 柱穴45断面(南東から)
 2. 建物24 柱穴574断面(東から)
 3. 建物25 柱穴896断面(西から)
 4. 柱穴814〔左〕、柱穴815〔右〕断面(西から)
- 図版60 真福寺遺跡 柵列・井戸
1. 2 Eトレンチ 柵列1全景(北東から)
 2. 3 Eトレンチ 柵列2全景(南から)
 3. 2 Eトレンチ 井戸42全景(南西から)
 4. 2 Eトレンチ 井戸42断ち割り(東から)
- 図版61 真福寺遺跡 井戸
1. 2 Eトレンチ 井戸42 断面(東から)
 2. 同上 枠組検出状況(西から)
 3. 2 Eトレンチ 井戸42 掘方内鋤先出土状況(上から)
 4. 同上(南から)
- 図版62 真福寺遺跡 自然流路・溝
1. 4 Eトレンチ 自然流路1全景(北から)
 2. 3 Eトレンチ 同上 和同開珎出土状況(北から)
 3. 2 Eトレンチ 溝401全景(北東から)
 4. 同上 高杯出土状況(北東から)
- 図版63 真福寺遺跡 溝
1. 2 Eトレンチ 溝8全景(北から)
 2. 同上(南から)
 3. 1 Fトレンチ 溝12全景(東から)
 4. 同上(西から)
- 図版64 真福寺遺跡 溝
1. 1 Fトレンチ 溝18・19・20全景(北から)
 2. 2 Eトレンチ 溝25全景(北から)
 3. 2 Eトレンチ 溝25全景(南から)
 4. 同上(南から)
- 図版65 真福寺遺跡 溝
1. 2 Eトレンチ 溝563全景(南から)
 2. 3 Eトレンチ 溝568全景(西から)
 3. 3 Eトレンチ 溝569全景(南西から)
 4. 3 Eトレンチ 溝892全景(南西から)
- 図版66 真福寺遺跡 溝
1. 6 Eトレンチ 溝19 全景(南西から)
 2. 同上(北から)
 3. 2 Eトレンチ 溝386全景(南東から)
 4. 同上(北西から)
- 図版67 真福寺遺跡 溝
1. 2 Eトレンチ 溝383〔右〕・384〔左〕全景(東から)
 2. 同上 溝383〔左〕・384〔右〕(西から)
 3. 2 Eトレンチ 北側溝群(南西から)
 4. 2 Eトレンチ 溝402〔右〕・469〔左〕全景(北東から)
- 図版68 真福寺遺跡 土坑
1. 3 Eトレンチ 土坑881全景(南から)
 2. 同上 断面(南から)
 3. 7 Eトレンチ 土坑1033全景(北東から)
 4. 同上 断面(北東から)
- 図版69 真福寺遺跡 土坑
1. 2 Eトレンチ 土坑400全景(南東から)
 2. 同上 須恵器飯蛸壺出土状況(北東から)
 3. 7 Eトレンチ 土坑1024全景(南から)
 4. 同上 土師器出土状況(南から)
- 図版70 真福寺遺跡 土坑
1. 4 Eトレンチ 土坑949獣骨検出状況(東から)
 2. 2 Eトレンチ 土坑385全景(東から)
 3. 2 Eトレンチ 土坑385鏝検出状況(北西から)
 4. 2 Eトレンチ 土坑404石組検出状況(東から)
- 図版71 真福寺遺跡 土坑
1. 2 Eトレンチ 土坑3 南半全景(南から)
 2. 同上 北半全景(北西から)
 3. 2 Eトレンチ 土坑3 北半遺物出土状況(南東から)
 4. 2 Eトレンチ 土坑34 全景(南西から)
- 図版72 真福寺遺跡 土坑
1. 2 Eトレンチ 土坑26全景(北東から)
 2. 2 Eトレンチ 土坑79全景(南西から)
 3. 2 Eトレンチ 土坑557全景(南東から)
 4. 2 Eトレンチ 土坑387〔左〕・398〔右〕全景(南東から)

- 図版73 真福寺遺跡 土坑
 1. 2 Eトレンチ 土坑559全景 (南西から) 2. 同上 (南西から)
 3. 2 Eトレンチ 土坑560全景 (東から) 4. 2 Eトレンチ 土坑561全景 (東から)
- 図版74 真福寺遺跡 土坑
 1. 2 Eトレンチ 土坑562全景 (北東から) 2. 3 Eトレンチ 土坑570全景 (西から)
 3. 3 Eトレンチ 土坑571全景 (南から) 4. 同上 (北から)
- 図版75 真福寺遺跡 土坑
 1. 3 Eトレンチ 土坑573全景 (北東から) 2. 3 Eトレンチ 土坑572全景 (南から)
 3. 4 Eトレンチ 土坑948全景 (西から) 4. 3 Eトレンチ 土坑885[左]・886[右]全景(西から)
- 図版76 真福寺遺跡 土坑
 1. 3 Eトレンチ 土坑880全景 (南から) 2. 3 Eトレンチ 土坑882全景 (南から)
 3. 3 Eトレンチ 土坑874全景 (南から) 4. 3 Eトレンチ 土坑875全景 (南から)
- 図版77 真福寺遺跡 土層断面・遺物出土状況
 1. 2 Eトレンチ 溝384断面 (西から) 2. 7 Eトレンチ 5層鉸具出土状況(北から)
 3. 3 Eトレンチ 3層鍵状鉄製品出土状況(東から) 4. 3 Eトレンチ 5層鉄鉗出土状況(西から)
- 図版78 真福寺遺跡 遺物出土状況
 1. 3 Eトレンチ 3層懸仏出土状況(北から) 2. 同上 細部 (北から)
 3. 3 Eトレンチ 3層筭出土状況(北東から) 4. 同上 細部 (南西から)
- 図版79 丹上遺跡・真福寺遺跡 遺構・掘立柱建物 柱穴断面
 1. 丹上遺跡 2 Qトレンチ 土坑12(南から) 2. 真福寺遺跡 建物 1 柱穴158(南東から)
 3. 真福寺遺跡 建物 3 柱穴57 (西から) 4. 真福寺遺跡 建物 3 柱穴57 (東から)
 5. 真福寺遺跡 建物 5 柱穴139(北東から) 6. 真福寺遺跡 建物 5 柱穴133(東から)
 7. 真福寺遺跡 建物 5 柱穴134(南から) 8. 真福寺遺跡 建物 5 柱穴140(北東から)
- 図版80 真福寺遺跡 掘立柱建物 柱穴断面
 1. 建物 5 柱穴136 (南西から) 2. 建物 6 柱穴120 (南東から)
 3. 建物 6 柱穴123 (南西から) 4. 建物 7 柱穴271 (南西から)
 5. 建物 8 柱穴70 (北西から) 6. 建物 8 柱穴73 (北東から)
 7. 建物 9 柱穴90 (東から) 8. 建物 9 柱穴92 (南西から)
- 図版81 真福寺遺跡 掘立柱建物 柱穴断面
 1. 建物10 柱穴86 (北西から) 2. 建物10 柱穴199 (南東から)
 3. 建物10 柱穴84 (南西から) 4. 建物10 柱穴83 (南西から)
 5. 建物10 柱穴80 (北東から) 6. 建物11 柱穴105 (南西から)
 7. 建物11 柱穴102 (北西から) 8. 建物11 柱穴107 (北西から)
- 図版82 真福寺遺跡 掘立柱建物 柱穴断面
 1. 建物11 柱穴101 (南から) 2. 建物11 柱穴106 (北から)
 3. 建物11 柱穴103 (南西から) 4. 建物12 柱穴117 (西から)
 5. 建物19 柱穴444 (北東から) 6. 建物19 柱穴432 (北東から)
 7. 建物19 柱穴432 (北西から) 8. 建物19 柱穴431 (南東から)
- 図版83 真福寺遺跡 掘立柱建物 柱穴断面
 1. 建物19 柱穴435 (西から) 2. 建物19 柱穴438 (西から)
 3. 建物19 柱穴441 (西から) 4. 建物19 柱穴442 (南西から)
 5. 建物19 柱穴486 (南東から) 6. 建物19 柱穴443 (北から)

- 図版83 真福寺遺跡 掘立柱建物 柱穴断面
7. 建物19 柱穴436 (南西から) 8. 建物20 柱穴409 (南西から)
- 図版84 真福寺遺跡 掘立柱建物 柱穴断面
1. 建物20 柱穴411 (北から) 2. 建物20 柱穴408 (東から)
3. 建物20 柱穴414 (北東から) 4. 建物20 柱穴412 (北東から)
5. 建物20 柱穴410 (南西から) 6. 建物20 柱穴415 (北東から)
7. 建物21 柱穴421 (南から) 8. 建物21 柱穴422 (西から)
- 図版85 真福寺遺跡 掘立柱建物 柱穴断面
1. 建物22 柱穴446 (西から) 2. 建物24 柱穴578 (北東から)
3. 建物24 柱穴575 (南東から) 4. 建物25 柱穴612 (東から)
5. 建物26 柱穴586 (南西から) 6. 建物29 柱穴738 (東から)
7. 建物43 柱穴663 (南東から) 8. 建物43 柱穴664 (南東から)
- 図版86 真福寺遺跡 掘立柱建物 柱穴断面
1. 建物35 柱穴662 (南から) 2. 建物36 柱穴659 (西から)
3. 建物36 柱穴658 (西から) 4. 建物38 柱穴646 (北東から)
5. 建物38 柱穴647 (南東から) 6. 建物39 柱穴961 (南東から)
7. 建物39 柱穴648 (北東から) 8. 建物39 柱穴920 (南東から)
- 図版87 真福寺遺跡 掘立柱建物・柵列 柱穴、ピット断面
1. 建物44 柱穴976 (南東から) 2. 柱穴203 (南東から)
3. 柱穴206 (南東から) 4. 柱穴207 (南東から)
5. 柱穴339 (南から) 6. 柱穴225 (南東から)
7. 建物39 柱穴998 (南から) 8. 柱穴235 (北東から)
- 図版88 出土遺物 (1) 須恵器〔1〕
- 図版89 出土遺物 (2) 須恵器〔2〕
- 図版90 出土遺物 (3) 須恵器〔3〕
- 図版91 出土遺物 (4) 須恵器〔4〕・土師器〔1〕
- 図版92 出土遺物 (5) 土師器〔2〕・黒色土器
- 図版93 出土遺物 (6) 陶磁器・墨書土器〔越州窯系青磁、緑釉・灰釉陶器〕
- 図版94 出土遺物 (7) 埴輪〔円筒・形象〕
- 図版95 出土遺物 (8) 製塩土器
- 図版96 出土遺物 (9) 金属器類〔1〕〔取瓶・筭・懸仏〕
- 図版97 出土遺物 (10) 金属器類〔2〕〔銭貨・不明金銅製品〕
- 図版98 出土遺物 (11) 石器〔1〕
- 図版99 出土遺物 (12) 石器〔2〕・木製品
- 図版100 出土遺物 (13) 柱根

第 I 章 調査に至る経緯と経過

丹上遺跡と真福寺遺跡は、昭和50年、都市計画道路松原～泉大津線建設に伴う分布調査によって発見された遺跡である。昭和50年には真福寺遺跡の試掘調査が、昭和57年には丹上遺跡の試掘調査が実施された。昭和59年からは、都市計画道路松原～泉大津線と近畿自動車道と歌山線併設区間での本格的な発掘調査が開始され、真福寺遺跡は昭和60年度、丹上遺跡は平成6年度に全ての調査を終了した。丹上遺跡からは、5世紀の古墳や奈良時代の官衙と考えられる大型掘立柱建物群や平安時代の掘立柱建物群が、真福寺遺跡からは、梵鐘鑄造土坑・白炭窯や「黒山廃寺」の瓦を生産した窯などが検出された。

今回の調査の契機となった南阪奈道路は、大阪府南河内郡美原町丹上（現阪和自動車道）を起点とし、奈良県北葛城郡新庄町（国道165号線大和高田バイパス）を終点とする、総延長16.9kmの第1種3級道路（自動車専用道路）である。路線名は一般国道165号線・166号線・府道美原太子線で、この間を国土交通省・日本道路公団・大阪府・大阪府道路公社・奈良県の合併施工によって事業が進められている。

この道路建設計画は昭和46年までに遡る。当時、建設省近畿地方建設局（現国土交通省近畿地方整備局）浪速国道工事事務所は、南河内地域の交通渋滞の緩和と、奈良県中和地域との連絡網の整備を目的として、一般国道165号線南河内バイパス道路の建設を計画した。建設省は、ルート選定に先立って、南河内郡美原町丹上から太子町までの間の分布調査を、財団法人 元興寺仏教民俗資料研究所（現財団法人 元興寺文化財研究所）に依頼した。道路工事が公示された昭和49年度には、分布調査の結果、遺跡の範囲

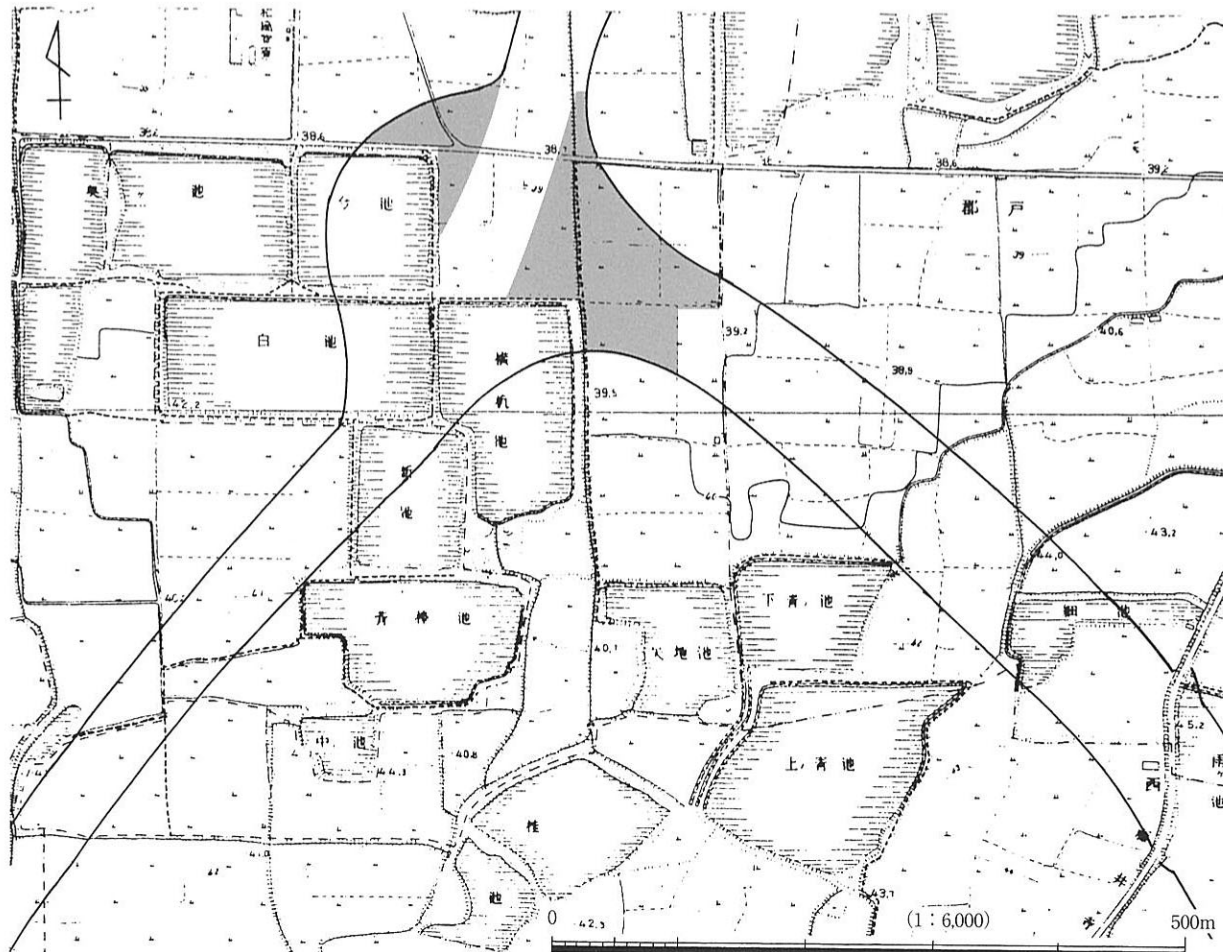


図1 遺跡周辺図

が広がる事が指摘された尺度地区での範囲確認調査を、再度現財団法人元興寺文化財研究所に依頼した。

調査は大阪府農林技術センターの敷地内で実施され、須恵器を含む包含層と溝・柱穴等の遺構が検出され、建設予定地周辺に遺跡が広がっている事が事実となった。

昭和50年度、国土交通省は、再度、計画予定地域内の分布調査を大阪府教育委員会に依頼した。依頼を受けた大阪府教育委員会は、協議の結果、財団法人 大阪文化財センター（現財団法人 大阪府文化財調査研究センター）で実施するのが適当である事を建設省に回答すると共に、財団法人 大阪府文化財調査研究センターに対しても調査を実施するように通知した。

調査は、広範囲な道路計画地域を便宜上6地域に分けて、昭和50年12月から実施された。西端の第1地域は、都市計画道路松原～泉大津線予定路線から東除川までの地域である。

昭和50年3月及び9月に実施された分布調査や試掘調査によって既に丹上遺跡・真福寺遺跡が周知され、周辺地域にも遺跡が広がる事が指摘されていたが、この時点では、その範囲や内容について必ずしも充分把握されておらず、丹上遺跡と真福寺遺跡の間の灌漑用溜池と水田は遺跡の範囲外であった。

調査の結果、弥生時代の石鏃や青磁碗をはじめ古墳時代から鎌倉時代の遺物の散布が確認され、郡戸遺跡が周知されるとともに、尺度遺跡を含む第3地区から石川までの第4地区においても多くの遺物の散布が認められた。

昭和62年には、大阪府道路整備長期計画（レインボー計画）が策定され、この中で、南阪奈道路は、「南阪奈軸の主要な路線の一つ」と位置づけられ、「大阪と奈良を結ぶ自動車専用道路として、関西国際空港のアクセス道路として、また、西名阪自動車道、国道166号線渋滞の混雑緩和に寄与する」重要な路線として、平成2年12月、都市計画決定がなされた。

平成5年度には、大阪府土木部道路課は大阪府教育委員会に対して事業内容を説明し、大阪府教育委員会はこれを受けて協議し、平成6年度事業地内全域において現地を踏査し、試掘調査を必要とする地区、さらに分布調査を必要とする地区、本調査地区を確認した。

平成7年度、大阪府教育委員会は、協議の結果、各事業者に対し、調査は財団法人 大阪府文化財調査研究センターに委託して実施することが適当である旨を回答すると同時に、センターに対しても、調査を実施するよう通知した。これを受けてセンターは各事業者と委託契約を締結し、平成8年度、太子町駒ヶ谷地区・地獄谷地区から順次調査に着手していった。

阪和自動車道から国道170号線（旧外環状線）までの4.6kmは、本線部（府道美原太子線）と側道部（一般国道）が併設する区間で、大阪府と大阪府道路公社が事業主体となる。丹上遺跡・真福寺遺跡の範囲は、大阪府が事業主体となっていることから、センターは平成11年2月26日付けで、「主要地方道美原太子線（南阪奈道路）丹上・真福寺遺跡発掘調査」として大阪府富田林土木事務所と委託契約を締結し、平成11年5月、調査に着手した。

調査は着手可能な地区から順次進捗していったが、契約期限内に用地取得、調査終了が困難と判断される地区が発生したため、センター・富田林土木事務所・大阪府教育委員会は協議の結果、この地区を当初契約から外し、着手可能となった段階で改めて「主要地方道 美原太子線（南阪奈道路）丹上・真福寺遺跡発掘調査（その2）」として契約し調査することとなった。

途中、平成11年7月12日、地元の美原町立美原北小学校の6年生を対象とした遺跡見学会を催し、Eトレンチで検出された掘立柱建物群や井戸跡を実際にみながら、地域の歴史について解説を行った。

平成13年6月、丹上遺跡・真福寺遺跡の全ての調査を終了した。

第Ⅱ章 位置と環境

地理的環境

丹上遺跡と真福寺遺跡が位置する南河内郡美原町は、1980年頃を境に町内への流入人口数が流出人口数を超え、大阪都市圏の衛星都市としての性格を変えつつある。

阪和自動車道など道路交通網の基盤整備が進み、各種産業分野の流通基地や工場が移転してきたことも大きな要因である。

その一方で、多くの溜池が点在する美原町独特の農村景観が失われ、地形環境も急激に変化してきた。この傾向は南阪奈道路の開通によって一層進むものと予想される。

この美原町一帯の地形は河内台地と羽曳野丘陵で構成され、丘陵地・段丘・谷底平野・段丘上の浅い谷・人工改変地などの地形面が観察され、これらの地形面形成には、羽曳野・陶器山丘陵を形成した地盤運動と、町内の主要河川である東除川と西除川の河川作用が大きくかかわっている。



図2 遺跡位置図

丹上遺跡と真福寺遺跡は東除川と西除川に挟まれた中位段丘面上のうち、標高38~40mの比較的平坦な面に立地している。この段丘面は大阪狭山市池尻付近の標高80mを最高所として北の平野区瓜破地区に向かって緩やかに傾斜し、東端と西端のより低位の地形面との高度差では西端より東端の方が大きい。

また、東除川の活発な下方侵食作用は、各地形面との間に2~8mの深い段丘崖を形成するのに対して、西除川の侵食作用は緩やかで、1~2m程度の崖と広い谷平野を形成している⁽¹⁾。

段丘面上には、多くの浅い開析谷が刻まれている。多くの谷は複数の不整形な溜池「谷池」を伴っており、平坦部での長方形の溜池「皿池」とともに美原町の特徴的な景観を形成している。これら溜池の築造時期の問題は、段丘面の耕地開発と関連する重要な課題を含んでいる。

阪和自動車道建設に伴う調査では多くの谷が調査された。このうち幅100m前後の大きな谷からは流路が検出され、流路は、谷内を蛇行しながら停滞期と活動期を繰り返し、遅くとも10世紀頃には埋没して平坦地となる。真福寺遺跡や太井遺跡では、さらに中世の遺物を包含する整地層が確認されている。

泉北台地に立地する日置荘遺跡では、谷斜面から後世の土地改変によって天井部が大きく削平された6世紀中葉の須恵器窯が検出された。両側の平坦部からは7世紀後半から8世紀前半と9世紀から11世紀中葉の集落が検出された。これらの調査結果は直接溜池の築造時期を示すものではなく、また段丘面上の谷地形が全て同じ経過を経たとは考えない。しかし、大阪狭山池の築造時期が7世紀初頭で確定され、池の築造を契機として段丘面上の開発が可能になったとする説があるが、少なくとも標高40m以上の段丘面については、なお周辺地域での調査資料の蓄積が必要と思われる。

歴史的環境

遺跡周辺は、旧石器時代から弥生時代の遺跡が希薄な地域である。これまでも国府型ナイフ形石器・有茎尖頭器が多数出土しているが、いずれも後世の遺構や包含層からのものである。しかし、太井遺跡や南花田遺跡では旧石器包含層が確認され、太井遺跡からは舟底形石器・有舌尖頭器・ナイフ形石

器など900点余りが、南花田遺跡からは、縦長剥片素材のナイフ形石器を含む400点以上の石器が出土している。中位段丘構成層中に原位置を保った旧石器が存在する可能性が充分考えられる。

美原町黒山には、24領もの短甲をはじめ多量の鉄製品が出土した黒姫山古墳が所在する。古墳の東と西には開析谷が走り、古墳築造時には東側谷部とは約5m以上の比高を有していた事が確認されている。

かつて周辺には陪塚と考えられた6ないし7基の古墳が存在した。その一つサバ山古墳は、全長34mの葦石と埴輪を伴う帆立貝式古墳で、黒姫山古墳に後続する古墳である事が確認された。

また、太井遺跡で検出された飛鳥時代の井戸枠に転用された埴輪は、黒姫山古墳の他にも大型の埴輪を伴う古墳が存在していた事を示唆している。この他、太井遺跡や真福寺遺跡からは、5世紀末から6世紀初頭の一辺10m前後の方墳が検出されている。

丹上遺跡北端からも5世紀末の方墳が検出され、「雄略陵」説のある大塚山古墳や、立部古墳群・山ノ内遺跡（山ノ内古墳）との関係が注目される。

古墳時代の遺跡としては丹上遺跡で布留式土器が出土する土坑・溝が検出されているが、遺構は希薄

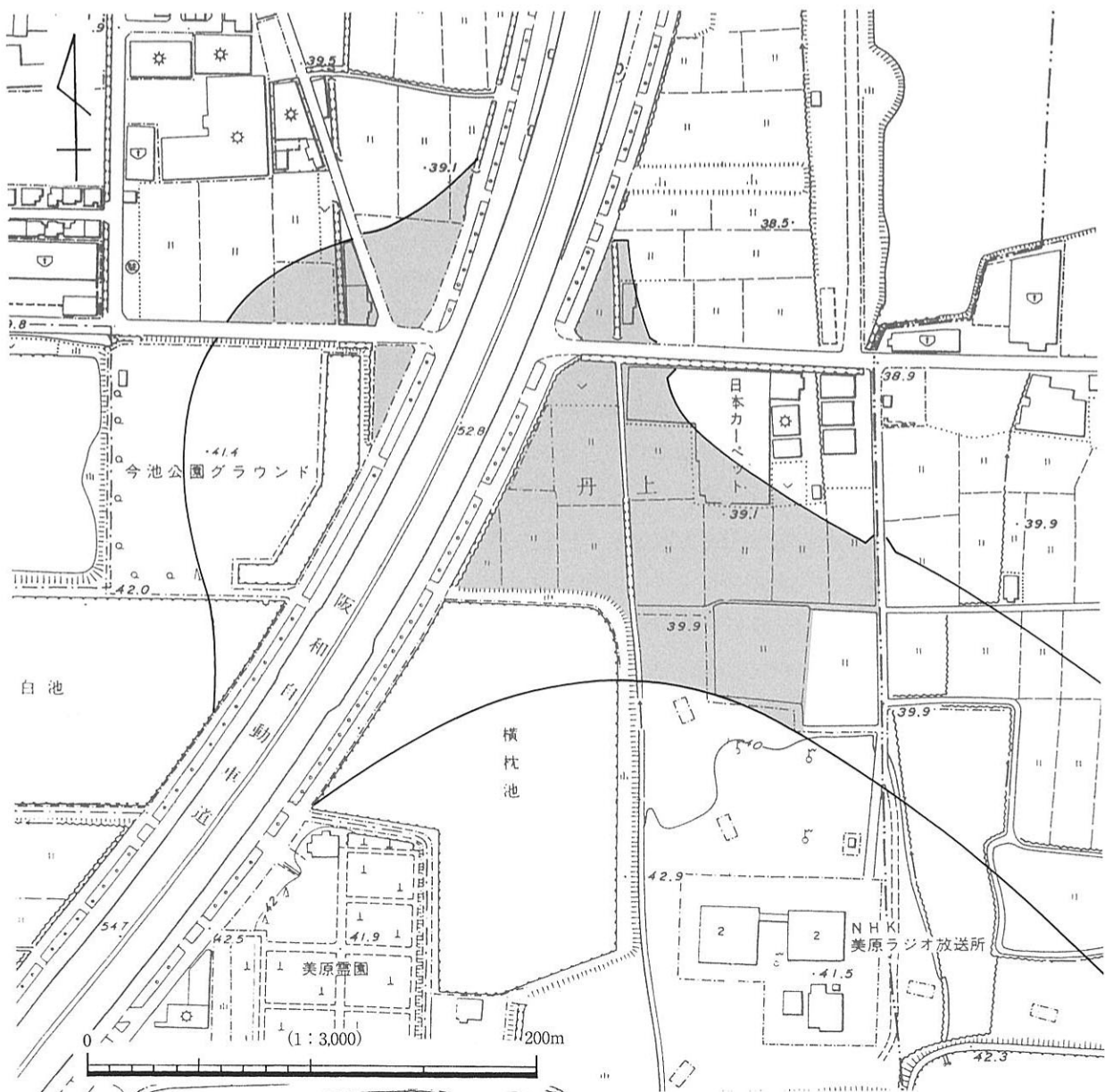


図3 調査区位置図

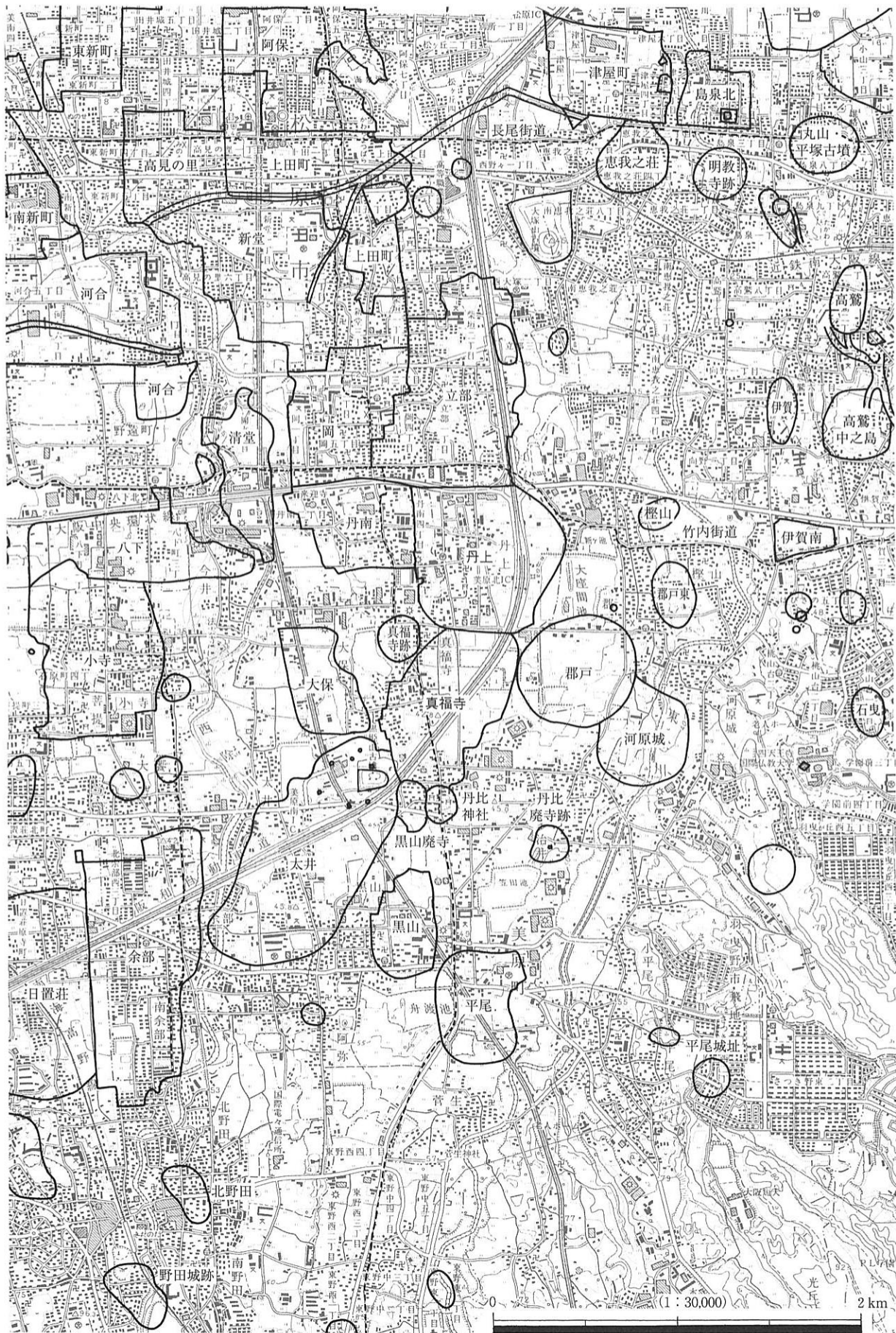


图4 周辺遺跡分布図

である。また河原城遺跡からも5世紀代の須恵器を含む土器群や土坑が検出されているが、集落の内容は不明である。

6世紀後半になると周辺地域でも遺跡数が増加する。河原城遺跡では、竪穴住居群から掘立柱建物群へ移行する6世紀後半から7世紀の集落の様子が明らかにされている。

太井遺跡では竪穴住居1棟と掘立柱建物4棟が、日置荘遺跡では、土器群と掘立柱建物3棟が検出され、南花田遺跡からは、二重の溝で区画された大型の掘立柱建物の一部が検出されている。8世紀まで継続する河原城遺跡を除き、いずれも存続期間は長くはない。

生産遺跡では、樋野ヶ谷池窯・平尾窯・日置荘西町窯の他に、南花田遺跡や余部遺跡で検出された畠が注目される。余部遺跡の畠は、800㎡以上の規模で、近接地点で掘立柱建物も検出されている。用水が得にくい段丘面上での農業生産の一形態を示している。

7世紀以降になると、周辺でも遺跡数が増加し、文献にも当地域に関連した「丹比坂」などの地名・当地域を本貫地とする丹比連とその同族および丹比公の一族や秦氏をはじめ渡来系氏族の人名や開発に関する記事が多く登場する。当地域は河内国丹比郡11郷のうち丹上郷と一部黒山郷に属し、丹北・丹南・八上の3郡に分かれた11世紀後半以後は丹南郡に属する。

郡戸遺跡は、その地名から丹比郡の郡衙とする説もあるが発掘調査件数も少なく実体は明らかでない。

9世紀以降には、石清水八幡宮領田井庄・宮家領菅生庄・興福寺領日置荘・狭山庄・広隆寺領松原庄など社寺・宮家領の荘園が置かれ、律令制下の郡郷制が変容する中で複雑な展開を見せる。

7世紀初頭から8世紀の平尾遺跡からは、柵列や溝の区画施設を含む42棟の掘立柱建物が検出され、丹比郡の郡衙もしくは催鑄銭司丹比真人三宅麻呂など、中央との繋がりが深い皇別系新興氏族「丹比公・真人」氏との関連も推定されている。

北約500mの地点には、地元で（オオテラ）と呼ばれ、檜隅寺式の塔心礎や、池田寺式軒丸瓦、平城宮式系軒丸瓦を出土する丹比廃寺や、丹比連の祖先神「火明命」や丹治比公の氏神「端齒別命」を祭神とする式内神丹比神社が位置し、遺跡の南には、茅渚道に比定される平尾村から黒山村・余部村・堺市原寺村を経て堺市関茶屋へ至るルートが通じている。

黒山郷のほぼ中央に位置する太井遺跡からは、7世紀末から8世紀の真北方向の溝で区画された数時期の掘立柱建物からなる屋敷地と青銅製品の鑄造土坑が検出され、多量のトリベ・ルツボ・和同開珎・頁岩制丸靱・円面硯・統一新羅系土器が出土している。東500mの地点には、小金銅仏の右手先や瓦塔・平城宮式系軒丸瓦を出土した7世紀後半から8世紀後半頃の黒山廃寺が位置し、仏具生産を通じて同廃寺との関連が窺われる。また、南北に貫く中高野街道に東接する。

条里制と古代の官道については、歴史地理分野での研究が多く蓄積されている。周辺地域では、真福寺で検出された10世紀前半の条里型地割に一致する南北溝が施工時期の上限を示す資料である。古代官道に関する遺構は堺市大和川・今池遺跡・松原市上田2丁目遺跡・羽曳野市伊賀南遺跡などで検出されており、いずれも7世紀代の年代が得られている。

一方、足利健亮氏は、南北方向地割に斜向する表層古道痕跡に注目し、正方位条里地割に先行する斜向地割が存在する事を指摘し、斜向丹比道と斜向大津道を推定した。このうち斜向丹比道にあたる松原市立部1丁目や松原市新堂2丁目遺跡からは橋や水路の遺構が検出され、丹上遺跡からは斜向地割に平行あるいは直交する溝群などが検出されている。

また、松田正男氏は、丹上遺跡と真福寺遺跡を隔て、大座間池の南を東西に通じる道路を、丹比道に

比定する。⁽¹¹⁾難波大道や丹比道・磯齒津路・大津道に比定されるルート添いや交差点には、野中寺・西琳寺など有力寺院や南花田遺跡・丹上遺跡・長曾根遺跡・野々上遺跡・伊賀遺跡など計画的に配置された大型の掘立柱建物で構成される遺跡が分布している。

野々上遺跡からは、最古の倭櫃や施釉陶器・三彩・「東家」・「殿」などの墨書土器が出土している。⁽¹²⁾丹上遺跡からは、石帯（巡方）や墨書土器が出土し、「コ」字に配置された大型掘立柱建物群を駅家とする説もある。

10世紀以降の集落遺跡は、観音寺に代表される屋敷地と掘立柱建物2～3棟を1単位とする小グループが点在する姿が、丹上・真福寺・太井・日置荘遺跡などで確認されている。

一方、平安時代後期を経て鎌倉時代から室町末期には、大保遺跡・立部遺跡・松原市上田2丁目所在遺跡（金屋友国遺跡）・余部遺跡など「河内（丹南）鋳物師」に関連する集落が急増する。

彼らの活躍の痕跡は、全国の金石文や文献資料からも窺う事ができ、「河内鍋」に代表される鉄製品など金属生産技術をもった職能集団をも内包していた。

註

- 1) 服部 昌之 1999「自然地理編」『美原町史』第1巻 美原町史編纂委員会
- 2) 小山田宏一 1999「古代の開発と治水」『狭山池』論考編 狭山池調査事務所
- 3) 大阪府教育委員会 1990『南花田遺跡発掘調査概要』VI
- 4) 大阪府教育委員会 1993『河原城遺跡発掘調査概要』
- 5) 大阪府教育委員会 1989『太井遺跡発掘調査概要』—— 府立農芸高校牛舎建設にともなう調査 ——
- 6) 財団法人 元興寺文化財研究所考古学研究室 1979『美原町土墨跡試掘調査概要報告書・美原町平尾古窯址群発掘調査報告書』考古学研究室調査概要第8冊
- 7) 大阪府教育委員会 1999『余部遺跡（その2）発掘調査概要』・II —— 府営美原北余部住宅建て替え工事（第2期）に伴う発掘調査 ——
- 8) 瀬川 健 1876「平尾遺跡の構造について」『古代を考える』2 平尾遺跡の検討 古代を考える會
- 9) 1に同じ
- 10) 足利 健亮 1985「摂河泉の古代計画道路」『日本古代地理研究』—— 畿内とその周辺における土地計画の復原と考察 ——
- 11) 松田 正男 1993「古代丹比道の復元」『大阪春秋』第72号 大阪春秋社
- 12) 河内 一浩 1997「羽曳野市野中寺東方地区の発掘調査」—— 大型掘立柱建物群と古櫃・面 —— 『大阪府下埋蔵文化財研究会 第(35回)資料』 財団法人 大阪府文化財調査研究センター

参考文献

- 大阪府教育委員会・財団法人 大阪文化財センター 1995 『大阪府堺市・南河内郡美原町所在 日置荘遺跡』—— 近畿自動車道松原さすみ線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書 ——
- 大阪府教育委員会・財団法人 大阪府文化財調査研究センター 1996 『大阪府南河内郡美原町所在 太井遺跡』—— 近畿自動車道松原さすみ線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書 ——
- 大阪府教育委員会・財団法人 大阪府文化財調査研究センター 1997 (財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第19集 『大阪府南河内郡美原町所在 真福寺遺跡』—— 近畿自動車道松原さすみ線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書 ——
- 大阪府教育委員会・財団法人 大阪府文化財調査研究センター 1998 (財)大阪府文化財調査研究センター発掘調査報告書 第28集 『大阪府南河内郡美原町・松原市所在 丹上遺跡』 近畿自動車道和歌山線・都市計画道路松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書
- 財団法人 大阪府文化財調査研究センター 1998 (財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第34集 『大阪府松原市所在 観音寺遺跡』 近畿自動車道那智勝浦線建設に伴う発掘調査報告書

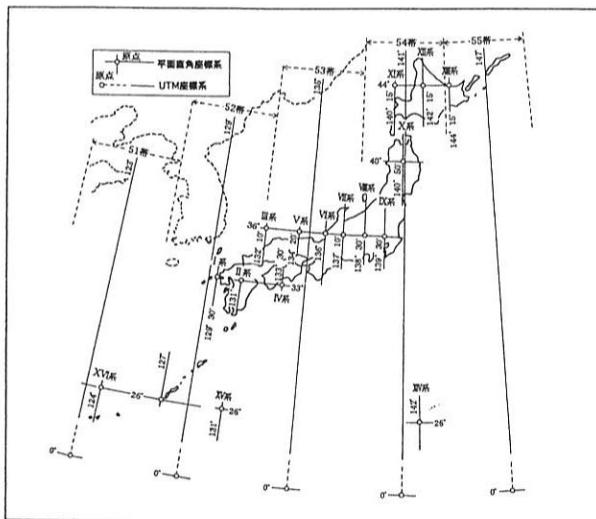
第Ⅲ章 調査の方法

発掘調査は、現地表面に積み重ねられた盛土や、調査着手前まで使用されていた耕作土を機械力で除去し、遺物包含層を露呈させた段階で人力掘削へと転換した。

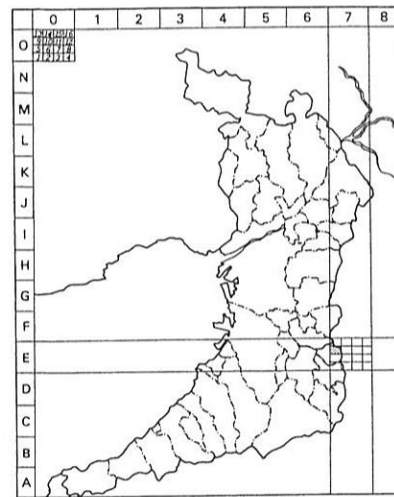
人力掘削に移行した後は、各層準ごとに掘り分けながら遺物の収集を行うと共に、それぞれの層位上面において遺構の確認・検出に注意を注いだ。そして、遺構や慎重を要する遺物が出土した場合、注意深く掘削し、状況に応じて図面や写真などの記録製作を繰り返しながら順次下層へと調査を進め、最終的には、無遺物との確証が得られた層位まで達した段階で掘削を完了させた。

なお、掘立柱建物の柱穴については、遺構の保存協議の結果、開発も止むなしと判断された時点で、周囲の基盤層を含めた範囲で断ち割りを行い、明解な記録類を作成するよう努めた。

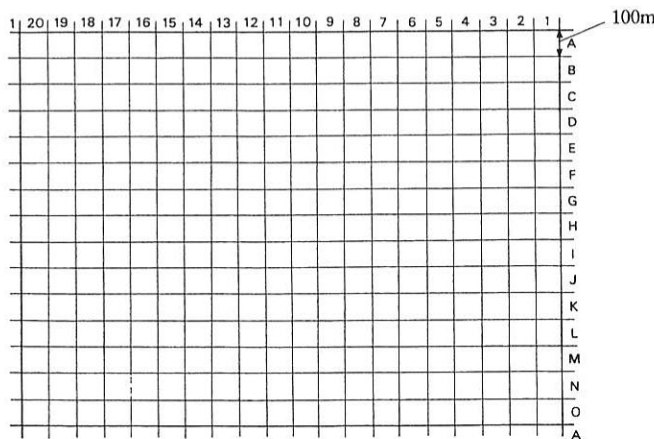
調査予定範囲は、近畿自動車道と南阪奈道路を繋ぐ美原ジャンクション建設予定地全域を対象とするもので、実際の道路敷以外に緑地帯や緩衝帯までが含まれたため、総面積は17,600㎡余に達した。しかし、供用中の道路や用水路などの既設構造物を調査範囲から除外し、また、調査区への立入防止柵の



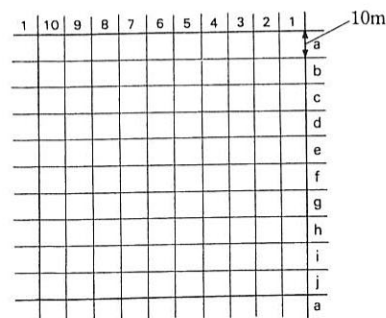
国土座標系図



第Ⅰ・Ⅱ区画



第Ⅲ区画



第Ⅳ区画

図5 地区割概念図

設置や法肩養生のための控えをとったため、実際の調査実施面積は16,000㎡弱となった。

なお、全体の平面図作成については測量会社に航空測量を委託し、フィルムベースにて記録した。

調査区名の呼称や調査方法に関する各基準は、財団法人 大阪文化財センターの遺跡調査マニュアルに準拠し、図5から図6にその詳細を図示した。

この方法は、地区割りについては6段階以上に細分が可能であり、また、平面図に関しては国土座標に基づく平面直角座標（第17座標系）第VI系の座標組織に組み込んで、調査区的位置や検出遺構の平面的絶対位置を確実に記録できるように設定されたものである。

なお、第I章において詳述した通りであるが、調査開始後相当な時間が経過したにも係わらず、用地買収や既存建物等の移転・撤去が遅々として捗らず、徒に時間だけが経過した。

このため、場当たりの調査区設定を行い、順次調査を終了させて行くことを余儀なくされると共に、調査終了区域は直ちに本体工事に引き渡されるという状況となった。

この状態は当初はさほどでもなかったが、工期が迫るにつれ出入業者が増加する出合丁場となり、双方の主張が入り乱れた。発掘調査はこれら諸々の調整をすべて済ませた中で進めなければならず、当然のことながら、本務以外で多くの手間を裂かねばならない状況となった。

この結果、調査区の数是最終的には大小24ヶ所にも達し、航空測量も11度もの回数を重ねることとなった。このような状況であったため、調査区全体の土層堆積状況を把握できるような作図地点を設定する

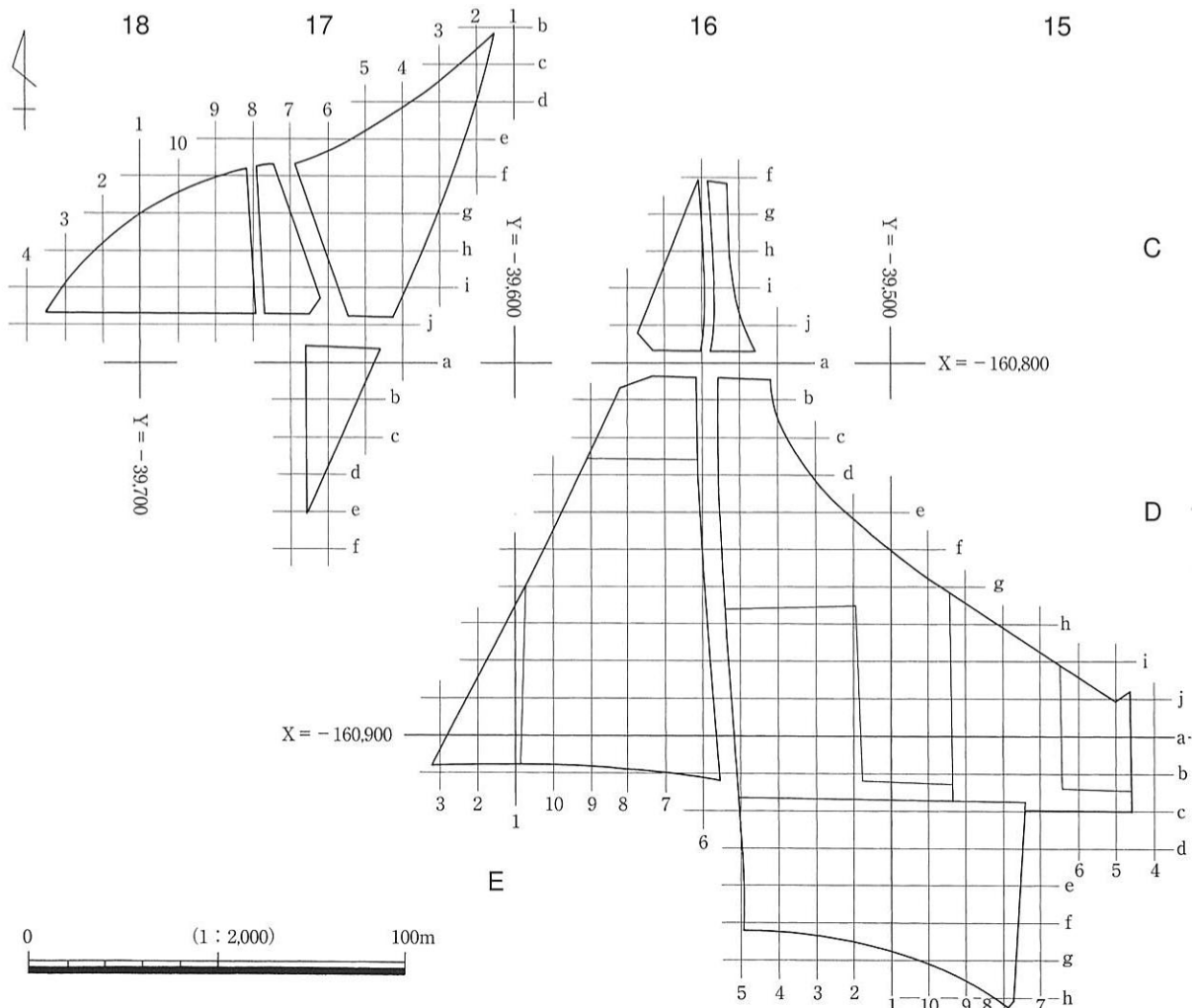


図6 調査区地区割図

ことができず、各地点における模式図的な標準断面しか作成できなかった。

上記のように調査環境としては決して良いものといえなかったが、その内容については非常に有為なもので、飛鳥時代から平安時代にかけて営まれた48棟以上もの掘立柱建物群や、これらに関連する井戸や土坑などを確認するなど、多大な成果を納めることができた。

なお、今回の調査区は既往の調査成果から「河内鑄物師」本貫地の一部を占める場所に位置すると推定されたため、鑄造関連遺物や金属器の検出に特に留意して作業を行った。

予測通り、出土遺物の中に含まれる鋳滓や溶解炉片の比率が他の遺跡と比較して極端に多く、また、調査者が発掘現場で日常的に遭遇する現象である暈状の土質・土色の変化があらゆる場所で観察され、その数も1,000地点に達した。この地点を平板測量により記録した後注意深く掘削した結果、周囲の土壌に金属成分が拡散してしまい、かろうじて金属製品であると認識できるが取り上げ不可能なものや、完全に金属成分が溶脱し物質としての金属製遺物の形状を止めていない地点も多数確認された。

それでもなお微細な貨幣の断片や、鑄造の際に周辺に飛散する細かな金属粒までもを回収することができ、これらを自然科学的分析に付して興味深い事実を明らかにすることができた。

なお、調査を進めるにあたっては、随時、検討・修正を加えながら進捗させることに努めたが、土層の質や特徴などの記録のうち、整理段階で明らかとなった誤認や矛盾を抱えたままの箇所については、本書では敢えて記載しなかった。

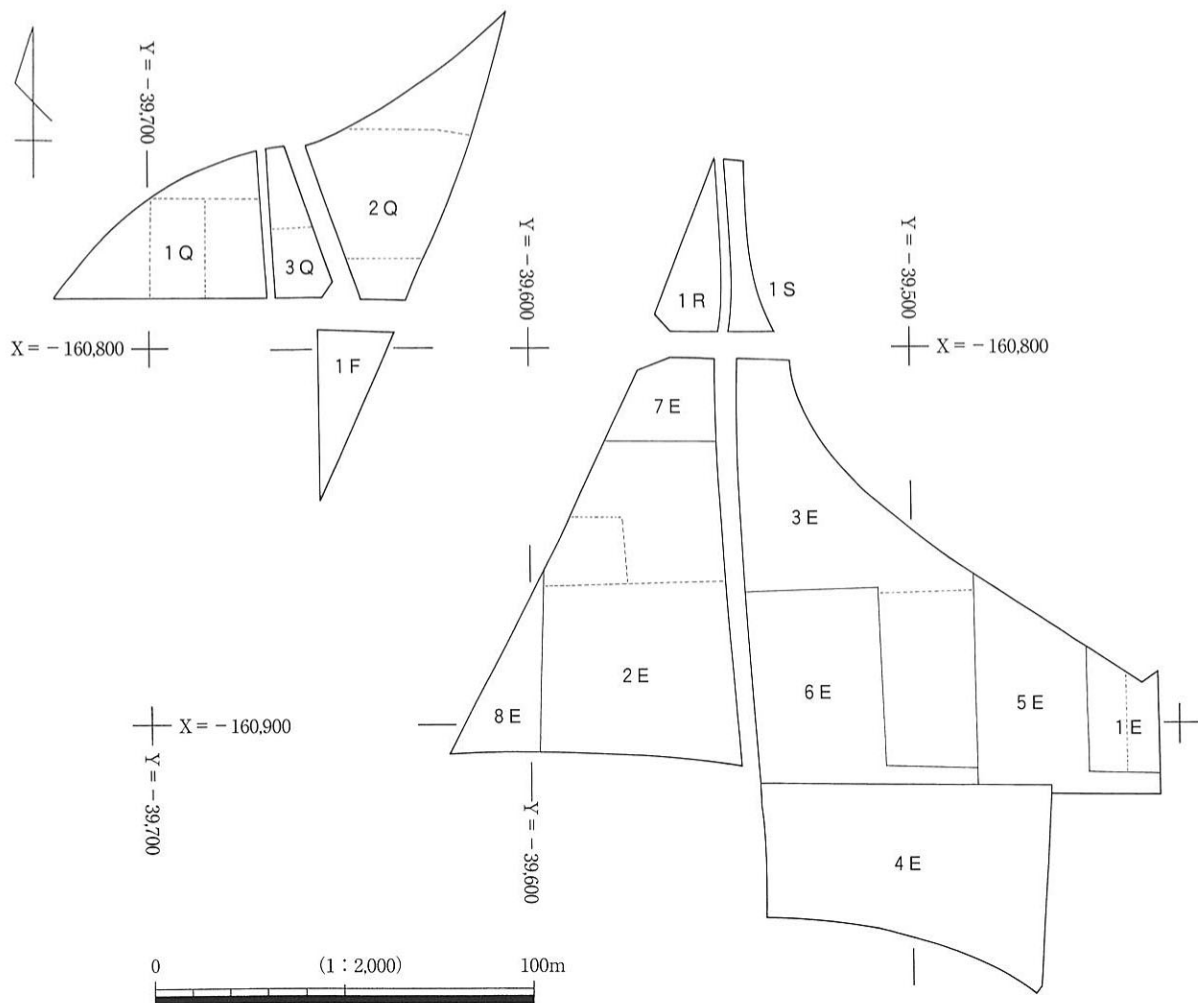


図7 トレンチ配置図

第IV章 調査の成果

第1節 丹上遺跡

第1項 1Qトレンチ (図8~12 図版4~6 付図1)

トレンチは今回の調査区域内の北西側に位置する。用地買収の関係から中央・北・西の3地区に大別し、さらに、掘削土仮置場確保のため中央部を東西に二分して調査を行った。

基本的な堆積層序は、1.5mほどの盛土の下に約0.2m程の旧耕土が存在し、これを除去した段階で洪積層表層部の黄褐色系の粘質土やシルトが直ちに露呈する地域が中央部を中心に大きく広がる。しかし、調査区東部と南部では、0.1m以下の薄層ではあるが、中世までの遺物を含む灰褐色系の砂質土、平安時代を主に一部飛鳥・奈良時代までの遺物を含む褐色系砂質土、これとは逆に量的には奈良時代以前の遺物の占める割合が高く、より褐色味と粘性が強い土層が上位からの攪拌を受けたような状態で堆積する部分が存在し、これらを1層から5層と呼称して掘削を行った。

遺構は、中位段丘面上位に堆積する黄褐色系の粘質土やシルト上面で検出され、その主だったものには溝と土坑がある。

これらの多くは褐色系の砂質土で充填され、含まれる遺物は、平安時代中頃を中心とするものであった。

しかし、土坑の中には数基ではあるが、古墳時代前期の土器を包含しているものが検出された。これらは、埋土の色調が黒褐色に近く、また、粘性もより高くなるという点において、他の遺構や、上位に堆積する包含層と相違していた。

以下、主要遺構について、その様相と特徴を述べることにする。

溝7 (図9, 11-12~35 図版5-1, 12-3・4)

トレンチ北部で検出された。東西方向にのび、西側で北向きに大きく方向を変化させて調査区外へと続く。

溝底の高低差から東から西への水流があったものとみられるが、埋土の粒子が細かいことから、その量は多くはないと推定される。

溝東半部の北肩附近では、土師器を中心とする土器がまとまって出土したが、その他の部分ではあまり出土しなかった。

これらの土器片は細片化していること、接合するものが少ないことから、あたかも不用品を打ち捨てたかの如き出土状況を呈していた。

出土遺物には図11-12から35に示す土器や瓦類がみられる。

このうち、12の飯蛸壺や15の杯身については古墳時代後期から飛鳥時代に属するもので、量的に少ないことや他の遺物と時期的な隔たりをもつため、混入品との解釈も可能である。一方、それら以外の須恵器や土師器については、時期的にみて比較的まと

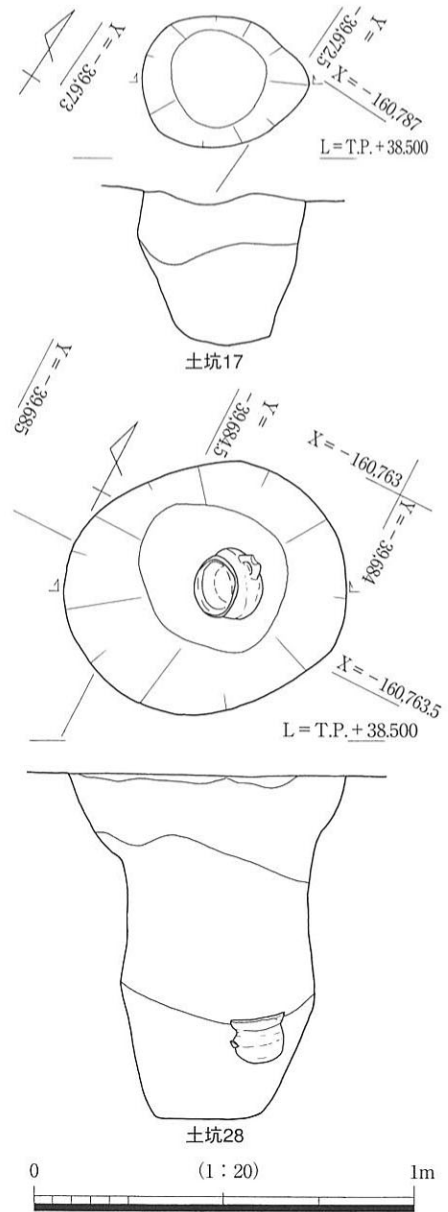


図8 1Qトレンチ 土坑17・28平・断面図

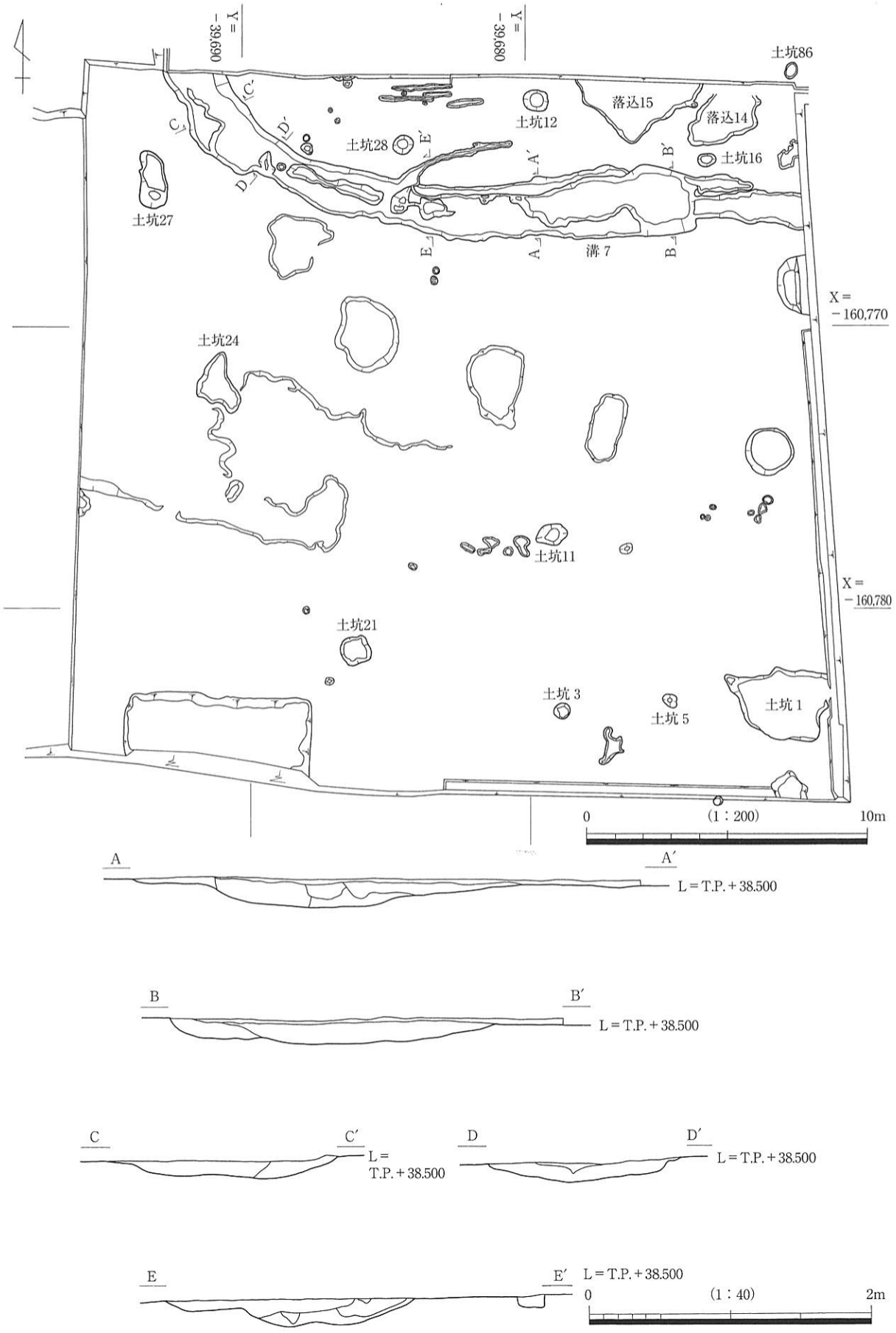


図9 1Qトレンチ 平面図および溝7断面図

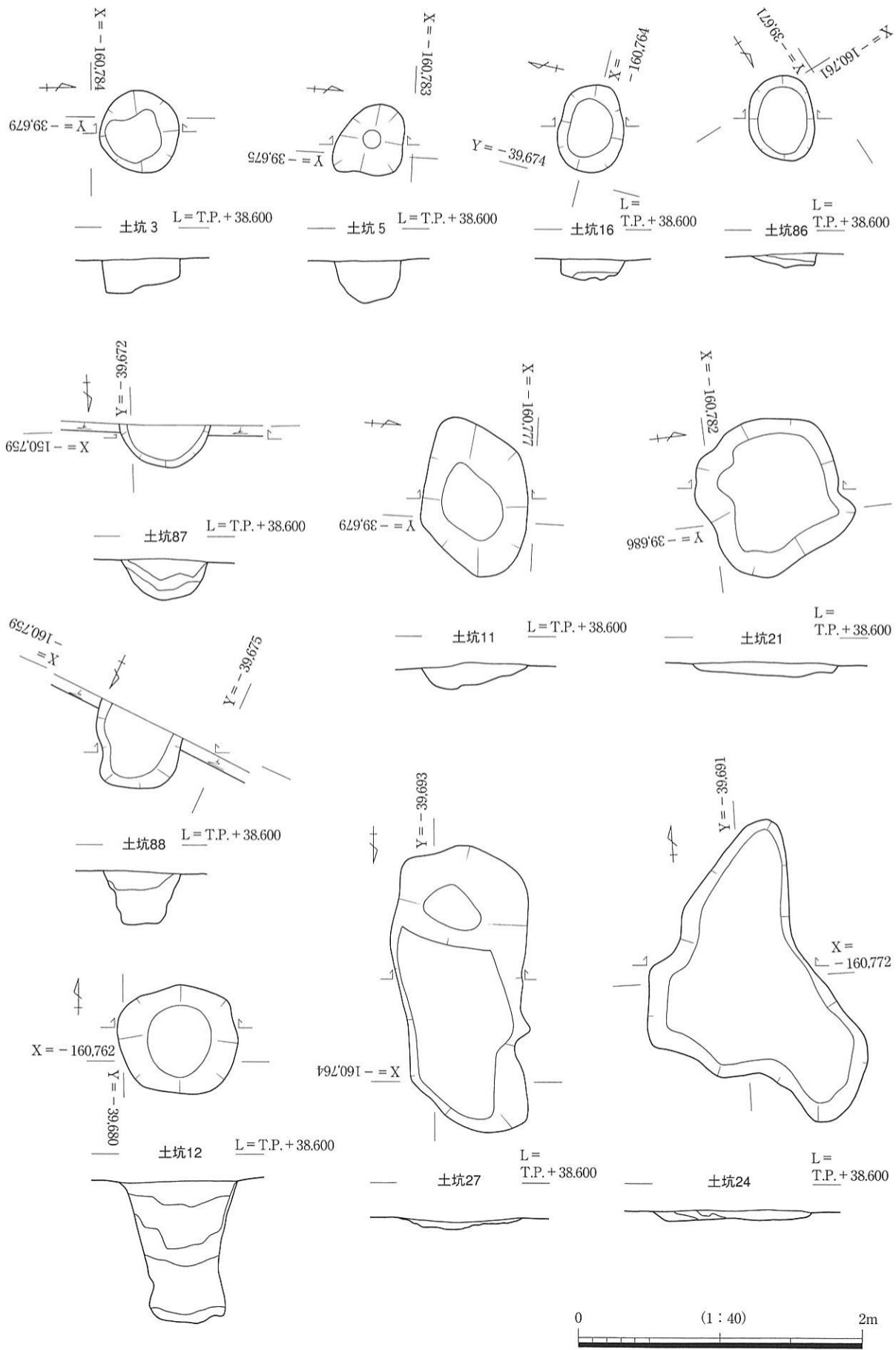


図10 1Qトレンチ 土坑平・断面図

まっていることから、これらの土器を溝廃絶段階の資料として位置づけられよう。

遺物の種類には、須恵器・土師器・瓦埴類がある。量的には土師器が大多数を占め、その中でも煮沸形態である甕が多いことで特徴づけられる。

これらは、大局的には平安時代前葉頃に位置づけられよう。しかし、図化できなかった破片類を含めると、土師器の量が須恵器などを圧倒的に凌駕しており、この点に着目するならば、その中でも中葉的要素の強い土器群と評価できる。

土坑12 (図10. 11-8 図版4-1)

トレンチ中央東半の北側で検出された。規模は、長径0.9m、深さ1.0mを測る。形状は円筒状に掘削され井戸状を呈するが、底部は粘質土層内で収まっており、湧水層までには達していない。

埋土は5層に分けられ、坑底に向かうにつれ粘性が高く、黒灰色味の強い土層が堆積していた。

出土遺物には図11-8に示す土師器の壺口縁部がある。その形状から布留式段階に属する直口壺であると考えられ、埋土の特徴とともに、古墳時代前期の遺構であることを指し示している。

土坑28 (図8. 11-9 図版11-1~4)

規模は、長径0.75m、深さ0.9mを測る。円筒形に近い形状に掘削され、上位はゆるやかに開く。

埋土は、大きく3層に分けられ、下層にいくほど粘性が高くなり、そこには黒色味の強い粘質土と灰色味の強いシルト質土層が薄く互層状に堆積していた。そして、下位には、土師器の甕が図8下段のような状態で埋もれていた。図11-9に図示するものがそれで、亀裂もなくほぼ完形の状態を保っている。比較的小型の製品で、体部上位には退化傾向にある把手を双方2ヶ所に貼り付けている。形態的な特徴から平安時代初頭から前葉頃の所産にかかるものと考えられる。

なお、外面下半には赤変し脆くなった部分と、煤が付着している部分が観察できることから、実用に供されていた土器を土坑廃棄段階に埋置したものと考えられる。

このほか、土坑5からは図11-5に示す甕や6の直口壺が、図版12-2のような状態で出土したことから古墳時代前期の遺構と確実視でき、土坑87・88についても埋土の特徴から、当該期の遺構である蓋然性が高い。また、土坑27は図11-1・2の須恵器杯身の特徴から、平安時代と考えられる。その他については判断材料に乏しいが、埋土の様相からおおむね平安時代以降に位置づけられよう。

包含層出土遺物 (図12-1~64)

図12-1から30は2層出土の土器である。後世の耕作などによる影響のためか土師器の遺存状況が悪く、図化できたものは1と29のみであった。その他については2が口禿口縁となる白磁碗、3から28が須恵器で、器種には3および23から28の蓋杯、4の平瓶の口縁部、6から10の壺の各部位、30の甕がある。これらは、時期的には飛鳥時代から鎌倉時代までのものが含まれている。この中には、小片ではあるが、図12-12のような円面硯の海から脚部にかけての破片が含まれていることで注目される。

3層出土遺物には図12-31から42がある。31から33は土師器の杯および甕である。34から39は須恵器で、34のように古墳時代後期にまで遡るものから、39のように平安時代前葉に至るものまでがみられる。40は須恵質焼成の円筒状土製品で、器種については不明である。41・42は丸瓦の破片とみられる。

4層出土の遺物には図12-43から62がある。すべて須恵器で、43・44の杯身は飛鳥時代のものと考えられる。その他、45から47は杯身、48から51は壺の底部から体部、52は甕、53から62は各器種に伴う蓋で、時期的には奈良時代後半から平安時代前葉にかけてのものと考えられる。

なお、図12-63・64の須恵器蓋杯は溝7検出作業中に出土したものだが、溝の遺物と接合しなかった。

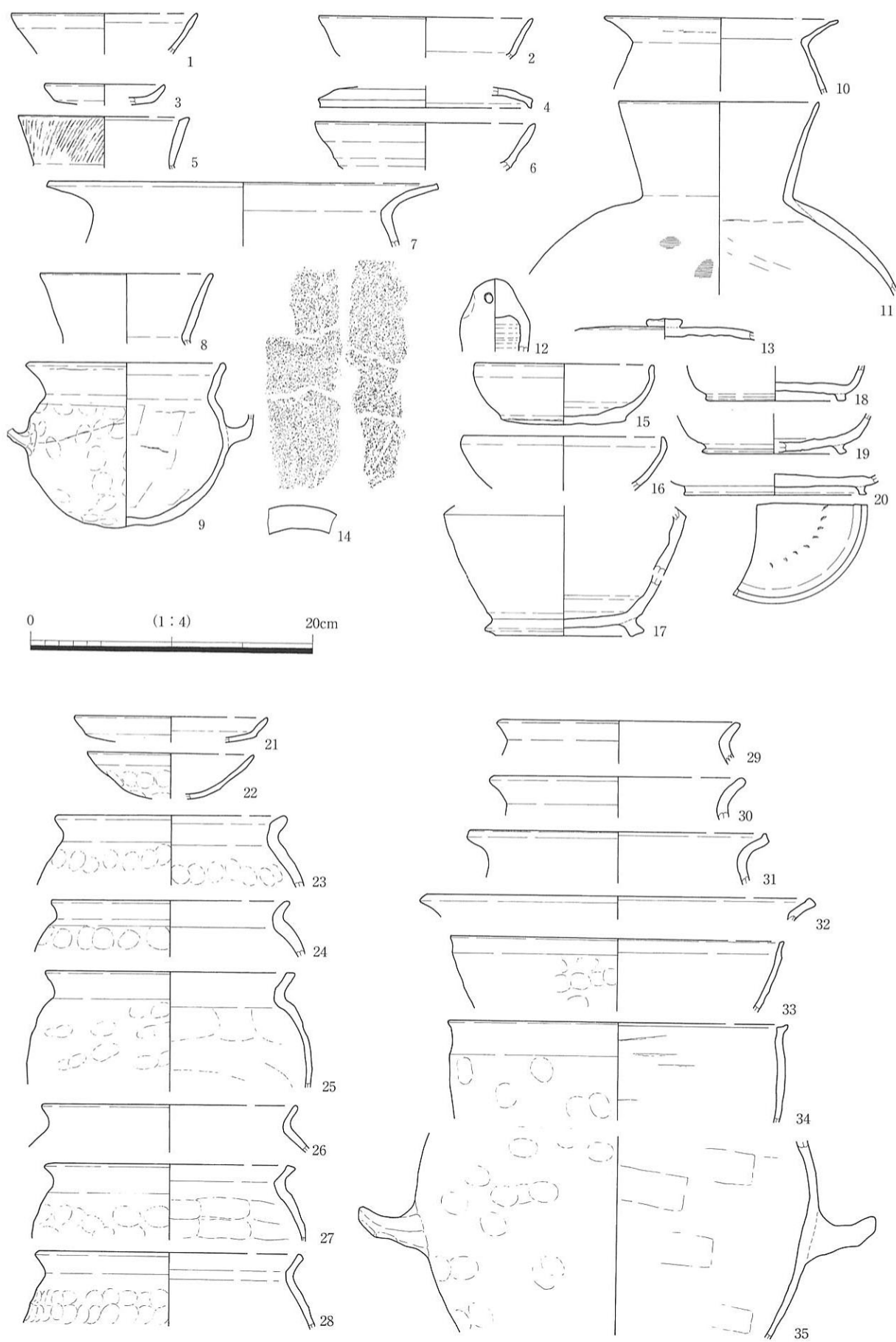


図11 1Qトレンチ 土坑・溝・その他出土遺物実測図

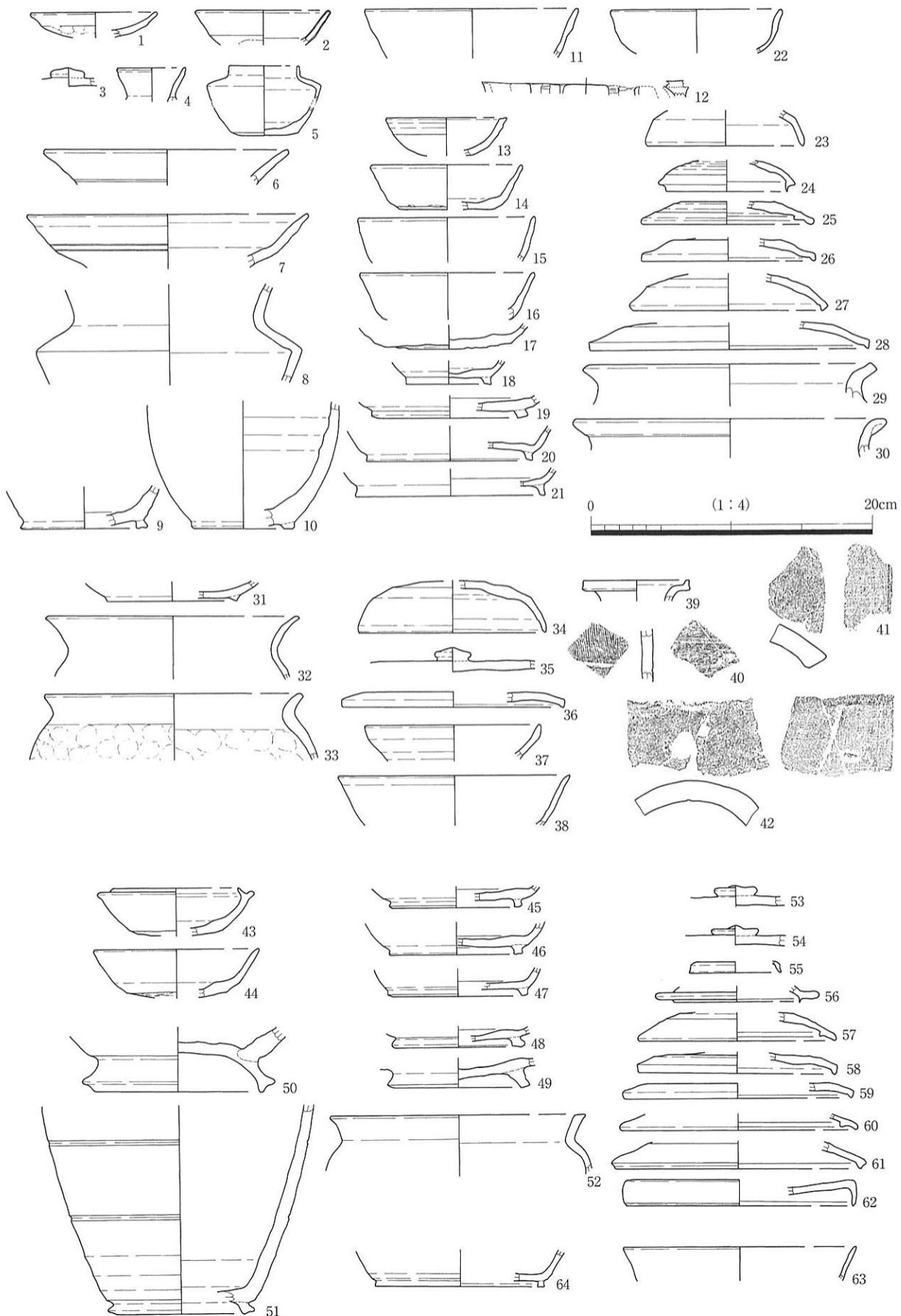


図12 1Qトレンチ 包含層(2から5層)出土遺物実測図

第2項 2Qトレンチ (図13~18 図版6-2. 7-1・2、8-1、10-1~4 付図1)

調査区のほぼ中央に位置し、東側隣接地は近畿自動車道建設工事に先立ち、当センターの前身組織により発掘調査が行われている。基本層序は1Qトレンチと大きく相違するところはないが、2層と3層が層厚0.1mほど堆積していたため、おのずと包含される遺物の量も多く、まとまった点数を図化することができた。なお、4層についてはそれに相当すると考えられる堆積層が認められなかった。

また、3層上面で遺構検出を行ったところ、図版10-1のような犁溝を検出した。溝の方向は現在の条里形地割に平行または直行していることから、この段階にはすでに耕地化されていたと察せられる。

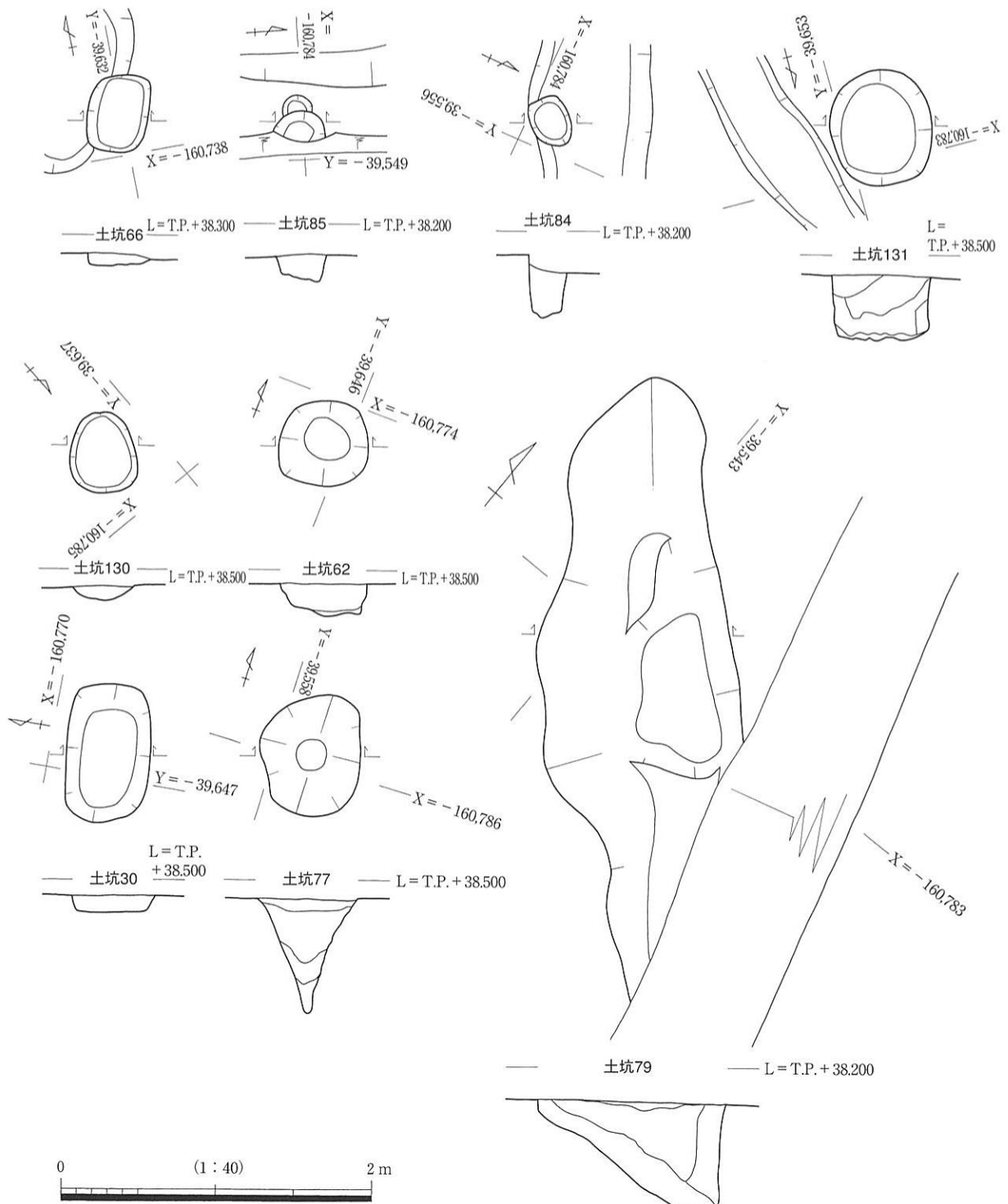


図13 2Q、3Q・1R・1Sトレンチ 土坑平・断面図

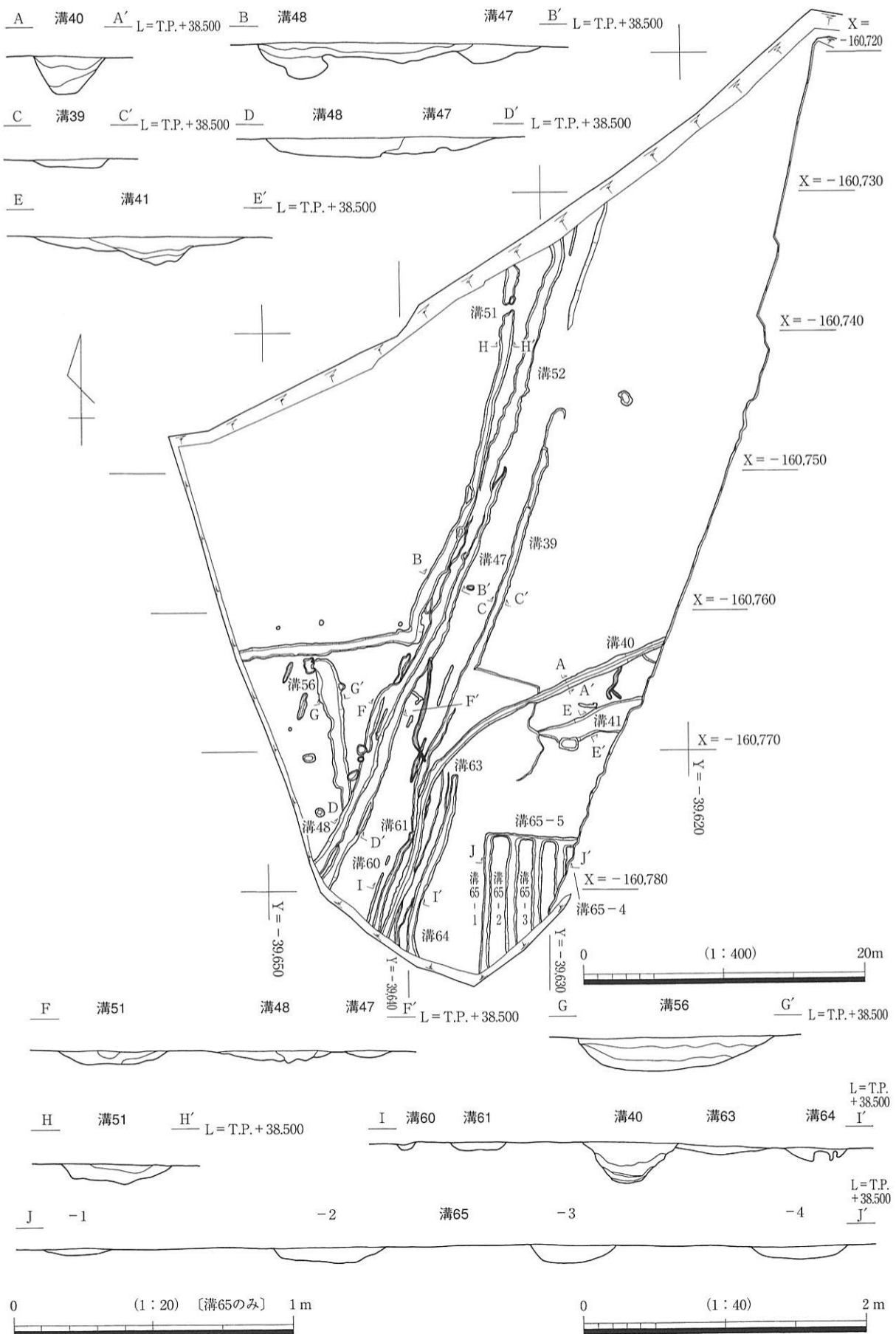


図14 2Qトレンチ 平面図および溝断面図

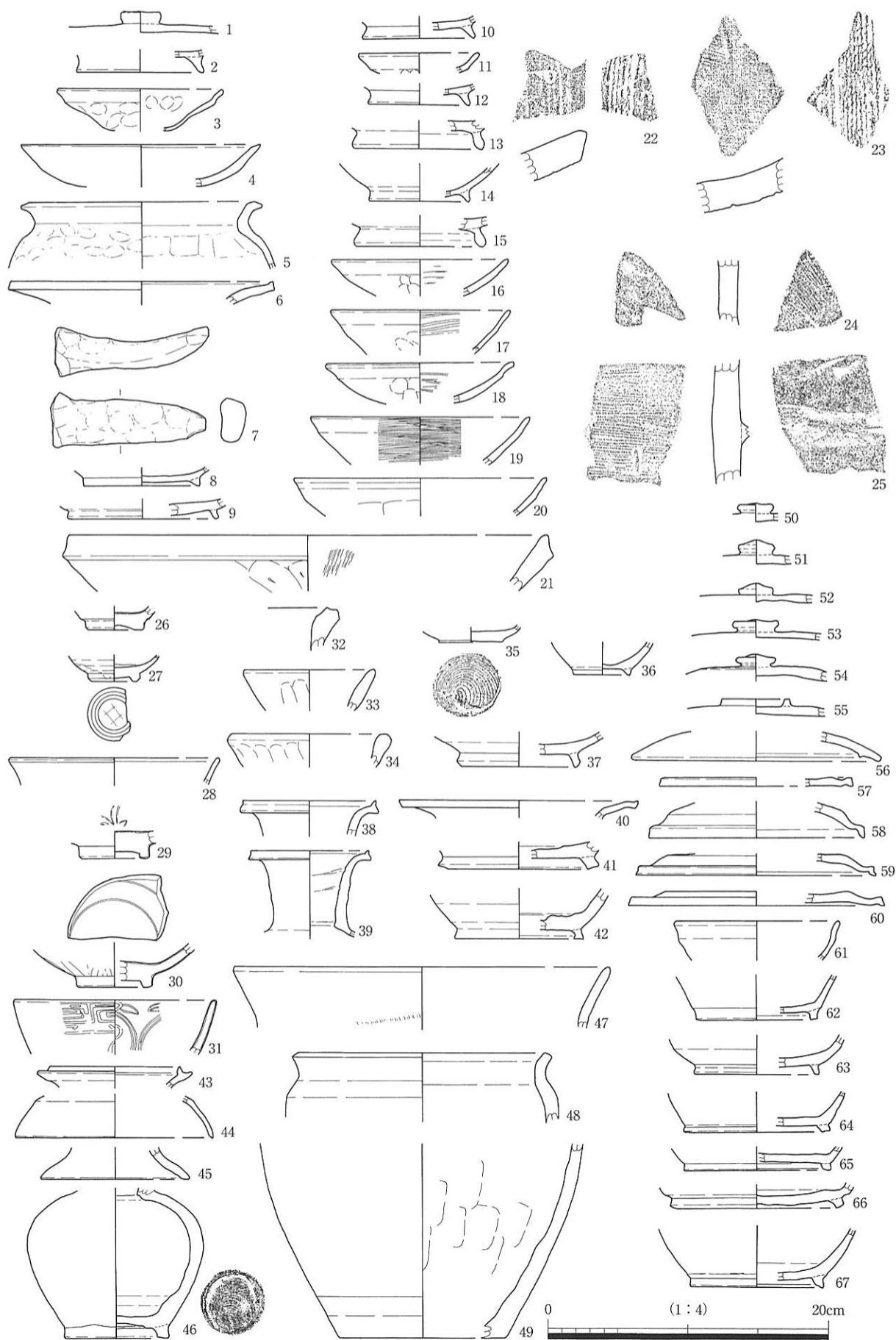


図15 2Qトレンチ 包含層(2層)出土遺物実測図

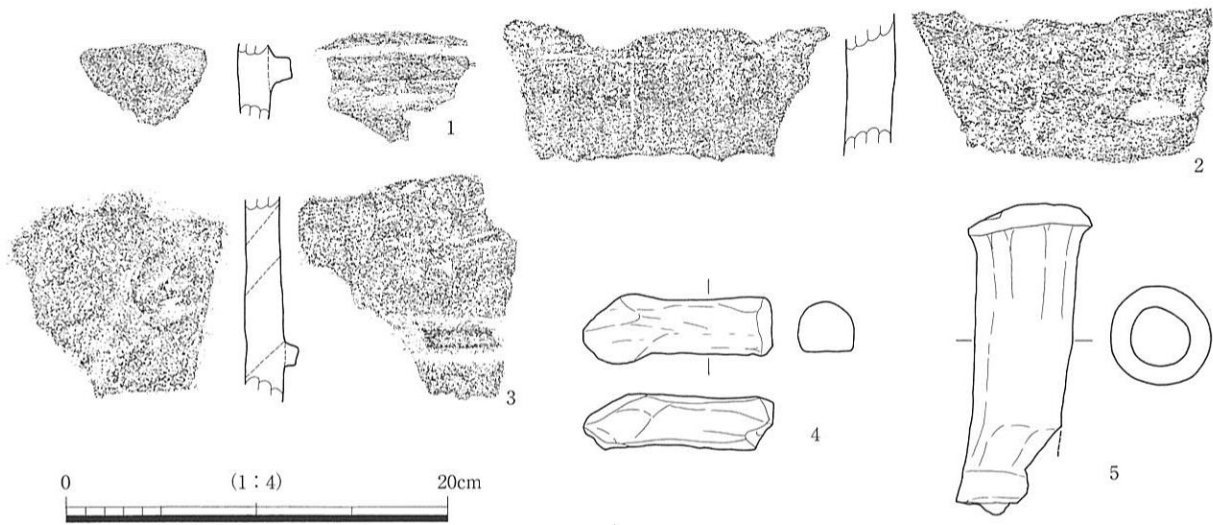


図16 2Qトレンチ 包含層(3層)出土遺物実測図〔1〕

検出された主要な遺構は溝群であるが、南部においてそれらが平行しながら区画を形成し、一つの単位を構成している溝65を検出した。類似する諸例との比較から、島の畝が削平を受け周囲の溝だけが遺存した状況を止めていると考えるに至った。これを含め、主要な遺構を以下に述べる。

溝40(図14. 18-3~5 図版7-1・2、8-1)

調査区北東側から南西部へと弓形に屈曲する溝で、断面形は図14に図示するような逆台形を呈する。埋土は大略的に3層に分けられ、全体を通じて褐色味を帯びた粘性の強い土層が堆積する傾向にある。

なお、既往の近畿自動車道側調査区で確認された溝2-115と溝6-124とに連続する位置関係にある。これに今回の調査で検出された約30m分を加えると、総延長100mを越えるものであることが判明し、これと同時に、直線的に開鑿されてきた溝が、今回の調査区内で大きく南に彎曲するものであることを明らかにすることができた。

出土遺物には図18-3から5に示す土師器の杯2点と鉢がある。このうち杯は暗文は確認できないが、その法量や形態から飛鳥第Ⅲ期を前後する段階のものと考えられる。鉢については詳細不明である。

溝47(図14. 18-6・17~20 図版6-2、7-1・2、8-1、10-2・3)

調査区北東から南東に向かって直線的にのびる溝である。図14に示すように、西肩を溝48によって失っている。断面形状は浅い皿形を呈し、溝底には動物の足跡と思しき小さな凹凸が顕著に認められた。

この溝を境として西側は堆積層が薄く、逆に東側では厚くなり、ゆるやかな段差を形成している。

堆積層は地点によって安定してはいなかったが、底部附近に粗砂を含んだシルトや砂質土の堆積が顕著に認められる部分が多いことから、一定程度の水流があったことを推定せしめる。

出土遺物には須恵器、黒色土器がある。須恵器には図18-6と20のような2種類の壺がみられ、この他、17や18の杯蓋が図化できた。黒色土器には19に示す内黒のA類とされるものが1点含まれている。なお、15・16の土師器は溝47と48の重複部で検出されたものだが、どちらに帰属するものか躊躇する。

これらの遺物は、A類の黒色土器が含まれていることや、6のような口縁形態をもつ須恵器がみられることから、平安時代の中でも10世紀前半を下限とする段階のものともみなされよう。

溝51(図14 図版6-2、7-1・2)

北側では溝39・47・48などと平行するが、途中で西側に屈折する溝である。平面的な位置関係に着目した場合、3Qトレンチの溝89・90を介して、先述の1Qトレンチの溝7に連続する可能性がある。

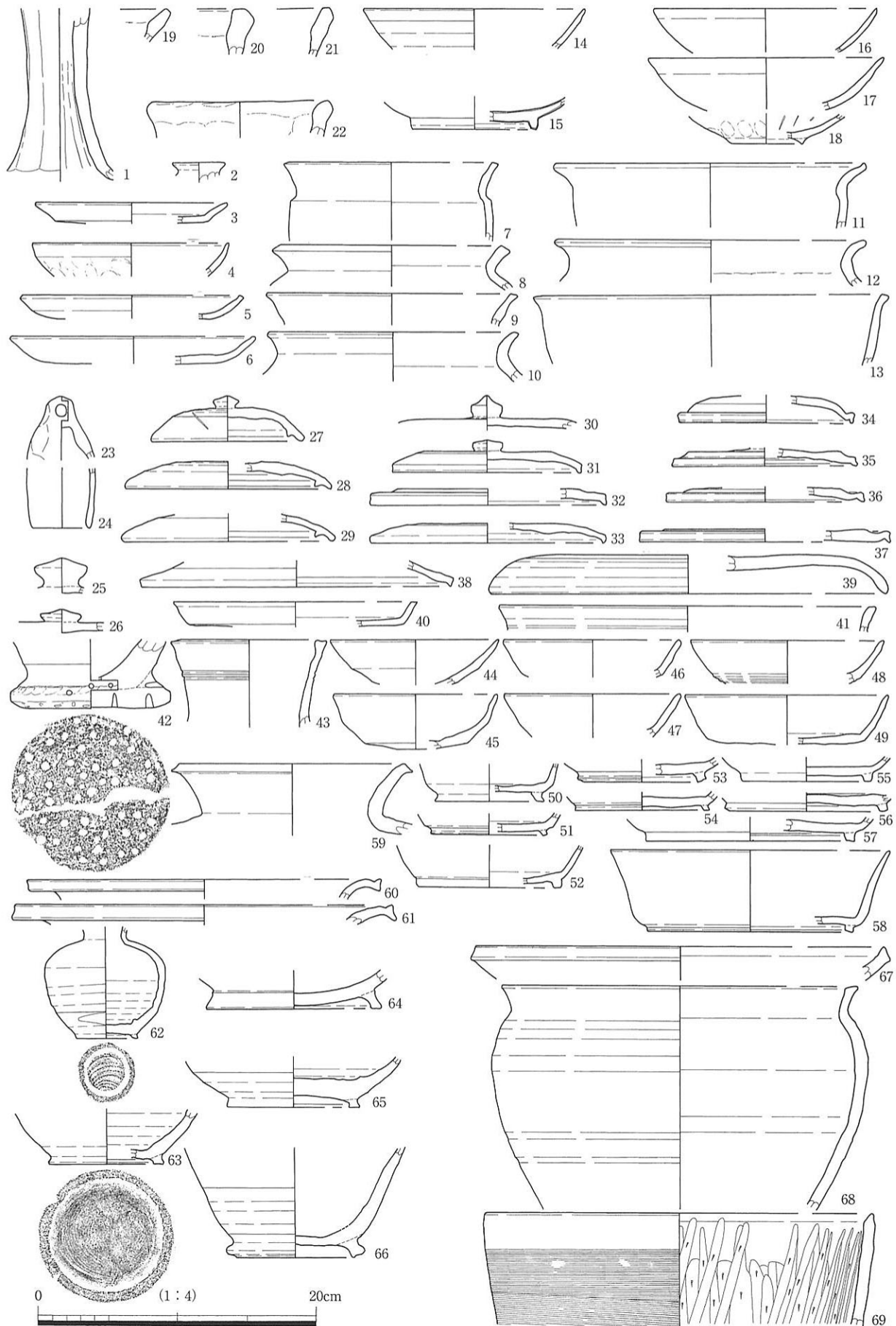


図17 2Qトレンチ 包含層(3層) 出土遺物実測図〔2〕

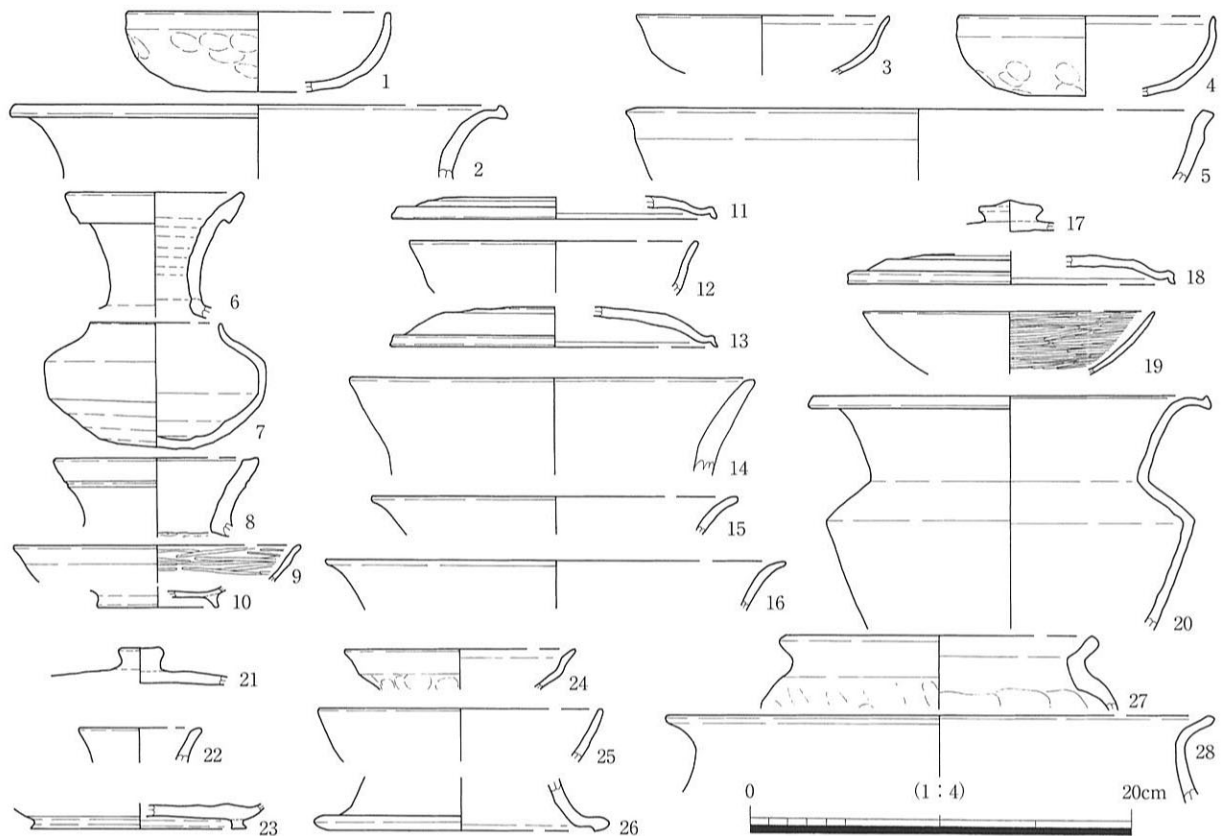


図18 2Qトレンチ 溝、3Qトレンチ 包含層・溝・ピット出土遺物実測図

溝65 (図14. 18-8~10 図版6-2、8-1、10-2・4)

トレンチ南端部で北西部分を検出した。4列の長方形区画の周囲を5条の溝が囲廓するように開鑿されている。長方形区画の規模は4条とも幅約1.2m、長さ9m以上を測る。これまでに検出された類例から類推して、畝であるとの解釈により妥当性があるものと考えられる。

出土遺物には図18-8から10の土器がある。3点とも細片化しているため詳細は窺えないが、8は飛鳥時代から奈良時代にかけての須恵器、9・10は瓦器碗である。このうち須恵器は混入品と考えられるため、遺構の時期は、瓦器碗の特徴が示す平安時代末期の12世紀代に収まるものとみなしたい。

遺構出土遺物 (図18-1・2・7・11~14)

図18-1・2は溝63出土の土師器杯と須恵器甕の口縁部で、ともに飛鳥時代のものと考えられる。なお、この溝は溝40に後出するもので、遺物からもこの関係に齟齬はない。7は溝56出土の有蓋短頸壺である。古墳時代後期から飛鳥時代頃の特徴を有しており、埋土の様相や遺構の重複関係とも整合する。11から13に示す須恵器の蓋杯と14の壺口縁部は溝52から出土した。時期は平安時代前葉頃と考えられる。

包含層出土遺物 (図15~17)

2層から3層にかけての層準より、古墳時代後期から桃山時代にかけての多種多様の遺物が出土した。

2層出土遺物には図15-1から67がある。新しいものでは26のような瀬戸・美濃窯系の天目茶碗、27・28の白磁、29から31の龍泉窯系青磁という輸入陶磁器の碗がみられる。奈良・平安時代では須恵器、土師器、内黒の黒色土器のほか、32から34の製塩土器、35の耳皿、22・23の平瓦がみられる。さらに、古墳時代後期から飛鳥時代では、43・44の須恵器蓋杯のほか、24・25の円筒埴輪も含まれていた。

3層からは図16・17の遺物が出土した、中世の遺物は図17-18の瓦器碗と14の白磁碗以外みられず、2層より古い時期の遺物が多い傾向にある。また、15のような緑釉陶器を含むことでも特徴的といえる。

第3項 3Qトレンチ (図18・19 図版6-1、8-2 付図1)

トレンチは1Qトレンチと2Qトレンチの間に挟まれた狭長な調査区となる。その上、既存建物の解体・撤去の時期が異なったため、南北2ヶ所に分割して調査を行うことを余儀なくされた。

基本的な堆積土層は、1Qトレンチと2Qトレンチが東西に控えているため相違する部分は少ない。そして、各層準の厚さは双方の中間的なものであった。検出された主要な遺構は溝と小ピットである。

溝89・90 (図18-21. 図19

図版6-1)

1Qトレンチ溝7と2Qトレンチ溝51とを繋ぐ溝である可能性が高いことは先述した。

出土遺物は図18-21の奈良時代末から平安時代にかけての土師器杯蓋など微量である。しかし、上記の溝と时期的な隔たりはなく、遺物からも両者が同一である可能性を否定できない。

土坑91 (図18-25・26. 図19 図版8-2)

溝89により北側を削平されているため全形は窺えない。図18-25・26の須恵器が出土した。

溝126 (図18-27・28. 図19 図版8-2)

トレンチ北半調査区で検出した。断面は浅い皿形を呈し、埋土はシルト質の強い灰褐色系の土層である。出土遺物には図18-27・28に示す土師器の甕などがある。特徴から平安時代前葉までのものと考えられる。

この他の溝の特徴も上記の溝と大同小異であり、ほぼ同時期として大過ないであろう。

なお、図18-24はピット107から出土した土師器の杯、同図-22は2層から得られた瓶子の口縁部、同図-23は同層準から出土した杯身である。

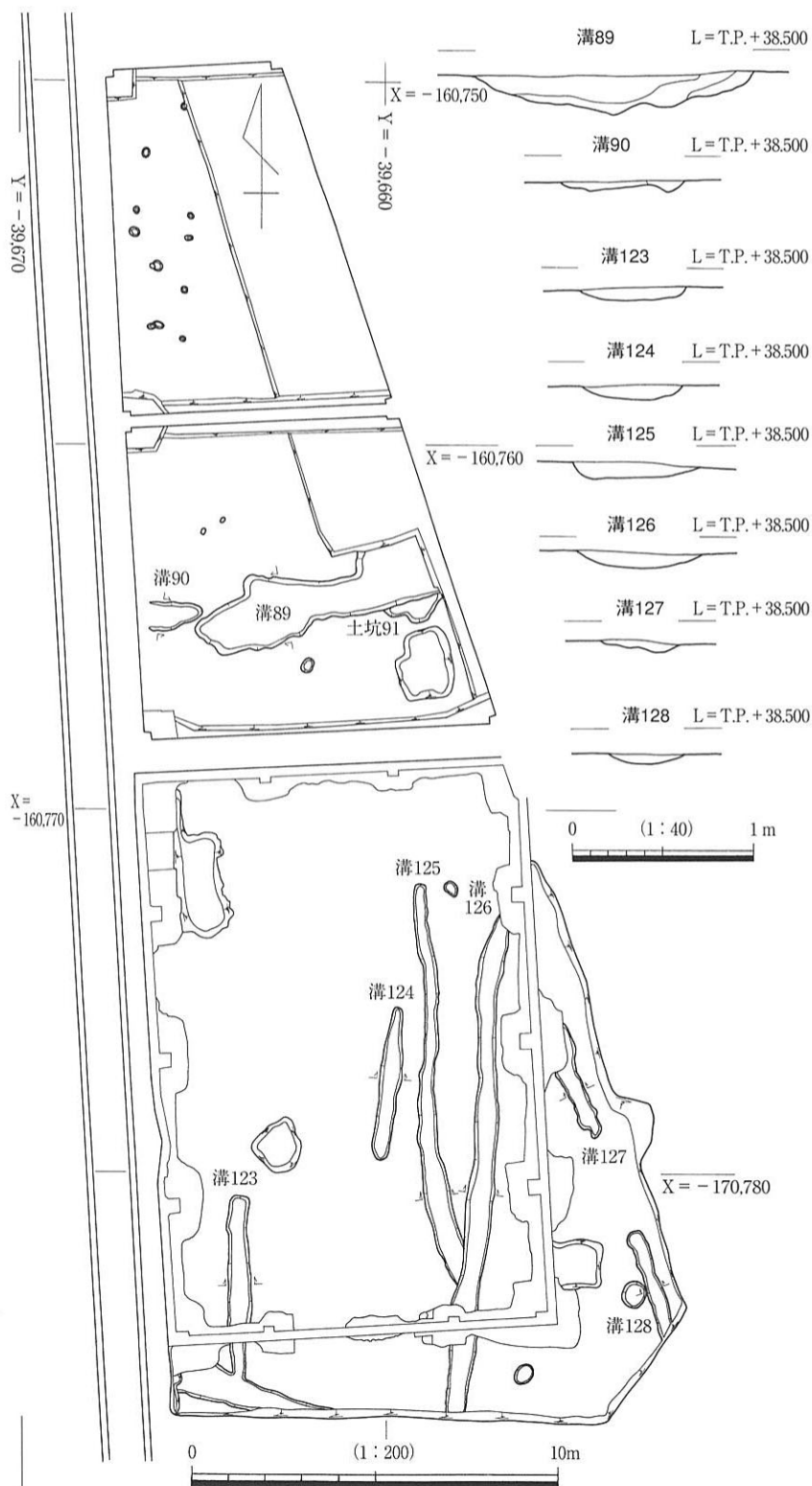


図19 3Qトレンチ 平面図および溝断面図

第4項 1R・1Sトレンチ (図13・20・21 図版9-2)

Q地区と近畿自動車道を挟んで東側に位置する細長い調査区である。既設用水路を境として西側を1Rトレンチ、東側を1Sトレンチと呼称して調査を行った。

基本的な層序は両トレンチとも相違がなく、層厚約0.15mの現在の耕作土を除去すると、中世までの遺物を含む砂質を帯びた灰褐色系の土層、それよりやや褐色味が強く粘性が増し、層中に飛鳥時代から奈良時代までの遺物を包含する土層が約0.1mずつ堆積し、これを除去すると遺物を含まない黄褐色系の粘質土から砂礫層が露呈する。周辺地区との対比では上層が2層、下層が3・4層に相当する。

遺構は、2層の灰褐色系土層を除去した段階と、黄褐色系の基盤層上面を露呈させた段階の計2面で検出した。

上層で検出した遺構は、図20のような溝と小溝群である。これらの遺構は西側の1Rトレンチのみで確認でき、1Sトレンチ側では検出できなかった。

溝群 (図20)

おおむね2.1mの間隔をおいて平行して並んでいる。主軸は、現在の条里形地割とほぼ同じ南北方向を向いている。

小溝群 (図20)

犁溝であると考えられる。溝群の間を平行するように並んでいるが、長さ、深さともにそれらより規模が小さい。

溝67 (図21・22 図版9-2)

上記溝群の東端に位置しており、南北に長軸をもつ。その規模は2者と比較して一段と大きくなる。

断面形状はゆるやかな皿形を呈し、溝底には局所的に浅い凹凸がみられた。

埋土は大きく2層に分かれ、下層には粘性の高い灰褐色系の土層が堆積する。

溝は南側に向かうにしたがって浅くなり、トレンチ東南隅で西側に直角に曲がって溝68へと連続している。

出土遺物には図22-3に示す土師器杯がある。器面の遺存が悪く、詳細は判断しかねるが、おおむね奈良時代後半に位置づけられる。しかし、検出面が上層であるため、該期の資料が原位置を止めて

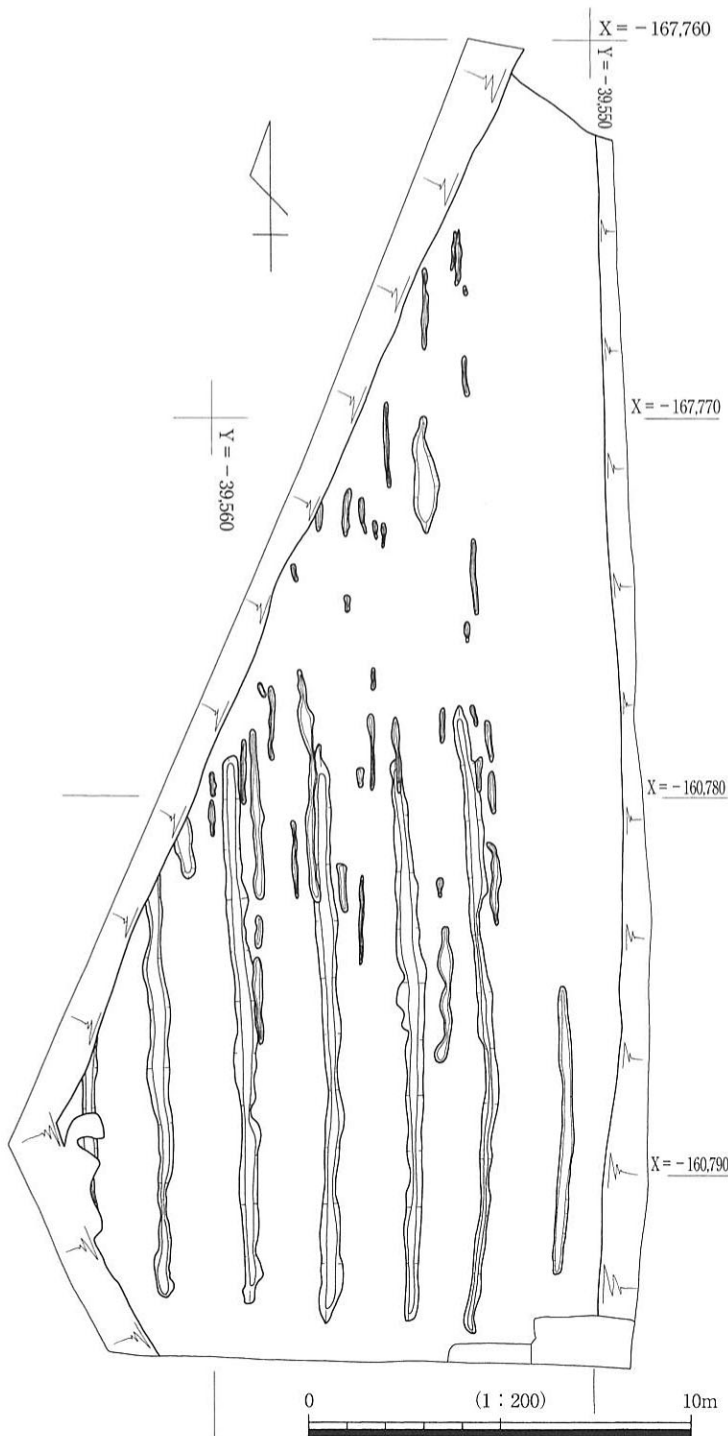


図20 1Rトレンチ 上層遺構平面図

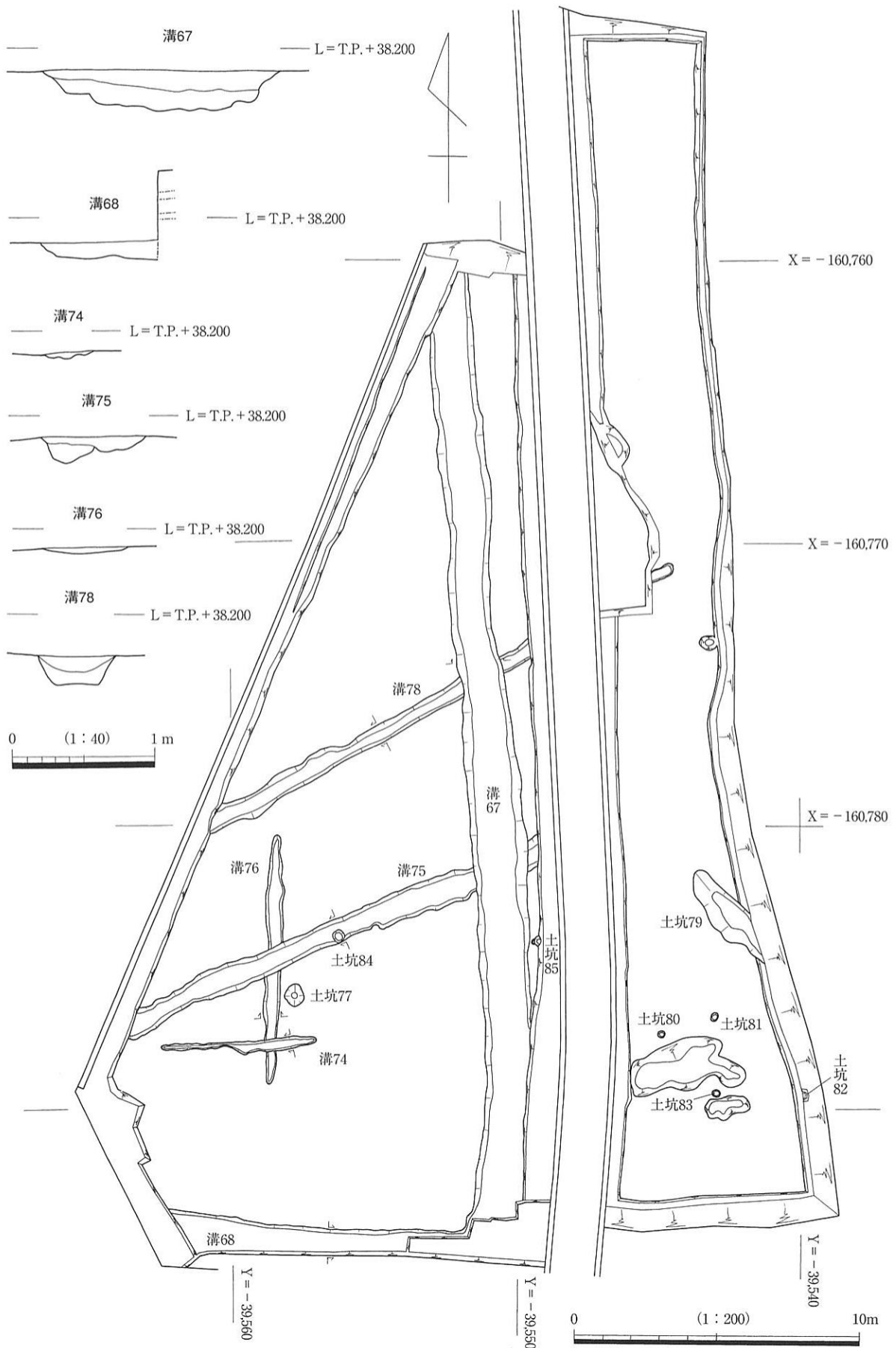


図21 1R・1Sトレンチ 平面図および溝断面図

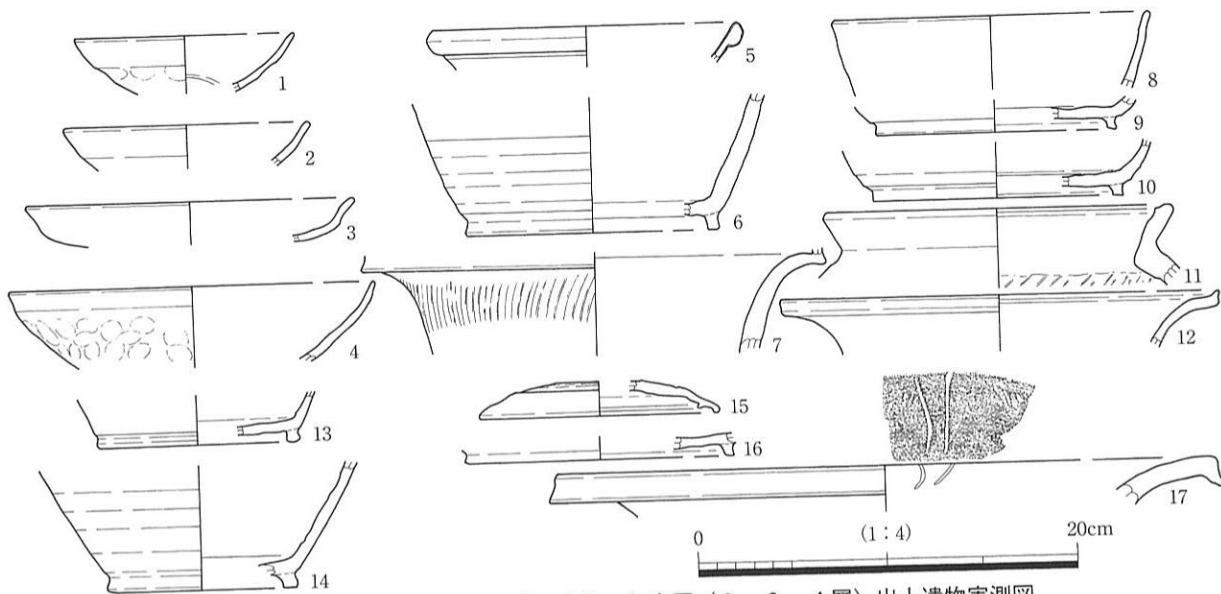


図22 1R・1Sトレンチ 溝・土坑・包含層（2・3・4層）出土遺物実測図

いるとは考えられない。埋土の特徴なども勘案すると下層からの混入とみなすのが妥当であろう。

なお、溝はさらに北部へ伸びることから、近畿自動車道側調査区で検出された遺構との照合を行った。その結果、溝2-82がこれの延長部に相当するものと考えられた。この溝は単位が30mを越える方形区画の一部を構成するような場所に位置しており、中世段階における幹線的水路の役割を担っていたものと考えられる。従って、今回の溝67もそれらと同様の機能を有していたものと位置づけられよう。

下面の基盤層上面で検出した主な遺構は溝と土坑である。これらは、溝74や76のように方位に対し直行あるいは平行する主軸をもつものと、75や78のように斜行するものの二者に大別される。

溝74（図21 図版9-2）

溝76廃絶後に開鑿された溝である。図に示すように非常に浅いものである。遺物は出土しなかった。

溝76（図21 図版9-2）

溝75埋没後に掘削された溝である。上記と同様に非常に浅いものであるが、両肩の検出は比較的容易であった。埋土は粘性が高く褐色味を帯びた均質な粘質土である。遺物は出土しなかった。

なお、埋土と位置関係とを比較した場合、2Eトレンチから7Eトレンチにわたって検出された溝25に連続する可能性が非常に高く、その解釈が許されるならば、溝の総延長は110mを越える。

溝75（図21 図版9-2）

溝78に平行するが、埋土は異なっている。図22-4に示す平安時代前葉頃の土師器の杯が出土した。

溝78（図21 図版9-2）

水路を挟んで1R・1S両トレンチで検出した。断面は図示するような逆台形で、埋土は2層に分けられる。堆積土は黒みを帯びた粘性の強い土層で、遺物は含まれていなかった。なお、位置関係などから、近畿自動車道側の溝2-59の延長部とみられ、総延長は断続しながら170mにおよぶ。

土坑79（図13・21）

1Sトレンチ東側で検出された。埋土は4層に分けられるが、下位は風倒木による攪拌と考えられる。

遺構・包含層出土遺物（図22）

2層から出土した図22-5の厦門碗窯系白磁碗以外は1Sトレンチからの出土である。すべて須恵器で6・7は2層、8から11および14から17は、3から4層相当層、13は土坑73から出土した。

第2節 真福寺遺跡

第1項 1Eトレンチ (図23・24 付図2)

今回の調査区、また、真福寺遺跡範囲内でも最も北東に位置する調査区で、東は郡戸遺跡に隣接する。基本層序は、現在の耕作土を除去した段階で、小礫を含んだ黄褐色系の粘質土が直ちに露呈する部分が大部分を占めていた。しかし、北側はその方向に向かって基盤層がなだらかに落ち込んでいき、その部分に堆積した包含層から若干の遺物を採取することができた。当初、この傾斜面の性格について把握できなかったが、後に調査した3・5・6Eトレンチの調査成果から、この地形は西から東に向かって広がる開析谷の南肩の一部であったことが判明した。

検出した遺構は若干の土坑で、時期的には中世以降のものである。

土坑5 (図24)

北へ落ち込む変換点で検出した。断面は皿形を呈し、遺物はない。

包含層出土遺物 (図23)

図23-1・2は唐津窯系椀で2には砂目痕がある。3は緑釉陶器の壺か瓶の口頸部、4は須恵器底部、5は同安窯系白磁碗口縁部である。

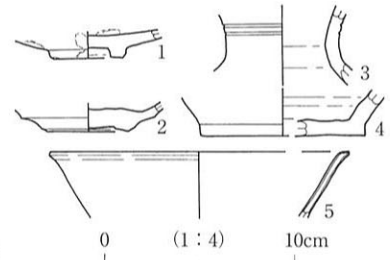


図23 1Eトレンチ 包含層 (1から3層)出土遺物実測図

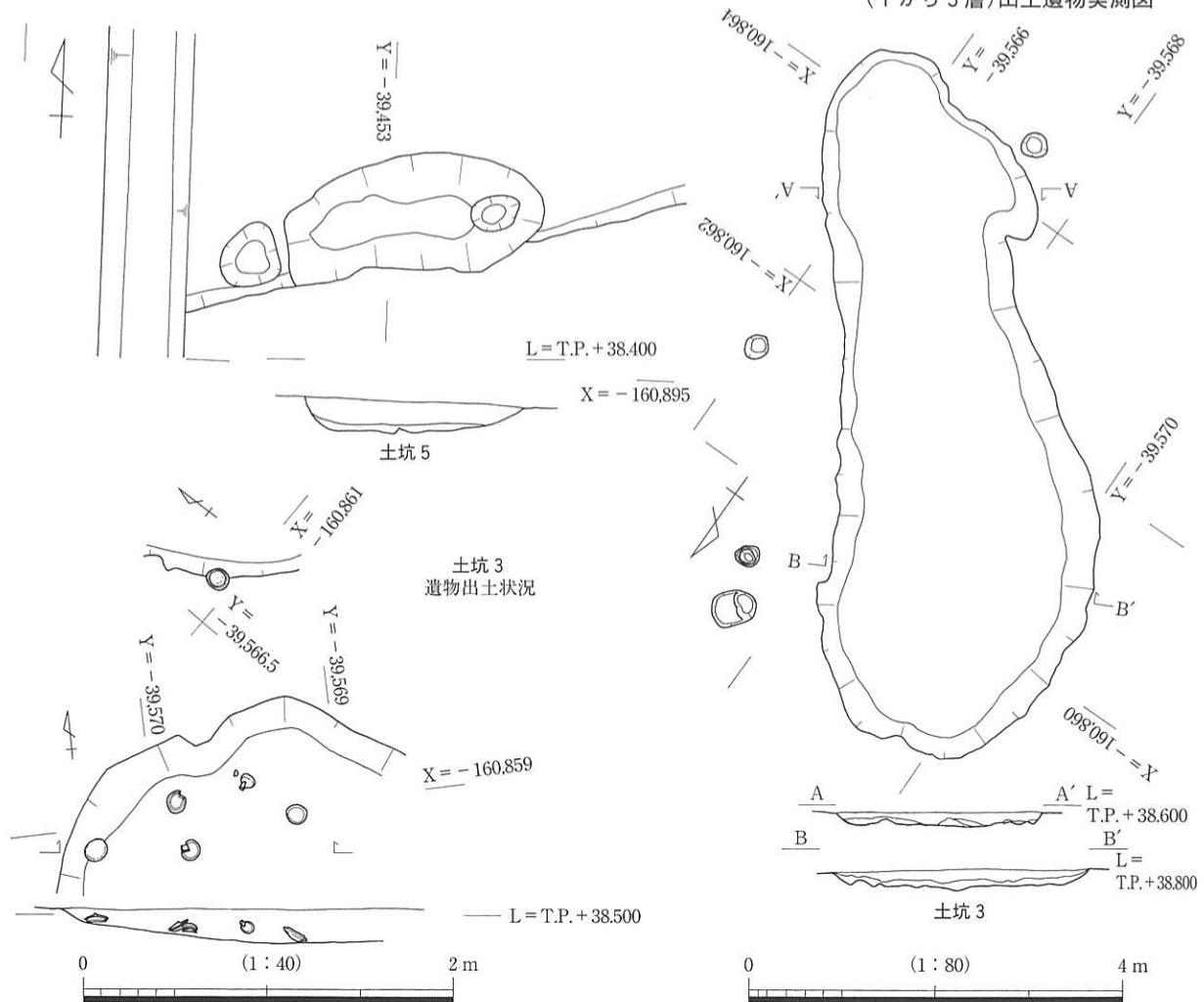


図24 1E・2Eトレンチ 土坑平・断面および遺物出土状況図

第2項 2Eトレンチ (図24~49 図版13~100 付図2・3)

近畿自動車道から既設用水路の間に位置するもので、本体工事との関係で3分割して調査を行った。

基本層序は、上位より現耕土および盛土、砂質を帯びた黄・灰褐色系の土層、先の土層により褐色味がやや強く粘質が加わった土層、褐色系で粘性を帯びた土層である。これらを現耕作土から順に1層から4層と呼称して掘削・遺物の取り上げを行った。さらに、この下層には基盤層である黄灰色系の粘質土から砂礫土が堆積していた。遺構の大部分はこの基盤層上面において検出することができた。

なお、1・2層以外の層準は、南西部にいくほど層厚を減じていき、トレンチ中央附近からは3層が消滅する。さらに、南西端部では4層の堆積も観察されず、極端な部分では現耕作土を除去した段階で直ちに黄灰色系の粘質土から砂礫土が露呈し、2層すら存在しない部分があった。

また、当初、無遺物層と認識していた黄灰色系の粘質土から砂礫土であるが、建物6・7を構成する柱穴の断ち割り作業を行っていたところ、上位から約0.1m掘り下げたこの層内より風化の進行した親指の爪ほどのサヌカイトの小細片を検出した。

石片の含まれていた黄色系土層は、洪積層表層部に相当し、周辺の広範な地域に分布する中位段丘面上に堆積する層序の一部である。また、周辺のこれまでの調査では、後世の包含層からではあるが、国府型ナイフ形石器や有茎尖頭器などが相当量検出されていた。

周囲を取り巻く環境は以上のような状況であったため、本例が後期旧石器時代にまで遡る段階のもので、かつ、層自体が該期の文化層である可能性も生じてきた。このため、周辺に堆積する同層準をさらに下位の砂礫層まで掘り下げ、調査の万全を期すこととした。

掘削の結果、検出されたのはこの小剥片のみで、他にそれらしき石片は検出できなかった。そして、より詳細な情報を得ようと精察したところ、周囲には亀甲状の乾痕が多数観察され、ここから縦方向にのびる亀裂も0.1m以上に達していた。以上の状況から、乾痕の中に偶然にもサヌカイト剥片が落ち込んだものと解釈するに至った。

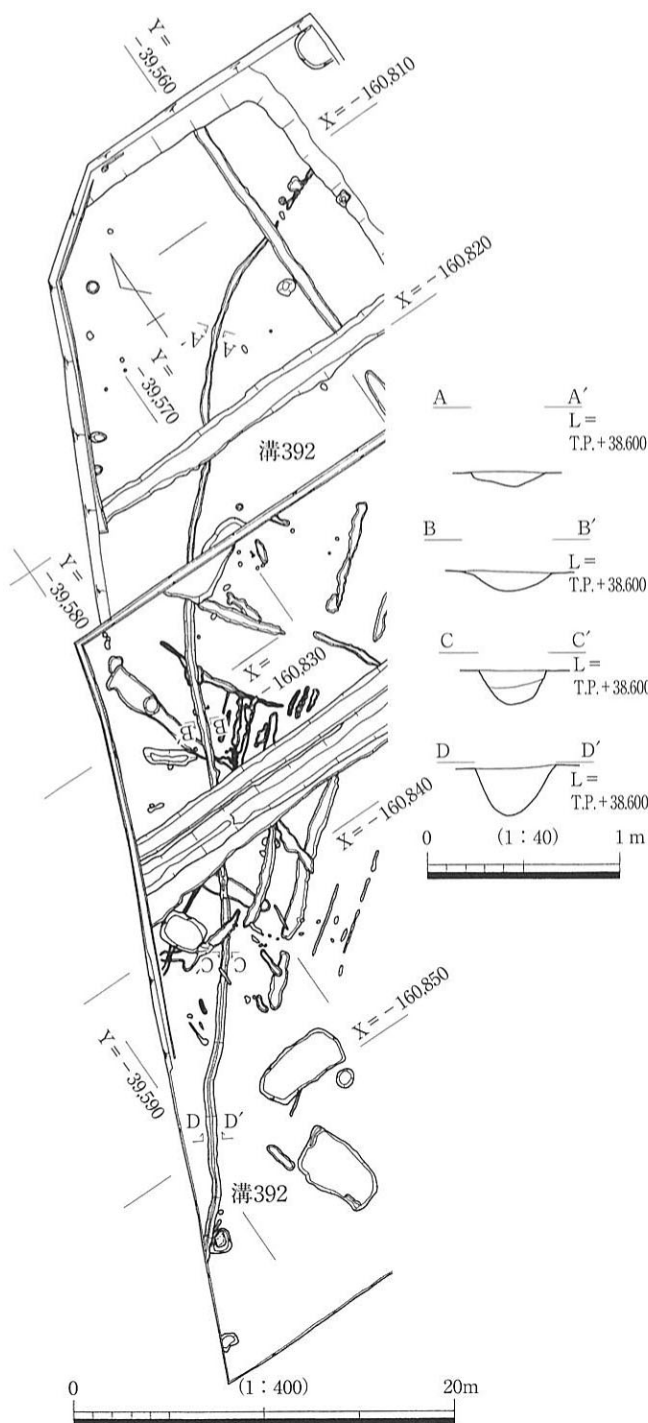


図25 2Eトレンチ 溝392平・断面図

これ以降、各トレンチの基盤層を絶えず注視していたが、他に石片は検出できなかった。検出された主要な遺構は24棟を数える掘立柱建物である。この他には溝・土坑・井戸などがみられた。以下、溝より報告を行う。

溝2・10・21・28 (図26. 27-4・5・9 図版26. 60-1・88-9)

おのおの独立した番号を付しているが、埋土の特徴や出土遺物などから、本来は4条が一連であった可能性が高い。掘立柱建物群南端を区画するような場所に位置しているが、重複関係からそれらより前段階の遺構であることが分かる。

しかし、溝2から出土した図27-4 (図版88-9) の須恵器杯蓋や土師器の甕、溝21から出土した5の須恵器杯身などから、さほどの時間差はないと思われる。

溝8 (図26 図版33-2、63-1・2)

トレンチ中央部を南南東から北北東方向へ45m以上にわたって検出された溝で、南部はさらに調査区外の横枕池側に続く。断面は浅い碗形を呈し、埋土は締まりが良く、粘性を帯びた褐色味の強い土層であった。出土遺物はみられなかったが、その方向や埋土の特徴から飛鳥時代に属するものと考えられる。

溝19 (図26. 27-9 図版60-1・89-3)

2 E トレンチ南東部で検出された。先述の溝2と並行関係にあり、その間隔は両肩間で1.8mを測る。既設用水路を隔てて6 E トレンチの溝19へと続き、さらに、断続して3 E トレンチ溝892へも繋がり、最終的には調査区外にまでびるものとみられ、3者を含めた総延長は75m強を測る。

断面形態は深い皿状を呈する。埋土は黄褐色を基調とし、これに褐色を交えた粘質土である。

出土遺物には図27-9 (図版89-3) に示す須恵器杯身があり、その形態から飛鳥時代のものと考えられる。また、両溝間の中央には1.6mから2.2mの間隔で6基のピットが並んでいることから、ある時期にはこれらを一対とした柵列と区画溝が設置されていたことが想定される。

溝25 (図26・27 図版15~17、26、64. 89-3)

調査区東部を南北に貫く。先述の丹上遺跡1 R トレンチ溝76に連続するとみなされ、深さは南側ほど深くなる。埋土はやや褐色味の強い土層で、遺構検出時の確認作業は容易であった。

出土遺物には図27-6と9 (図版89-3) に示す2点の須恵器杯身のほか埴の破片がある。ともに飛鳥時代のものとみられるが、溝がその時期の遺構群と重複することや、方向を異としているこ

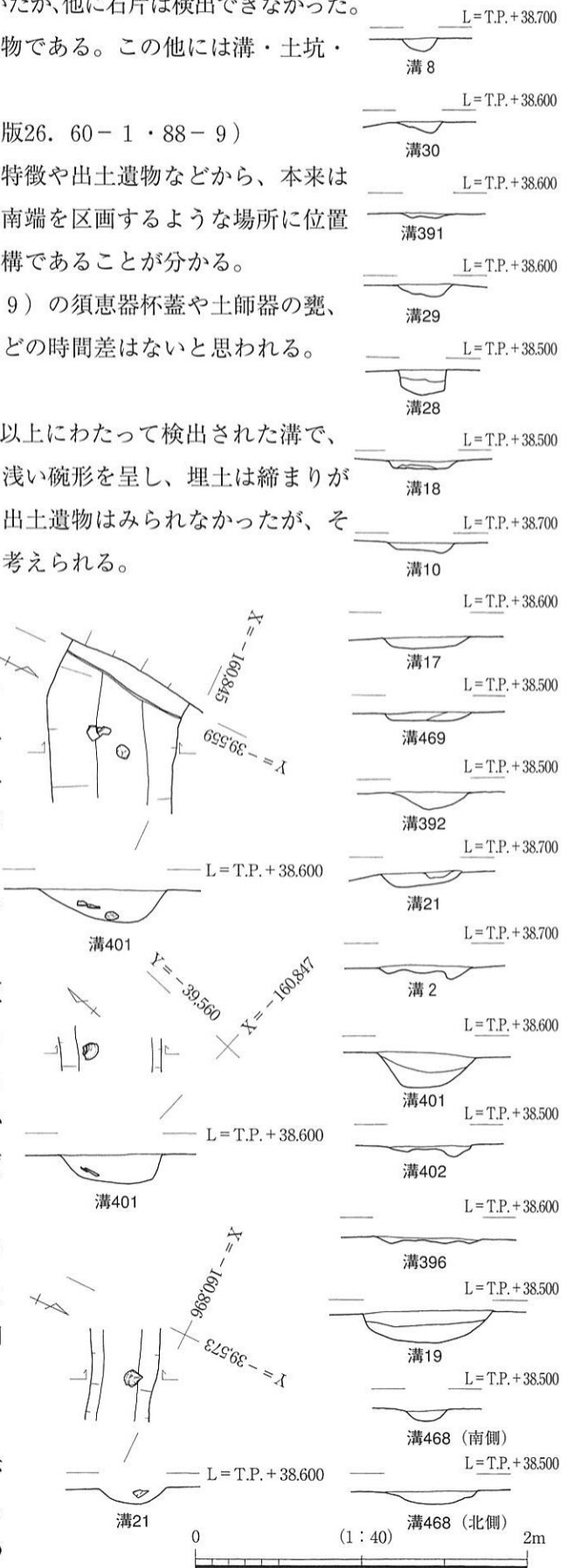


図26 2 E トレンチ 溝断面および遺物出土状況図

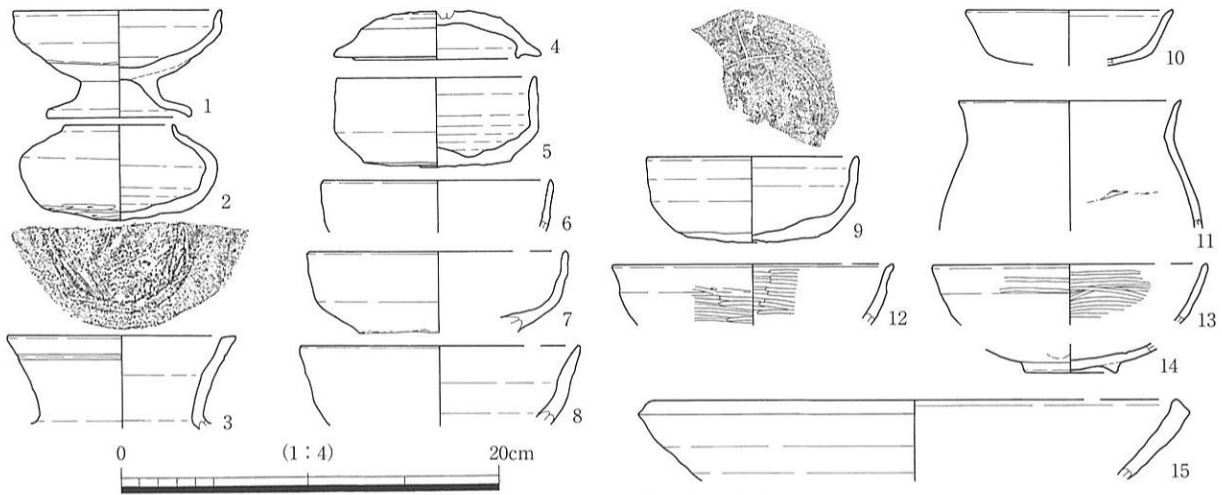


図27 2 E トレンチ 溝出土遺物実測図

とから、後出する時期のものと考えられる。

溝383・384 (図27 図版15-1, 17・26, 67-1~4, 77-1)

トレンチ北側で検出された。東西方向に2条並列しており北側を溝383、南側を384とした。両端は調査区外にのび、西側の近畿自動車道側調査区では溝383が溝4-2から溝2-65、溝384が溝4-1から溝2-66と命名されて調査が行われている。また、既設用水路を隔てて3 E トレンチとした東側では溝384は消滅し、溝383の延長あるいは、それと一連の遺構と考えられる溝568が位置している。

断面から南側の溝384が北側の383より後に開鑿されたことが理解され、また、溝384の中位にはブロック状の土塊を交えた堆積土が観察されることから、埋め戻された状況を止めている。

出土遺物には図27-12から15の土器類がある。12から14は瓦器碗の口縁部や底部の破片で、調整や高台の形態から、平安時代後葉頃の12世紀前葉から中葉頃のものと考えられる。15は東播系須恵器片口鉢の破片で、口縁端部の形状から12世紀前半代までの時期のものともみなされる。

その他、図27-3は溝558から出土した須恵器短頸壺の口縁部片。同図8は溝169から出土した須恵器杯身片、10は溝348から出土した土師器杯破片で、これらすべては飛鳥時代のものと考えられる。

溝392 (図25 図版15-1, 17-1・2)

調査区北西部で検出された溝である。規模は幅0.4m前後、深さは部分によって異なるが、0.1mから0.35mを測る。断面の形状は図25に示すようなもので、深い碗形を呈している。

埋土は褐色味が強く粘性を帯びた土層で、部分的に2層に分けられる。時期の判断できる遺物は出土しなかったが、その色調や土質から勘案して飛鳥時代の遺構となる蓋然性が最も高い。

なお、近畿自動車道側調査区で検出された溝の中に、この溝の南西側延長部と考えられるものがあり、それを含めた総延長は計120mに達する。さらに視野を広げて、北側の丹上遺跡1 R・1 S トレンチで検出された溝78と、近畿自動車道側調査区の溝2-59とを含めて考えた場合、双方が幅35mから40mの間隔を保ちながら同じような弧を描いて並走し、それらが今回の掘立柱建物群西端で途切れる位置関係にある。時期的な検討を要するが、広範にわたって計画的に開鑿された溝である可能性も考えられる。

溝401 (図26・27 図版15~17-1・62-3・4, 90-3)

溝392南東側に位置し、主軸はそれとほぼ同様となる。断面形態はゆるやかな逆台形を呈し、埋土は2層に分かれる。両層とも褐色味が強く粘性がやや高い。遺物には図27-1 (図版90-3) に示す全形の窺える低脚無蓋高杯と2の有蓋短頸壺がある。これらは図26左上部に示すような状態で出土した。

出土した遺物の時期や溝の方向、埋土の特徴から飛鳥時代前半代の溝であると考えられる。

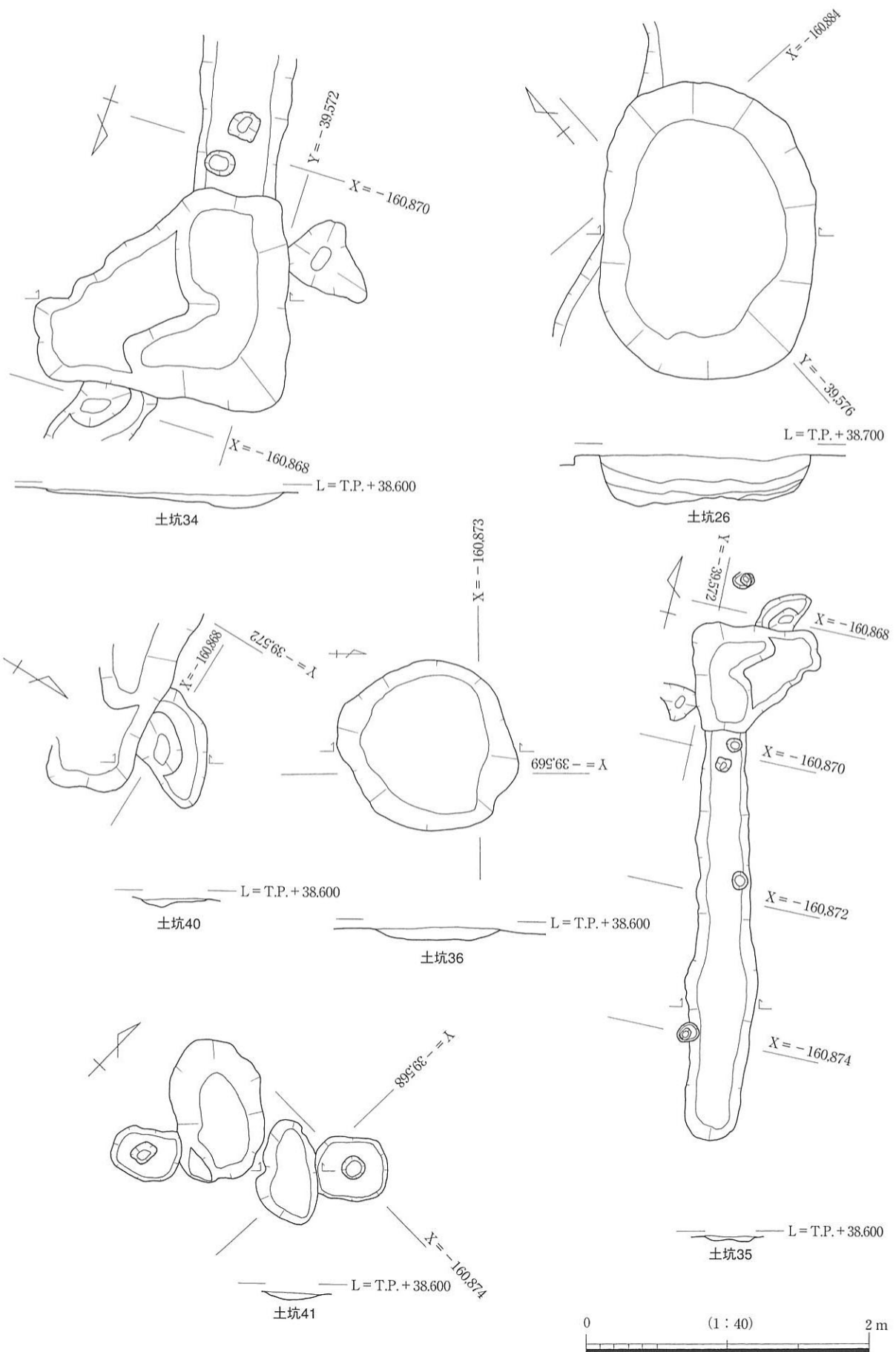


図28 2 E トレンチ 土坑平・断面図 [1]

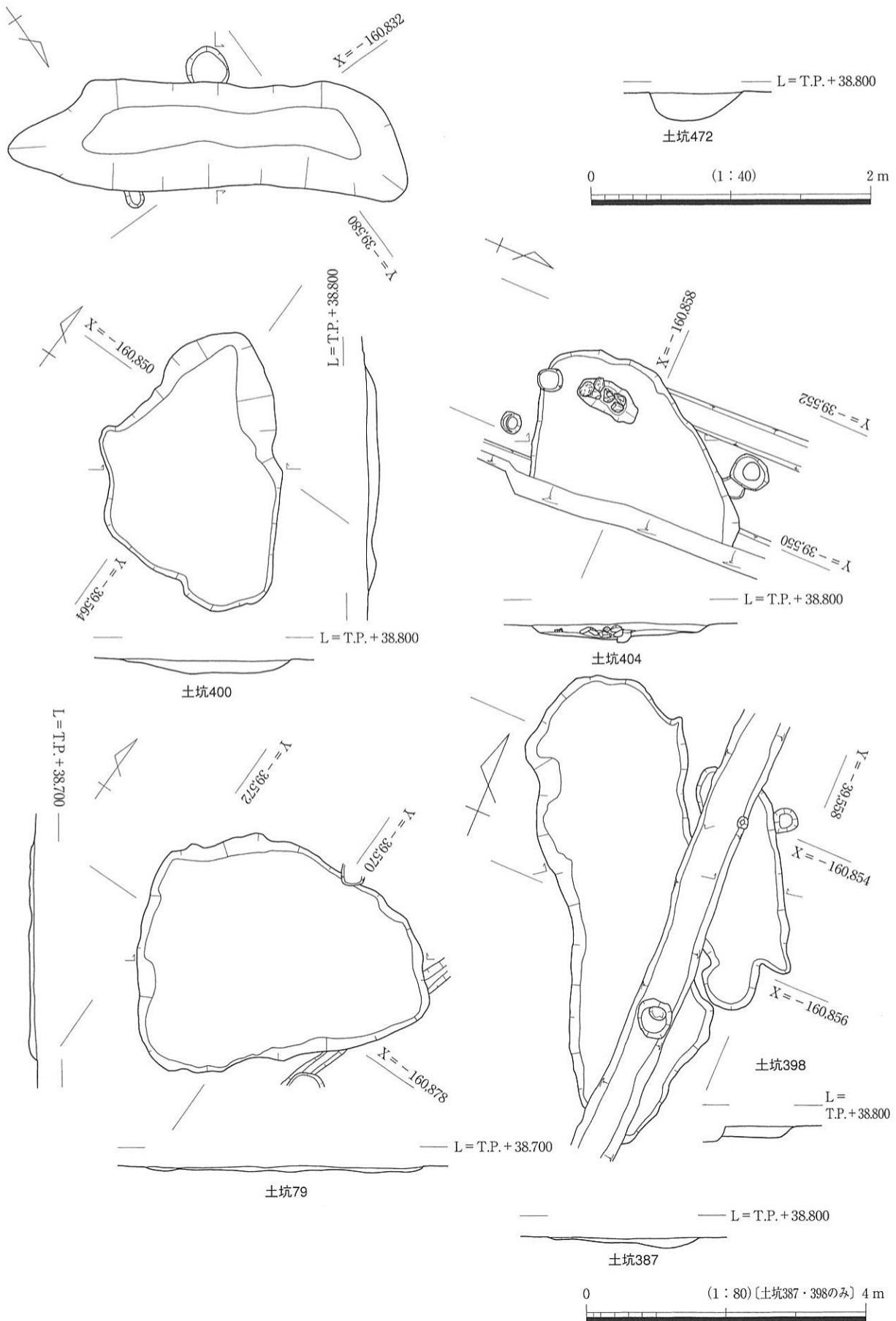


図29 2 E トレンチ 土坑平・断面図〔2〕

土坑3 (図24・48 図版71-1~3、88-8・11・12、91-6~8・10)

2 E トレンチの南北調査区境にまたがって検出された。平面形は細長い楕円形となり、断面の形状は浅い皿形を呈し、坑底に凹凸を有する。埋土は大きく2層に分けられ、上層は褐色味の強い粘性を帯びた土層、下層はこれに基盤層となる黄灰色系粘質土をブロックを交えたものとなる。

遺物は北側と南側の2ヶ所に分かれ、図24に示すような状態で坑底に接するようにして出土した。その内容は、南側では図48-4 (図版88-12) の杯H身、北側では図48-1 (図版88-8) の杯G蓋、図48-2 (図版88-2) の杯H蓋、図48-3 (図版88-11) の杯H身、図48-5 (図版90-8) に示す小型の平瓶、そして、図48-7・8 (図版91-6・8) に示す土師器の杯2点で、総合計は7点となる。

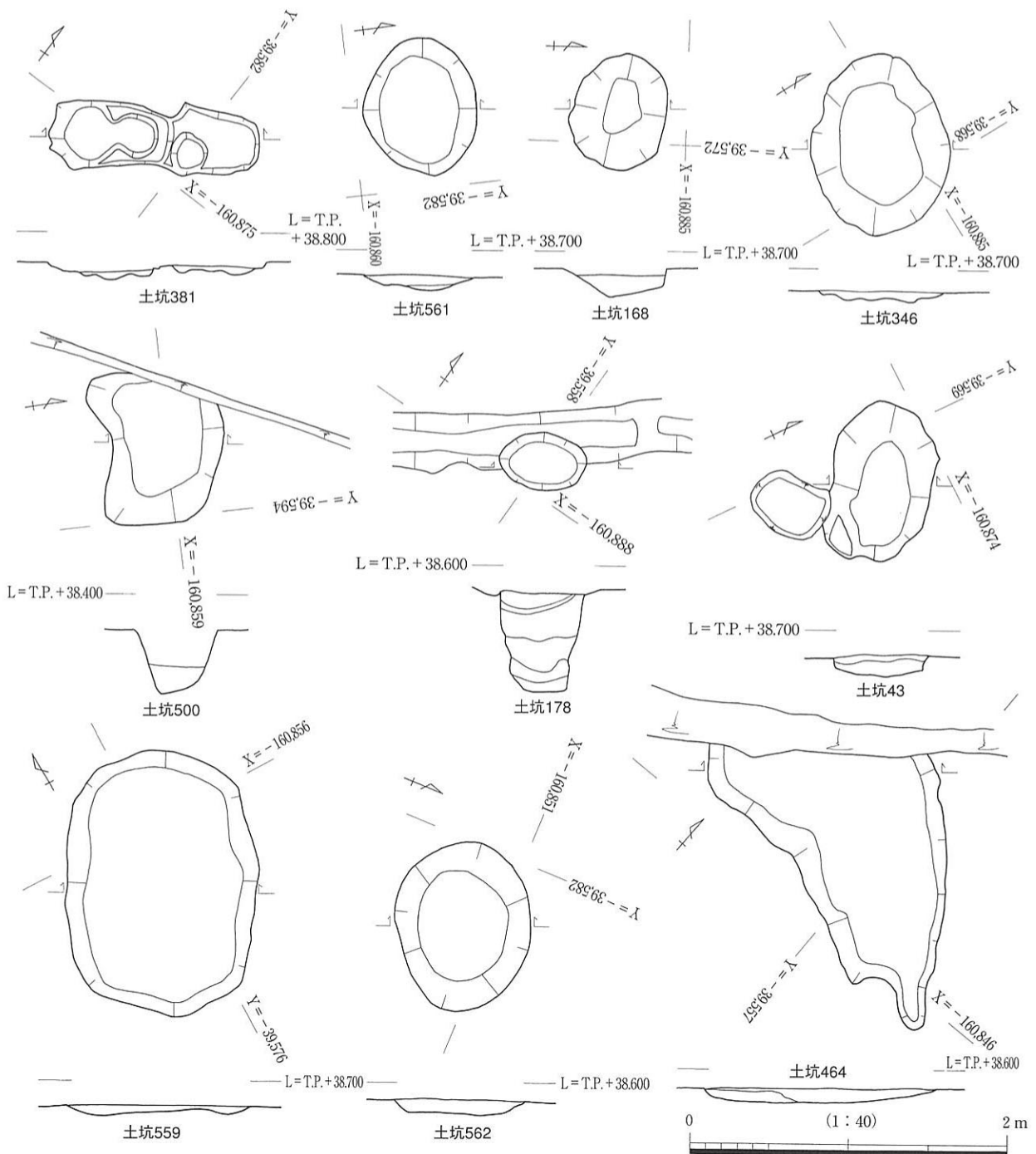


図30 2 E トレンチ 土坑平・断面図〔3〕

これらは完形の状態を保って出土したこと、図48-8と7の2点の土師器の杯が、前者を下にしてうつむけに重ねられた状態で出土したことから、土坑内に意図的に置かれたものと推定される。

他に、図48-4・9（図版91-7）に示す土師器の杯2点、6（図版91-10）・11に図示した土師器の甕2点なども出土した。これらのうち、6や9の土師器も全形が窺える状態にまで復原されることから、上記の例と同様に意識的に埋置された可能性が考えられる。以上の遺物は須恵器の蓋杯にH形態とG形態の双方が併存していること、それぞれの口径が10cmを大きく越えるものでないこと、高台付の須恵器杯身が破片でも確認できないことから、飛鳥の第Ⅱ期段階に相当する土器群であると考えられる。

土坑557（図48-12～22 図版72-3）

トレンチ西側で検出されたいびつな隅丸長方形を呈する土坑である。出土遺物は図48-12から22の11点で、12・22・23の土師器3点以外須恵器で占められる。このうち20と21の杯身はその形態や、胎土に大粒の砂粒が含まれること、また、内面にヘラ記号を有することなど陶器製品とは異なる特徴をもつ。

土坑から出土した遺物にはこの他に、土坑79より図48-26の須恵器杯G蓋、土坑168から38の須恵器と39の土師器鉢、土坑261から37の土師器鉢、土坑349から50の土師器杯C、土坑353から33の須恵器杯G身、土坑385から34の須恵器有蓋短頸壺蓋と35の甕口縁部、土坑387から40（図版90-7）の須恵器壺、土坑398から24の須恵器杯G蓋と25の土師器杯C、土坑400から27の飯蛸壺、28の須恵器杯G身、土坑559から30の土師器杯と32の須恵器台付長頸壺脚部、土坑561から31の須恵器杯身がある。

以上は、高台付の須恵器杯身を含んでいないことから、飛鳥時代でも前半代に位置づけられる。

井戸42（図31・32 図版60-3・4、61、91-2～4、92-7～10）

木と石とを併用した井戸枠を設置していた。掘方は上位を漏斗状に大きく掘り広げ、それ以下を円筒状に掘削している。上面での大きさは、長径2.4m、短径2.1mで、深さは2.6mを測る。また、南側の斜面が大きくなっているが、これは枠設置に斜路を確保したためとも考えられる。

枠はまず最初に長さ約1.8m、直径約0.5mを測るカシの一本を底部に設置し、その上位に幼児の頭ほどの円礫を組み上げていた。なお、途中石組が0.4mほど欠落しているが、枠内中層から上層にかけて同様の自然礫が含まれていたことから、当初はこの部分にも石組があったものと考えておきたい。

また、木枠の長さが1.8mを測るのに対し、内径が0.3mほどしかないことから、無垢の一木から製作したものではなく、自然に腐朽した空洞部分を利用しながら加工を行ったことが想定される。

出土遺物には図32のような土器類と木製品がある。このうち19の組合せ鋤の身は、図31上段に示すような状態で出土した。この状況は、鋤の柄を外し、刃部を上に向けて枠に立て掛け埋置したことを想起させる。出土例の僅少な該期の資料としてばかりではなく、井戸掘削時の祭祀や儀礼を類推する意味においても貴重な例を供したといえよう。木製品にはもう1点、枠内中位から出土した図32-20がある。直径5cmほどの自然木の先端を杭状に尖らせたものでその用途は不明である。

土器類には図32-1から5の土師器の甕、6から18の各種須恵器がある。6の杯身が枠内上位、18の平底の底部が枠内最下位より出土し、それ以外は中位からのものである。ただし、断ち割り作業中に枠が崩壊し、その中から拾い出した遺物であるため厳密な層準ではない。これらのうち、13の台付短頸壺は、脚部破断面に磨耗がみられることから、欠損後もそのまま使用されていたことが考えられる。また、14の短頸壺は、製作時に体部を削り過ぎて穴があき、外面から粘土を充填し補修した痕跡を止める。16の甕は口縁内部の上端面に滑沢が観察されることから、この部分が何かと接触していたと考えられる。

以上の須恵器は、胎土が粗いこと、製作技法が稚拙なことなど陶器製品とは異なる特徴をもつ。

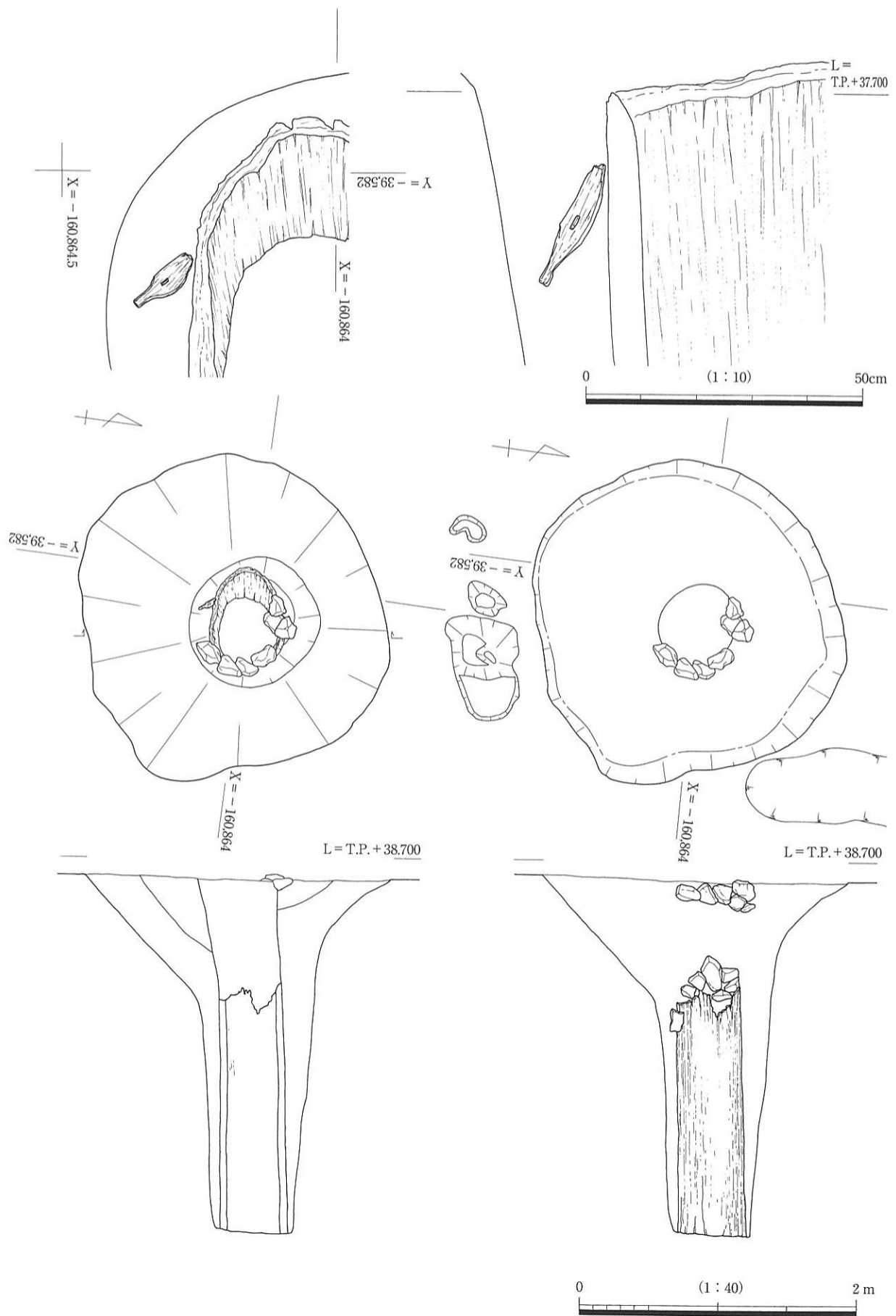


図31 2 E トレンチ 井戸42平・断面および遺物出土状況図

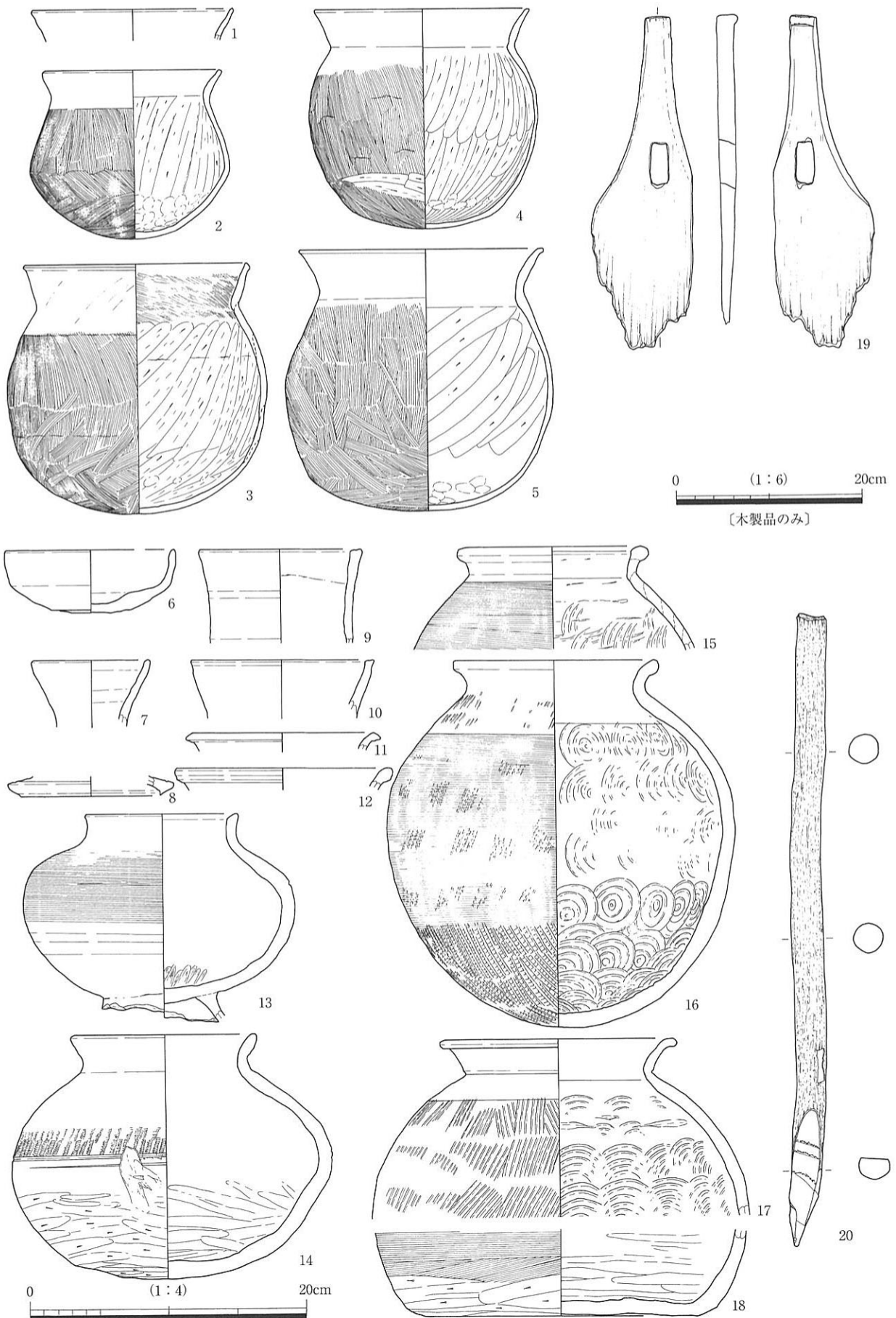


図32 2 E トレンチ 井戸42出土遺物実測図

建物1 (図33 図版13・26・28)

調査区北西側で検出された南北棟の掘立柱建物である。主軸はN-35°-Wを示し、西に偏る。

規模は、桁行4間(7.0m)、梁間2間(3.6m)で、床面積は、25.2㎡(7.6坪)を測り、柱間寸法は桁行、梁間とも1.7mから1.8mを測る。

柱穴の平面形は、円形から隅丸方形を呈し、断面形態は矩形が基本となる。

埋め土は黒味を帯びた粘質土に基盤層の黄灰色系の土層を交え、その中央附近には直径0.5mから0.2mを測る灰色を呈し、泥濘化した柱痕が認められるものが多い。なお、北東側桁行の柱穴162・柱穴163と北東側隅柱の柱穴152では埋め土が乱されており、柱が抜き取られたと考えられる。

また、断面をみると深い柱穴と浅い柱穴を交互に配しているが、これが建物構造に起因するのか、使用材に規制されるものかは判断できない。

出土遺物には柱穴152から出土した図48-43・44の土師器の杯CとA、柱穴163から出土した須恵器杯身がある。双方とも飛鳥第Ⅱ期頃のもので、抜き取り穴から出土したことから、この段階に建物を解体したと思われる。

建物2 (図33 図版13・26・28・29)

トレンチ南端で検出された東西棟の掘立柱建物である。規模は、桁行2間(3.9m)、梁間1間(3.9m)で、床面積は15.2㎡(4.6坪)を測る。主軸はN-12°-Wと西偏し、柱間寸法は桁行1.9m前後、梁間3.9mを測る。

埋土は黄褐色を基調とした粘質土で、すべての柱穴で直径10cm前後の灰色系粘土に置換した柱痕が確認された。

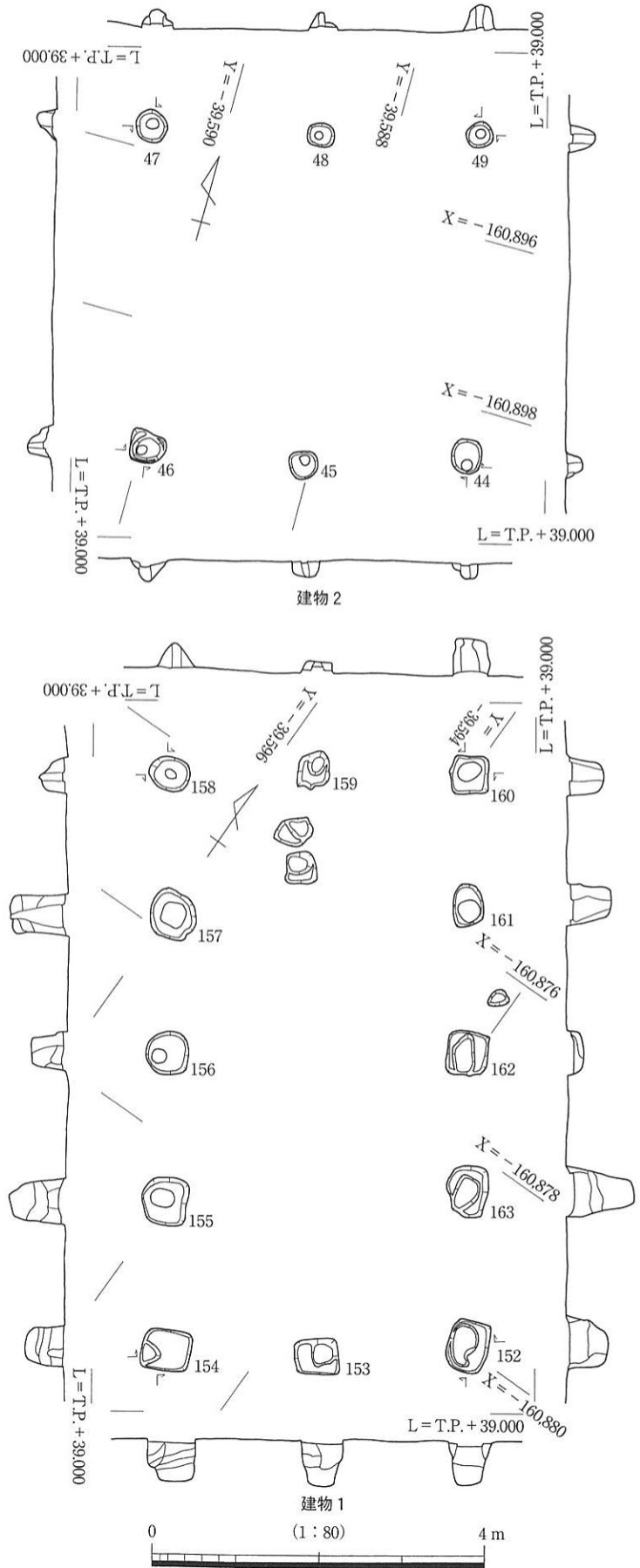


図33 2 E トレンチ 建物1・2平・断面図

建物3 (図34 図版13-2. 26. 29-2、79-3・4、100-3・4 付図3)

トレンチ南端で検出された東西方向にやや長い総柱の掘立柱建物である。規模は桁行2間(4.2m)、梁間2間(3.6m)である。柱間は桁行2.0m前後、梁間1.8m前後で、床面積は約15.1㎡(4.6坪)、主軸はN-20°-Wと西偏している。掘方の形状は長径0.5mから1.0m程度の円形から楕円形を基本とし、その断面形はやや下底のすぼまった矩形で、深さは0.6mから0.8mを測る。

柱穴内には黒味の強い褐色系の粘質土と、黄灰色を基調とする粘質土や砂混じり粘質土が、ブロック状や互層状に充填されていた。このうち、後者の土層は基盤層を掘削した際に掘り上げたものである。

また、柱穴50・51・57には直径0.2m前後の柱根が遺存し、さらに、柱穴55・58・56には直径0.2m前後を測る柱痕が、黄灰色から灰色系の粘土や粘質土に置き変わった状態で観察された。なお、西側柱列は埋め土が乱され、柱の存在も確認できないことから、抜き取られたと考えられる。

遺存していた3本の柱根はいずれもヒノキと同定され、そのうちの一つ、柱穴57から得られたものを図版100-3に示した。なお、建物の周囲約1mの場所には、小ピットが列状をなしてこれを囲郭している。これらはその位置から推察して、建物の建設や解体に伴う足場穴であった可能性が考えられる。

出土遺物には、柱穴51掘方から出土した図48-45の須恵器杯G蓋片と、柱穴52掘方から出土した48の須恵器台付長頸壺脚部片がある。これらの時期は杯G蓋の形態や口径、長頸壺の脚部が短脚で円孔透かしをもつことなどから、飛鳥第Ⅱ期頃に位置づけられるものと考えられる。

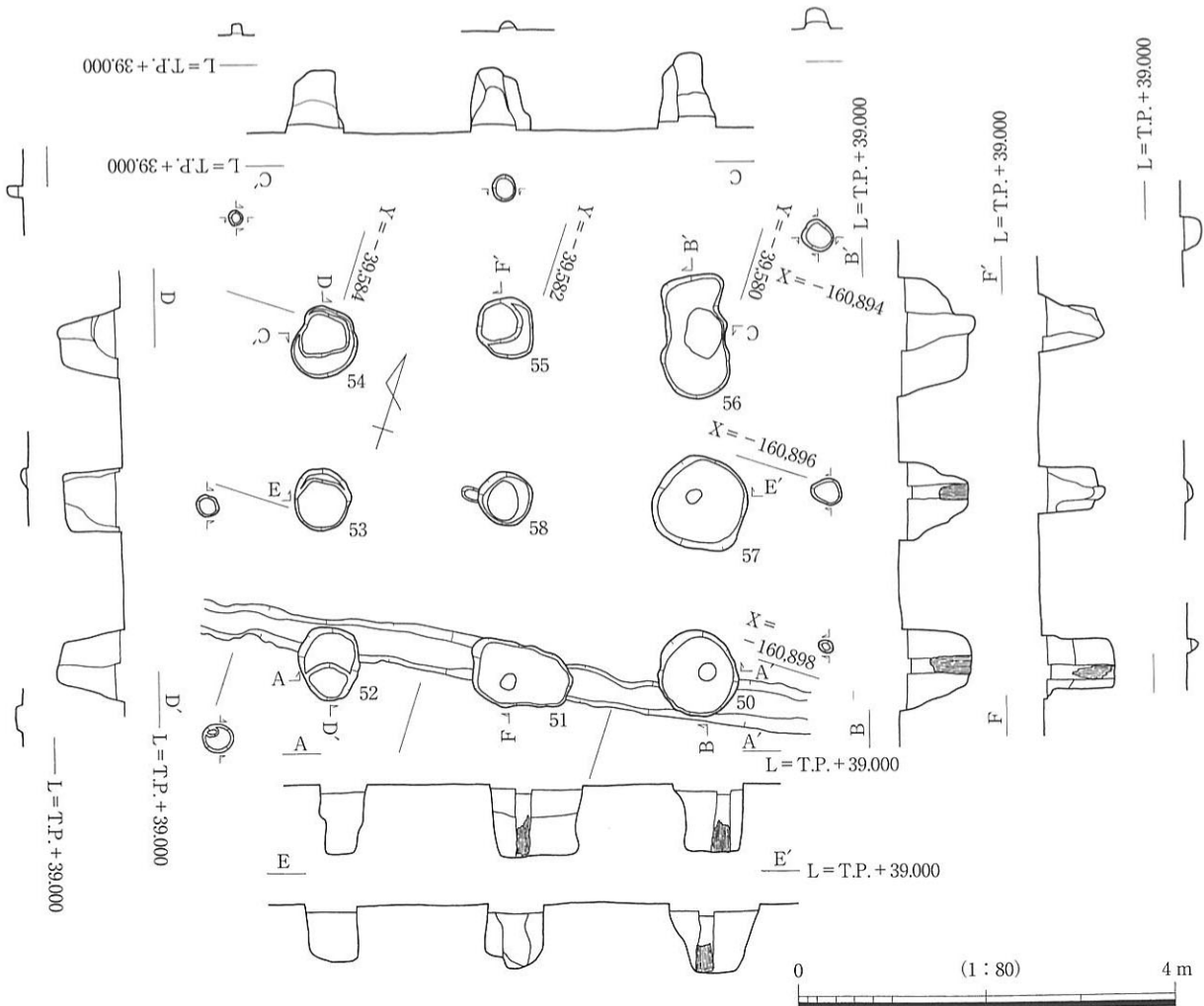


図34 2 E トレンチ 建物3平・断面図

建物4 (図35 図版13・26. 30-1)

トレンチ中央付近で検出された掘立柱建物で、主軸は $N-31^{\circ}-W$ と西偏する。

規模は桁行2間(4.5m)、梁間3間(3.3m)で、床面積は約14.9㎡(4.5坪)を測る。

柱間は、北側桁行が西側から1.6mと1.9m、南側のそれが同方向より1.6mと2.0m弱で、柱穴309を組み入れても、1.6m、1.6m、1.4mとなり、北側に位置する攪乱に柱穴309に対応する柱穴を想定しても東側の柱間が長い。梁間は東側が北から1.0m、1.4m、0.8mで、西側が0.9m、1.0m、1.3mを測る。

柱穴の大きさは桁行と比較して小さく、特に西側でその傾向が顕著である。

掘方の形状は円形から楕円形を基本とし、その大きさは梁間が0.4m前後、桁行が0.2m弱である。断面形はやや下底のすぼまった矩形を呈し、深さは、梁間が0.2mから0.4m、桁行が0.1mから0.2m弱である。

埋土は黒味がかかった褐色系の砂混じり土で、大きな柱穴では灰褐色系の粘土となった直径約0.15mの柱痕が観察された。

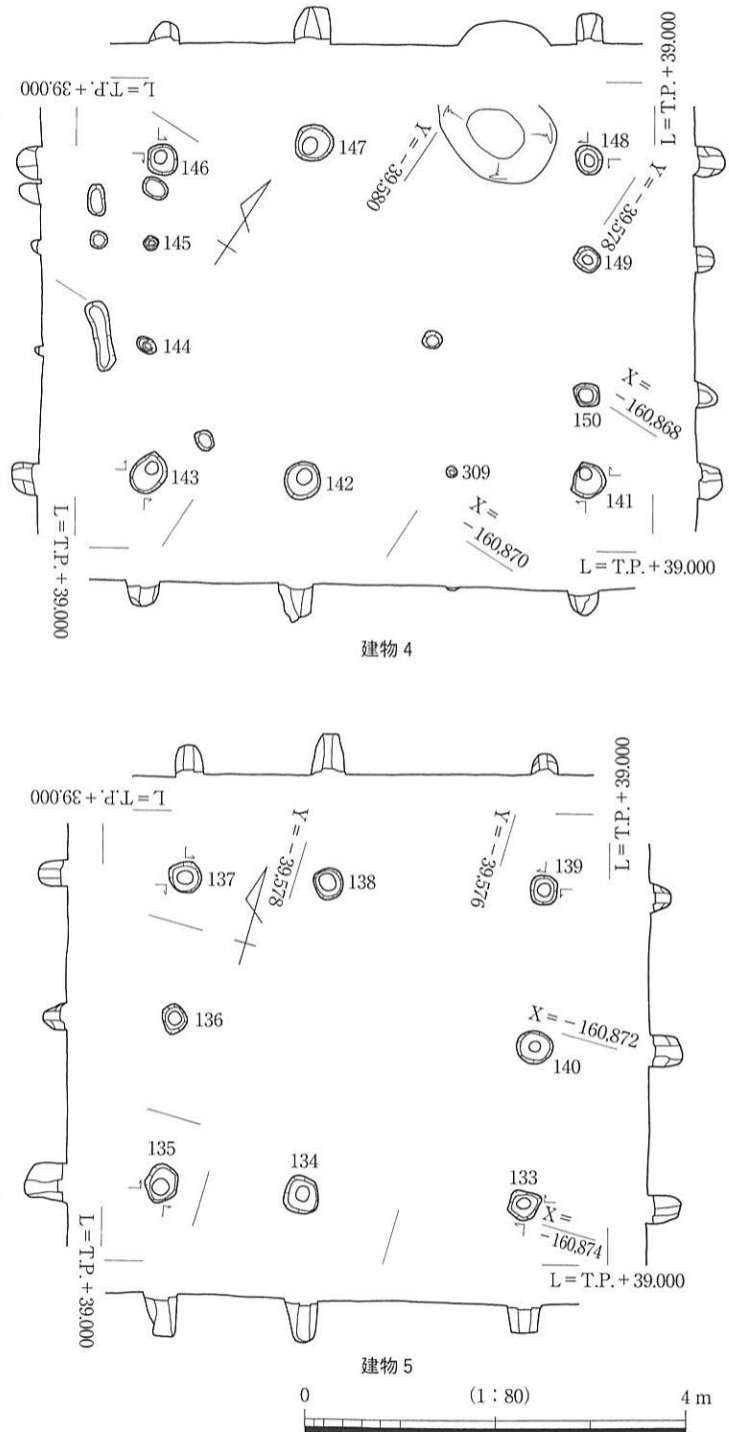
建物5 (図35 図版13・26. 30. 31-1、79-5~8、80-1 付図3)

先述の建物4の南側で検出された東西棟の掘立柱建物である。

主軸は $N-12^{\circ}-W$ と西偏する。

建物の規模は、桁行2間(3.3m)、梁間3間(西側3.3m、東側3.4m)で、床面積は、約11.1㎡(3.4坪)を測る。柱間は、桁行が南北とも1.5mと2.3m、梁間が、西側で1.5mと1.8m、東側で1.7m等間となる。建物4と同様に西側の柱間と比較して東側の柱間が長くなっており、その差は0.8mを測る。

掘方の形状は円形に近い隅丸方形を呈し、断面形は下底部のやや短い逆台形を呈する。埋め土は、褐色味の強い砂混じりの粘質土を基本とし、これに遺構の基盤層である黄灰色系の砂礫や粘質土がブロック状に混じり合った状態のものであった。なお、これらにはすべて灰色味を帯びた土層からなる直径0.15m程度の柱痕が観察され、その遺存状況は図版79-5から8に示すように非常に明瞭であった。



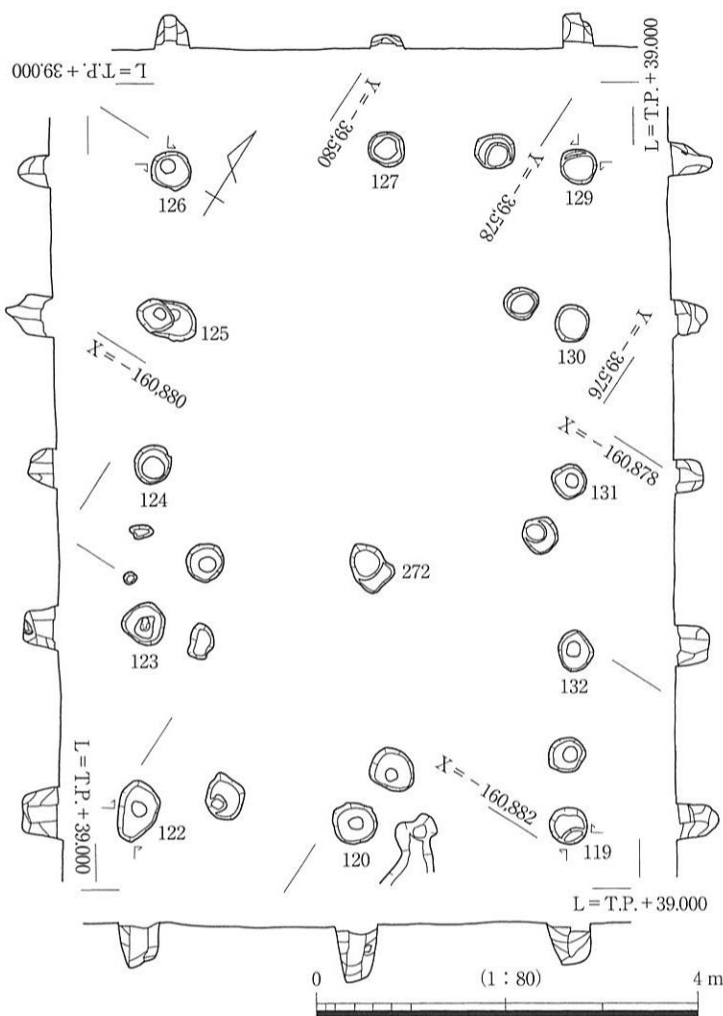


図36 2 E トレンチ 建物6 平・断面図

建物6 (図36 図版13・26. 31-2. 80-2・3 付図3)

トレンチのほぼ中央で検出された東西棟の掘立柱建物である。その主軸はN-30°-Wと西偏する。

規模は、桁行2間(北側4.3m、南側4.6m)、梁間4間(6.8m)で、床面積30.3㎡(9.2坪)を測り、平面形態は北辺のやや短い台形様を呈している。

柱間は北側桁行で西から2.3mと2.0m、南側で2.6m等間となる。梁間は西側柱列が北から2間が1.6m等間、南側2間が1.8m等間で、東側柱列は北から1.6m、1.7m、1.7m、1.9mとなる。

なお、北側の棟持柱となる柱穴127は、柱間左右の間隔差が0.3mと大きいことや、他の柱穴に比べ掘方が浅いことなどから、本来この建物とは関係ないピットとなる可能性も残されている。

また、南から3間目と4間目に位置するピット272は、それらのほぼ中央に位置することから、例えば床を支える東柱

的な機能を持つなど、この建物に何らかの形で付随する柱穴であった可能性もある。

掘方の平面形態は不整形円形を呈し、その大きさは0.3mから0.5m前後を測る。断面形態は下方のやや角張った「U」字形を呈し、その深さは0.3mから0.5mを測るものがほとんどであるが、南側の棟持柱に相当する柱穴120では0.7mに達する。

一方、両桁行側柱の中央に位置する柱穴124と131の深さは0.3m程度しかなく、他の柱穴と比較して非常に浅い状況となっていることで特徴的といえる。

埋め土には、褐色味の強い黄褐色系の粘質土と、柱を建てる際に基盤層を掘削することにより掘り上げられた小礫の混じった黄灰色系の粘質土層や砂質土が用いられ、これらを図版80-2の写真をもとに典型例とするような状態で埋め戻していったものと考えられる。

なお、図版80-2・3に示すような状態で、すべての柱穴において直径0.2m前後の柱痕を確認することができた。これらは木質が永年土中にあったため、灰色を帯びた粘質土に置き変わっていた。

また、柱穴123では、図版80-3のように、直径0.2m程度の円礫を底に埋設して根石として利用している状況を確認することができた。

出土遺物については、掘方や柱痕内を精査したが検出することができなかった。このため時期決定を行う直接的な根拠に乏しいが、埋め土の様相や建物の示す主軸の方向などから推察して、飛鳥時代に属する可能性が最も高いと考えておきたい。

建物7 (図37 図版13-2. 26. 32-2、33-1、80-4 付図3)

トレンチ中央で検出された掘立柱建物である。先の建物6とほぼ全域が重複するような状況で検出された。

このため、北西端の柱穴が建物6北西隅柱によって完全に破壊され、それに続く南側桁行の北から2番目の柱穴も、建物6の柱穴によって一部破壊されている。

その重複関係から、この建物7が先行して建てられ、その後に建物6が築かれたものと理解される。

建物は南北方向に棟をもち、主軸はN-37°-Wと西に偏る。

その大きさは、桁行が北側1間(推定3.5m)、南側が2間(3.8m)となり、梁間は3間(東側6.9m、西側6.8m)で、床面積は約25㎡(7.6坪)を測る。

両桁の寸法が異なるため、平面形態からはややいびつな感を与えられる。

柱間寸法は、桁行北側が先述のとおり推定で3.5m、南側が1.9m等間となる。

梁間は西側で北から推定1.6m、2.4m、2.5mで、東側が同方向から1.6m、2.4m、2.4mとなる。このように、他の柱間と比較して北桁一間分のみが0.6m短いという特徴をもっている。

掘方の平面形態は不整形を基本とするようであるが、一部には辺をなす部分が観察される。断面形態は、下方が隅丸となる矩形から「U」字形を呈するものまでおのおの差異があり、その深さも0.2mから0.4mにわたっているが、概して浅い傾向にある。内部に充填される埋め土は、褐色味の強い粘質土と遺構周辺の基盤層を形成している小礫混じりの黄灰色系の粘質土からなり、それらを、図版80-4に示すような状態でブロック状に混ぜ合わせて用いていた。この様相から、掘方を掘削した土砂と当時の表層土とを、一気に混ぜ込んで埋め戻して行った状況を想定することができる。

なお、大半の柱穴で直径0.2m弱の柱痕を確認することができた。これらは、掘方埋め土よりも灰褐色を帯び均質な砂質土となっていたことから、その識別は比較的容易であった。

遺物については、掘方・柱痕内ともに確認することができなかった。このため、時期決定の判断材料に欠けるが、埋め土の様相や建物の方向などから推察して飛鳥時代となる可能性が最も高い。

なお、これら2棟の建物はほとんど重複する場所に建てられていること、双方とも北側棟持柱に相当する柱穴の存在を確定しづらいこと、そして、南側に床構造と関連する可能性のある柱穴を配していることなど数多くの類似点を指摘できる。このような状況から推察して、建物7が廃絶した後、時を経ずしてその機能を引き継ぐ形で建物6が建設された可能性も考えられる。

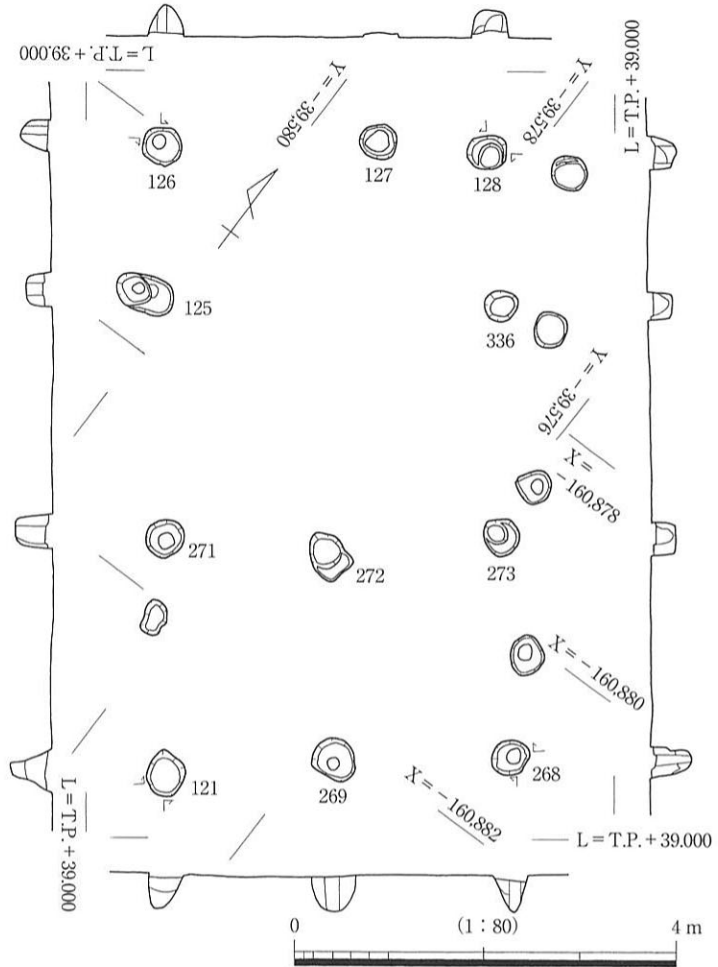


図37 2 E トレンチ 建物7平・断面図

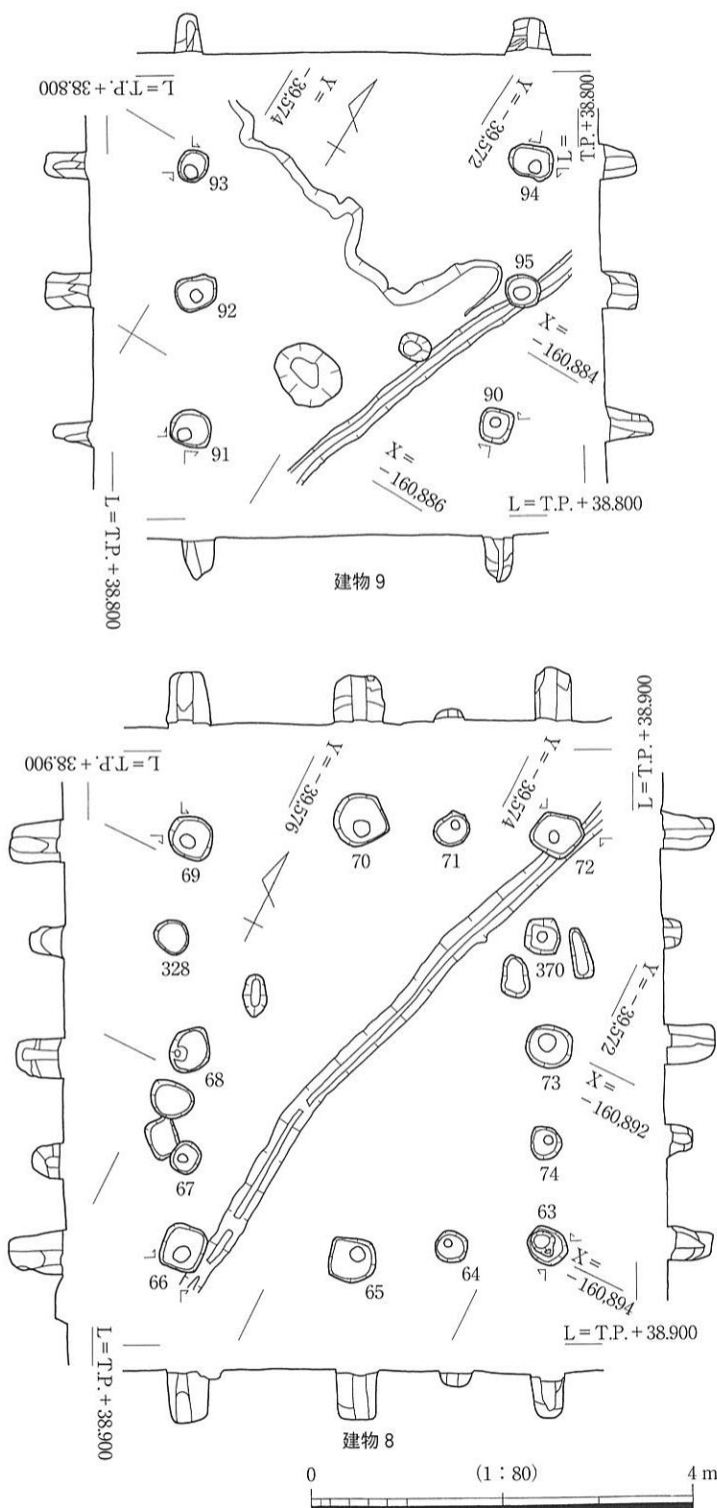


図38 2 E トレンチ 建物8・9平・断面図

建物9 (図38 図版34-1、80-7・8 付図3)

トレンチ南部で検出された東西棟の掘立柱建物である。主軸はN-31°-Wと西傾する。規模は桁行2間(西側2.8m、東側2.7m)、梁間1間(北側3.6m、南側3.3m)で、床面積は約9.5㎡(2.9坪)を測る。桁の柱間は東側が北から1.3mと1.4m、西側が同じく1.3mと1.5mとなる。

このように、おのおのの辺の長さに格差が大きいことから平面形も歪んだ四角形となっている。また、桁の柱間も揃わず、梁間も3mを大きく越えていることから、建物の構造については疑問点が多い。

建物8 (図38 図版33-2、80-5・6 付図3)

トレンチ南部で検出された南北棟の掘立柱建物で、重複関係から溝8廃絶後に構築されたことが明らかである。

建物の規模は、梁間3間(3.9m)、桁行4間(4.4m)を測り、床面積は約17.2㎡(5.2坪)である。また、主軸はN-26°-Wと西に傾いている。

おのおのの柱間寸法は、梁間が南北とも西から1.9m、1.0m、1.0m、桁行が、東側柱列の北より1.0m、1.1m、1.0m、1.1m、西側が同方向より1.0m、1.2m、1.2m、1.0mである。

柱穴の平面形態は、円形に近い隅丸方形を基本とし、断面形態は隅丸の矩形を呈する。深さは2つに類別され、浅いものが0.1mから0.3m、深いものが0.5mから0.6mを測る。

この大小差は平面形にも反映されており、これらが交互に配されて一つの建物を構成している。

埋め土は図版80-5・6に示すような状況で、褐色系の粘質土と基盤層を掘削した土層を互層状に埋め戻していた。

大半の柱穴からは、0.2m程度の灰色系粘質土からなる柱痕が確認できた。

規模の大きな柱の間に一回り小さな柱を配する例は、建物1などでも確認できるが、それらに比して柱間が狭くなるという特徴が加わることから、荷重に対する配慮がなされたとも考えられる。

建物10 (図39 図版34-2、81-1
~5 付図3)

トレンチ南部で検出された南北棟の掘立柱建物である。

重複関係からみて、溝8より新しく、溝29より古い段階に建てられたものと判断される。

位置的には北側に建物9が、西側に建物8が近接する関係となる。

建物の規模は、桁行2間 (4.0m)、梁間4間 (7.0m) を測り、主軸はN-38°-Wと西に偏る。

柱間は、梁間が南北とも2.0m等間となり、桁行は、東側が北から1.8m、1.5m、3.3m、1.9mで、西側が、同方向より1.8m、1.7m、3.3m、1.9mとなっている。

他の柱穴と比較して桁筋の中央に位置する柱穴214と柱穴219の二つのみがみが大変小さくなることが特徴で、3.3mもの柱間を支えるための補助的な役割をもたせる意味で設置されたとの解釈が成り立つのかも知れない。

掘方の平面形態は不整円形を基本とし、断面形態は隅丸の矩形から「U」字形を呈するものが大多数を占めている。

掘削深度は上記2基の柱穴を除いて0.5mから0.6mに達しており、平面的な大きさと比較して、非常に深い傾向となっていることで特徴的である。

埋め土は、褐色味が強く粘性を帯びた土層と、柱設置時に基盤層を掘り上げた黄灰色系の砂や小礫を混じえた粘質土などを主体とする。その状況は図版81-1から5に示すようなもので、先述の土層が薄層をなして互層状に埋め戻されているものや、それぞれが大小大きさの異なるブロック状の単位をなして埋め戻されているものを観察することができた。

また、すべての柱穴において灰色系統の粘質土やシルトに置換された柱痕を観察することかでき、中には柱穴83や柱穴199のように、底部付近にしろうじて柱根が遺存しているものもあった。これらを慎重を期して取り上げようとしたが、すでに木質が泥濁化してしまっており不可能であった。

出土遺物には北東隅柱の柱穴87から出土した器種不明の須恵器脚部片がある。類例のあまりみられない器形であるため詳細な時期を知り得ないが、円孔透かしを有していることなどから考えて、飛鳥時代以降の時期に属するものであると考えておきたい。これに埋め土の特徴や建物の主軸などの要素を加味して考えるならば、飛鳥時代の建物となる蓋然性が高くなる。

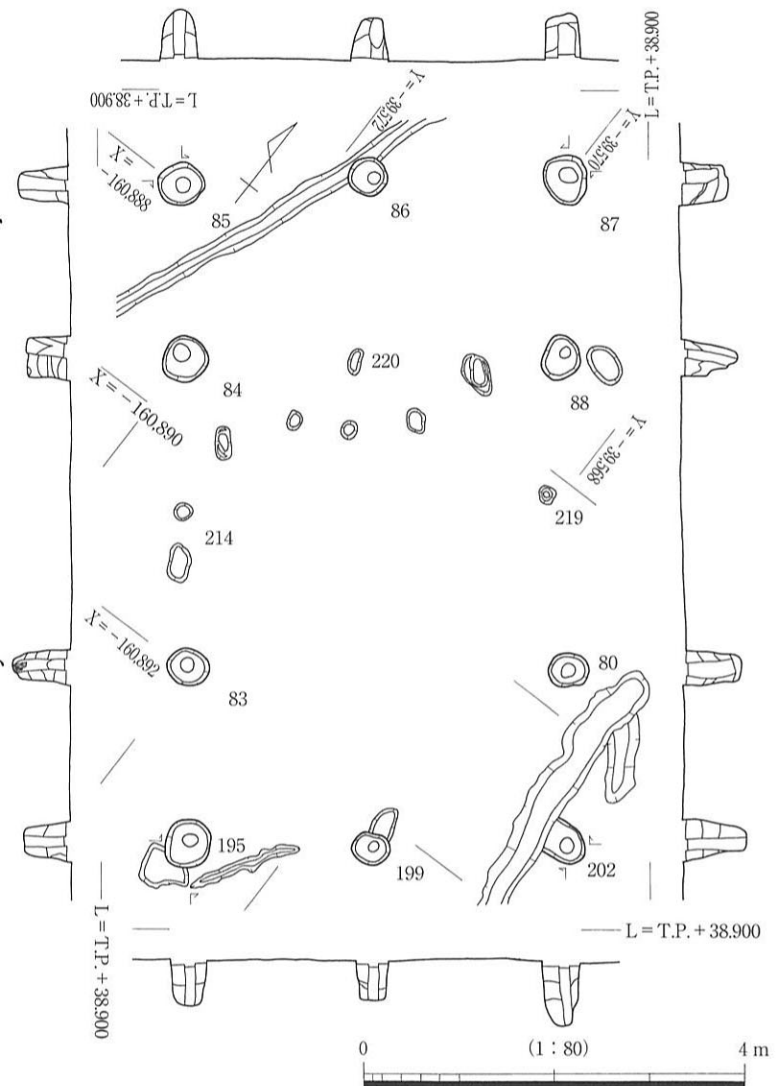


図39 2 E トレンチ 建物10平・断面図

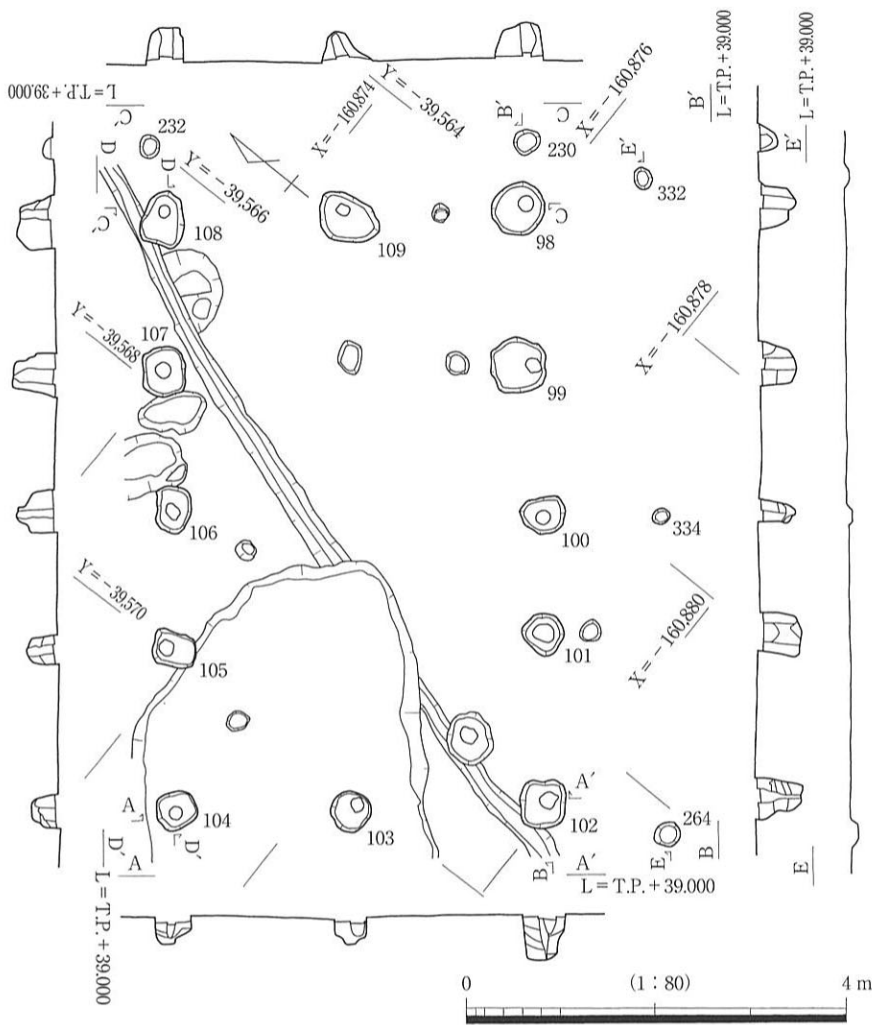


図40 2 E トレンチ 建物11平・断面図

建物11 (図40 図版35-1、81-6~8、82-1~3 付図3)

トレンチのほぼ中央部で検出された東西方向に主軸をもつ掘立柱建物である。

主軸はN-40°-Wと西に偏っている。

規模は、梁間2間(東側3.8m、西側3.9m)、桁行4間(6.4m)となり、床面積は、約24.6㎡(7.7坪)を測る。

柱間は、梁の東側が1.9m等間、西側は北から1.9mと2.0mである。桁行は、北側柱列が東から順に1.7m、1.5m、1.4m、1.7mとなり、南側柱列が同方向から、1.7m、1.6m、1.2m、1.8mで、1.7mとなっている。

なお、他と比較して桁行

の北から3列目の柱間のみが1.2mと1.4mと短くなっていることが特徴としてあげられる。

掘方の平面形態は隅丸方形を基本としているようにも見えるが、円形や不整円形の例も混在しているのが実態であり、その断面形状は矩形または「U」字形を呈している。

埋め土は褐色系の色合いが強い黄褐色の粘質土や砂質土と、基盤層を掘り込んだ際に生じた黄灰色系の小礫混じりの土層からなり、これらは図版81・82のような状態で埋め戻されていた。また、これらすべての柱穴で、灰色系粘土やシルトに置換された直径0.2m前後の柱痕を確認した。

なお、北辺の梁から東方向へ0.6m離れた地点には、一回り小型のピットが桁に柱筋を揃えて位置していることから、この方向のみ軒がのぼされたか、縁が付くような建物であったことが想定される。

また、桁行南柱筋から1.3m離れた位置にも規模の小さなピットが3.5mと3.6mの間隔において3基並んでいる。これらについても、埋土が類似していることや、両桁中央とピット列の中央が一直線に並んでいることからみて建物11に伴う施設であった可能性が高い。このピット列は、規模が小さいことや柱間の間隔が広いことからみて、大きな荷重に耐え得るような構造物ではないと思われる。この考え方が当を得たものであるならば、柵列の可能性が最も高く、つづいて庇、縁の順でそれが低くなる。

建物の時期については、柱穴から遺物がほとんど出土しなかったために不明確であるが、埋土の様相や建物の主軸などから類推して、飛鳥時代のものである可能性が最も高い。

建物12 (図41 図版
35-2、58-1~3、
82-4 付図3)

トレンチ東部南側で
検出された総柱の掘立
柱建物で、主軸は、N
-21°-Wと西に偏る。
平面形は、梁間2間
(3.7m)、桁行2間
(4.0m)を測り、床
面積は、14.8㎡(4.5
坪)となる。

柱間寸法は、梁間が
東側で北から1.9mと
1.8m、西側は北から
1.8mと1.9m、中央の
柱穴は北から1.8mと
1.9mを測る。桁行は
南北と中央の3柱列す
べて2.0mの等間となっ
ている。

掘方の平面形は、隅

丸方形のものと不整円形のもの
が混在し、その大きさは、直径
あるいは一辺が、0.5mから
0.6mのものが大半を占める。
断面形態は「U」字形をする
ものが主体となり、これに下
のすぼまった矩形を呈する
ものが数基加わる。掘り込み
の深さは、0.6mから0.7m
を測り、最も浅いもので
0.4m、その逆に深いものでは
0.9mに達する例もみられた。

埋め土は巻頭図版や図版58・82
に示すような状況であり、柱
設置後、黒みを帯びた褐色系
の粘質土と基盤層掘削に伴う
黄灰色系の砂質土や粘質土を
互層状に積み重ねながら、あ
るいは、ブロック状に混ぜ合
わせながら埋め戻して行った
当時の様子を如実に知ることが
できた。

また、柱穴113・115・117・118
の4ヶ所では、直径0.2mから
0.3mのヒノキの柱材が遺存
し、特に柱穴113・118では木
質の上部が空洞のままであり、
柱根が上位より腐朽し、灰色
系粘土を主体とする柱痕へと
置換されつつある状況を観察
することができた。そして、柱
穴117ではそれが完了し、灰
色系の粘質土からシルトに置
き変わった柱痕を確認した。ま
た、柱穴110・111・112・114
・116の5ヶ所については、
遺構検出時に柱穴が重なって
いるような輪郭がみられたた
め、断面を注意深く観察した。
結果、上位で観察された重なり
が下位に行くほど不明瞭とな
り、部分的に圧密を受けたよ
うな土層の変形構造が観察さ
れたため柱が抜き取られたも
のと考えに至った。

遺物には、柱穴111柱抜取穴から
出土した図48-47の須恵器杯
身の口縁部片がある。小片で
あるため時期の限定はできな
いが、飛鳥時代を中心とする
時期の所産と考えられる。

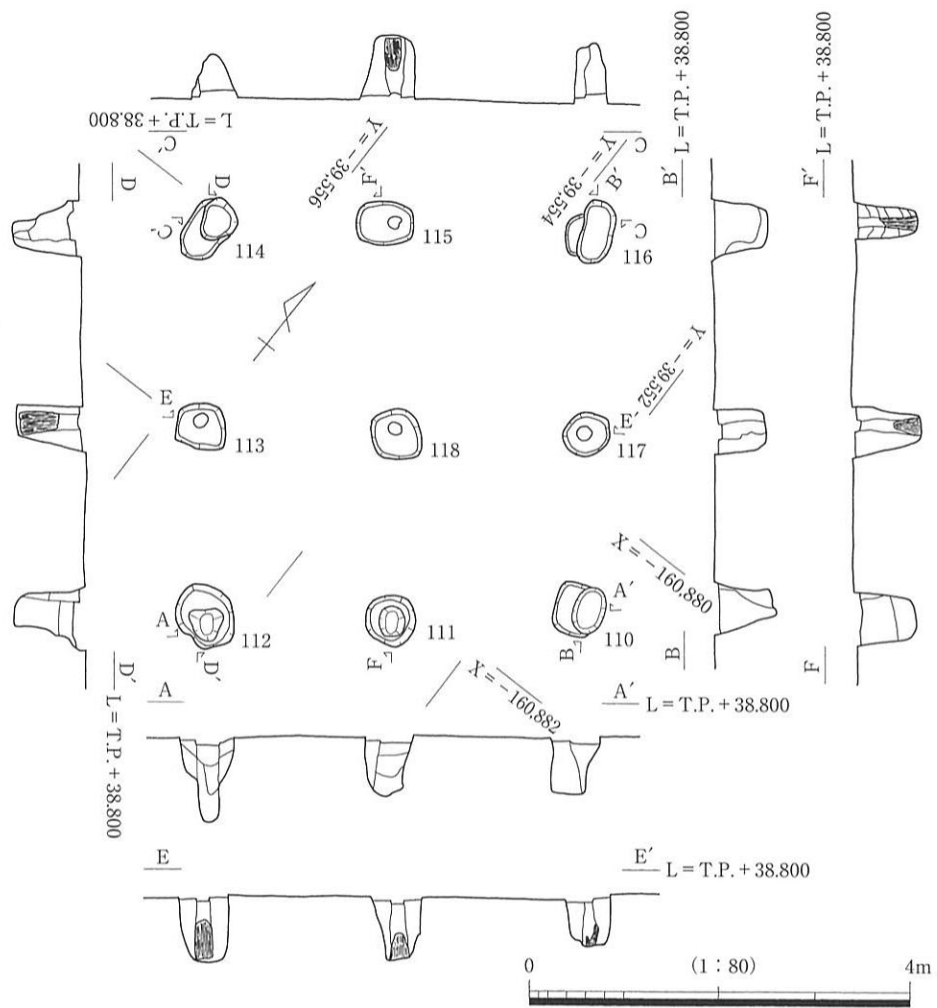


図41 2 E トレンチ 建物12平・断面図

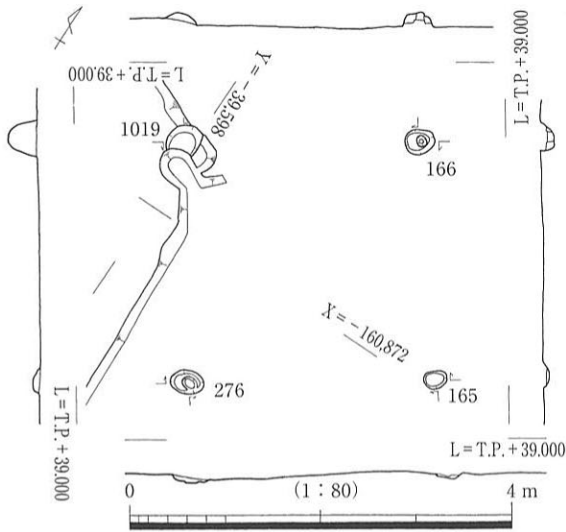


図42 2 E トレンチ 建物13平・断面図

建物13 (図42 図版36-1 付図3)

トレンチ北西部で検出された掘立柱建物で、北東部の隅柱は8 E トレンチにおいて確認した。主軸はN-36°-Wと西に偏る。柱間は東西、南北それぞれ1間で、その間隔は前者が2.6m、後者が2.5mとなり、床面積は6.5㎡(約2.2坪)を測る。掘方の平面形は不整形円形で、断面は浅い皿形を呈し、柱穴166と276では直径0.1m程度の柱痕を確認した。埋め土は黒味の強い褐色系の土層で粘質が強い。出土遺物がみられないため時期は不詳であるが、方位や柱穴埋め土の様相から、飛鳥時代と考えられる。なお、規模が非常に小さいことから、住居とは考えられない。

建物14 (図43 図版36-2 付図3)

トレンチ中央から南西の地点で検出された掘立柱建物で、建物1と建物2のほぼ中間に位置している。柱間は東西、南北とも1間で、柱間は東西が北側2.0mと南側1.9m、南北は東側2.0mと西側2.1mで南北方向にやや長い。床面積は約4㎡(1.2坪)で、主軸はN-21°-Wと西に偏る。

掘方は不整形円形で、断面形は歪んだ「U」字形を基本とする。埋め土は暗褐色系の粘質土に黄灰色粘質土を交えたもので、その中央には灰色系の均質な砂質土からなる直径0.1m程度の柱痕が確認された。出土遺物はないが、埋め土の特徴や主軸から、飛鳥時代の建物となる可能性が高い。

なお、当初、このような各辺1間で、面積の矮小な建物の存在を疑問視していた。しかし、この建物を調査した時点で、周辺にピットが皆無であること、掘方の輪郭が明瞭で深く、そこに確実な柱痕が確認できたことから、実存を敢えて否定する根拠が乏しくなり、一応、建物と同様の調査を行った。

その後、前述の建物13など他にも同様のまとまりをみせるピット群が確認できたことから、その存在を肯定し、今回、建物として報告する。しかしながら、その用途は住居とは考えられず、現状では道具小屋や小型の家畜類飼育用の施設などとの解釈を行っておきたい。

建物15 (図43 図版37-1 付図3)

トレンチ中央部で検出された掘立柱建物で、建物6の北側に位置する。平面形態は東西、南北とも各1間で、その柱間は東西両側が1.8m、南側1.3m、北側1.1mを測り、床面積は約2.2㎡(0.7坪)である。南北方向にやや細長く、主軸はN-36°-Wを示し、西に偏っている。

掘方の形状は不整形な円形から隅丸方形を呈し、断面形は矩形または、角張った「U」字形である。深さ0.2mから0.4m程度に掘り込まれ、埋め土は黒味の強い褐色系の粘質土であった。その中央部附近には北西側の1基を除いて直径0.15m前後の柱痕が観察された。

なお、建物の主軸は建物6と1度しか変わらず、また、建物6の中心を延長すると、建物15の東辺に至るという位置関係にあることから、2.4m離れた双方の建物が同時併存していた可能性が高い。

建物16 (図43 図版37-2 付図3)

トレンチ東端部で検出された。北西隅柱と、そこから東へ1間、南に2間分の柱穴を確認したのみで大半は調査区外となる。このため規模は不明であるが、柱間は東西2.1m、南北が北から2.6m、2.0mを測り、主軸はN-26°-Wを示す。柱穴の平・断面形態や埋め土の特徴は、既述の諸例と共通する。

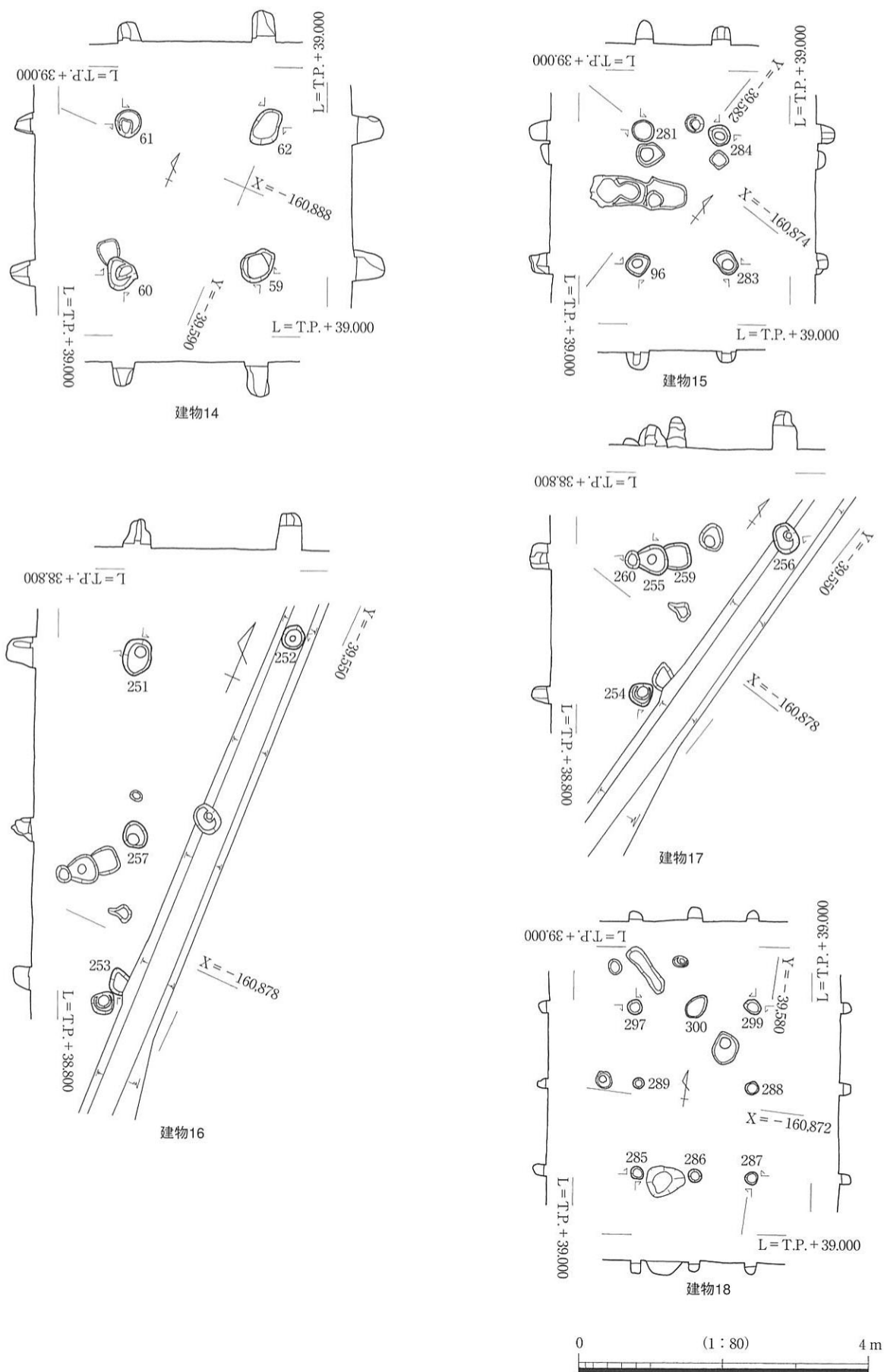


図43 2 E トレンチ 建物14から18平・断面図

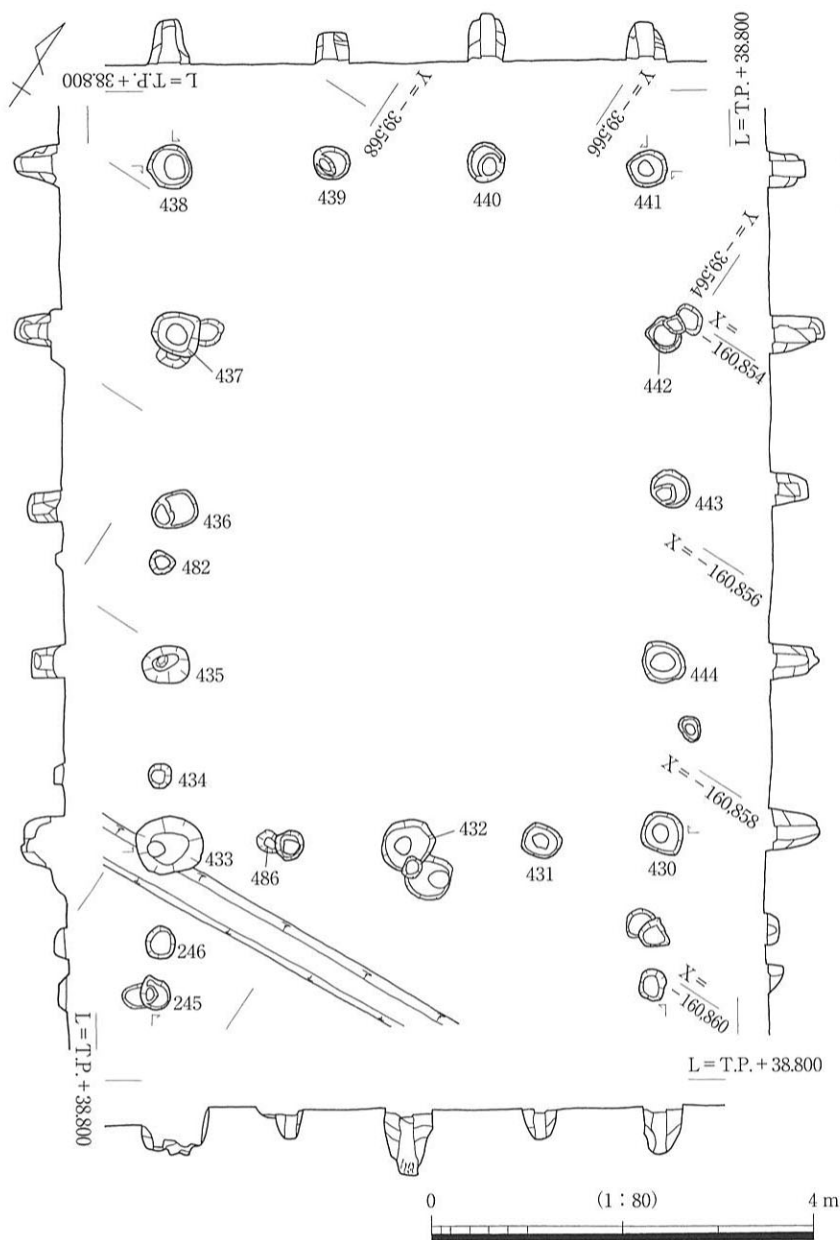


図44 2 E トレンチ 建物19平・断面図

建物19 (図44 図版38-2、39-1、58-4、82-5~8、83-1~7 付図3)

トレンチ南北区境で検出した南北棟の掘立柱建物で、主軸は $N-33^{\circ}-W$ を示す。規模は、桁行北3間(5.0m)、南4間(5.0m)、梁間4間(東7.1m、西7.2m)を測り、桁柱数が東西で異なる。実際には南のように通柱とする構造と、北のように二本で支える構造とが併用された可能性があるが、南には梁や屋根に規制されてか小型の柱が添えられている。なお、南の両桁延長部には1.0mと、0.6m離れて平面、深さとも一回り小さな柱穴が存在し、これを含めた床面積は 43.8m^2 (13.3坪)となる。身舎の面積のみでは建物35に譲るが、総面積では今回検出した西偏軸建物群中最大となる。柱間は北梁が東から1.6m、1.7m、1.7m、南梁が同じく1.2m、1.4m、1.2m、1.2mで、桁は東が北から1.7m、1.7m、1.8m、1.9m、西が同じく1.8m、1.8m、1.6m、2.0mである。埋め土の状況は図版82・83に示す通りで、建物12同様に柱痕や埋め戻し状況を非常によく観察することができた。

出土遺物がないため確実性には乏しいが、その諸要素から鑑みて飛鳥時代の遺構であると考えられる。

建物17 (図43 図版38-1 付図3)

建物16と前後関係にある掘立柱建物である。大部分が調査区外であるため、北西隅柱とそこから東と西の柱穴を1基ずつ確認したに止まる。柱間は、北側1.9m、西側1.7mを測り、主軸は $N-45^{\circ}-W$ と西偏している。掘方の形状や、埋め土の様相はこれまでの例とほぼ同様で、その中央付近には直径0.15m程度の柱痕が確認できた。

建物18 (図43 付図3)

報告書作成段階で認識した。

桁行2間(東2.4m、西2.3m)、梁間2間(1.6m)の東西棟建物で、面積 8.8m^2 (2.7坪)を測る。主軸は $N-7^{\circ}-E$ と西傾する。柱間は梁が0.8m等間、桁が北列双方とも1.1m、南列は東2.4m、西2.3mである。埋め土は灰褐色系の土層で、柱痕は確認できない。柱穴299と柱穴300から、図48-53・54に示す平安時代初頭の土師器の杯が1点ずつ出土した。

建物20 (図45 図版39-2、83-8、84-1~6 付図3)

トレンチ中央部の東よりで検出された南北棟の掘立柱建物である。主軸はN-14°-Wと西偏する。規模は、梁間2間(北3.3m、南3.2m)、桁行3間(3.9m)、床面積約12.7㎡(3.8坪)を測る。

柱間は、梁北側が東より1.6mと1.7m、南側が1.4mと1.8mで、柱間の広い方の中間には柱穴484がこれを補うような場所に位置している。桁は東側が北より1.7m、1.0m、1.2m、西側が同じく1.6m、1.2m、1.1mを測る。なお、南の両側柱延長部には0.9m離れて一回り小さな柱穴が位置することから、この建物に付随する縁か軒がこの部分にまで伸びていた可能性が考えられる。

掘方の形態は不整円形を基本とし、断面形は隅丸の矩形から「U」字形を呈し、図版83や84のように明瞭な柱痕が観察された。なお、桁の北から3列目の柱穴のみは、他のそれと比較して小規模となるのが特徴である。

遺物の出土がみられないため、確実な時期は不明であるが、既述の例との比較から、飛鳥時代の建物であると考えられる。

建物21 (図45 図版40-1、55-1、84-7・8 付図3)

トレンチ東際で検出された掘立柱建物で、東半部が調査区域外にある。このため、全体の規模は不明であるが、東西2間(3.6m)、南北2間以上の規模を有する。検出できた部分での柱間は、北側1.4m、南側1.5m、西側が北から1.9m、1.7mであり、主軸は、N-11°-Wと西偏する。柱間のみから考えるならば、南北棟建物となる可能性が高い。

掘方の形状や埋め土の特徴は、飛鳥時代の諸例と近似し、柱穴421では図版84のように柱根の一部が遺存している状況が観察された。また、柱穴418では柱の抜き取りを確認した。

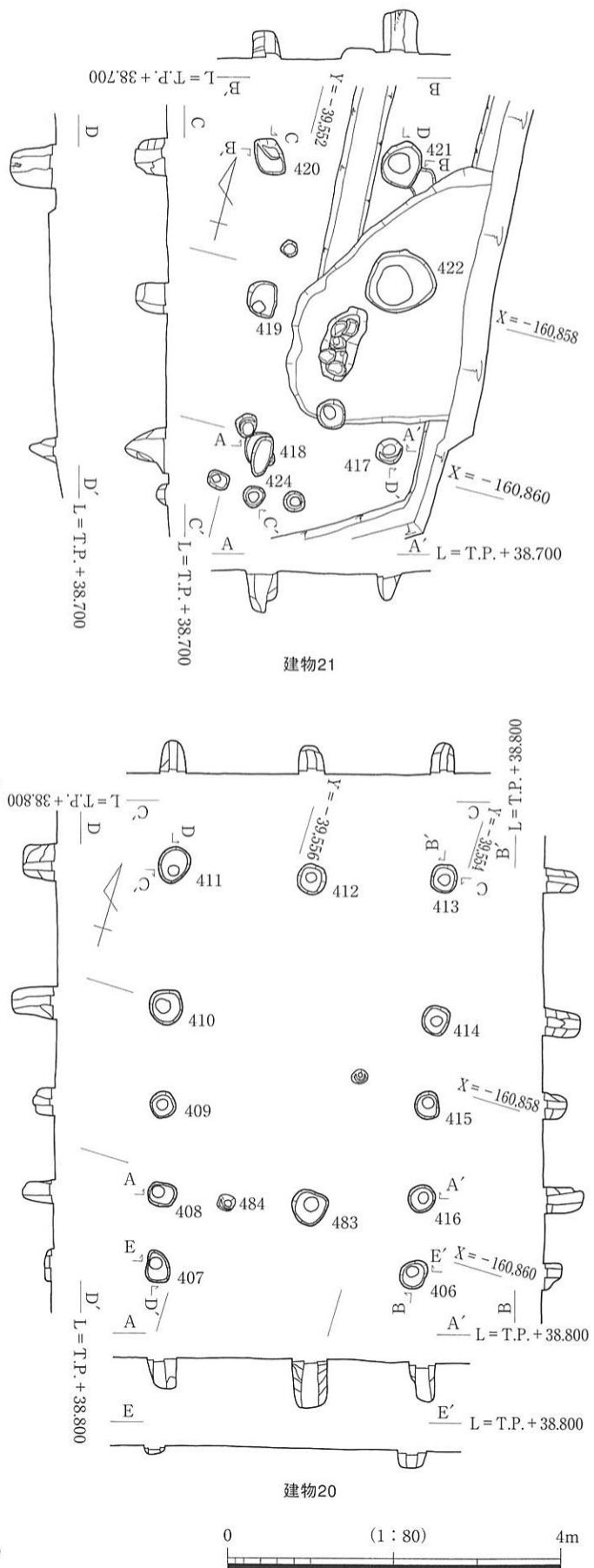


図45 2 E トレンチ 建物20・21平・断面図

建物22 (図46 図版40-2、85-1 付図3)

トレンチ北東部で検出された総柱の掘立柱建物である。東西2間以上、南北5間の規模を有し、主軸はN-1°-Wを示す。東部が調査区外のため全容は不明だが、東の3Eトレンチまでには達しない。

西側には北西隅を除いて1.1mから、1.2m離れた場所に柱穴が並列しており、庇あるいは縁が設置されていたことを窺わせる。さらに、0.8m西側にも柱列が平行しているが、その位置から勘案して柵列や堀とは考えられない。柱穴の平面形は円形を基本とし、断面は隅丸の矩形が多数を占める。埋め土は灰褐色系の粘質土を中心とし、中央附近に0.1m強の柱痕が確認できるものが多かった。

時期は出土遺物がないため不明である。しかし、飛鳥時代のものとは主軸、柱配置、埋め土など悉く異なっており、少なくともこれらとは区別できる。3層除去後に検出されたこと、柱穴の埋め土中に小片たりとも瓦器片を含まないことから勘案するならば、平安時代後期以前とすることができよう。

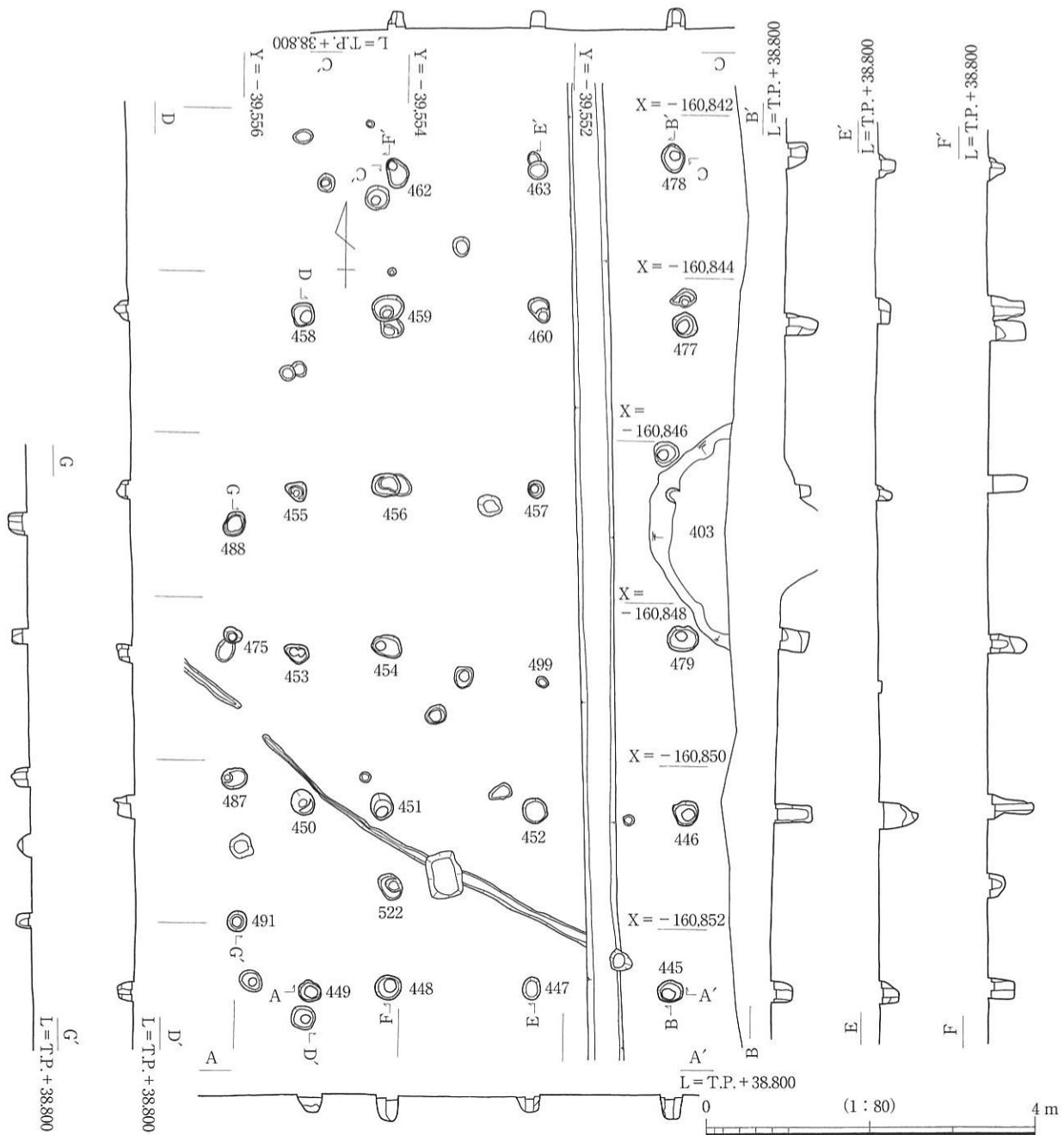


図46 2Eトレンチ 建物22平・断面図

建物23 (図47 図版41-1 付図3)

トレンチ北部の東よりで検出された掘立柱建物で、南側には建物20が位置している。

規模は、東西・南北とも各1間となり、柱間は、南北両側が1.7m、東が2.0m、西が1.9mで、南北方向にやや長い。面積は約3.3㎡(1坪)を測り、主軸はN-48°Wと大きく西に偏っている。

掘方の形状は不整円形で、掘り込みの形状は「U」字形を基本とし、これにやや下方が角張る例が加わる。

埋め土は黒味の強い褐色系の土層で、やや粘質を帯びていた。なお、すべての柱穴のほぼ中央には、直径0.15mから0.2m程度の柱痕が確認された。それは、埋め土よりも均質で灰色がかった粘質の強い土層であったため、比較的容易に識別できるものであった。

柱穴からの出土遺物はみられず、ここから時期を特定することは困難である。しかし、主軸の方向、埋め土の様相や土質、そして、平面形の類似する建物が他の飛鳥時代建物にもみられることから、それらと同時期として考えることに矛盾はないであろう。

建物45 (図47 付図3)

トレンチ中央のやや北西で検出された南北棟の掘立柱建物で、東側には建物18が隣接している。

報告書作成段階で認識したものであるため、記録類に不十分な点があることは否めない。

規模は、梁間2間(2.4m)、桁行4間(6.2m)で、床面積は約15.9㎡(4.5坪)を測る。主軸はN-4°-Wを示す。柱間寸法は、東西の両梁間とも1.2m等間で、桁行は東側が北より、1.8m、1.5m、1.5m、1.4mで、西側が1.0m、6.2m、1.5mとなる。

なお、西側桁列の中央2本が欠失している。これについては、当初より存在しなかったのか、それとも削平を被ったためなのかは不明である。しかし、掘方が小規模であることから使用される柱材も細いとみられ、6.2mもの柱間を支持する構造を考えることは困難である。全体的に柱穴が浅く、後世に相当の改変を受けた状態で検出されたと考えられることから、むしろ完全に削平されてしまった可能性を想定しておきたい。

埋め土は灰褐色系の土層を中心とし、すべての柱穴において柱痕は確認できなかった。

建物の時期は、柱穴305から図48-52、柱穴306から51に示す土師器の杯が出土したことから奈良時代末期から平安時代前葉頃と考えられる。

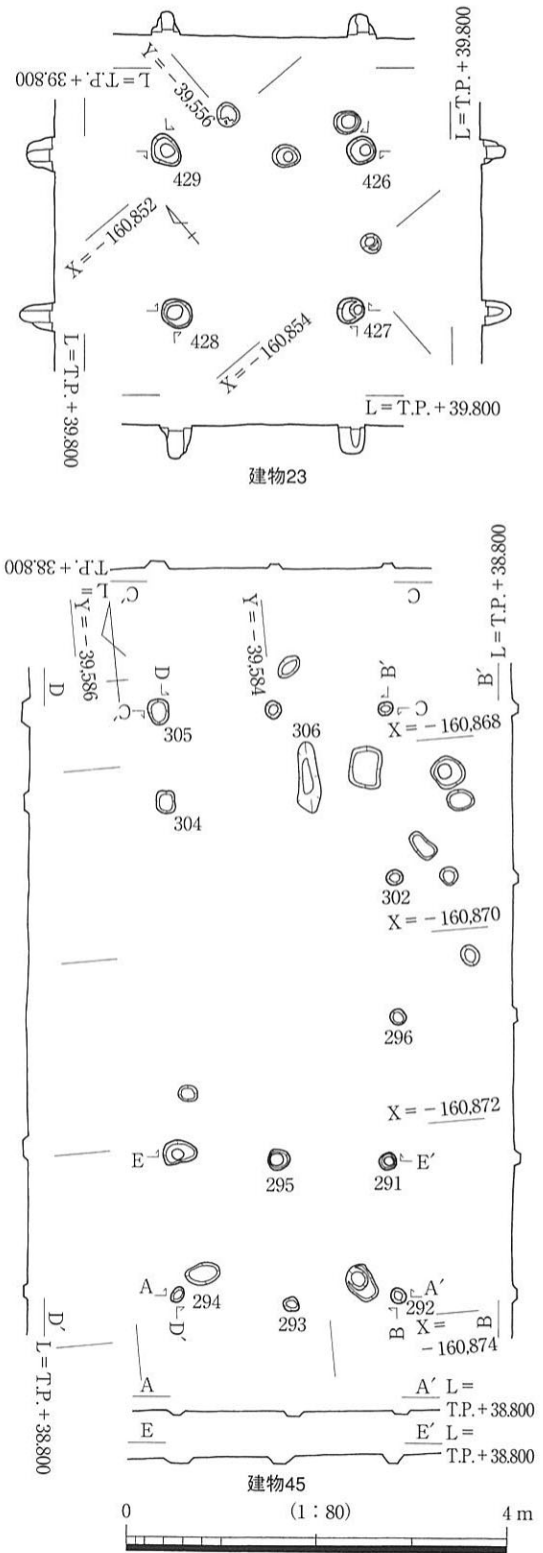


図47 2 E トレンチ 建物23・45平・断面図

遺構出土遺物（図48 図版88-2・8・11・12、89-1・10・11、90-2・4・7・8、91-10）

土坑3（図48-1~12 図版88-2・8・11・12、90-8、91-10）

須恵器と土師器が出土した。その状況は遺構の項で詳述した通りで、完形品の多いことが特徴である。

須恵器には図48-1から5の蓋杯および平瓶がある。1・2は蓋でそれぞれ杯G、杯Hのものである。

3・4は杯Hの身である。5は小型の平瓶で、体部には回転カキ目調整が二回に分けて施されている。

以上5点の須恵器は、一部に細かな欠損部はみられるものの、すべて完存した状態を保っている。

図48-6から12は土師器の杯および甕である。このうち6から8については、全形が窺え、中でも、7・8の杯は完形品となる。6は小型の甕で、外面下半部に被熱痕跡が観察される。7は杯Cで、口縁短部はやや肥厚しゆるやかな段状をなしており、内面には一段の斜放射線暗文が観察される。8も杯Cである。先述の例と比較して、法量や口縁端部の形状など共通する部分も少なくないが、底がやや深く、口縁部から杯部へと至る部位に鈍い屈曲部が形成される点において上記の例と異なる。なお、現地では取り上げた時点では、内面には1段放射線暗文を明瞭に観察することができたが、その後の洗浄作業で表面が剥離してしまい、現状では確認できない。

図48-11と12は土師器甕の口縁部から体部上半にかけての破片である。12については口縁部の形態から推察して、長胴となる可能性も考えられる。

以上の土師器は、その形態的特徴や内面に施される暗文、また、須恵器蓋杯にHとGの両形態が併存していること、それらの法量などからみて飛鳥第Ⅱ期のものと考えられる。

土坑557（図48-13~23 図版89-1・10・11、90-4）

須恵器と土師器が出土した。須恵器には図48-13から21がある。13は鉢類の口縁部破であると考えられるが、遺存部が僅少なためどのような器形となるのかは判然としない。

図48-14と15は低脚高杯である。14は口縁部が欠損しているが、杯から脚部にかけての形態や調整技法など細部に至るまで15との共通点が多い。なお、15の脚部外面には回転を利用した針描状の線刻が二条認められる。図48-16から21は杯類である。形態には口縁部の外反する16のようなものと、それ以外に分類される。後者はさらに、17のような小型のものとそれ以外に分けられる。これらのうち、18・20・21の3点については、これまでも述べたが、胎土に砂粒を多く含む粗い胎土をもつこと、成形、調整技法が粗雑であること、内面底部にヘラ記号をもつものがみられるなど、陶邑窯製品ではあまり類例をみない特徴が看取されるため、調査地周辺から供給された製品である可能性が考えられる。

なお、19については、口縁部の立ち上がりが大きく、また、内傾していることから、脚部が付される椀や杯類となる可能性も考えられる。

これらの遺物は蓋杯類が欠如しているため明確にはできないが、7世紀前半代のものと考えられる。

上記以外の土坑出土遺物はその概略を遺構の中で略述しているため、それ以外の遺物を報告する。

図48-41はピット179から出土した須恵器杯H身の口縁部から杯部上半部にかけての破片である。図48-42はピット474より得られた土師器杯Cの口縁部から杯部上半部の破片で、内面には一段の正放射線暗文が観察される。図48-50はピット349より出土した土師器杯Cの体部上半部から口縁部にかけての破片で、杯部外面にはユビオサエによる調整が明瞭に観察される。

なお、図48-40の須恵器は、成形や調整が非常に粗略で、このたやすく識別できる特徴を手掛かりとして接合関係を調べた。その結果、隣接する土坑387や土坑398ばかりではなく、約25m離れた井戸42の枠内からも破片が出土していることが判明し、遺構の共時性を考える上で興味深い事実を供した。

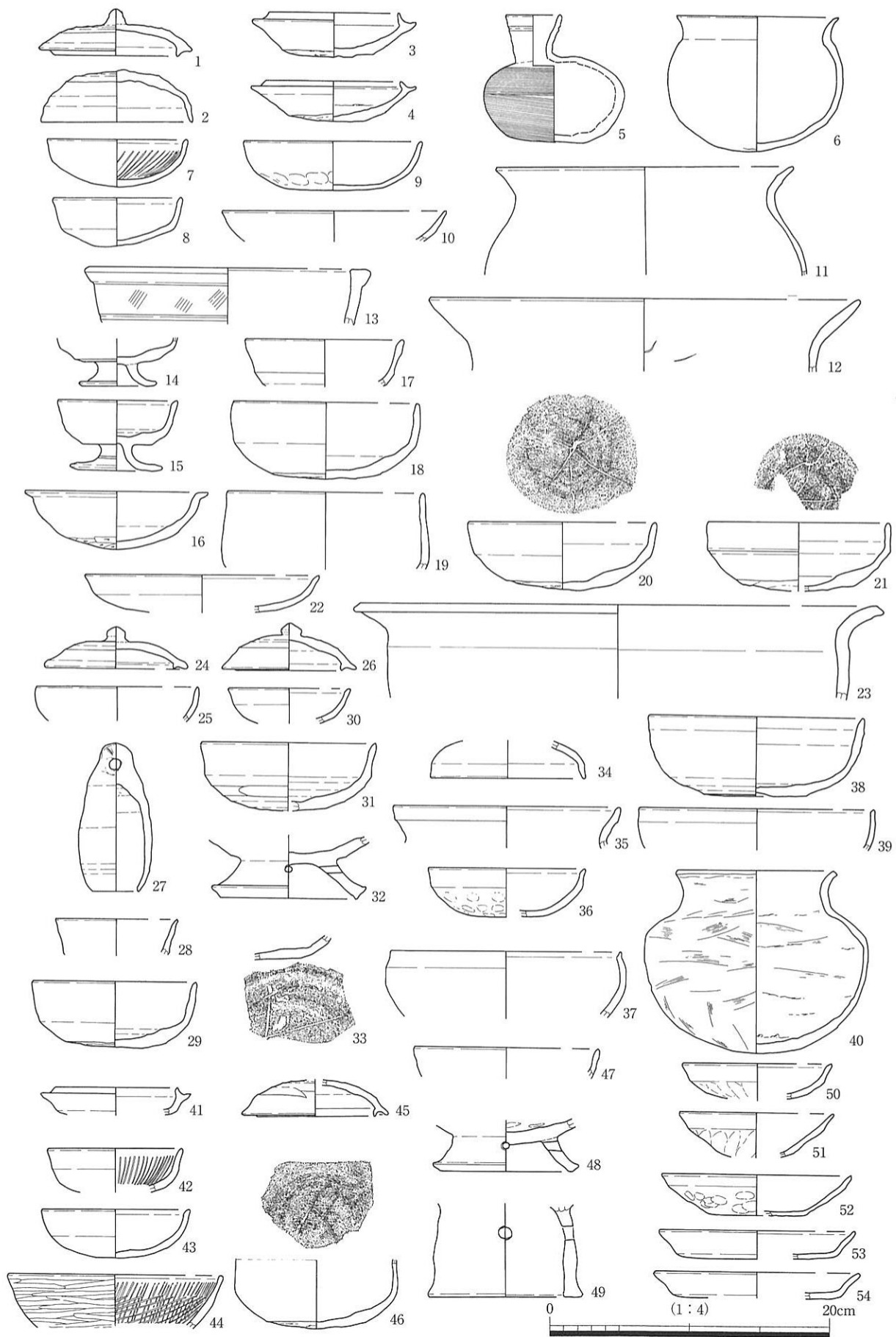


図48 2 E トレンチ 土坑・柱穴出土遺物実測図

包含層出土遺物（図49-1～72）

1・2層出土遺物（図49-1～9）

図49-6・8は1層出土、7は1・2層出土、9から11は2・3層からの出土遺物で、二つの層準にまたがるものは、便宜上、上層に含めて報告する。なお、1から5はラベルに遺構面直上出土と記されており、厳密には1層出土ではない可能性があるが、下層出土遺物との混同を避けるためここに含める。

図49-3から5は須恵器で、3は杯蓋のつまみ。4は蓋杯Hの身。5は短頸壺の口縁部破片と思われる破片である。これらの土器はその形態から飛鳥時代から平安時代にかけてのものと考えられる。

6は濁淡黄緑色の釉薬が薄くかけられた青磁の体部下半の破片で、磁胎の様相や釉薬の状況などから越州窯系青磁であると考えられる。既往の近畿自動車道第1調査区でも図版93-2に示すような底部破片が1点出土しており、府内でも10指を数える程度の遺跡でしか確認されていないこの資料が2点も出土したことは、破片は小さくとも当遺跡の性格を知る上で非常に重要な意味をもつ。

図49-1と8は青磁で1は内面見込みに印花紋が押捺された龍泉窯系の碗、8は猫描手の櫛描紋をもつ同安窯系の皿である。2は瓦器碗の口縁部片で、その形態から13世紀から14世紀のものともみられる。

3層出土遺物（図48-12～51）

古墳時代後期から鎌倉時代にわたる各期の遺物が出土した。量的には鎌倉時代から室町時代にかけてのものが中心となり、後述する鑄造関連遺物もこの層中において多数確認することができた。

図49-12と20は土師器で、12は小皿、20は甕の把手である。13・14は13世紀から14世紀にかけての瓦器碗、15から19は13世紀代を中心とする龍泉窯系青磁碗や皿の各部位の破片である。

図49-21から51は各時期の須恵器である。21は飯蛸壺。22・23は低脚高杯。24は平瓶などの口縁部。25は長頸壺口縁部。26から35はヘラ記号をもつ蓋杯や高杯。39は蓋杯H蓋。40は杯蓋。41から43は蓋杯G蓋。44・45は杯身。49は甕の体部上半から口縁部にかけての破片である。これらの遺物は、40のみが古墳時代後期にまで遡るが、それ以外はおおむね飛鳥時代の範疇の中に納まる。つづいて、図49-36から38は奈良時代から平安時代前期にかけての杯蓋のつまみ、46は鉢の口縁部破片で、これも平安時代前期までにみられる器形である。図49-47・48と50・51は須恵器片口鉢類である。このうち48・50・51は13世紀初頭以前と考えられる東播系須恵器の片口鉢である。47についてはその形態や、白味を帯び質感が粗い胎土で製作されていることなどから、東海地方の瀬戸系製品である可能性が考えられる。

4層出土遺物（図49-52～72）

須恵器や土師器が出土した。時期的には飛鳥時代のもものが大多数を占め、一部それ以外のものを含む。

図49-52と53は須恵器杯蓋のつまみ部で奈良時代後半から平安時代前期にかけてのものである。54はヘラ記号を有する須恵器の蓋杯、55は土師器の高杯脚部で、古墳時代前期のものと考えられる。

図49-56から69は須恵器の蓋杯および高杯で、62のような古墳時代後期のTK-43型式のものから、60・67の杯Gにみるような飛鳥第Ⅱ期のもの、そして61や69のような杯B類に至るものまでが含まれている。このうち、65と66は先に陶邑窯以外の製品と推定したものと同類である。

70は瓦器碗の体部から口縁部にかけての破片である。時期的にはこの1点のみが新しく、上層の包含層を掘り残した部分から出土したなど、混入品である可能性を指摘しておきたい。

71は須恵器壺Eの体部上半から口縁部にかけての破片である。時期的には奈良時代後期に位置づけられるものであろう。72は壺の体部から底部にかけての破片である。胎土は白味ががり非常に堅緻な焼成で、体部中央の上位には櫛状工具を施紋具とした列点紋が一条めぐらされている。

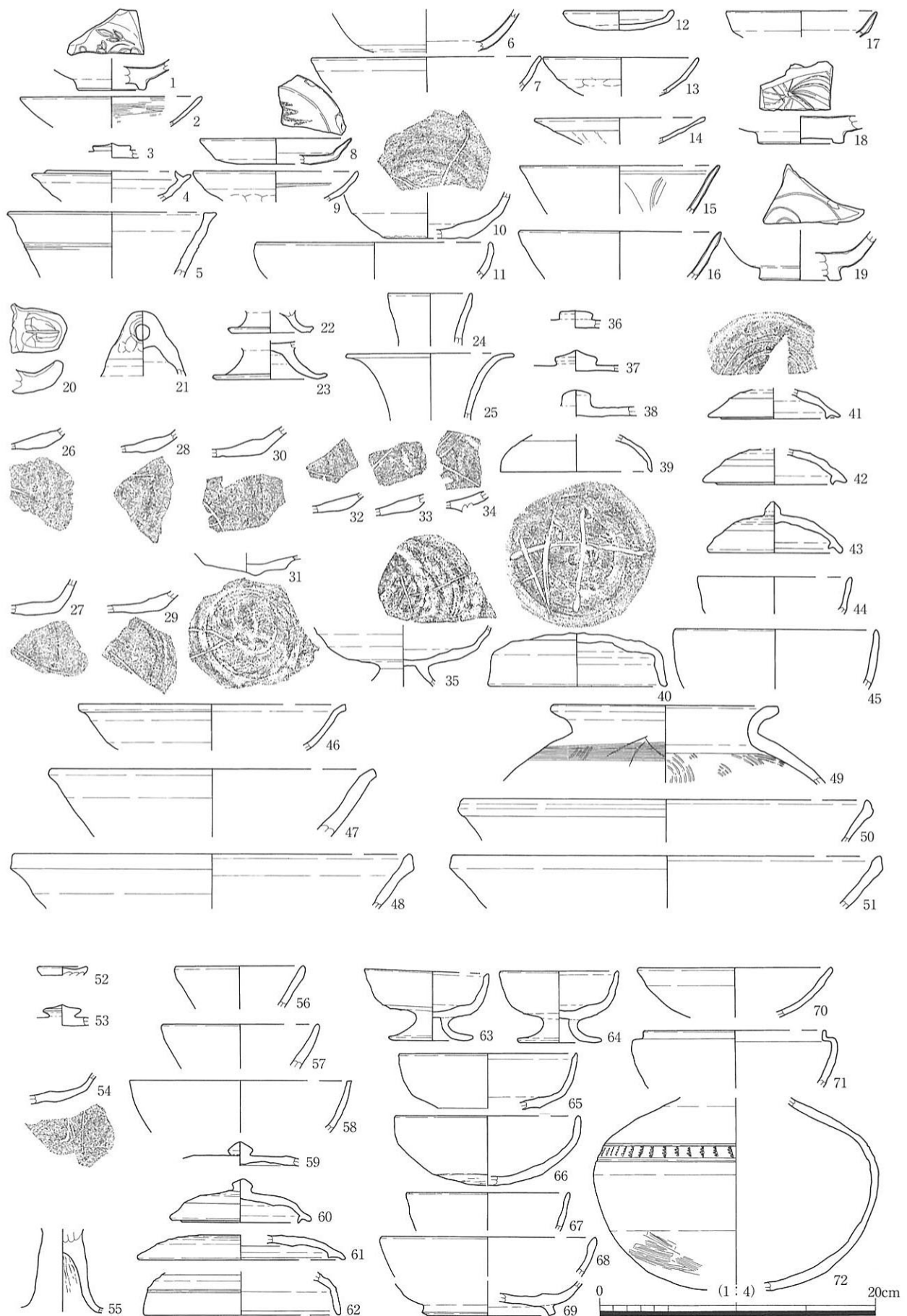


図49 2Eトレンチ 包含層（1層から4層）出土遺物実測図

第3項 3Eトレンチ(図50~76 図版18~20・27・41~62・65・68・74~78・93~99 付図2・3)

調査着手前の畑の形状に規制され南北に2分して調査を行った。北部は2Eトレンチと既設灌漑水路をはさんだ反対側、南部は5Eトレンチと6Eトレンチとに挟まれた部分に位置する関係となる。

基本的な堆積層は、北側については2Eトレンチと大きく変化することはない。ただし、トレンチ北部の基盤層においてその上部に土壌化の著しい部分が認められた。層上面を精査した限りでは無遺物であったためこの段階で調査を終了していた。しかし、3Eトレンチ南側の開析谷を埋積させる土層よりサヌカイトの剥片が得られたため、これにも遺物が含まれている可能性が再浮上してきた。ところが、この時点では北側調査区はすでに本体工事側に引き渡されなす術がなかった。半ば諦めていたところ、2Eトレンチ北側の調査区で、幸いにもより以上に土壌化の著しい部分が検出されこの層準を掘削することとした。その結果、遺物・遺構とも存在しないことを確認することができた。

検出された主な遺構は25棟にもおよぶ掘立柱建物群である。これらは、ほぼ南北方向の主軸をもつものが多く、この点において2Eトレンチで検出された建物群と大きく異なっている。

建物はその位置や直接的な重複関係などから、数時期にわたり建て替えられたものと理解されるが、その初期段階には高い計画性のもとに配置された建物群が存在していたことを明らかにすることができた。周辺からは緑釉陶器や灰釉陶器も出土しており、遺物とも相まってその性格が注目される。

また、トレンチ南部は、ほぼ全域が開析谷となり遺構は存在しなかった。しかし、先述のとおり谷の最下層より3点のサヌカイト剥片が出土し、また、そこへ流下する自然流路の一つから和同開珎4点が重なって出土するなど、遺跡の来歴と集落縁辺の状況を知る上において貴重な成果を得ることができた。

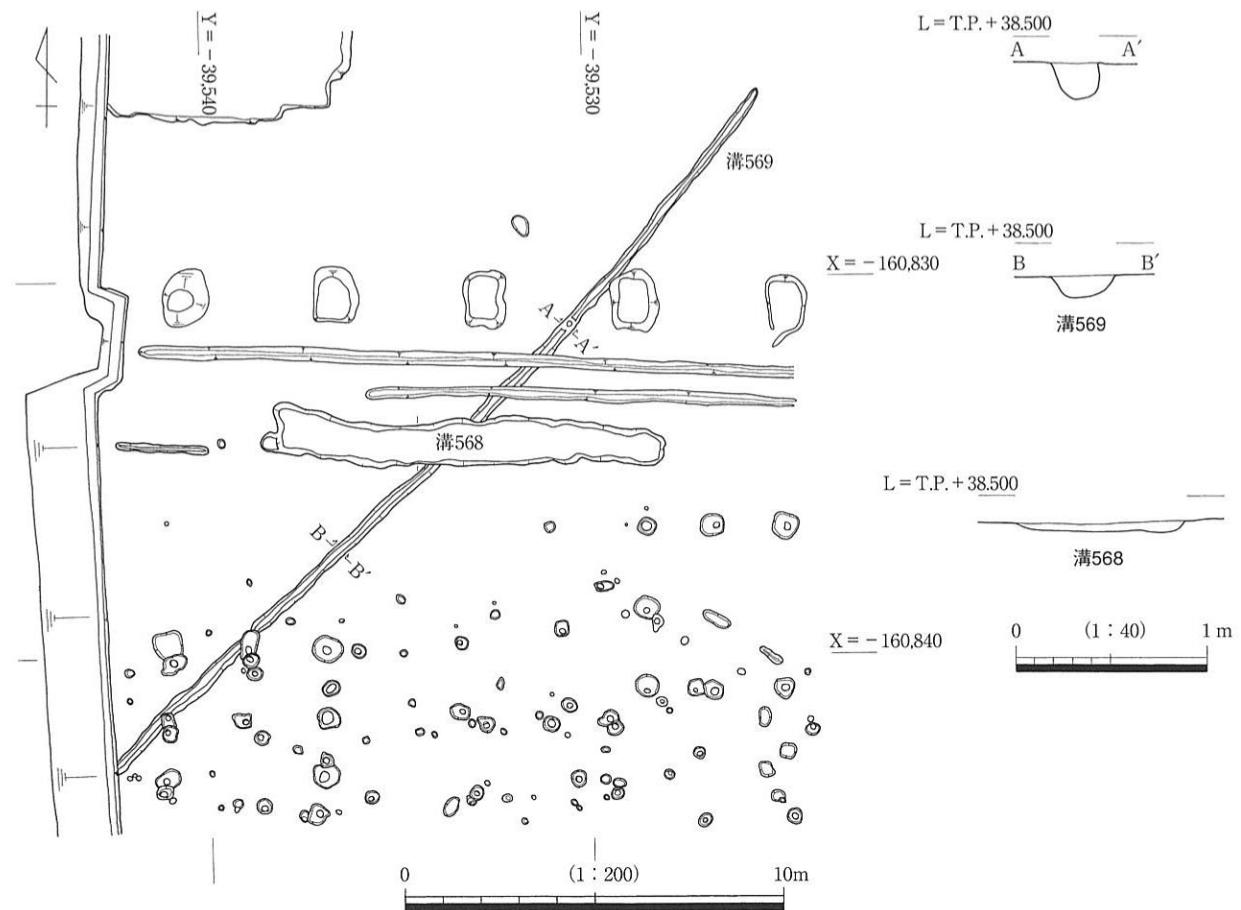


図50 3Eトレンチ 溝568・569平・断面図

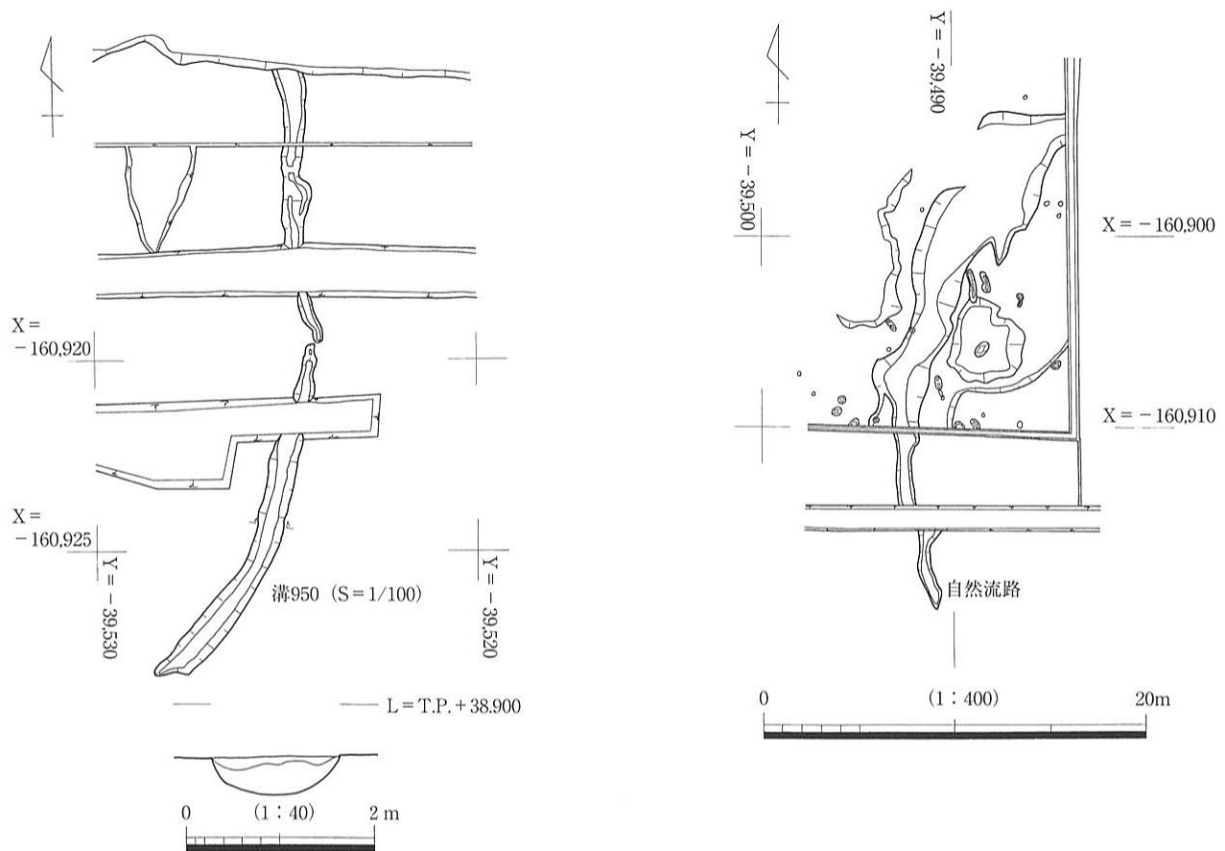


図51 3・4・6 E トレンチ 溝950・自然流路平・断面図

溝568 (図50 図版18-1・65-2)

トレンチ北側で検出された東西方向の溝である。重複関係から溝569廃絶後に開鑿されたことが明らかである。断面は浅い皿状を呈し非常に浅い。埋土は灰褐色系の砂質土からシルトが中心となり、上面には上位より降下した鉄分の沈着や、マンガンの結核が顕著に観察された。なお、既述のとおり、2 E トレンチで検出された溝383と水路を挟んで断続する位置関係にある。

出土遺物がみられないため、時期は不明である。しかし、埋土が包含層の2層に類似しており、また、溝383と関連するものとの推論が正鵠を得たものであるならば、鎌倉時代とすることができる。

溝569 (図50 図版18-1・65-3)

トレンチ北部を北東から南西に貫く直線的な溝である。北側はトレンチ内で途切れ、南側は水路の下に向かうが、2 E トレンチまでには達していないことから総延長は最大でも35mには満たない。

断面形は図示するような逆台形で、埋土は粘質を帯びた暗い褐色系の土層である。出土遺物はみられないが、埋土の様相が飛鳥時代の遺構に類似することや、北西側約33mにはこれに平行するような位置関係で溝392が存在していることから、この溝も飛鳥時代のものとみなしておきたい。

溝950 (図51 図版20-1・2)

3・6 E トレンチで検出された。北流し開析谷へと向かうが、耕地化に伴い形成された段差によって寸断される。遺物がないため時期は不明だが、埋土の様相から飛鳥時代以前のものと考えられる。

自然流路 (図51 図版62-1・2・97)

3・4・6 E トレンチで確認した。北へ広がり開析谷へと流下する。そのほぼ中央の溝底で和同開珎銅銭4枚が重なって出土した。周辺では土器片1片すら確認できず、これのみが単独の状態であった。

土坑570 (図52・72 図版74-2)

トレンチ北部の西際で検出した。平面形は東側に張り出しをもつ長方形を呈する。断面形は極く浅い皿状を呈し、その深さは0.05m程度である。埋土は灰色味の強い黄灰色系の砂質土が中心となる。遺物には図72-4から8に図示する土師器の杯や甕があり、その時期から平安時代前葉の遺構と考えられる。

土坑571 (図53・72 図版74-3・4)

トレンチ北部東側で検出した。平面は凹凸のある楕円形である。断面は深さ0.1mから0.15mを測る浅い皿形で、埋土はやや粘性を帯びた明るい褐色系の土層である。出土遺物には図72-1に示す土師器や2の須恵器杯Gの身がある。その特徴から飛鳥時代のものとみられ、遺構の時期も該期となろう。

土坑572 (図52・72 図版75-2)

トレンチ北部の南端で検出した。平面形は東西4.5m、南北5.0mの隅丸方形を呈する。深さは0.4m程度で、埋土の最下層には均質な灰色系粘質土が堆積していることから、一時、滞水状態に置かれていたことを窺わせる。遺物には図72-18から25に示す須恵器・土師器・黒色土器A類・瓦のほか、自然の円礫や緑泥片岩、被熱のため赤黒く変色し、脆弱化した凝灰岩切石などがみられた。

遺構の時期は、A類の黒色土器が含まれるため10世紀前半代頃まで機能していたものと考えられる。

土坑573 (図53・72 図版75-1)

トレンチ北部の西壁際で検出された。長径1.2m、短径0.9mの隅丸長方形を呈する。出土遺物は図72-27と28で、黒色土器B類を含むことから、平安時代前半代の遺構群中最も新しい段階のものとなる。

土坑885・886 (図53・72 図版75-4)

トレンチの中央で検出された。円形の土坑が2つ連なったような平面形態を呈する。何度も掘削された状況が断面からみて取れ、一部には炭や灰の薄層も認められた。出土遺物は図72-34から38である。

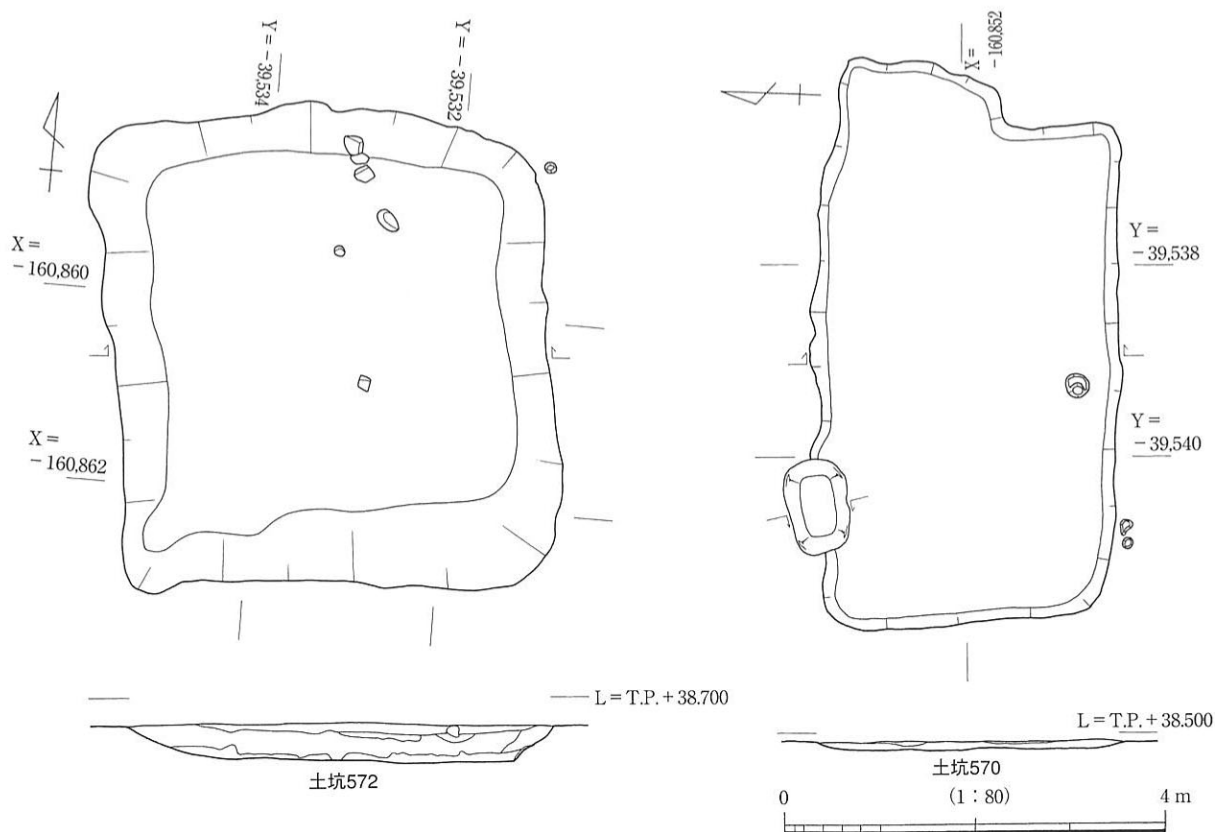


図52 3 E トレンチ 土坑570・572平・断面図

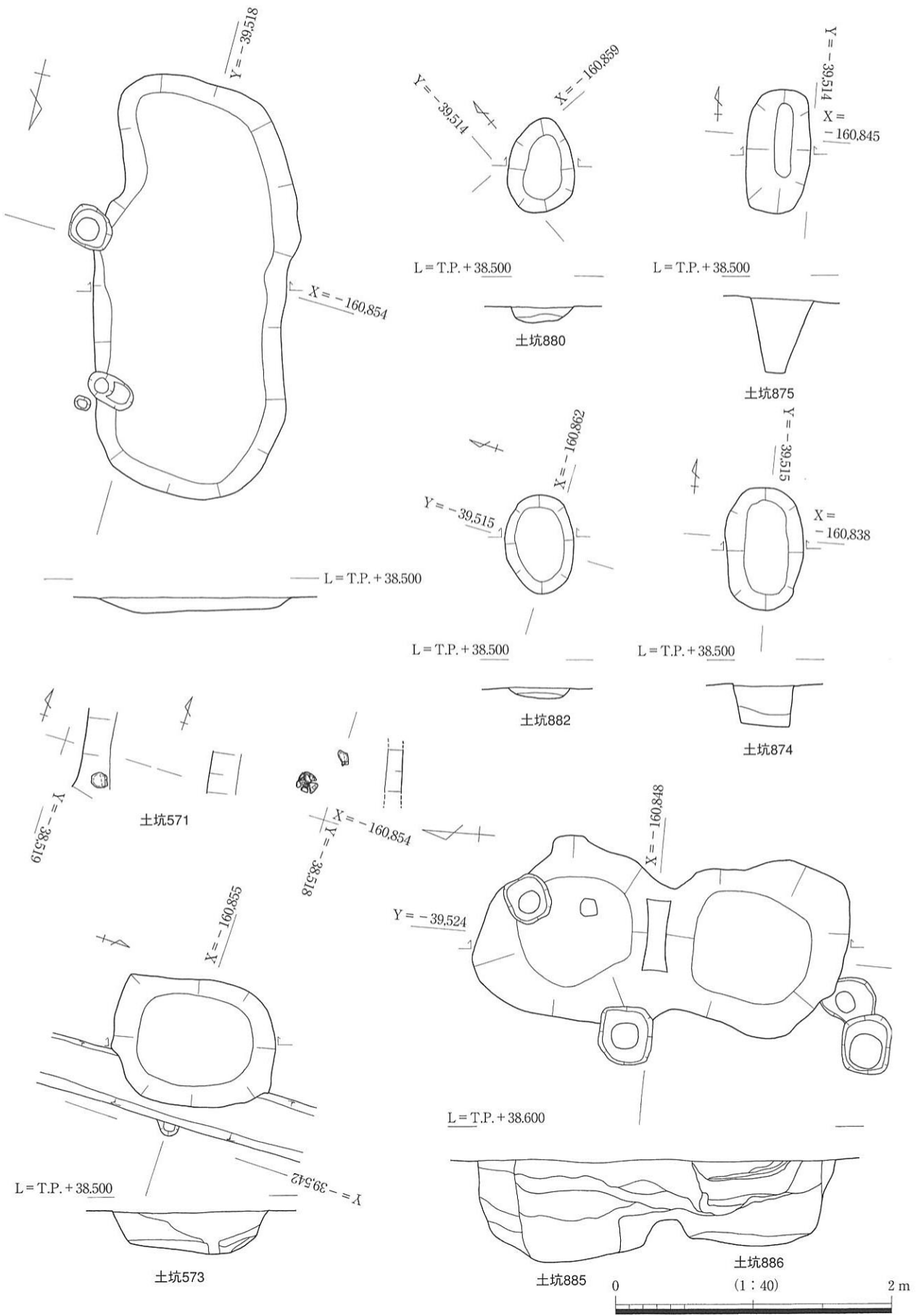


図53 3 E トレンチ 土坑平・断面および遺物出土状況図

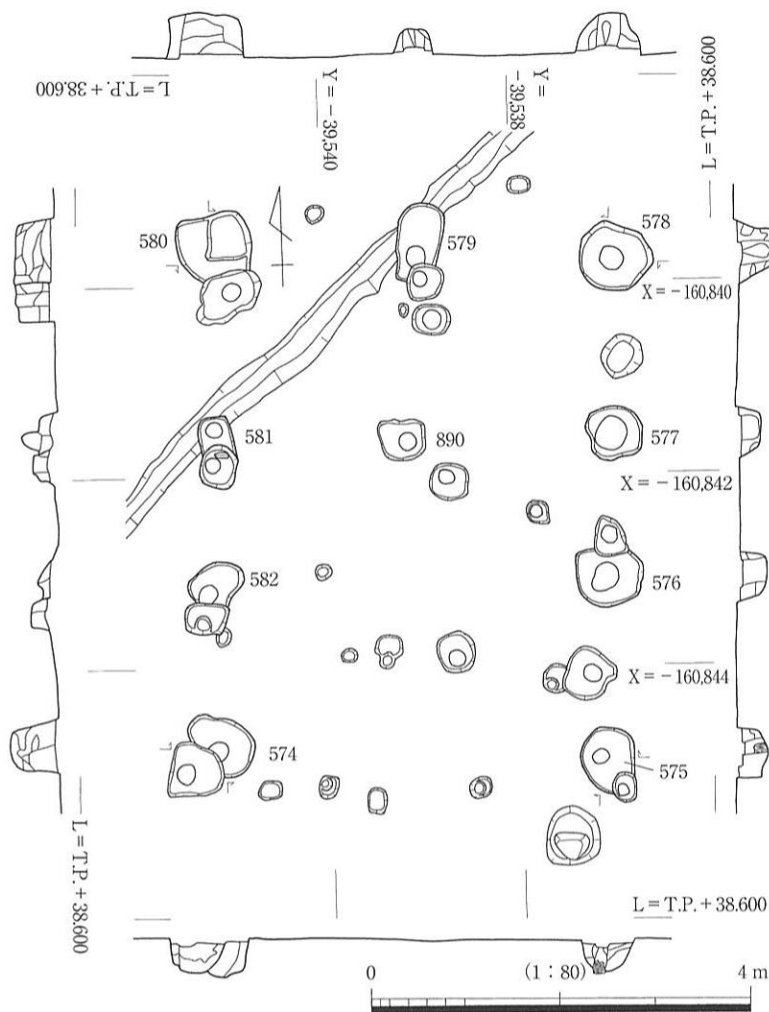


図54 3Eトレンチ 建物24平・断面図

建物24 (図54・73・74 図版27. 41
- 2・42-1、59-2、85-2・3
付図3)

トレンチ北部の西際で検出された南北棟の掘立柱建物である。

主軸は長軸でN-4°-Eを示し、ほぼ真北に向いている。

規模は、梁間北側が2間(4.0m)、南側が1間(4.0m)となり、桁行は3間(5.3m)で、床面積は、21.2㎡(約6.4坪)を測る。

なお、南側は柱がないことから開放されていたとも考えられる。

また、北側の桁2列目中央には柱筋を揃えるように柱穴890が位置していることから、これを建物24にともなう間仕切と考えることができる。

西側柱列のすべてと、東側柱列の南側2基を、建物25の掘方によって一部削り取られ、また、北側棟持柱の南東隅を建物26の北西隅柱の掘方によって失うという重複関係にあり、このこと

から、3棟の中ではこの建物が最も古い段階に建設されたものと考えることができる。

柱間の寸法は、北側の梁間が2.0m等間、東桁が北より1.8m、1.6m、1.9mを測り、西側が同じく1.9m、1.7m、1.7mとなる。掘方の形状は隅丸長方形から不整円形を呈し、断面の形状は隅丸の矩形を基本とする。また、隅柱4基は掘方を深く掘削しているが、その間に配列される梁と桁の柱穴はとも浅いという状況にあり、特に、北側の棟持柱にその傾向が強い。

埋め土には黒味の強い褐色系の粘質土と黄灰色系の粘質土が用いられていた。後者は基盤層上位の堆積層で、柱穴掘削時に掘り上げた土砂をそのまま埋め戻した状況を示している。

そして、ほとんどの柱穴内には直径0.2mを越える柱痕が観察され、特に柱穴575では、図版85-3に示すように木質がわずかに遺存する柱根が存在した。そして、北西隅柱掘方の埋め土には、ブロック状の混合土のみが観察されたことから柱が抜き取られたと考えられる。

柱穴内からは瓦片のほか、土器の細片や凝灰岩の碎片が少量出土した。瓦片は柱穴581から図73-4、柱穴577から図73-9と図74-1・6、柱穴576から図73-3と図74-7が出土し、このうち、図74-7は南側に位置する建物25の柱穴612出土の破片とも接合した。

これらの瓦片は奈良時代の特徴をもつものが多いが、図73-3や図74-7のように平安時代にまで下がるものも一部に含まれる。従って、建物の時期は平安時代に位置づけられようが、瓦の様相から後期にまでは下らない。

建物25 (図55・73～75 図版27.
42・43・57・59・85 付図3)

建物24とほぼ同位置に建築された南北棟の掘立柱建物で、方位はN-8°-Eを示す。柱穴にみる前後関係から、建物24廃絶後に建築されたと判断され、このほか、東側桁筋の北から3基目の掘方が、建物46の西側棟持柱である柱穴942の一部を掘り込んでいる。

規模は、梁間2間(4.1m)、桁行3間(5.1m)で、床面積は約20.9㎡(6.3坪)を測る。柱間は梁が東より2.0mと2.1m、南が同方向より2.1mと2.0mを測り、桁行は東側が、北より1.8m、1.5m、1.8mで、西側が同方向より1.8m、1.65m、1.65mとなる。なお、桁筋南側から2列目のほぼ中央には、間仕切りと考えられる一回り小型の柱穴が存在している。

掘方の形状は、不整円形から隅丸方形のものが混在し、大小の差が著しい。断面は矩形を呈するものが主流を占めるが、その深さは様々である。なお、西側の桁行柱列については、先述の建物24と同様に南北双方の隅柱のみが掘方、深さともに大きく深くなり、また、南側梁行の棟持柱に相当する柱の掘方が極端に小さく浅い状況となる点でも、建物24と近似する。埋め土は建物24と同じく黒味の強い褐色系の粘質土と、黄灰色系の粘質土が混合されたような状況で、そのほぼ中央には0.2m強の灰褐色系の土層からなる柱痕を確認できるものが多いほか、中には掘方内に扁平な礫を礎石のように据え付けた南東隅柱のような例も含まれていた。

出土遺物には土器片や図版85-4のように根石状の状態で出土した瓦片のほか、凝灰岩碎片がみられた。これらの中には被熱痕跡を止めるものが含まれ、火中に晒されたことを知らしめている。

土師器には柱穴896掘方から出土した図75-6や8の杯のほか、柱穴623掘方から出土した図75-24や、柱穴897掘方から出土した図75-26のような甕の口縁部がある。後者は須恵器の甕Dと見紛うような形状を呈している。須恵器には柱穴899掘方から出土した図75-20に示す瓶子の底部片がある。これらの遺物は平安時代前葉の9世紀初頭頃に位置づけられるものであろう。瓦片はすべて平瓦で掘方内から出土した。それぞれの出土遺構の対応関係は柱穴612から図73-1と図74-3、柱穴602から図73-5と7、柱穴896から図74-4である。なお、図74-5は柱穴896掘方出土の破片と柱穴898掘方出土の破片が合致し、また、図74-7は柱穴612と建物24の柱穴576の掘方から出土した破片と接合した。

これらは奈良時代の特徴をもつものが中心となるが、図73-1や図74-7のように平安時代前期にまで下がる段階のものまでが含まれており、建物24との重複関係や、土器類の時期とも齟齬をきたしてはいない。従って、建物の時期は平安時代前葉に位置づけられる。

これらは奈良時代の特徴をもつものが中心となるが、図73-1や図74-7のように平安時代前期にまで下がる段階のものまでが含まれており、建物24との重複関係や、土器類の時期とも齟齬をきたしてはいない。従って、建物の時期は平安時代前葉に位置づけられる。

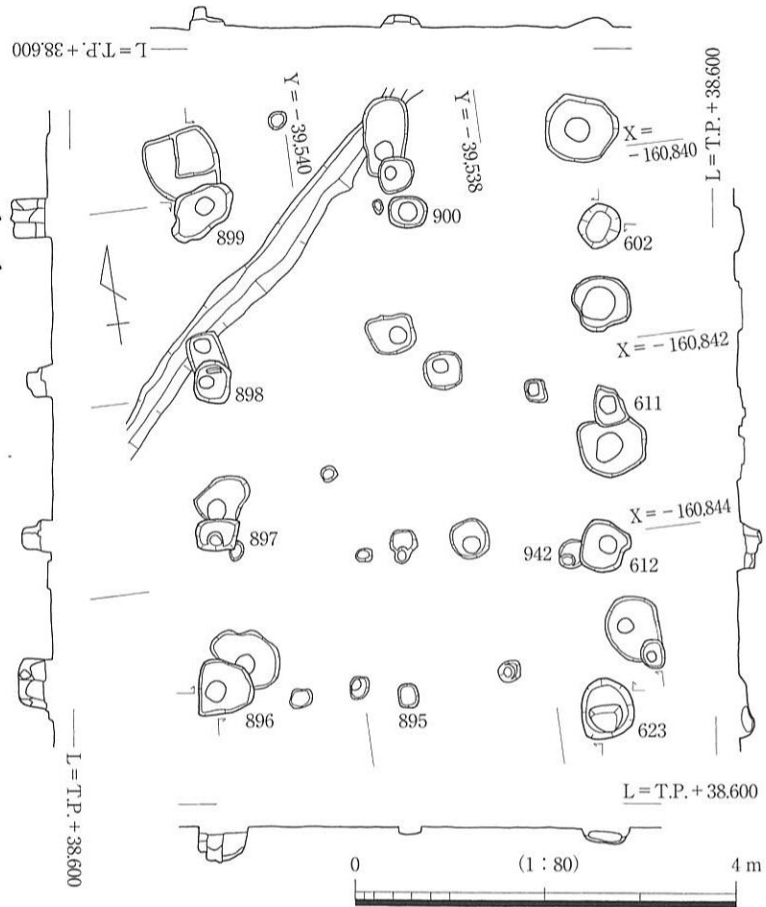


図55 3Eトレンチ 建物25平・断面図

建物26 (図56・75・76 図版27. 43-2、85-5 付図3)

トレンチ北部北側で検出された東西棟の総柱の掘立柱建物である。主軸はN-5°-Wと、やや西に偏り、現在の磁北とほぼ同軸となっている。

規模は、梁間3間(6.5m)、桁行4間(10.6m)を測り、床面積は、68.9㎡(約20.9坪)となる。なお、北西側の内部については柱穴を確認することができなかったことから、床張をとまなわない土間のような空間として利用されていた可能性が考えられる。

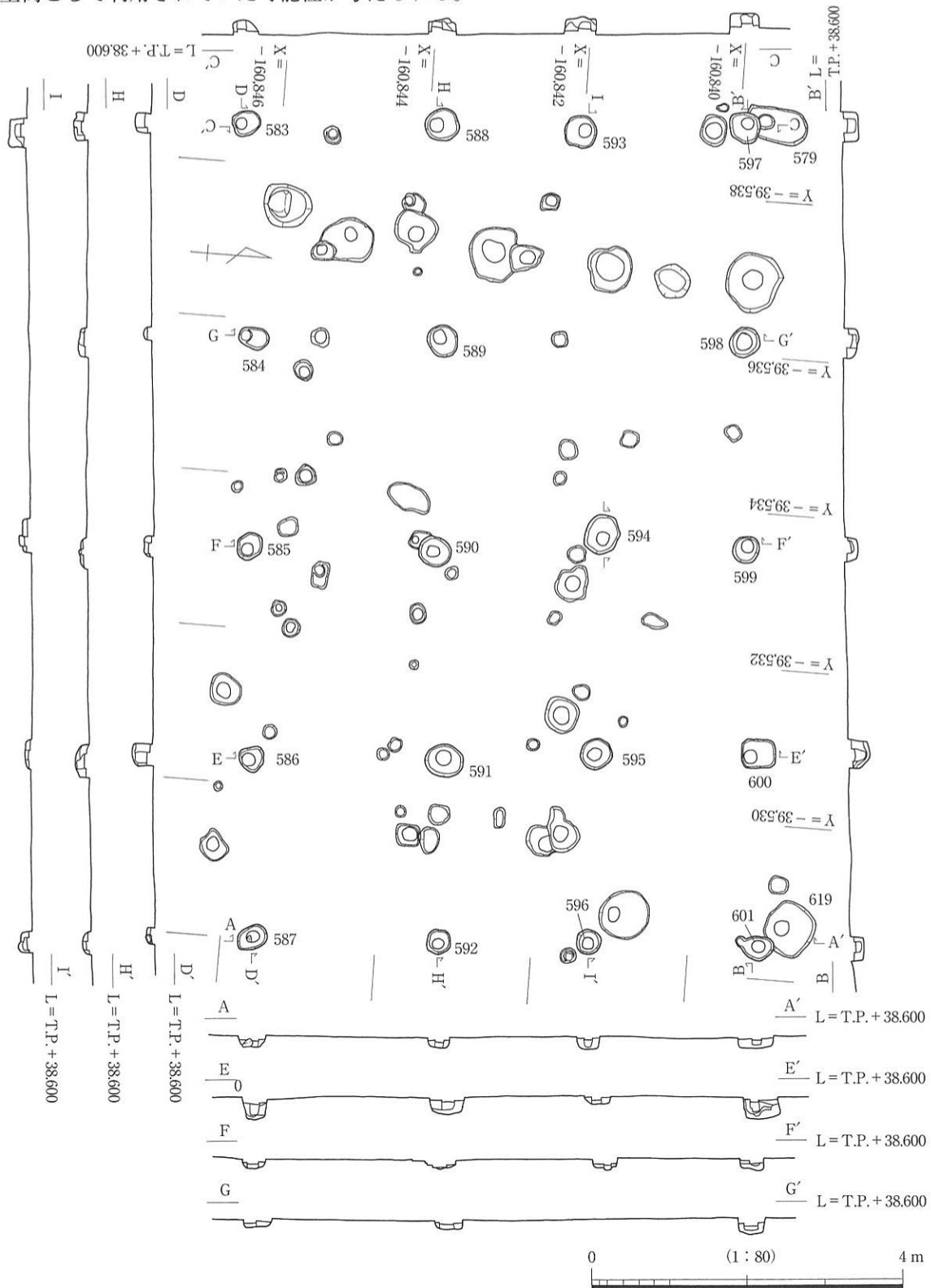


図56 3 E トレンチ 建物26平・断面図

また、先述した建物22の梁間を3間と仮定するならば、その総床面積が67㎡弱を測ることとなるので、不確定要素を残してはいるが、今回確認された掘立柱建物の中では最大床面積となる可能性がある。

柱間は、東側梁間が北側より、2.1m、1.9m、2.5mで、西側のそれが、同じく2.0m、2.0m、2.5mとなる。桁行は、北側柱列が東より2.4m、2.8m、2.6m、2.8m、南側柱列が同方向より、2.4m、2.7m、2.8m、2.7mを測る。

掘方は不整円形を呈し、埋置する柱よりさほど大きくは掘削していない。また、断面の形状から、矩形を基本として掘削している様相が看取される。

埋め土は暗い灰褐色系の砂質土を主体とし、すべての柱穴において、直径0.15m前後を測る灰褐色系粘質土からなる柱痕を確認することができた。

なお、北西隅柱掘方が、建物24の北側棟持柱掘方である柱穴579と、また、北東隅柱掘方が、建物28の西側棟持柱掘方である柱穴619と重複しており、その前後関係より、双方の建物より後出する段階に建築されたものと判断できる。

遺物には柱穴586掘方から出土した図75-16の黒色土器A類の椀がある。器形が扁平で、9世紀末葉から10世紀頃のものと思われることから、建物の時期の上限をこの段階とすることができる。

建物27 (図57 図版27. 44-1、45-2 付図3)

トレンチ北部の中央部よりやや北西側で検出された南北棟の掘立柱建物である。主軸はN-2°-Wとやや西に偏る。この方位は東側に2.2m離れて位置する建物29と同軸で、なおかつ、建物29の桁の中間に占地していること、双方の建物の柱間寸法に1.7m尺が多用され、掘方の形状や埋め土の様相に類似点があることから、両者が軒を接するような状態で併存していた可能性が考えられる。

規模は梁間2間(3.3m)、桁行4間(東側6.8m、西側6.7m)で、床面積は約22.3㎡を測る。柱間は梁間が南北とも東より1.6mと1.7m、桁東側が北より、1.9m、3.2m、1.6mで、西側は同方向から北1間のみが1.6m、他は1.7mとなる。

なお、桁東側の北から3目目の柱穴は確認できず、はたして柱間3.2m分の荷重に耐え得る構造であったか否か検討の余地がある。

また、南側の両桁延長部には、0.9m離れて一回り規模が小さく埋め土の酷似する柱穴が存在していることから、縁が付随していたか南側の梁のみ屋根が拡張されていた可能性が考えられる。

掘方の平面形は不整円形と隅丸方形とからなり、断面は矩形を意識して掘削されているようである。時期については無遺物のため不明であるが、主軸方向から建物29との強い相関関係を窺わせる。

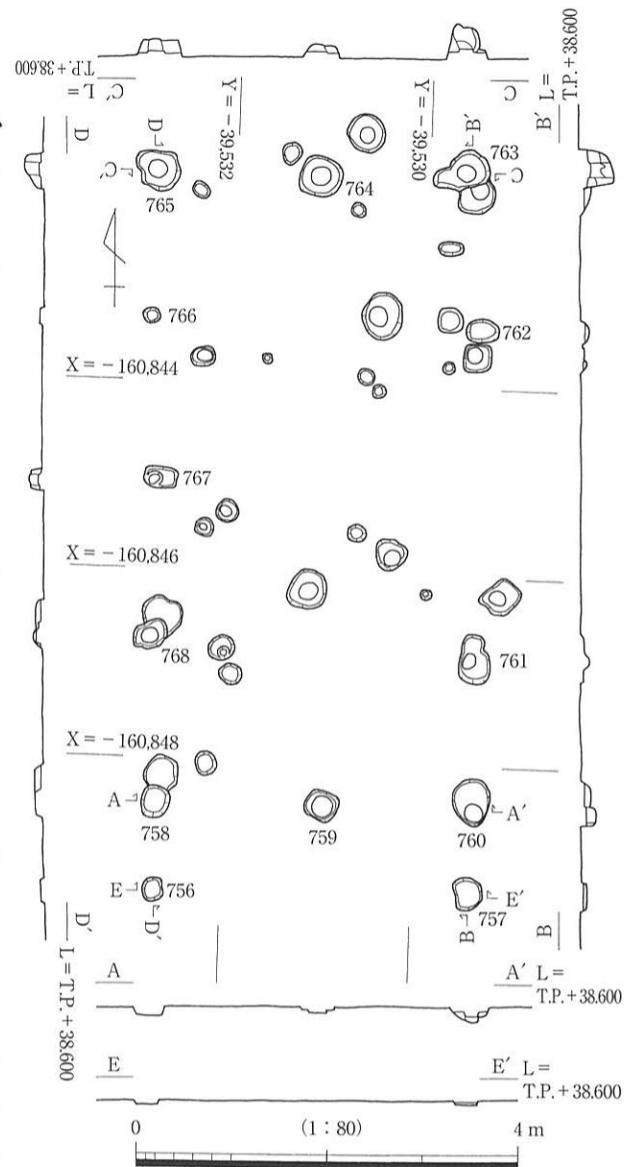


図57 3 E トレンチ 建物27平・断面図

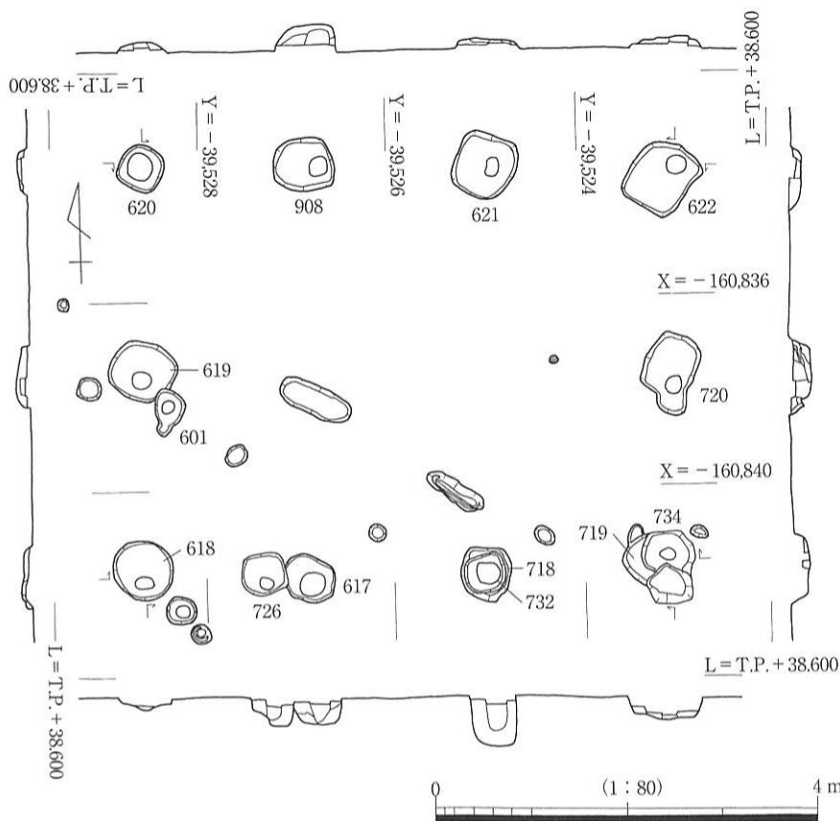


図58 3Eトレンチ 建物28平・断面図

柱穴732と柱穴726の掘方掘削にもなって削り取られている。さらに、西側の棟持柱掘方は建物26の北東側隅柱の柱穴601掘方によって南東隅を破壊されており、従って3者の中では最も古い段階に建設された建物と判断される。

柱間寸法は、梁行西側が北より2.2m、2.1m、東側が同じく2.2mと、推定2.1mで、桁間北側が東より1.9m、1.8m、1.9m、南側が西より1.8m、そこから2間分は推定1.9m等間である。

掘方の形状は隅丸方形を主体とし、これに不整形のものを含む。隅丸方形のものについては、各辺を建物の主軸に合わせて掘削している様相は看取されない。断面の形状は隅丸の矩形を基本とし、掘り込みは非常に浅い。埋め土には、黒色味の強い土層と掘方掘削時に基盤層を掘り上げて得られた黄灰色から黄褐色系の粘質土とが用いられ、その中には他の建物の柱穴によって破壊を被っているものを除いて、直径0.2m前後の明るい灰褐色系の均質な土層となった柱痕を確認することができた。

出土遺物がみられないため明確な時期については確定できないが、掘方の形状や埋め土の様相、また、建物の平面形態や主軸方向、そして、相互の位置関係などから勘案するならば、先述の建物24との類似点を数多く指摘できることから平安時代の中で捉えられよう。

なお、南北方向に主軸をもつ建物の多くに共通していえることであるが、柱穴の掘削深度が非常に浅い傾向にあり、中にはこの建物のようにほとんど掘込みのないものまでが存在する。

これらの柱穴が上位に堆積する包含層2層から掘り込まれた状況は確認しておらず、また、そこに含まれる遺物、そして、包含層の土質や色調からみてもその可能性は皆無に等しい。

掘削深度の時代的な傾向を考慮する必要もあり、また、具体的な根拠を提示することもできないが、これらの建物建築以前に盛土をとまなう造成が行われ、そして、建物群が廃絶した後にそれが耕地化による再造成によって削平され現況に至ったと解釈できることを指摘しておきたい。

建物28 (図58 図版27. 44-2、45-1 付図3)

トレンチ北部の中央北側の位置で検出された南北棟の掘立柱建物である。主軸はN-1°-Eを示しており、ほぼ真北を向いている。

建物の規模は、梁間2間(東側推定4.3m、西側4.3m)、桁行3間(北側5.6m、南側推定5.6m)で、床面積は約21.1㎡(7.3坪)を測る。

なお、推定値が含まれるのは、東南隅柱を建物29の柱穴734掘方によって失うためである。

このほか、桁行南側の東から2基目の柱穴の大部分とその西側の柱穴の西辺部が、建物29の

建物29 (図59・75 図版27. 46-1、85-6)

東西両側に庇をもつ南北棟の掘立柱建物で、主軸はN-2°-Wを指す。身舎は梁間2間(3.6m)、桁行5間(8.7m)で、床面積は約67.3㎡(20.4坪)である。

柱間は梁、桁とも1.7mから1.8mが主に用いられている。東側庇は身舎から1.6m離れて設けられ、掘方はそれより一回り小規模となるが、両隅柱のみは深く掘削される。西側庇は身舎より2.4m外側に設置され、掘方の規模は身舎とほぼ同大となる点で先例と異なる。前述のとおり建物28の柱掘方3基と、また、身舎南西隅柱は建物35の柱穴668と重複しており、その前後関係から3者の中では最も新しい建物であることが窺い知れる。

遺物は柱穴728掘方から図73-2の瓦、柱穴721柱痕から図75-17の杯、柱穴735掘方から同図-2の杯や3の皿、柱穴742柱痕から同図5・9・11の杯が出土した。3は緑釉陶器、2・5・11が土師器、9・17が黒色土器A類である。

これらは10世紀初頭までのものであることから、建物の廃絶を平安時代前葉頃とすることができる。この年代観は建物25との前後関係とも矛盾をきたさない。

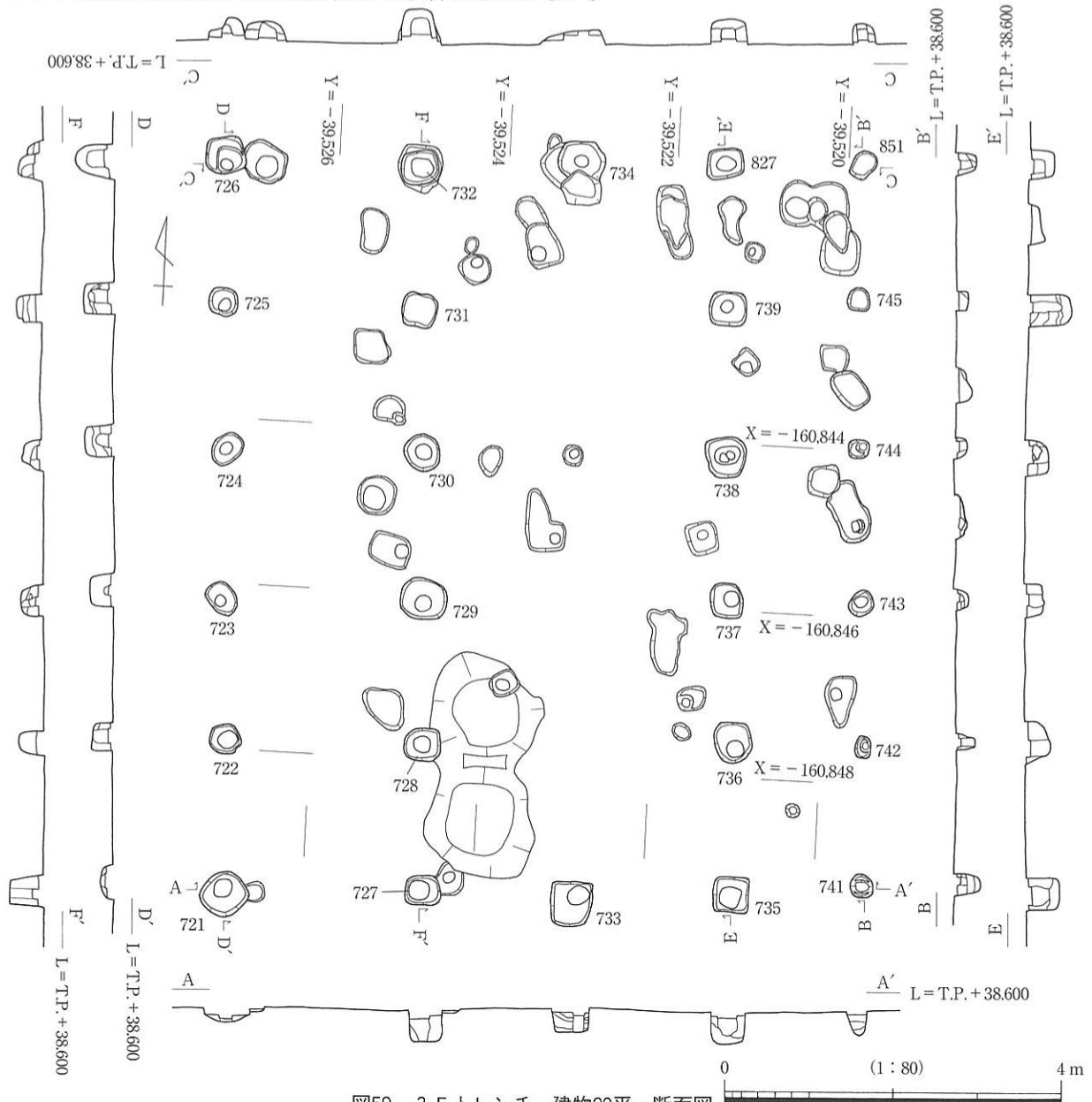
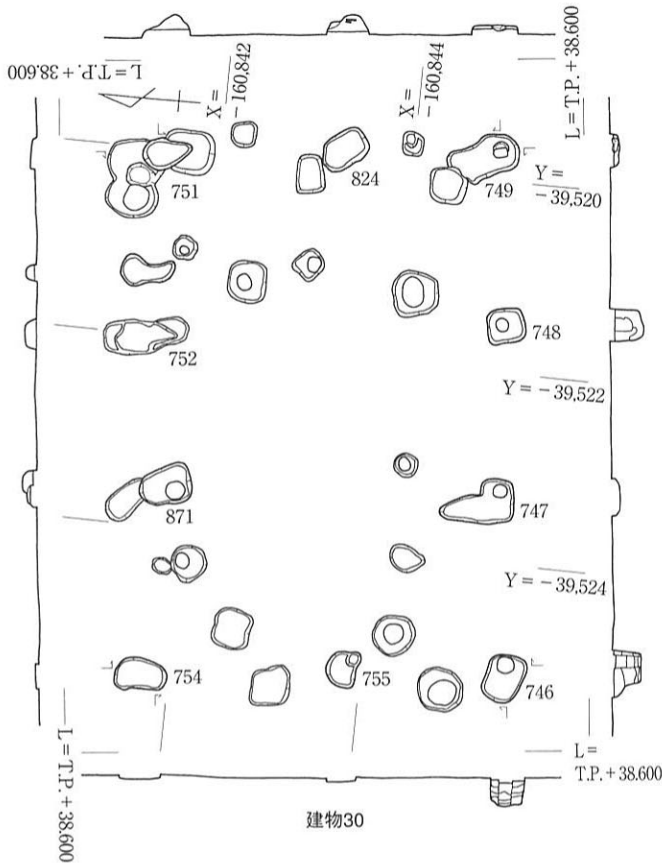


図59 3 E トレンチ 建物29平・断面図



建物30 (図60・75 図版27・46 付図3)
東西棟の掘立柱建物である。主軸はN - 5° - Wと、やや西に向けている。

規模は梁間2間(3.8m)、桁行3間(5.4m)で、北東西の3辺の柱間が不揃いなのにに対し、南のみが1.8m等間と均等に配されている。

柱掘方は隅丸方形を基本とするが、南東側に拡張されるように掘削されるものが半数近くを占めていることで特異である。

埋め土は灰褐色系の土層で、半数以上の柱穴で直径0.15m内外の柱痕が観察できた。

なお、先述の特異な形状を呈する柱穴は、南側の一方向にのみそれが確認されることから、掘削途中の掘方を広げてまでその方向に柱を設置しなければならない必然性があったものと解釈される。南桁の柱間のみが整然と配されている事実とも相まって、注目に値する事象である。

ちなみに、西側2.7mには建物26が南桁を揃えて占地し、しかも、両者は主軸までが共通する。このことから、両建物が強い相関関係にあったことを窺わせる。

以上の諸相から、先んじて建物26が建てられており、これに制約を受けて建物30が建築されものと推察できる。

遺物には柱穴871掘方から出土した図75-4や柱穴746柱痕から出土した同図18の土師器の杯、柱穴749柱痕から検出された同図22の製塩土器がある。

これらの遺物のうち、土師器はおおむね10世紀前葉頃までの時期を与えることができよう。

なお、南東隅柱柱痕より高台を付した土師器杯が全形の窺える状況で出土した。建物29からもほぼ同様の出土状況を示す遺物があることで注目される。

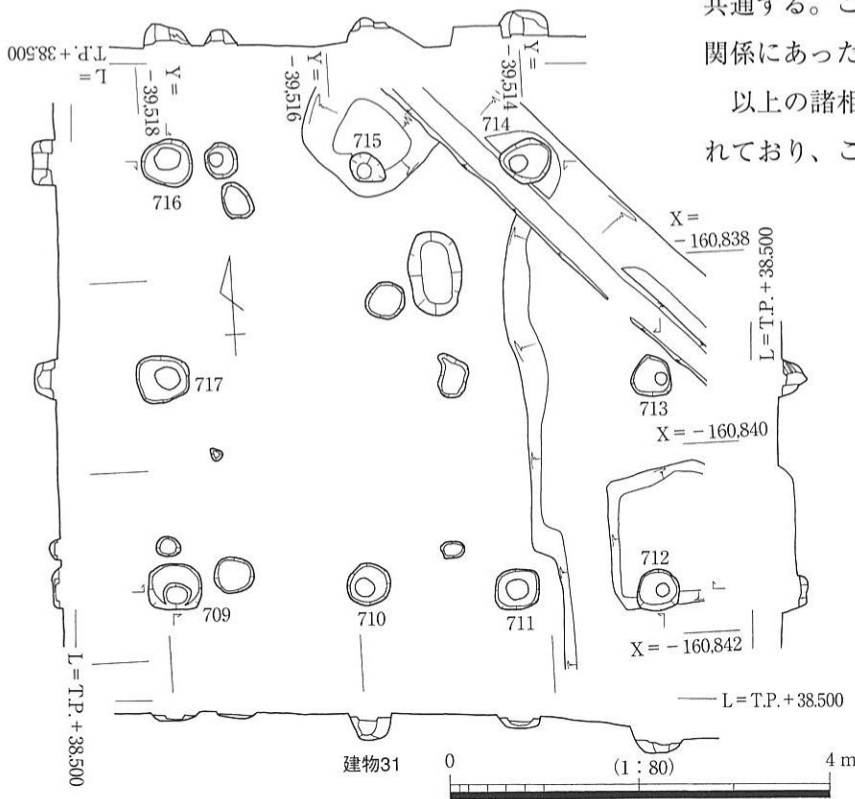


図60 3 E トレンチ 建物30・31平・断面図

建物31 (図60・75 図版27. 47
- 1・2 付図3)

トレンチ北部の北東側で検出した南北棟の掘立柱建物で、北東隅柱は調査区外のため確認できない。

規模は、梁間2間(西4.6m、東不明)、桁行3間(南5.1m、北不明)で、面積は、約24㎡(7坪)程度となろう。建物の主軸はN-1°-Eでほぼ真北となる。

柱間は確認できる範囲では、梁間2.3m、両桁は西から2.0m、1.6mで、南側は1.5mが加わる。

掘方の形状は隅丸方形から不整円形を呈し、断面は基本的には隅丸の台形を呈するが、遺存状況が非常に悪く確定的ではない。

埋め土は黒味が強い褐色系の粘質土と黄灰色系の粘質土が混じり合った土層で、建物24や建物28に酷似する。1基を除いてそのほぼ中央に0.2m強の柱痕を確認した。

出土遺物がないため時期決定の根拠に乏しいが、平面規格の類似性や主軸の方向、埋め土の共通性から、上記の建物24や建物28とほぼ同時期のものと考えたい。

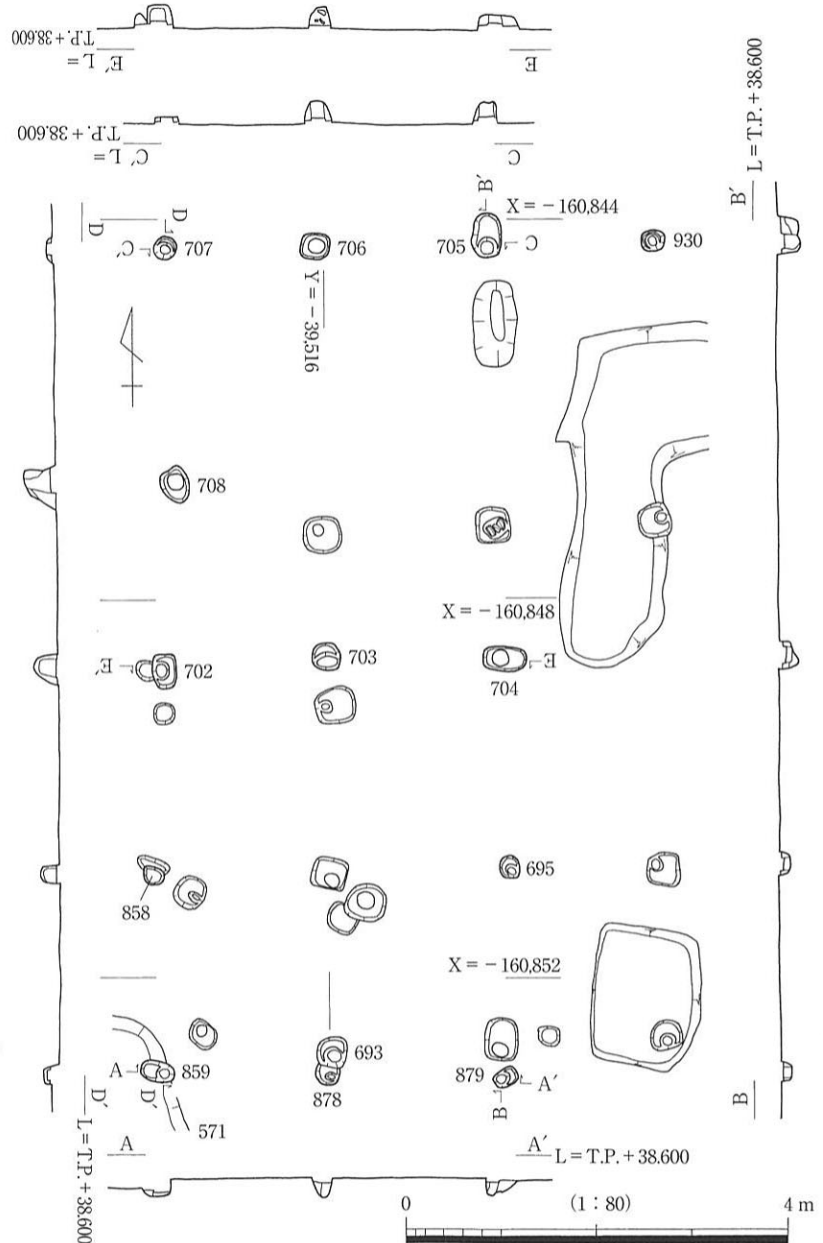


図61 3 E トレンチ 建物32平・断面図

建物32 (図61 図版27. 48- 1、55- 4 付図3)

南北棟の建物で、主軸はN-0.5°-Wを示す。規模は梁間2間(北3.4m、南3.5m)、桁行東3間、西4間(西8.7m、東8.8m)で、床面積は約30.2㎡(9.1坪)を測る。柱間は梁の北が1.7m等間、南が1.75m等間となり、桁行は東が北より4.4m、2.2m、2.2m、西が同じく2.5m、1.9m、2.2m、2.1mとなる。掘方の形状は小型の隅丸方形を基本とし、埋め土は灰褐色系の砂質土で、大部分のものに0.1m程度の柱痕を認めた。また、南西側隅柱は土坑571の埋土上面から確認され、南側棟持柱は建物33の柱穴693と重複関係にあり後者が新しい。なお、東側柱列の北から2基目の柱穴がなく柱間が4.4mにも達することから耐荷性に支障があると思われるが、建物の中央に間仕切りとみられる柱穴703が存在すること、その北側の柱間を1.9mと短かくすることで対処したとも考えられる。

遺物には柱穴702掘方から出土した図75-14の土師器の杯と、柱穴703柱痕から出土した図74-2の丸瓦片がある。土師器が平安時代前半代のものと考えられるため、該期の建物であるとみなされる。

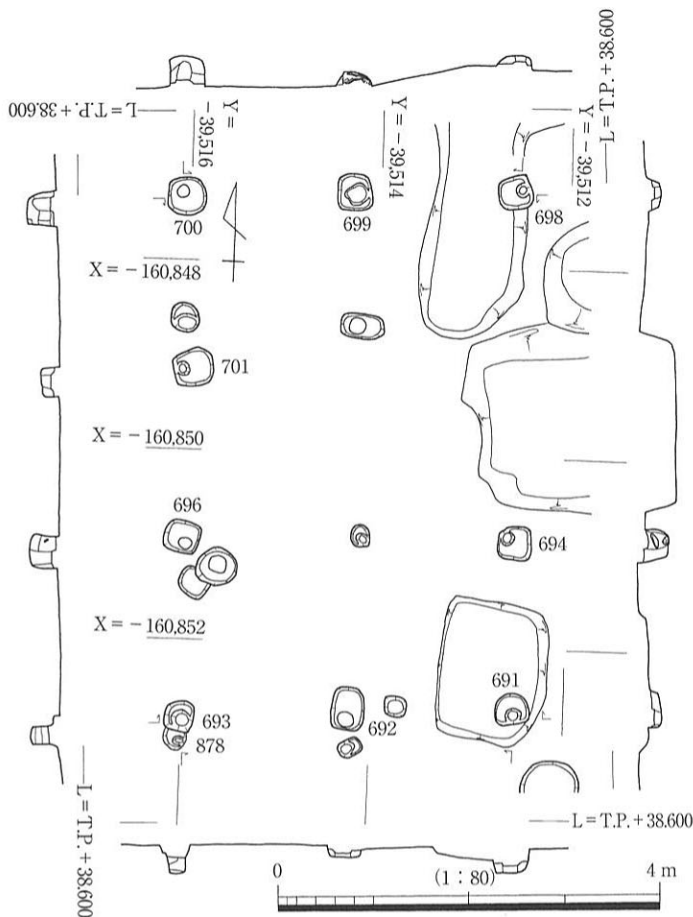


図62 3Eトレンチ 建物33平・断面図

埋め土は灰褐色系の土層で、柱穴の多くにはそれよりやや明るく、シルト質から粘質土に置き変わった直径0.15m前後を測る柱痕が確認できた。

なお、南西側隅柱は建物32の柱穴878と重複関係にあり、その前後関係からこの建物が後に建てられたものであることを知ることができた。

また、北西隅柱からは、柱が腐朽した部分に土師器の高杯脚部が図版55-3のような状態で出土し、さらに、北側棟持柱では、図版56-1・2のように柱を抜き取った後、平瓦片をまとめて収めている状況を確認することができ、これを復原した結果、完形に近い2個体分の平瓦となった。

出土遺物には図73-8・11の平瓦、図75-10に示す高台付の土師器の杯、同図23の土師器高杯の脚部、同図25の甕がある。これらのうち、図73-8・11の平瓦と図75-10と25の土師器は、先述の北側棟持柱である柱穴699からの出土で、23は北西隅柱となる柱穴700より得られたものである。

これらの土器については高杯脚柱部外面に明瞭な面取りが施されること、杯高台部の形状や貼り付けられる位置、甕の形態などからみて、平安時代前葉の9世紀末葉以前に位置づけられよう。

なお、建物の平面的位置関係に注目した場合、この建物の北梁柱列とその南の柱列が、西に3.4m離れた建物29の南側から北へ1筋目の桁柱列と南桁柱列に並列していることに気付かされる。

さらに、建物の主軸が同じくすることや、柱間の間隔に1.8mから1.9m尺が多用されていること、そして、掘方の平・断面の形状やその掘削深度など、数多くの共通点を指摘できる。以上の事実から、双方の建物が計画的に配置されていたことを想定することは難くない。

遺物の指し示す時期には微妙な時期差が見受けられるが、上記の関係をとらまえたならば、その共時性を否定する根拠はもはや無に等しいといわざるを得ない状況である。

建物33 (図62・73・75 図版27. 48-2、55-3、56-1・2 付図3)

トレンチ北部の東端で検出された南北棟の掘立柱建物である。

規模は、梁間が2間(3.5m)、桁行が3間(5.6m)を測り、床面積は、14.0㎡(約4.2坪)となる。主軸は、N-2°-Wとやや西に偏り、現在の磁北に近似する。

なお、桁行東側柱列の北から2基目の柱穴は、調査着手直前まで存在していた工場の基礎によって攪乱を被り確認できなかった。

柱間は、梁間が南北双方1.75mの等間で、桁行は、西側が北側方向より1.9m、1.8m、1.9mで、東側は、南より1間が1.9mとなり、そこから北部は先述の工場建設にともなう攪乱により柱穴が滅失してしまい、計測不可能となっている。

柱掘方は大多数が隅丸方形を呈し、断面形状は矩形のものがほとんどであった。

建物34 (図63 図版27. 49-1 付図3)

北側トレンチの中央よりやや南で検出された南北棟の掘立柱建物である。

主軸は $N-2^{\circ}-E$ と、ほぼ真北方向を示している。

規模は、梁間2間(3.4m)、桁行4間(東側8.8m、西側8.7m)となり、床面積は、約29.8 m^2 (9.0坪)を測る。

また、西側1.1m離れた位置には、一回り小型の柱穴3間分が南端を揃えて並列していることから、縁あるいは庇が設置されていたものとみられ、これを含めた場合の総床面積は約38.1 m^2 (11.5坪)を測ることとなる。

柱間は、南北両梁が1.7m等間、桁行は、東側が、北側から1.6m、1.6m、1.8m、1.6m、2.2mとなり、西側が、同じ方向より、1.6m、1.6m、1.7m、1.5m、2.3mを測り、他と比較して桁行南側1間分のみ0.5m程度柱間が広がっている。

なお、南側桁列2列目中央には柱穴676が柱筋を揃えて位置しており、これが間仕切りのための柱穴であった可能性が高い。先述のようにここから南側の桁行のみ柱間が広がっていることとも兼ね合わせて考えると、その蓋然性がより高くなる。

柱穴の平面形は隅丸方形を主体とするが、梁の北東側2基のみは不整形円形を呈し、他と比較して規模も大きい。断面形態は削平が激しく明確ではないが、矩形から皿形を呈しているようである。埋め土は灰褐色系の砂質を帯びた土層で、その約半数には直径0.15mから0.2mを測る柱根が確認できた。

出土遺物がないため時期を確定することは困難である。しかし、西側柱列の北端が建物36に付随する柵列の北から2番目の柱穴943と重複し、その前後関係より建物36柵列の後にこの建物が建築されていることが確認できる。柵列を通じての間接的な順序ではあるが、少なくとも建物36廃絶後に設けられた可能性が高いとみなされよう。なお、平面形態では建物32とほぼ相似形をなし、かつ、位置は異なるが双方とも間仕切りを設けていることから、両者に関連性があるものとみなしておきたい。

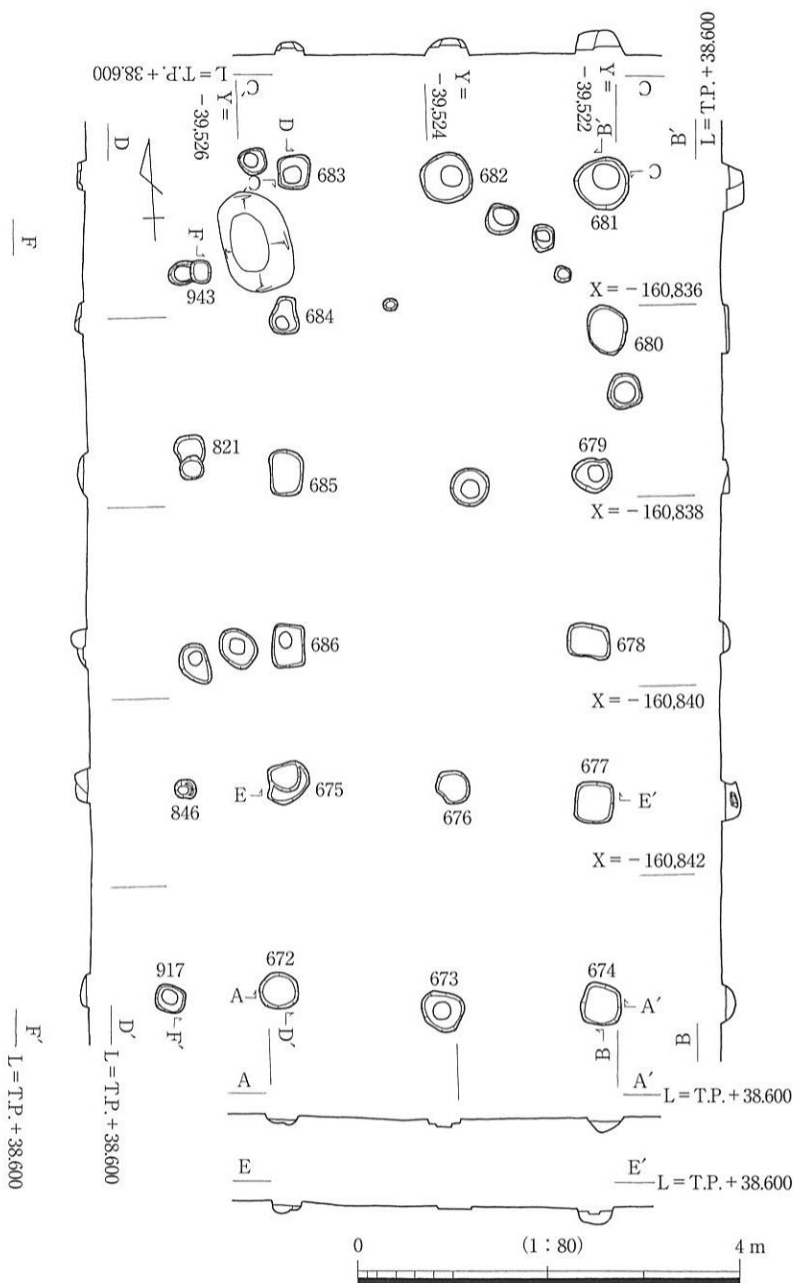


図63 3 E トレンチ 建物34平・断面図

建物35 (図64 図版27. 49-2、85-7・8、86-1 付図3)

北部トレンチの中央よりやや南の位置で検出した東西棟の掘立柱建物で、主軸はN-32°-Wと西に偏っている。

西偏する主軸の掘立柱建物としては、調査区全体内で最も東よりに位置している。規模は、梁間2間(4.3m)、桁行4間(南側8.8m、北側8.7m)である。

床面積は、約38.1㎡(11.5坪)を測る。この数値は、西偏する主軸をもつ建物群の身舎だけを比較した場合、建物19の35.8㎡を凌駕して最も広いものである。

柱間は、梁間が双方とも北側から2.1mと2.2m、桁行は、北側が東より1.9m、2.7m、2.3m、1.9mで、南側が、1.9m、3.0m、2.1m、1.9mを測り、両桁外側の柱間のみが1.9mに統一され、中央2間分の柱間が広い構造となる。

また、建物内部には柱穴847と柱穴891が、ちょうど長軸線上に並ぶ位置関係となり、特に前者については西桁2列目柱の中央に位置していることから、これも建物35に付随する何らかの施設の一部を構成するものであった可能性が考えられる。

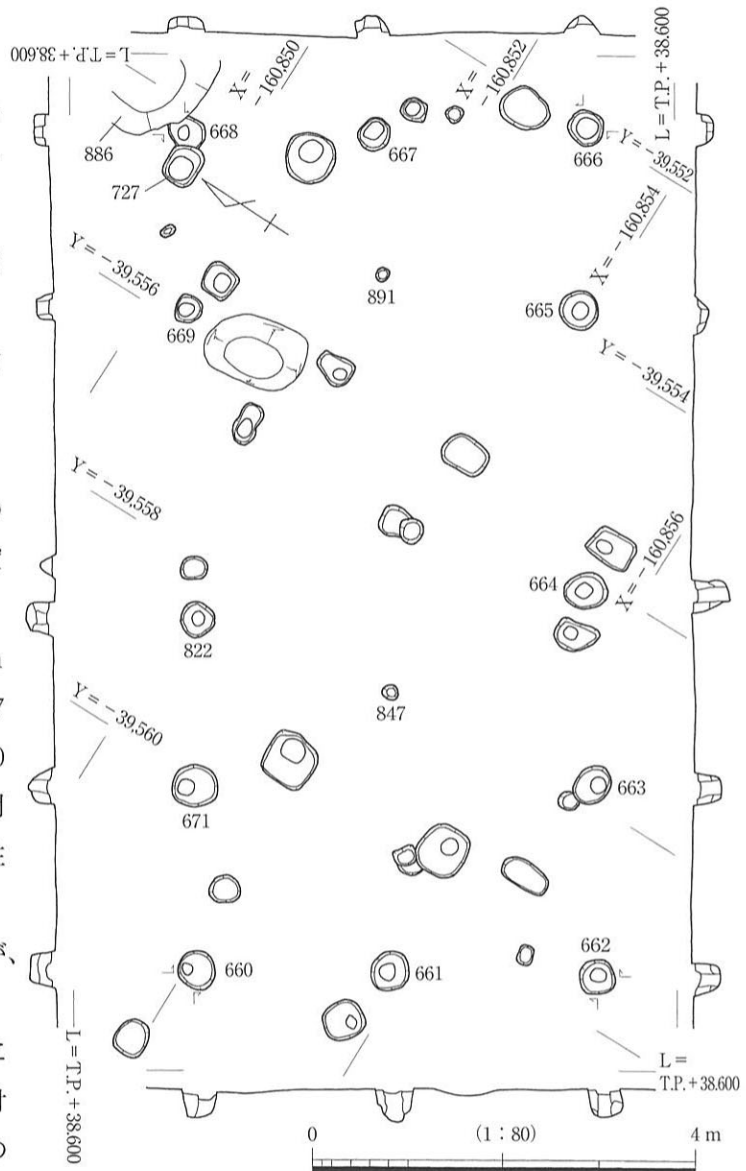


図64 3Eトレンチ 建物35平・断面図

柱穴の平面形態はすべて不整円形を呈し、その断面形態は「U」字形となるものがほとんどとなる。

埋め土は粘性を帯びた黒味の強い褐色系の粘質土を主体とし、これにわずかながら基盤層に由来する黄灰色系の粘質土や砂質土を交えている状態であった。

そして、そのすべてにおいて直径0.15mから0.2m程度の柱根が確認され、それらは図版85-7・8や図版86-1に示すような灰褐色系の砂質土やシルトに置き変わっている状態であった。

また、北東隅柱の掘方の一部が建物29の柱穴727掘方と土坑886の掘削によって一部失われていることから、これらの遺構の中では一番古い段階のものであることが判明した。

建物の時期については、柱穴内からの出土遺物がなかったため不明であるといわざるを得ない。しかし、遺構の重複関係から平安時代前半代以前の遺構であることは確実である。

そして、主軸が大きく西に偏っていることや、埋め土の特徴などに2Eトレンチで多数検出された飛鳥時代の掘立柱建物群と共通する部分が多いことも事実であり、これらを根拠とすることが許されるならば、不確定要素を多分に残すものではあるが、2Eトレンチの諸例と同じく飛鳥時代の前半代に帰属する建物となる可能性が高いといえる。

建物36 (図65. 75-19 図版27. 50-1・2、56-3・4、86-2・3 付図3)

北側トレンチの中央部より西側の地点で検出された南北棟の掘立柱建物である。

主軸はN-0.5°-Eを示し、ほぼ真北に向けられている。

建物の規模は、梁間2間(4.0m)、桁行3間(5.8m)を測り、面積は、23.2㎡(約7坪)を測る。

柱間は、梁間が東西双方とも2.0m等間となり、桁行も双方とも北側から1.9m、2.0m、1.9mと揃えられている。

また、2.7m隔てた東側にはわずかながら北側にずれるものの、桁筋に揃えて埋め土を同じくする小型の柱穴が並列しており、その柱間が桁行と同様の寸法となっていることから、この建物にともなう柵列とみなされる。

なお、この施設は建物との距離から考えて庇や縁ではなく、東側からの遮蔽を目的とした塀などであったと推察される。

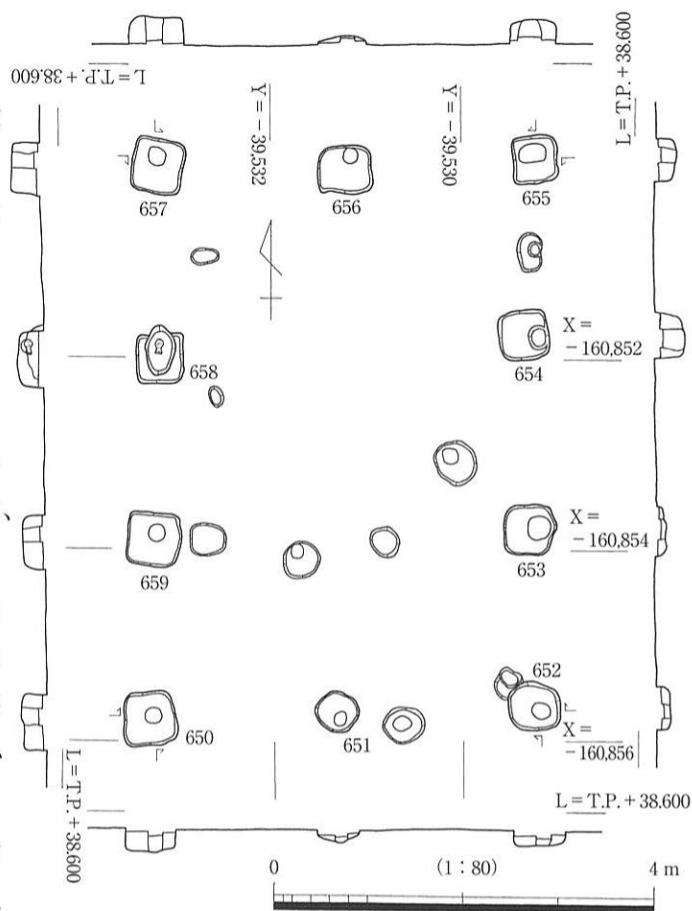


図65 3 E トレンチ 建物36平・断面図

柱穴の掘方は、南側棟持柱が不整円形となることを除いてすべて隅丸方形を呈している。また、各辺は、ほぼ軸線に則る形で掘削されており、柱間と同様に丁寧な作業が行われた状況が看取される。

断面形態は削平のため遺存状態が良くないが、隅丸の矩形を呈するものが多い傾向にある。なお、南北双方の棟持柱に関しては、極めて浅い皿状となっていることで他の柱穴と相違をみせている。

埋め土には、黒味の強い褐色系の土層に黄灰色系の粘質土や砂質土を交えた土層が用いられ、柱穴を埋め戻す際に当時の表土と掘り上げた基盤層をそのまま埋め戻した状況を止めていた。

また、掘方埋土内には西側桁行の北から2基目の柱穴を除いて、直径0.2m弱の明るい灰褐色系のシルトから粘質土に置換された柱痕が観察された。

柱痕の確認できなかった西側桁行の北から2基目の柱穴には、南北に長い楕円形の柱抜き取り痕が観察され、解体時に柱を南北方向に揺り動かしながら引き抜いた状況を推定できる。そして、この作業が終了した後は、図版56-3や4また、86-3に示すように口縁部を南に向けた完形の瓶子を納めて地鎮を行っていた。取り上げ後、内部の土を注意深く洗浄したが埋納物は確認できなかった。

この瓶子は糸切底であることから9世紀代に下るものではあるが、形態からみてその中でも古い様相を止めている。従ってこの建物の廃絶時期も平安時代の初頭であったと考えられる。

また、この建物と平面形や柱数、柱間寸法、掘方の形状や埋土、さらに主軸までをもほとんど共通させる建物を4棟は抽出できる。すなわち建物24・28・31、そしてこの建物36である。これらは諸々の特徴が共通するばかりではなく、建物28と建物31の間に位置するピット802・803を結んだ線を中軸として左右対称の建物配置となっていることから、極めて高い計画性のもとで造営されたと考えられる。

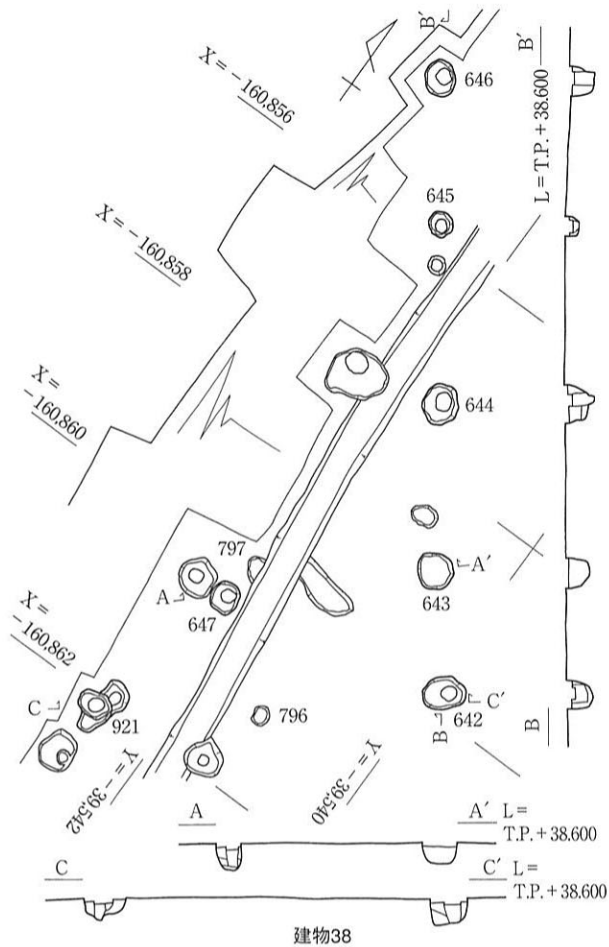


図66 3 E トレンチ 建物37・38平・断面図

建物37 (図66・75 図版27. 51-1 付図3)

トレンチ北部西端で検出された南北棟の掘立柱建物である。主軸は $N-35^{\circ}-W$ を示す。

北側梁間には棟持柱に相当する柱穴が存在せず、変則的な建物構造となっている。

規模は、梁間北側が1間(3.6m)、西側が2間(3.6m)となり、桁行は3間(東側4.4m、西側4.2m)で、面積は約 15.5m^2 (4.7坪)を測る。

柱間寸法は、北側の梁間が先述のように3.6m、南側のそれが1.8m等間、桁行は東側が北から1.7mと2.7mで、西側が同方向より1.5mと2.7mとなる。なお、北東側隅柱は土坑570の堆積土除去後に検出されたため、この土坑より古い段階の建物であると理解される。掘方の形状は不整形を呈し、埋め土は粘質を帯びた黒味の強い褐色系の土層であった。その中には直径0.15m前後の柱痕が明灰色系の土層となって遺存している状況をすべての柱穴で確認した。遺物には北西隅柱の柱穴640掘方から出土した図75-21の須恵器の口縁部がある。その特徴から7世紀代に属するものと考えられ、この遺物や埋め土の特徴、建物の主軸方向、また、土坑との重複関係から、飛鳥時代の建物と考えられる。

建物38 (図66 図版27. 51-2、54-1、86-4・5 付図3)

北部トレンチ西端で検出された掘立柱建物で、主軸は $N-36^{\circ}-W$ を示す。

北東側が調査区外にのびるため全容は不明であるが、東西2間(3.8m)以上、南北4間(5.5m)以上の規模となる。既往の検出例からみて東西が梁間に、南北が桁行に相当する蓋然性が高い。その場合、梁間の柱間寸法は1.8m等間となり、東側桁の南端柱穴は縁か庇となる可能性が高い。

出土遺物がないため時期は確定できないが、掘方の形状や、埋め土の様相そして、主軸の方向などから飛鳥時代の建物と考えられる。

建物39 (図67 図版27. 52-1、86-6、87-6 付図3)

3 Eトレンチでは南西隅で北東側隅柱1基を確認したのみである。

他のすべての柱穴は6 Eトレンチで検出され、はじめてその全容が把握できたものであるが、遺構番号との関係上、この項で報告する。

建物は南北に主軸をもち、その角度は $N-30^{\circ}-W$ と西に偏っている。

規模は北側梁間3間(3.5m)、南側のそれが2間(3.9m)で、桁行は双方とも3間(5.0m)を測り、床面積は 18.5m^2 (5.6坪)となる。

柱間は、梁北側が東より0.9m、1.7m、0.9mで、南側が同じ方向より、2.1m、1.8mである。桁行は、東側が北より1.8m、1.5m、1.7mで、西側が北側から1.8m、1.8m、1.4mを測る。

梁間の最長と最短では0.3mの差があり、これに影響されて平面形はいびつな台形様を呈している。

また、柱間寸法についてもおのおのに差異が大きく最大で0.4mを測るため、全体を通して均衡性に欠ける建物との印象を与えるものである。

掘方の形状は、長楕円形から不整円形を呈しており不揃いである。断面形態はおのおのに差異が認められるが、逆台形から「U」字形を基本として掘削しているようである。しかし、削平を被っている度合いが高いと考えられるため、不確定要素を多分に残している。

埋め土は、黒味が強くやや粘性を帯びた褐色系の土層と、小礫混じりの黄褐色や黄灰色系の粘質土とが混じり合った土層からなり、前者は旧地表面に堆積した表土層、後者は柱穴掘削にともなって掘り上げられた基盤層が埋め戻されている状況を表しているものと考えられる。

また、柱を設置する状況を端的に表すものとして、図版86-6と図版87-7を示しておく。特に後者は柱を埋設するに際して、事前に前掲の2種類の土層を互層状に突き固めながら充填してゆき、その後柱を設置していった当時の一工法を如実に示すものであった。

なお、掘方内の多くには図版86や87に示すように、0.15m前後を測る柱痕が確認された。これらには量や質的な多寡はあるものの、いずれも灰色味の強い粘質土やシルトからなる土層であった。

これは柱材が腐朽していく過程において、その隙間に地下水の作用により徐々にこのような土層が堆積したり、柱本体がこのような土層に置換されながら生成されていったものと考えられる。

なお、いずれの柱穴内からも遺物は出土しておらず、ここから時期を推定する手掛かりは得られなかった。しかし、建物の主軸が西偏していること、上記のような埋め土の様相、類似する平面形態や柱間隔をもつものに飛鳥時代のものが多いことなどから、この建物も該期のものとして大過ないと考えておきたい。なお、この建物のように両梁間の柱数が異なるものに建物19がある。この建物にも遺物はとまっていないが、同様の参考事例として書き止めておきたい。

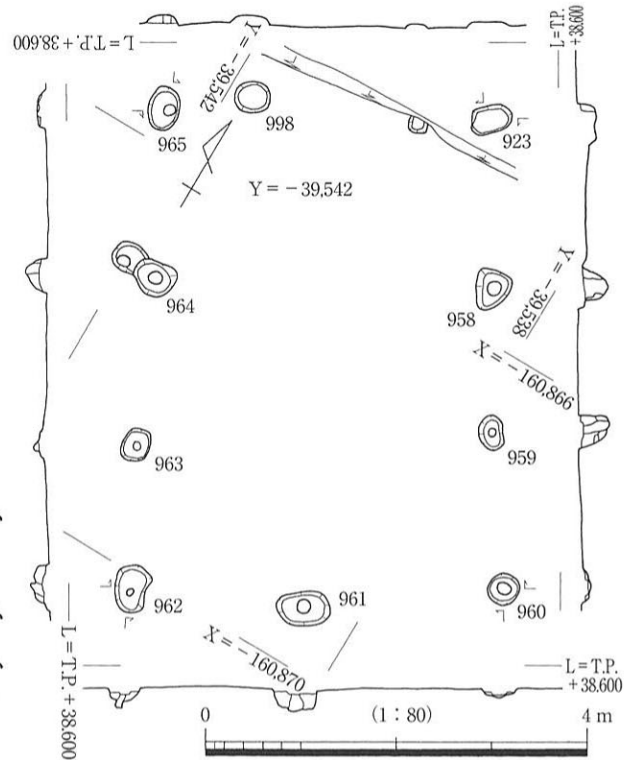


図67 3 Eトレンチ 建物39平・断面図

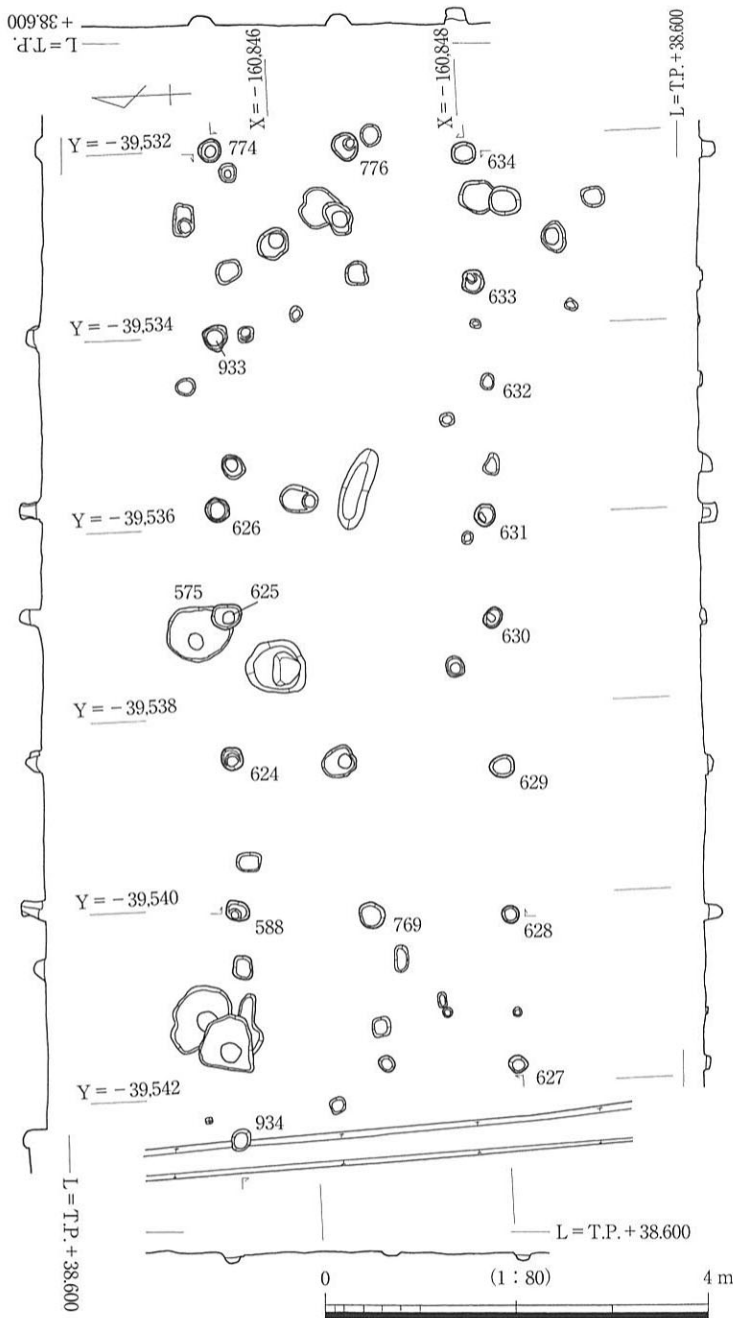


図68 3 E トレンチ 建物40平・断面図

建物40 (図68・73 図版27 付図3)

北側トレンチの中央部から北西側によった位置で確認した東西棟の掘立柱建物である。他の掘立柱建物と比較して掘方が小規模であることや、掘方が浅いことから、現地調査段階では南側桁筋のみを南北方向の柵列と認識していた。

しかし、航空測量図校正段階で北側に平行して並ぶ柱穴を確認すると同時に、それらが対をなして並んでいると認識できたこと、また、梁側に棟持柱に相当させることのできる柱穴を抽出できたことにより、掘立柱建物と解釈するに至った。従って写真類などに不十分な点があることは否めない。

建物の規模は、梁間が2間（東側2.7m、西側2.7m）、北側桁行5間（8.1m）、南側桁行6間（8.1m）で、床面積は約22.7㎡（6.8坪）を測る。

桁の柱数が南北で異なるという変則的な柱配置となっていたため、現地での混乱を招いたようにも考えられる。

主軸は、N-0.5°-Eを示し、やや東傾して磁北に近い方向となっている。

柱間は、東側の梁間が北から1.3m、1.4m、西側のそれが同方向より1.4m等間、北側の桁行は東から2.0m、1.8m、1.2m、1.5m、1.6mとなり、南側では同じ方向より、1.4m、1.1m、1.4m、

1.1m、1.6m、1.5mと双方で格差が大きい。なお、桁筋を西に延長すると北に柱穴934、南に柱穴627がそれぞれ2.4mと1.6mの間隔で並んでいる。これを桁の延長部とみなし、西側棟持柱とした柱穴769を間仕切りと考えるならば、建物はさらに西に広がる狭長な建物となる可能性がある。

掘方は直径0.15mから0.25m前後を測り、平面形は不整円形を主体とする。埋め土は灰褐色系の砂質土で、その中には直径0.1m程度の柱痕が観察されるものが多い。この中には柱穴630のように、根石の代わりに平瓦が入れられるものも認められた。出土遺物は上記の瓦1点のみで、時期的な問題については不確定要素が多い。しかし、柱穴625が建物24の柱穴575を、柱穴933が建物46の柱穴を破壊しており、少なくともこれらの時期である平安時代初頭よりは新しい。なお、柱通りが悪く柱痕も貧弱であることから、住居と考えるよりは、作業小屋程度の比較的簡易な建物であったと解釈しておきたい。

建物41 (図69 図版27. 52-2 付図3)

6 Eトレンチ北部で検出したが、遺構番号の関係上、ここで報告する。規模は各辺とも1間で、柱間はすべて1.7mを測る。

方位は $N-26^{\circ}-W$ を示す。

掘方はほぼ円形を呈し、断面は隅丸の矩形となる。すべての柱穴で、直径0.15m前後の柱痕を確認した。遺物はないが、埋め土の特徴や主軸の方向から飛鳥時代の建物とみられる。

建物42 (図69 図版53-1 付図3)

8 Eトレンチと近畿自動車道側調査区に跨がって検出された。

既往の調査で2基の柱穴が検出されており、これを含めて考えると2間ずつの東西棟建物で南側に附属施設を設けるのか、柱穴1012を間仕切りとして、梁間2間、桁行3間とする二通りの考え方ができる。柱間は梁間1.8m等間、桁行は南から2.2mと2.4mを測り、柱間からいえば後者の可能性が高い。方向は $N-30^{\circ}-W$ で、飛鳥時代のものと共通するが、遺物はない。

建物43 (図70 図版27. 53-2 付図3)

トレンチ北部の南西側で検出した掘立柱建物である。南北2間分以上の柱穴と、西にのびる柱列を1間分以上確認したのみで、その他の大部分は既設灌漑水路の下となるため詳細は不明である。

柱間は東西1.5m、南北は南から1.2m、1.9mで、柱間からの類推では、 $N-37^{\circ}-W$ の南北棟建物となる可能性が高い。なお、南端隅柱に相当する柱穴の西にはそれに対応する柱穴がなく、そこから北1列目の西にはこれと組み合わせる位置に柱穴があることから、これを南側桁行とみなし南端の柱穴は諸例の如く建物南側に付随する縁か庇のような施設用のものであったとの解釈を行っておきたい。

出土遺物がないため建物の時期は不明であるが、掘方の形状や埋土の様相については飛鳥時代のものと共通している。なお、直接的な重複関係にはないが、建物38と平面的に重なっている。

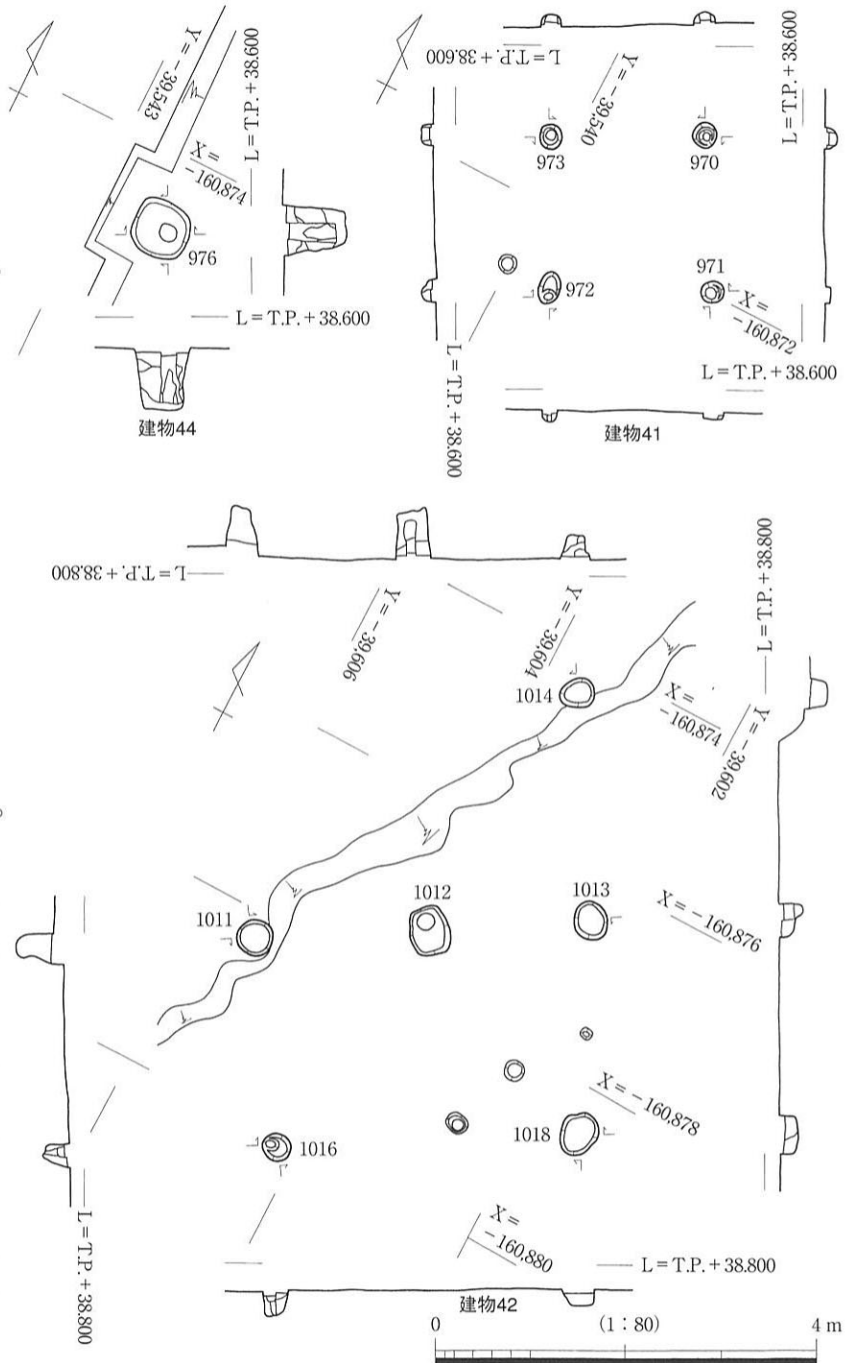
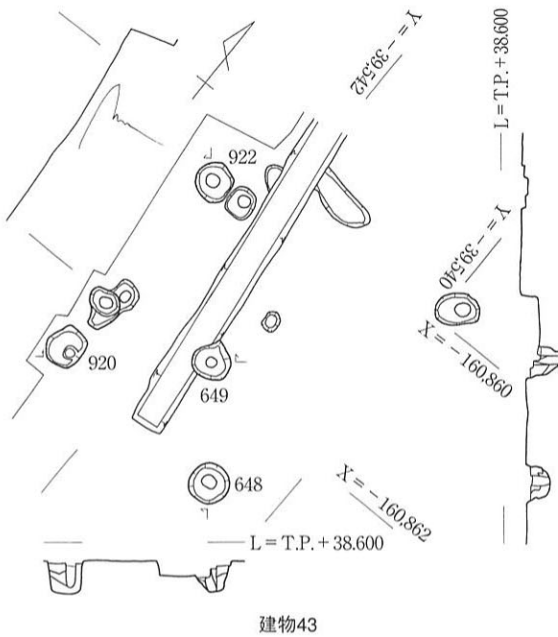


図69 3・6・8 Eトレンチ 建物41・42・44平・断面図



建物44 (図69 図版87-1 付図3)

6 E トレンチで検出したが、同前でここで報告する。実際に検出したのは南東隅柱に相当すると考えている柱穴1基のみで、他は既設灌漑用水路の下となる。

しかし、これが以下に述べるような際立った特徴をもつことから、敢えて単独の建物番号を付与した。

その特徴はまず柱穴の平面と断面にある。掘方の直径は0.6mを越え、検出された通常の建物より一回り大きい。深さは0.7mに達し、そのほぼ中央には図版87-1のような状態で通常より太い直径0.25mの柱痕が確認できる。さらに埋め土の様相が建物3や建物12に酷似する。重ねて3者ともに集落南端に占地している。以上の事実を包括的に解釈し、未知の総柱建物が存在する蓋然性が非常に高ものとみなした。なお、西偏方向での記録類作成に努め、向後に備えた。

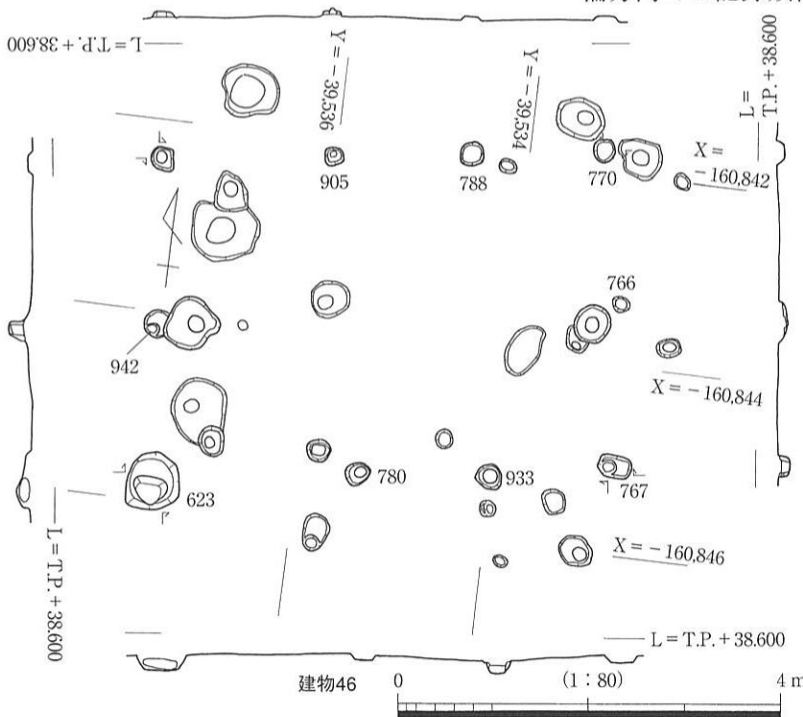


図70 3 E トレンチ 建物43・46平・断面図

建物46 (図70 図版27)

北側トレンチの中央から北西側で検出された掘立柱建物で、主軸はN-13°-Wを示している。

建物26南西側に重なっており、さらに、主軸の角度差が8度程度であったため、現地ではその存在をまったく認識していなかった。

規模は、桁行2間(東側3.3m前後、西側3.1m以上)で、梁間は3間(北側4.7m、南側4.5m以上)を測り、面積は15㎡(4.7坪)程度となる。

柱間寸法は梁間の東側が北より1.6m、1.3mで、西側が同方向より1.8mと1.3m以上となる。

桁行は北側が東より1.5m、1.4m、1.8mを測り、南側は同方向より1.3m前後、1.4m前後、1.8m以上となる。各寸法に推定値が含まれるのは、南桁の東西両隅柱が建物27の柱穴767と建物25の柱穴623によって壊されているためで、また、南東隅柱から西へ2基目の柱穴も、建物40の柱穴933掘方と重複して失われている。このように3棟の建物と重複し、その前後関係からそれらより先行して建築された建物であることが判明するが、出土遺物がないため、より以上の情報を得ることはできない。

また、柱穴は平面形が0.1mから0.2m未満で、柱痕の確認できないものも含まれていることから、使用された柱材も細いものであった可能性が高く、構造的には簡便な建物であったと推定される。

建物47 (図71 図版27. 54-2、付図3)

規模は、梁間が2間(約3.6m)、桁行が3間(4.5m)を測り、主軸はN-1°-Wを示す。

そして、床面積は16㎡(5坪)程度となる。

なお、西側梁柱列と両棟持柱は遺存するが、梁の東側柱列は後世の削平のため遺存状態が悪く、両棟持柱を中軸として折り返した地点に桁東側の北から2基目に相当する位置に柱穴863が確認できたことで、かろうじてその平面形態を知り得た。

柱間寸法は両梁間が1.8m等間とみられ、西側桁行は北から1.4m、1.5m、1.6mを測る。

掘方の平面形態は隅丸方形を基本とし、断面形態については削平が著しいため極めて浅い。

埋め土は灰褐色系砂質土を中心とし、その中には直径0.15m前後の柱痕が遺存するものが多い。

出土遺物がないため、時期は不明確であるが、建物46と規格が酷似することを指摘しておく。

建物48 (図71 図版27 付図3)

3Eトレンチ南端部と6Eトレンチ北端部の調査区境で検出した、東西棟の掘立柱建物である。

現地調査段階では、周辺で検出されたピットのうち、埋め土の特徴が類似するものを抽出してその組み合わせを検討していたが、建物と認識するまでには至らなかった。しかし、調査終了後に再度平面図の検討を重ね、埋め土などの情報を追加して照合した結果、北西隅柱と北側棟持柱を調査段階の側溝掘削などにより滅失させてしまった掘立柱建物と認識して個別の建物番号を付与した。

そのため、断面図などに単独方向しか記録できていないものができる結果となった。

建物の規模は、梁間2間(南側3.6m、北側不明)、桁行2間(東側3.9m、西側不明)で、床面積は約14㎡(4坪)を測る。主軸はN-40°-W

と大きく西に偏っている。柱間は、北側梁間が東より推定1.8mで以西不明、南側は同方向より1.8m等間となる。桁行は、東側が南より2.2mと1.9m、西側が同方向より2.2mで以北不明となる。掘方は不整円形を呈し、各隅柱のみは規模が大きいという特徴を有しており、埋め土は黒味を帯び粘質の高い褐色系の土層からなり、そのすべてにおいて柱痕を確認した。遺物がなく時期は不明であるが、飛鳥時代と共通する諸相をもつことから推察して、該期の建物となる可能性が高い。

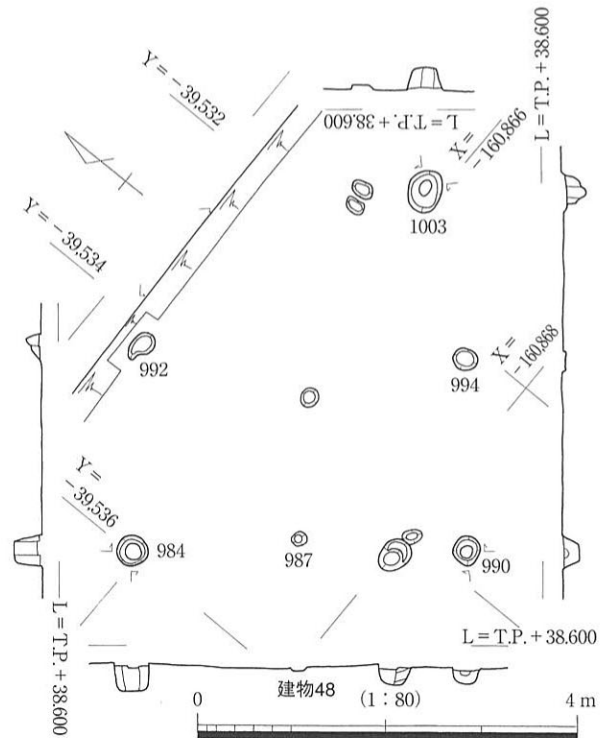
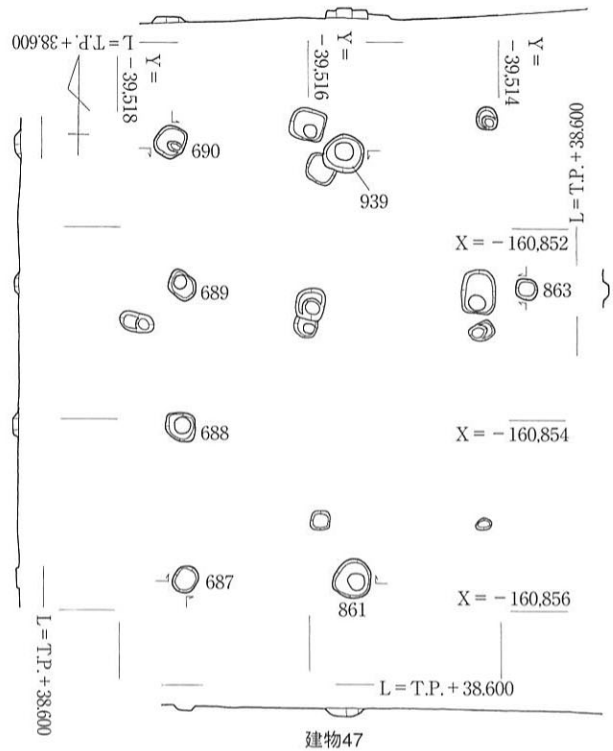


図71 3Eトレンチ 建物47・48平・断面図

遺構出土遺物 (図72~75 図版88~95)

土坑570 (図72-4~8)

5点の遺物を図化することができた。すべて土師器で、器種には4のような小皿様の口縁部、5や6に示す杯の口縁部破片、7や8に図化した甕の体部上半から口縁部にかけての破片がある。

遺物の特徴は、杯の外面に4や5のようにナデを基本とする調整法を用いるもの以外に、6のような指頭圧痕を明瞭に遺存させる調整法を用いるものが含まれることや、甕の頸部から口縁部にかけての屈曲部にゆるやかな段が形成されていること、また、口縁端面が面をなしていることなどである。

遺物はこれらの諸特徴をもつことから、9世紀後半代に位置づけられるものとみなされる。

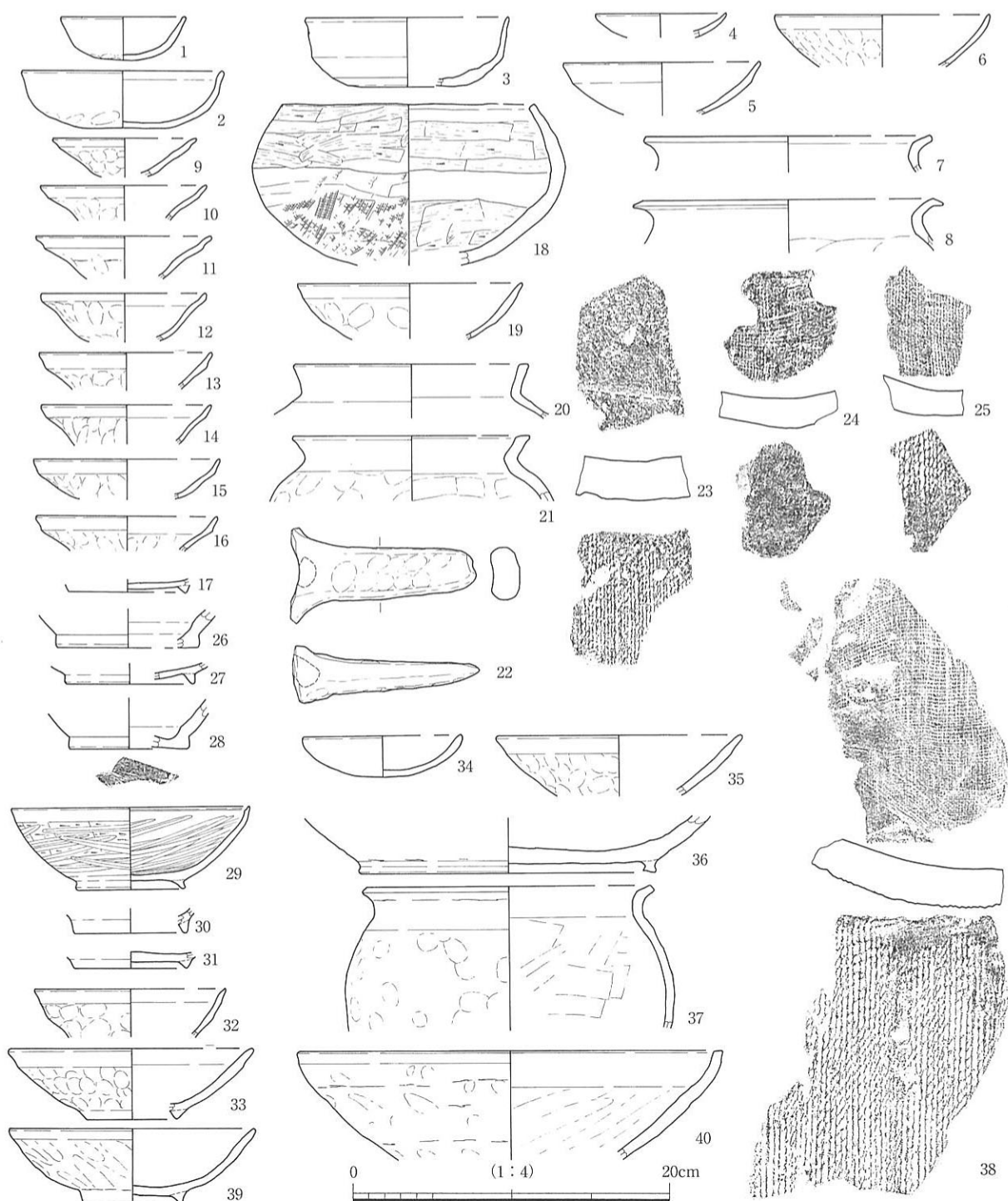


図72 3 E トレンチ 土坑出土遺物実測図

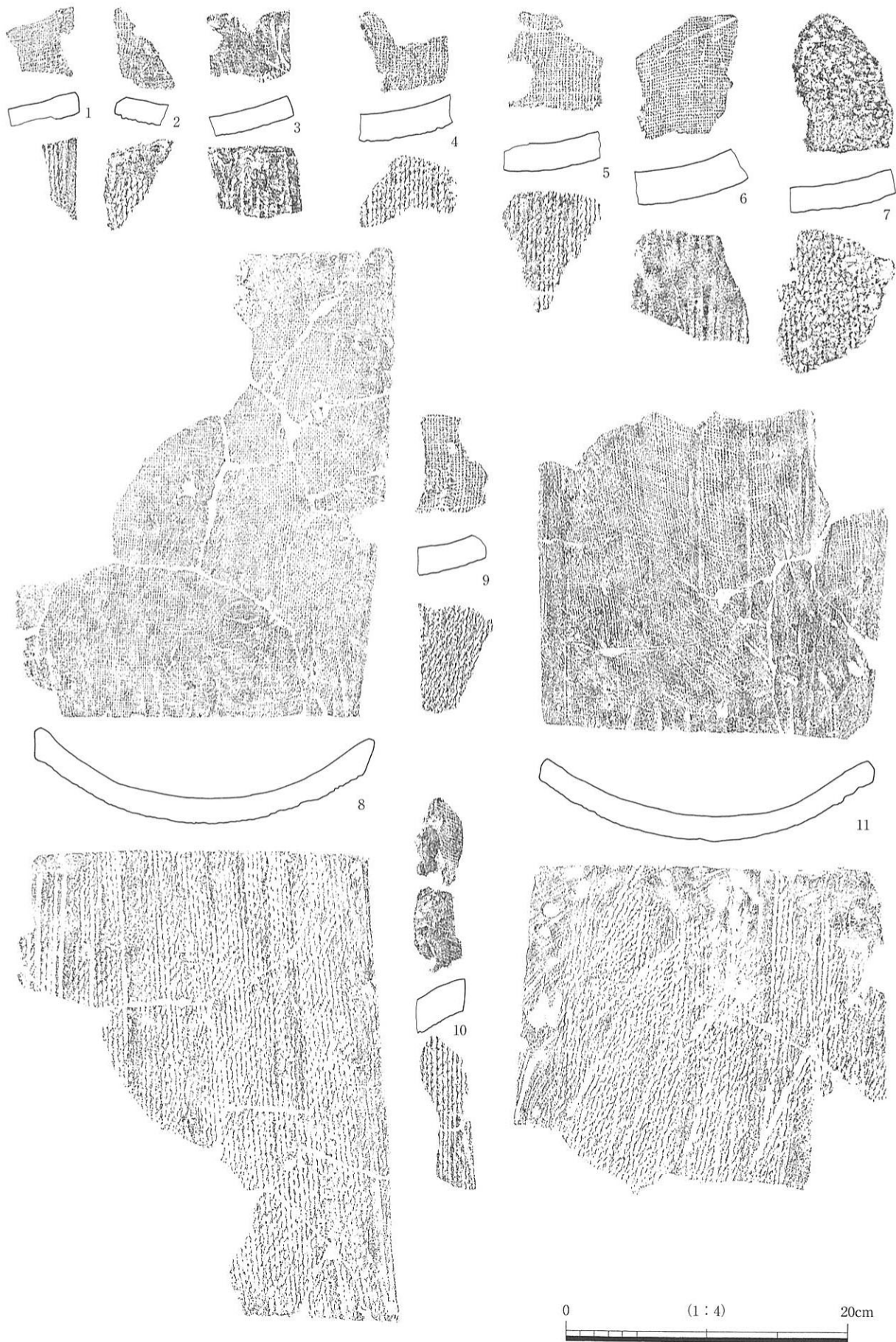


図73 3Eトレンチ 柱穴出土遺物実測図〔1〕

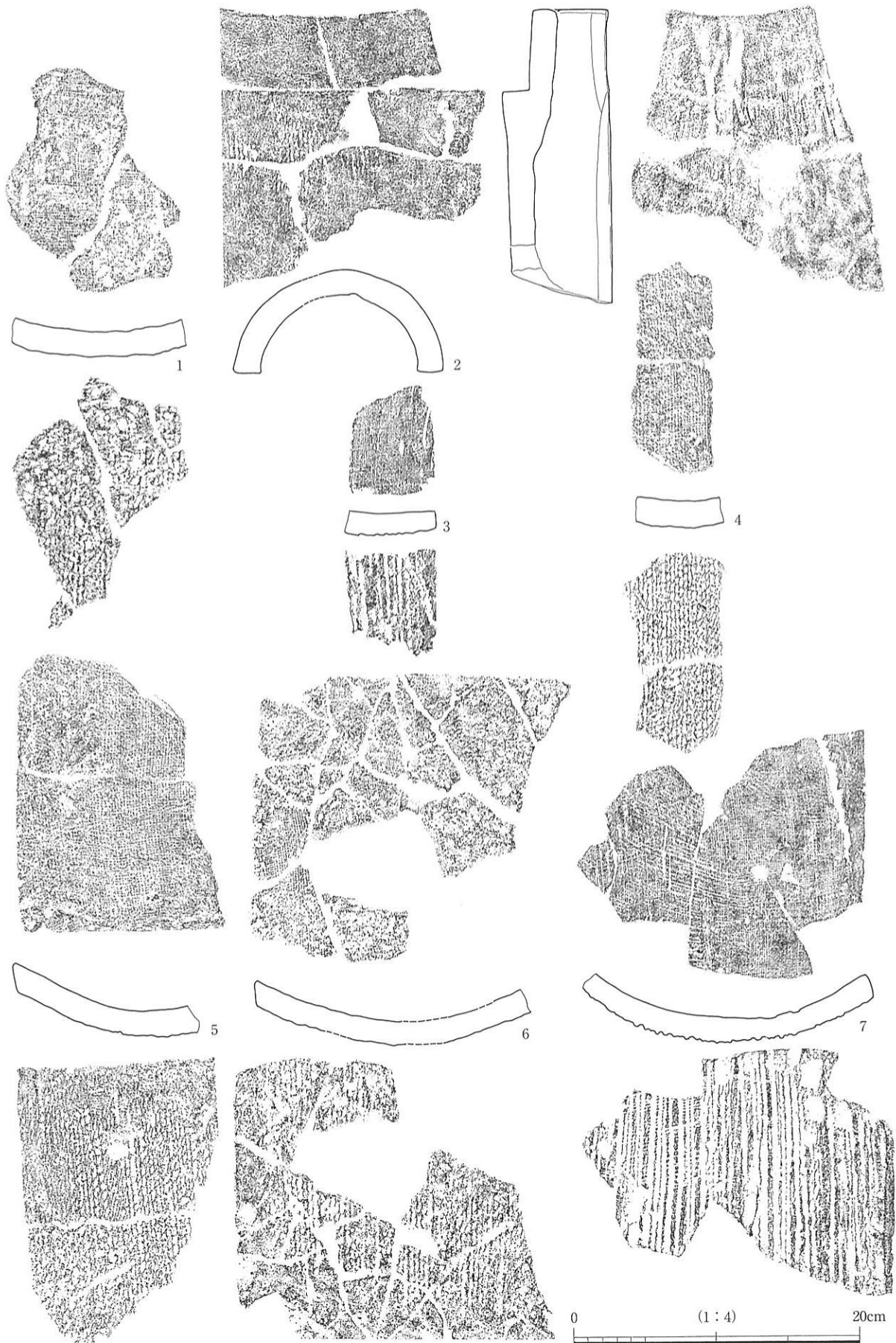


図74 3Eトレンチ 柱穴出土遺物実測図〔2〕

土坑571 (図72-1~3 図版91-5・9)

土師器2点、須恵器1点を図化することができた。土師器には図72-1のような小型の杯や、同図-2に図化した杯Cがあり、須恵器には同図-3の杯Gの身がある。このうち2の土師器は、器面剥離のため調整や暗文は不明瞭ながら、その形態や法量から飛鳥第Ⅲ期に位置づけられる。

土坑572 (図72-9~25)

須恵器、土師器、黒色土器A類、瓦片が出土した。須恵器は図72-18と26の2点で、このうち18は調整技法が非常に粗く、あたかも甕の体部下半を成形途上の段階で鉢として転作したかの如き態をなしている。26は鉢か壺の底部破片であるとみられる。なお、前者は形態や焼成からみて飛鳥時代の遺物とみられ、他の遺物と時期的な齟齬をきたしているため、混入品と考えられる。

土師器には図72-9から16や19の杯、同図-20と21の甕、22の把手がある。杯は形態に小異が認められるものの、外面に指頭圧痕が明瞭に観察される調整法となることで共通する。また、甕は直線的に広がる口縁部をもつことで時期的な特徴を表している。黒色土器は図72-17の1点で、内面のみが黒いA類の杯高台部破片である。瓦には図72-23から25に示す3点の破片がある。ともに平瓦の一部で、表面には布目圧痕が観察され、裏面の調整には縄目タタキが施される点において共通している。

これらの遺物は、須恵器の数が僅少であること、土師器の杯や甕の形態的特徴、A類の黒色土器に付された高台の大きさや形状からみて、10世前半代までの時期に属するものとみなされる。

土坑573 (図72-27~29 図版92-3)

須恵器1点と、黒色土器2点を図化できた。図72-27は両面が黒化処理されたB類の黒色土器碗である。同図-28は回転糸切り技法で切り離された須恵器の鉢あるいは壺の底部片である。29は全形の窺える黒色土器A類の碗で、両面にヘラミガキが施される。これらの遺物は黒色土器にAとB類双方がみられること、付される高台の形状や大きさ、調整技法などからみて10世紀後半代のもと考えられる。

土坑881 (図72-39・40 図版92-2)

2点の土師器を図化した。39は全形の窺える高台付の碗で、40は鉢の口縁部片である。双方とも外面にユビオサエによる調整が多用されることから、9世紀末から10世紀前葉の所産にかかるものであろう。

土坑885 (図72-32~38、73-10)

須恵器、土師器、瓦が出土した。須恵器には図72-36に示す高台付大型器種の底部片がある。その大きさなどから盤などの破片と考えられる。土師器には図72-32から35に図化した各種の杯や、同図-37の甕がある。これらには器面調整に指頭による押圧が盛んに用いられるが、口縁部が外反気味となる例がないことを特徴としている。瓦は図72-38と、図73-10の2点を図化した。前者は平瓦で、後者は丸瓦の細片である。これらの遺物は、土師器の杯にみられる特徴から9世紀末葉頃に位置づけられる。

建物24 (図73-3・4・9、74-1・6・7)

柱穴576から図73-3と図74-7、柱穴577から図73-9と図74-1と6、柱穴581から図73-4に示す瓦片が出土した。これらはいずれも掘方からのものである。破片のうち、図73-4は重複関係をもつ建物25の柱穴898掘方出土のものと、また、図74-7は隣り合う建物25の柱穴612掘方から出土した破片と接合した。これらはいずれも平瓦の破片で、表面に布目圧痕、裏面に縄目タタキが施されるものを主体としている。しかし、図73-3のように、裏面の隅に成形段階に使用された台の痕跡がみられることから一枚作の製品と判明するものや、図74-7の裏面にみられるような調整技法が用いられているものがあることから、総体としては平安時代初頭の8世紀末から9世紀初頭にまで下るものである。

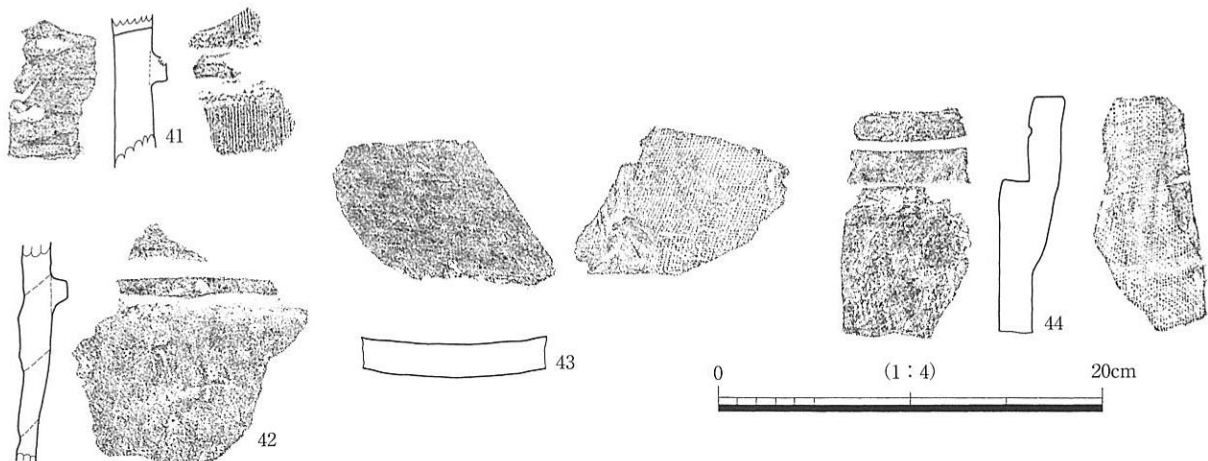
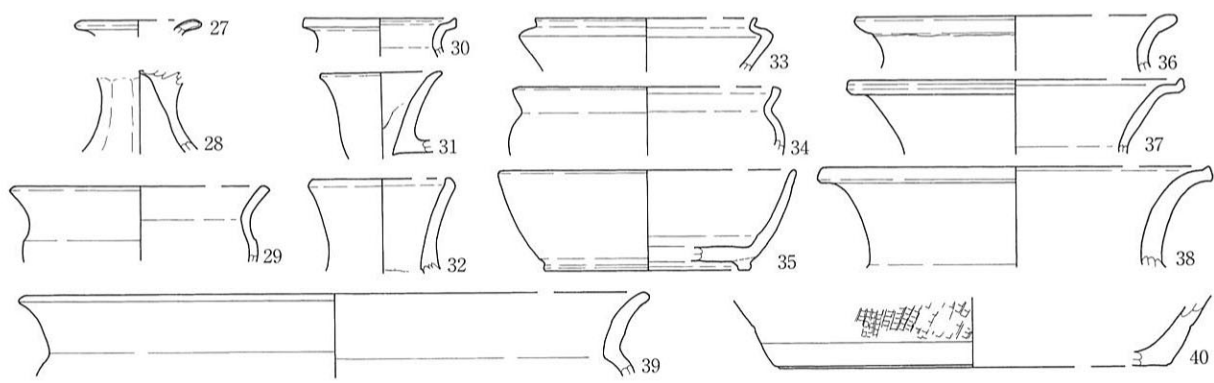
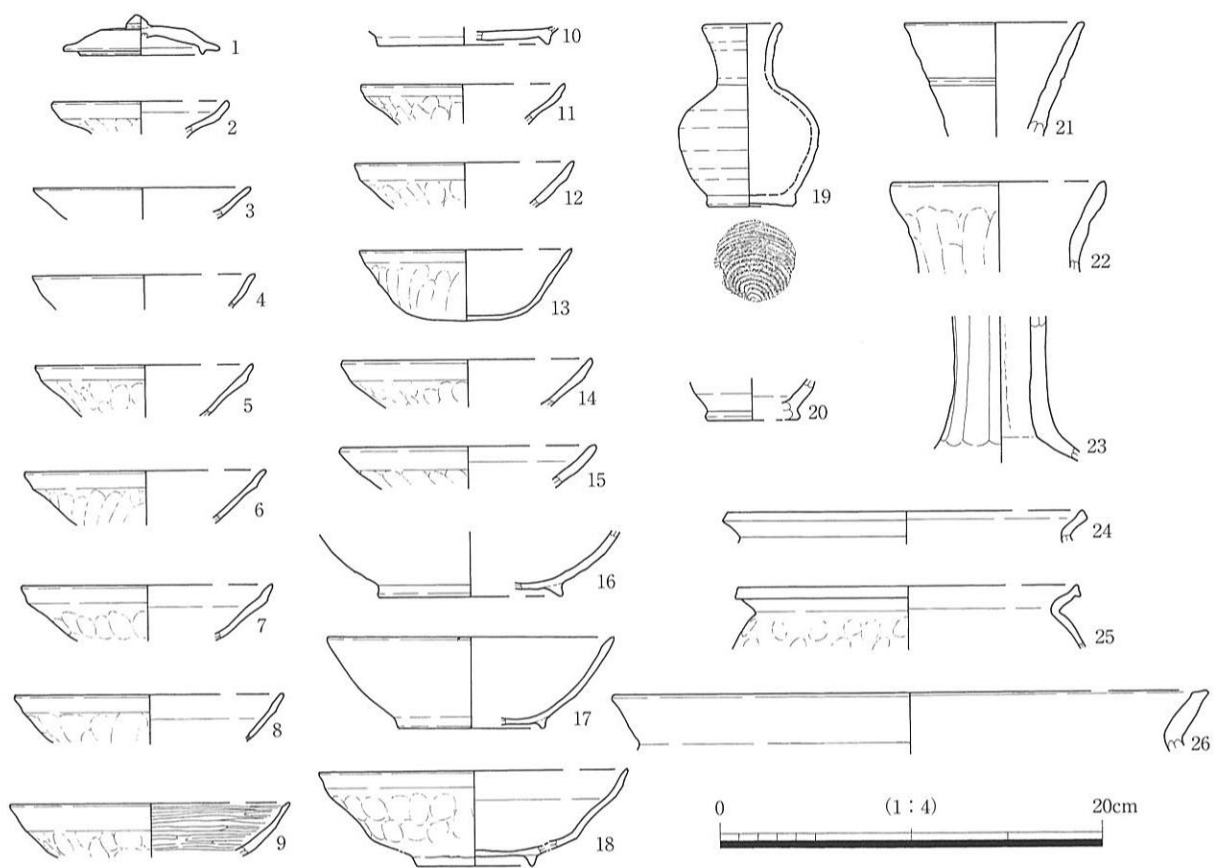


図75 3 E トレンチ 柱穴出土遺物実測図〔3〕、包含層（5層）出土遺物

建物25 (図73-1・4・5・7、74-3・4・5・7、75-6・8・20・24・26)

須恵器、土師器、瓦が掘方内より出土した。須恵器には図75-20に示す瓶子の底部、土師器には同図-6や8のような杯のほか、24や26に図示する土師器の口縁部がみられる。

これらの遺物は、高台は消失しているが瓶子の体部が未だ球形に近いこと、甕の口縁部端部が肥厚し面をなしているなどから、8世紀末から9世紀初頭頃にかけての製品と考えられる。

瓦は柱穴581より図73-4、柱穴602より図73-5と7、柱穴612より図73-1および図74-3と7、柱穴896より図74-4が出土した。中には柱穴896と898出土の破片が接合した図74-5のような例もあり、また、図73-4と図74-7は、先述のように建物24出土のものと接合関係にある。これらの特徴は、先述の建物24出土のものと大同小異であるため、時期的にも大きな差異はみいだせない。

建物26 (図75-16)

柱穴586掘方から図75-16に示す黒色土器A類の碗が出土した。口縁部を欠損するが器形が扁平であることや、高台の位置が外側となることから、9世紀末葉から10世紀前葉に位置づけられよう。

建物29 (図73-2、図75-2・3・5・9・11・17)

土師器、黒色土器、緑釉陶器、そして、図73-2に示す瓦片が出土した。土師器は杯3点でそれぞれ柱穴735柱痕から図75-2、柱穴742掘方から図75-5、同じく柱痕から図75-11が出土した。黒色土器は2点あり図75-9が柱穴742、図75-17が柱穴721からの出土である。ともに柱痕からの出土で、A類に分類されるものである。緑釉陶器は図75-3に示す皿の口縁部小片で、柱穴735掘方から出土した。硬質に焼成されていることや、器形・胎土の様相から山城産と考えられるものである。

これらの土器は、その形態的特徴から、9世紀末から10世紀初頭にかけての時期に位置づけられる。

建物30 (図75-4・18・22)

土師器2点と、図75-22に示す製塩土器1点が出土した。図75-4は柱穴871掘方から、同図-18は柱穴746柱痕から出土した土師器の杯で、その形態的特徴から10世紀前葉までのものと考えられる。

建物32 (図74-2、75-14)

土師器と瓦が出土した。図75-14は柱穴702掘方から出土した土師器の杯で、図74-2は柱穴703の柱痕から出土した丸瓦の破片である。土師器は小片となるが、10世紀前葉頃のものであろう。

建物33 (図73-8・11、75-10・23・25)

土師器3点と、瓦2点が出土した。瓦は柱穴699の柱抜き穴から出土し、復原の結果、2個体の平瓦と判明した。土師器には図75-10の高台を付す杯、同図-23の高杯脚部、同図25の甕がある。杯は柱穴699掘方から、高杯は柱穴700柱痕から、甕は柱穴699掘方から出土したものである。高杯の脚柱部の形状や面取りの様相、また、甕や杯の高台部の特徴から、9世紀末葉頃までの所産と考えられる。

建物36 (図75-19 図版91-1)

須恵器の瓶子が柱穴658の柱抜き穴から完形の状態で出土した。糸切底となるが、体部の張りが強いことや、口縁部が短い形態であることから、9世紀初頭頃までのものと考えられる。

建物37 (図75-21)

柱穴640掘方から須恵器の平瓶か提瓶の口縁部が出土した。形態から飛鳥時代のものとみられる。

建物40 (図73-6)

柱穴630掘方から平瓦の小片が出土した、表面に布目圧痕、裏面に縄目タタキが観察される。

この他、ピット811・814・815・819から、図75-13・12・15・7の土師器が出土している。

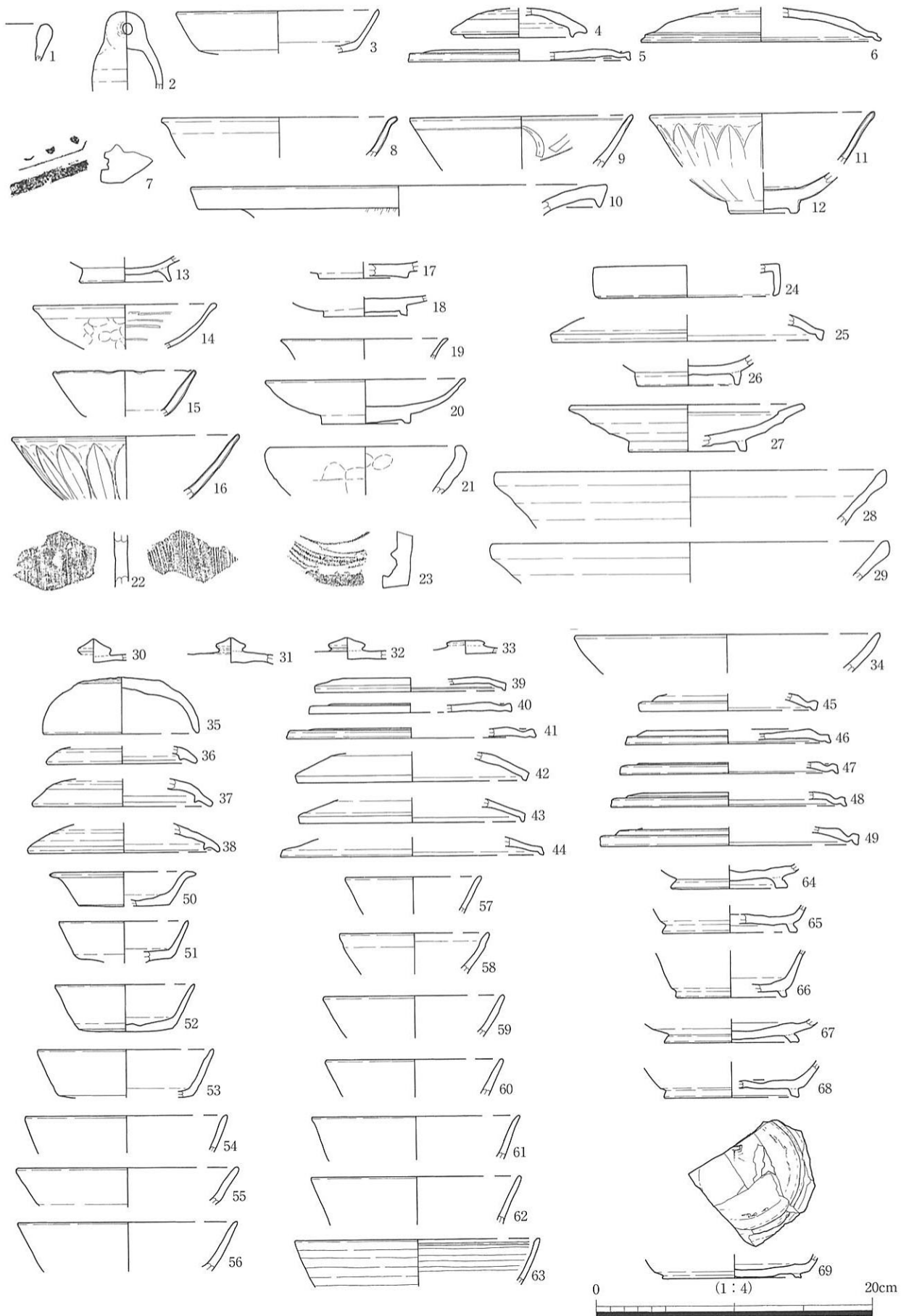


図76 3 E トレンチ 包含層 (1 から 5 層) 出土遺物実測図

包含層出土遺物（図75-1・27～44、76-1～69 図版93～95）

1層出土遺物（図76-1～6）

1は製塩土器口縁部の小片、2から6は各種形態をもつ須恵器で、2は飛鳥時代までの飯蛸壺、3は奈良時代前期の杯Gの身、4は飛鳥時代前半の杯Gの蓋、5・6は平安時代前期の杯蓋である。

2・3層出土遺物（図76-7～12）

須恵器、輸入陶磁器、瓦のほか、金属製品や貨幣類の出土も顕著で、これらについては別項を設けた。

図76-7は珠紋と郭線を組み合わせた紋様を表現する軒平瓦、図76-10は須恵器の甕口縁部である。

図76-8・9と11・12の4点は青磁碗で、いずれも龍泉窯系の製品である。9の内面には片切彫風の技法を用いた紋様が施され、11・12の外面には鎬連弁紋をみることができる。

これらの遺物は軒平瓦が13世紀代、須恵器が9世紀頃、青磁が8を除いて13世紀のものと考えられ、8は釉調や磁胎の様相から、15世紀代にまで下る可能性が高い。

4層出土遺物（図76-13～29）

須恵器、瓦器、輸入陶磁器、瓦、土製品、製塩土器、緑釉や灰釉などの瓷器類などが出土している。

須恵器は図76-24の薬壺の蓋や、25の杯蓋のような陶邑系製品と、図76-28や29に示す東播系製品の片口鉢とに分けられる。前者は9世紀代に分類され、後者は13世紀初頭頃までのものと考えられる。

輸入陶磁器には図76-15や16のような碗類がある。前者は口縁端部を切り込んで輪花に仕上げた小碗で、後者には鎬連弁紋が表現されている。ともに龍泉窯系の製品で13世紀代に位置づけられる。

瓦には図76-23に示す軒丸瓦がある。遺存する紋様から推察して尾の連なった左巴紋が表現されているものと考えられる。土製品は図76-22に示すようなもので、須恵質に焼成され、調整は埴輪と共通する点も多いが、それと比べて器壁が薄い。製塩土器は図76-21に示すもので、器壁が厚く、胎土が粗い。

緑釉陶器には図76-17から20に図示した4点の碗や皿がある。いずれも高台は削り出されており、素地は須恵質に焼成されていることから山城系の製品と考えられ、素地に丁寧なヘラミガキが施されていること、硬質に焼成されていること、底部の作出形態に円盤状のものと、削り出しの輪高台がみられることから、その中でも9世紀後半から10世紀初頭頃にかけての製品と考えられる。

灰釉陶器は図76-26と27の2点を図化することができた。26は杯の底部片で、高台の形態は三日月高台となる。釉は内面のみに施され、そこにはトチン痕が観察される。27は全形の窺える段皿である。内面にハケによる施釉が行われ、そこには製品同士を直接重ね合わせて焼成した痕跡がみられる。

これら2点は以上のような特徴を備えていることから、9世紀後半から10世紀以前にかけての黒笹90号窯式段階に相当する資料と考えられる。

5層出土遺物（図75-1・27～44、76-30～69 図版94）

須恵器、土師器、灰釉陶器、瓦、埴輪などが出土した。須恵器には図75-1と30から40そして、図76-39から69がある。器種は蓋杯を主とし、壺、平瓶、甕などがあり、時期的には、飛鳥時代の第Ⅱ期から平安時代前期にかけての幅広いものを含んでいる。特徴的なものに回転ヘラミガキを施し、金属器を模倣した図76-63の碗や、底部外面に「良」あるいは「良」と墨書された図76-69の杯身がある。

土師器には図75-28から30に示した高杯と甕がある。2点とも奈良時代の特徴を色濃く残している。

灰釉陶器には図75-27に示す9世紀末頃の小さな瓶の口縁部片がある。内外面には厚い釉が施されている。

図75-43と44は、平瓦の破片と玉縁をもつ丸瓦の破片である。玉縁上面には一条の凹線がみられる。

埴輪は図75-41と42に示す2点で、ともに円筒埴輪である。このうち41は日置荘窯系のものである。

第4項 4 Eトレンチ (図77・78 図版21-1・2、62-1、70-1、75-3 付図2)

真福寺遺跡の南端に位置するトレンチである。削平によるものか、遺構は3 Eトレンチからつづく溝950の延長部と図77に示す獣骨を埋置した土坑を検出したに過ぎない。また、4層以下の層準も認められないことから、この改変は鎌倉時代以降に行われたと考えられ、遺構の時期はおのずと知れよう。

遺物には2層と3層からのものがある。図78-1から12は2層出土で、1の唐津系天目椀、2の瀬戸鉄絵皿、3から5の飛鳥時代の須恵器、6から10の同安窯系の白磁皿や厦門碗窯系の碗、11の瓦器椀、12の瓦質片口鉢がある。このうち唐津の椀は17世紀前半のもので、層中最も新しく位置づけられる。

図78-13から24は3層出土で、5世紀代に遡る14の高杯脚部のほか、15・16・21の平安時代の土器、17から19の瓦器、20の龍泉窯系青磁碗、22から24の東播系須恵器片口鉢など14世紀代のものまでがある。

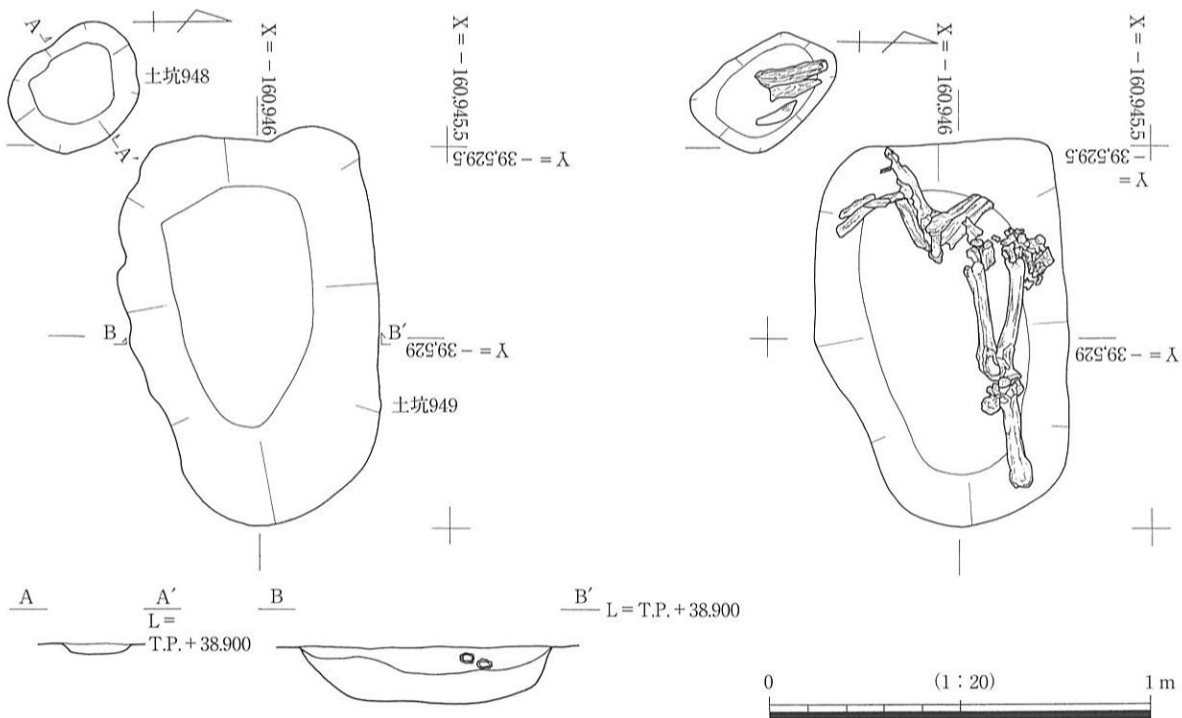


図77 4 Eトレンチ 土坑948・949平・断面および獣骨出土状況図

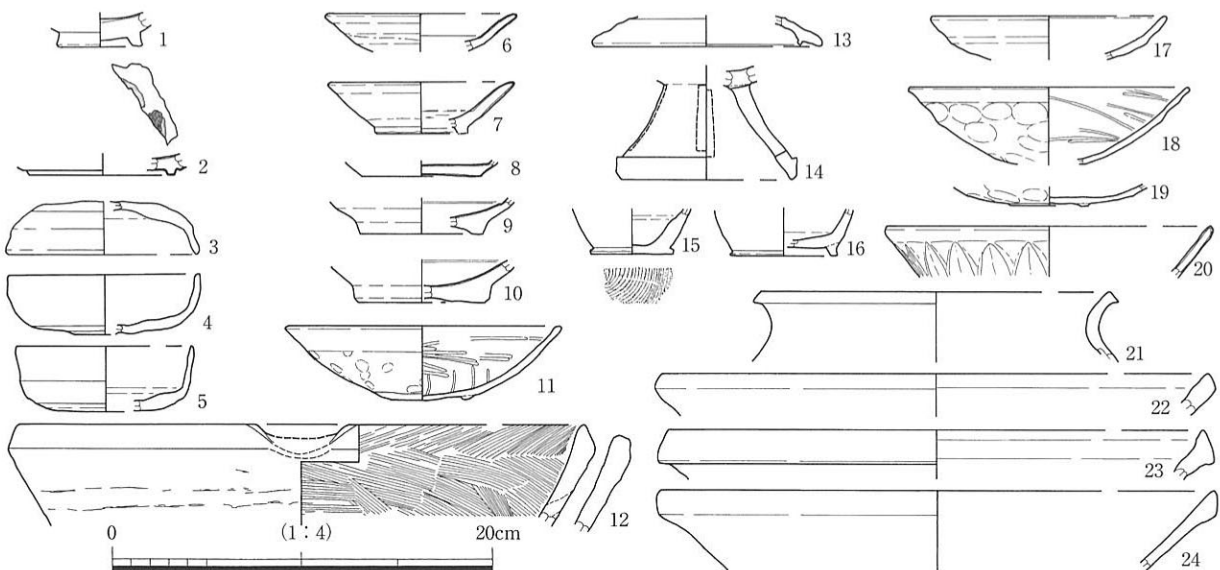


図78 4 Eトレンチ 2・3層出土遺物実測図

第5項 5 Eトレンチ (図79~81 図版22-1・2 付図2)

真福寺遺跡側調査区の東方に位置し、1 Eトレンチと3 Eトレンチ南部とに挟まれる位置関係となる。遺構は4層上面と、基盤層上面の2面において確認することができた。

4層上面で検出した遺構は、南北方向に主軸をもつ犁溝群と952と呼称した溝である。これらについては3層除去後に確認できたものである。

基盤層上面で検出される遺構は4層を除去した段階で確認されるもので、南端部において数基の小さなピットを検出したのみである。そこから北側は3 Eトレンチ南部で検出された開析谷の中心に向かうため、自然の旧地形が確認できたのみで遺構は存在しなかった。

なお、この谷地形を埋積させる土層には、包含層4層と5層に相当する堆積層が存在していた。これらの土層は、高い場所では中世段階の削平を被り遺存する部分は少ないが、当該地は幸いにも地形的に低い部分に相当していたため、後世の削平を免れて比較的安定した層厚を保っていた。このため、相当量の遺物が得られるという結果がもたらされ、また、上下位からの遺物の移動も少なく時期的にも一定程度のまとまりをみせていた。そして、この状況は、谷地形の延長部が検出された西側の3 Eトレンチの南側や、後述する6 Eトレンチでも同様であった。先に図75と76に、3 Eトレンチ包含層4・5層出土遺物として掲載した遺物の掲載点数が多いのも、このような状況に由来するものである。

溝952 (図79 図版22-2)

5 Eトレンチ西端で検出された南北方向の溝である。南側については途切れており、北側は調査区外となるため詳細は知り得ない。南側が途切れているのは、地形的に一段高くなっているためであろう。

規模は幅約2.0m、深さ0.3mから0.4mを測り、埋土は黄灰色系の砂質土層を主体とする。なお、溝底に明るい灰色系粘質土の薄層が観察されたため、一時、滞水状態にあったことを窺わせる。

遺構の性格は、周辺に遺存する条里型地割の坪境に相当する位置で検出されたため、この機能を兼ね用排水路的な溝との見方が妥当と思われる。その時期は下図の瓦器碗が示す12世紀代であろう。

出土遺物には図79-1から5に示す瓦器のほか、6から8の須恵器、9の埴輪がある。瓦器には1のような皿と、2から5のような碗があり、その形態的特徴から12世紀前半代のものと考えられる。

須恵器には6の杯蓋や8の盤のほか、7に示す風字硯の破片がある。裏面に脚が遺存していることから、陸の下端部に相当する部位の破片であることが窺われる。また、表面は磨耗し、滑沢を帯びる。

埴輪は、断面台形のタガが遺存する大型の円筒埴輪片で、外面にはタテハケ調整が観察される。

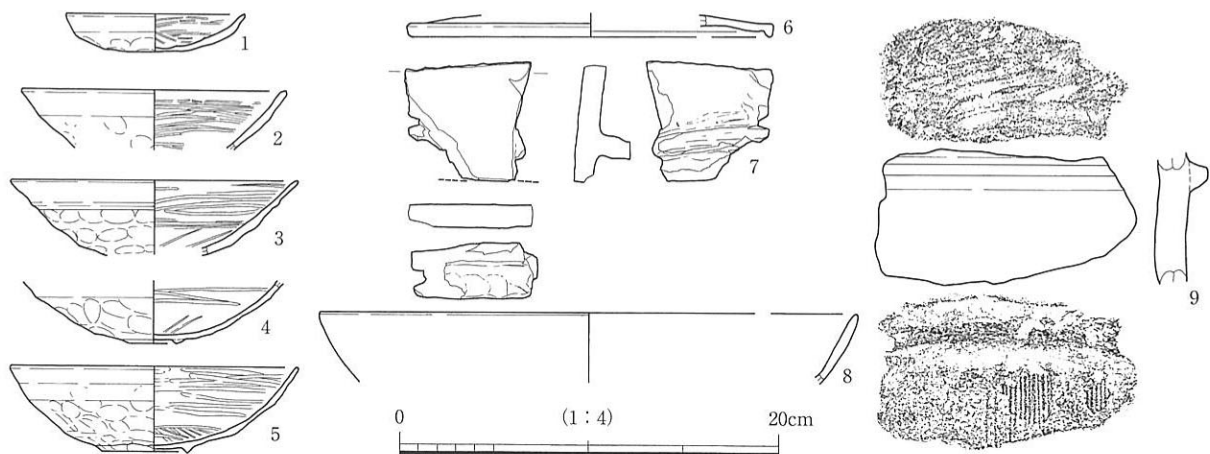


図79 5 Eトレンチ 溝952出土遺物実測図

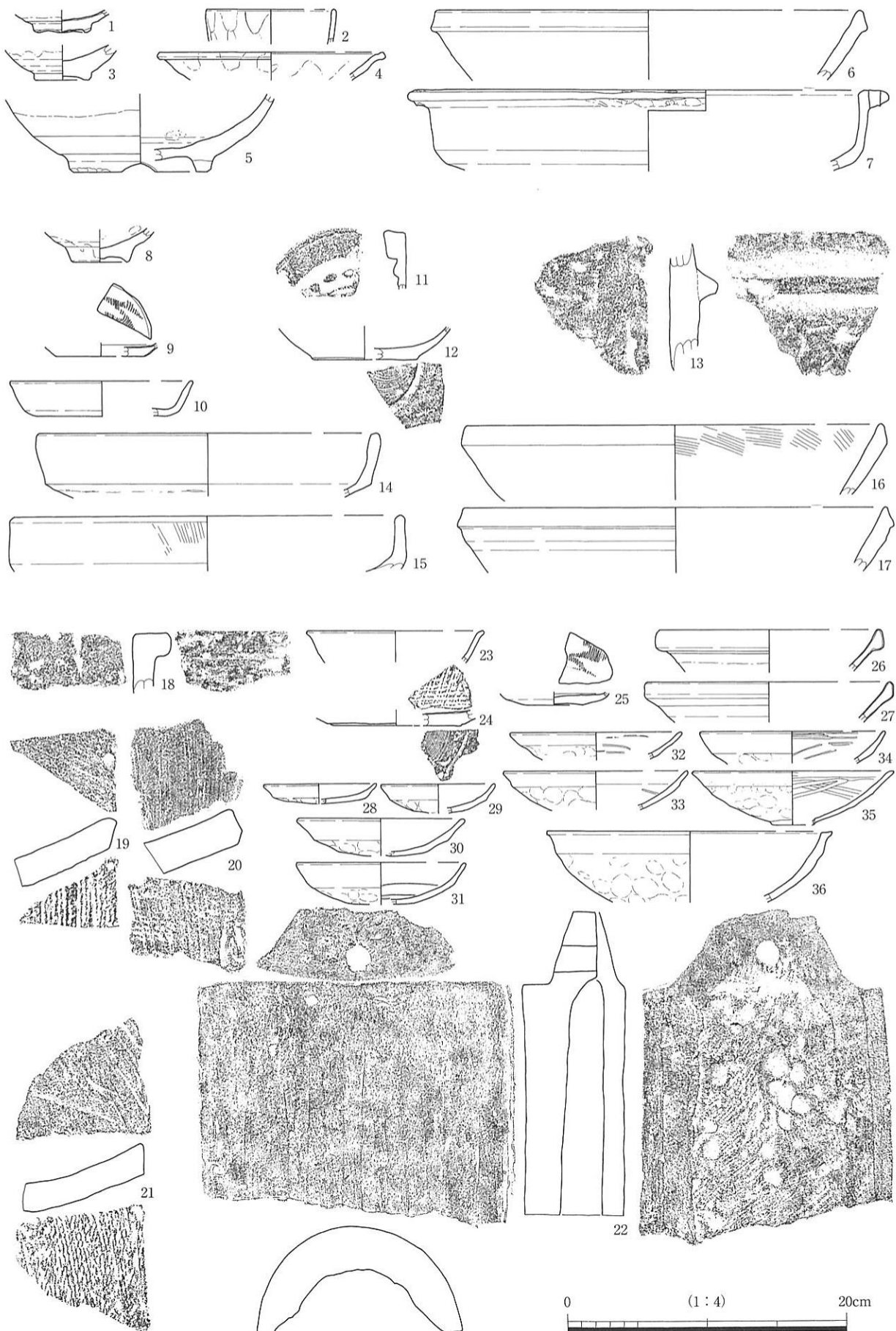


図80 5 E トレンチ 包含層 (1 から 3 層) 出土遺物実測図

包含層出土遺物（図80-1～22、81-1～47 図版93～95）

1層出土遺物（図80-1～7）

中世の遺物もみられるが、大部分は18世紀代までの近世の遺物で占められている。1は割高台となる白磁の小碗で、その形態から15世紀代に位置づけられる。2は一重網目紋を施す波佐見焼系磁器の碗で、その特徴から18世紀代の製品と考えられる。3から5は唐津窯系の碗、皿、鉢で、それぞれ、17世紀第1四半期、1620年代、17世紀後半代の製品と考えられる。6は東播系須恵器の片口鉢で、その形態から13世紀初頭と考えられる。7は土師質の焙烙で18世紀代の製品とみられる。

2層出土遺物（図80-8～17）

中世までの遺物がほとんどを占めるが、一部近世の遺物を含む。8は唐津窯系の灰褐色釉を施す碗で、17世紀前半頃のものである。9は猫描手の櫛描紋をもつ同安窯系青磁の皿で、13世紀代に属す。10と12は須恵器の杯で、9世紀前葉頃までのものである。11は右回りの巴紋をもつ18世紀代の軒丸瓦で、表面にはキラ粉が付着している。13は大型の円筒埴輪片である。14と15は土師質の焙烙片で、17から18世紀代のものである。16と17は瓦質土器の片口鉢で、15世紀代に属するものと考えられる。

3層出土遺物（図80-18～22 図版93）

平安時代前期から中世までの遺物が出土した。18は大型の円筒埴輪の上端部で、その形状から日置荘窯系の製品と考えられる。19から21は瓦の破片で、22が丸瓦である以外、すべて平瓦である。平瓦は表面と裏面の調整が共通し、その特徴から平安時代前期頃の製品とみられるが、丸瓦は表面にヘラナデが加えられ、裏面両端部の面取りも幅広くなっていることから、15世紀代にまで下がるものと考えられる。

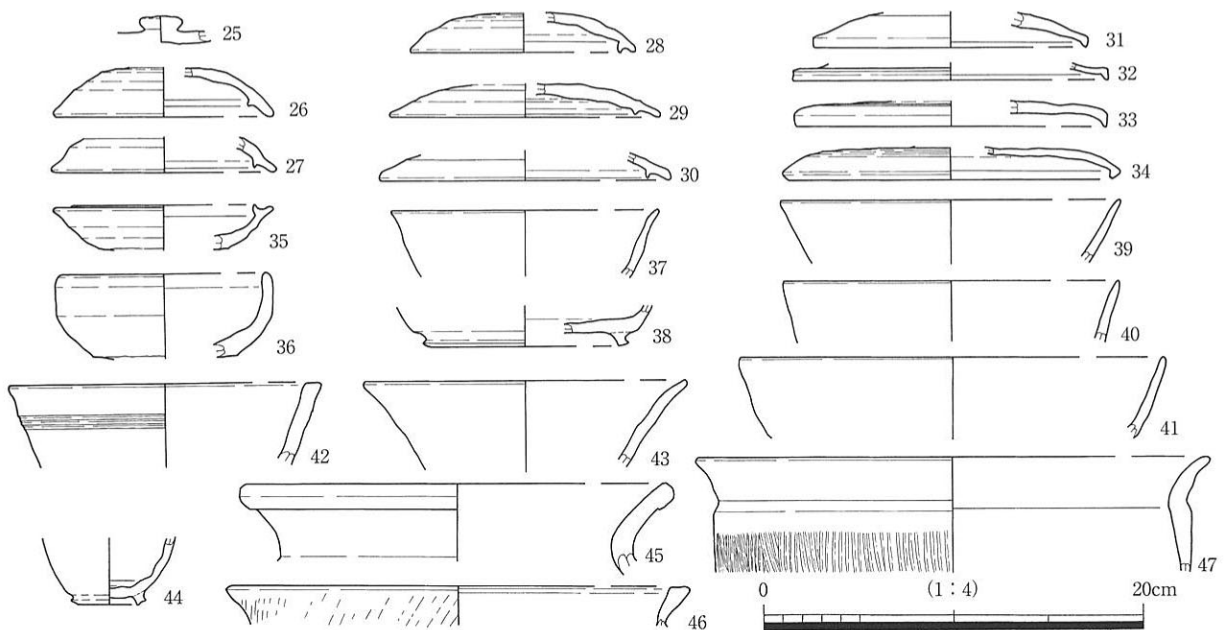
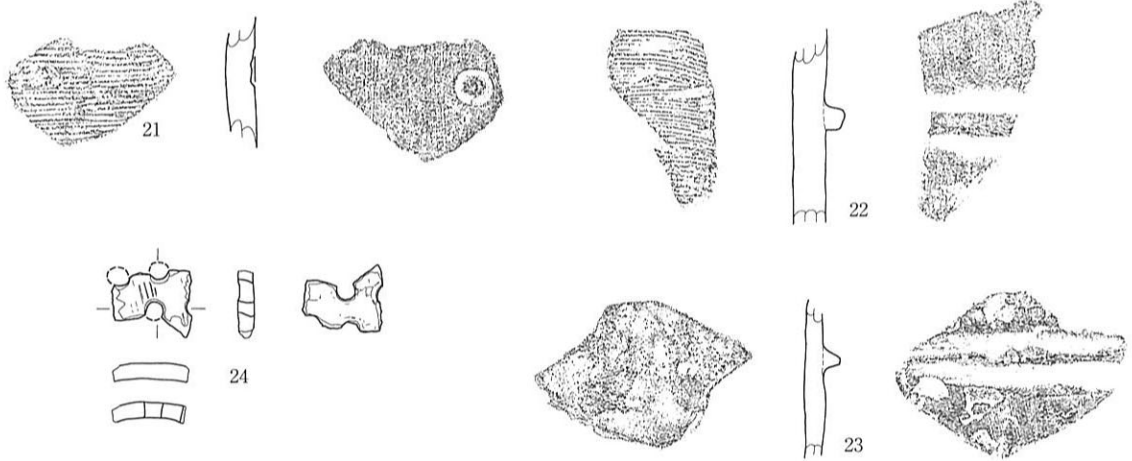
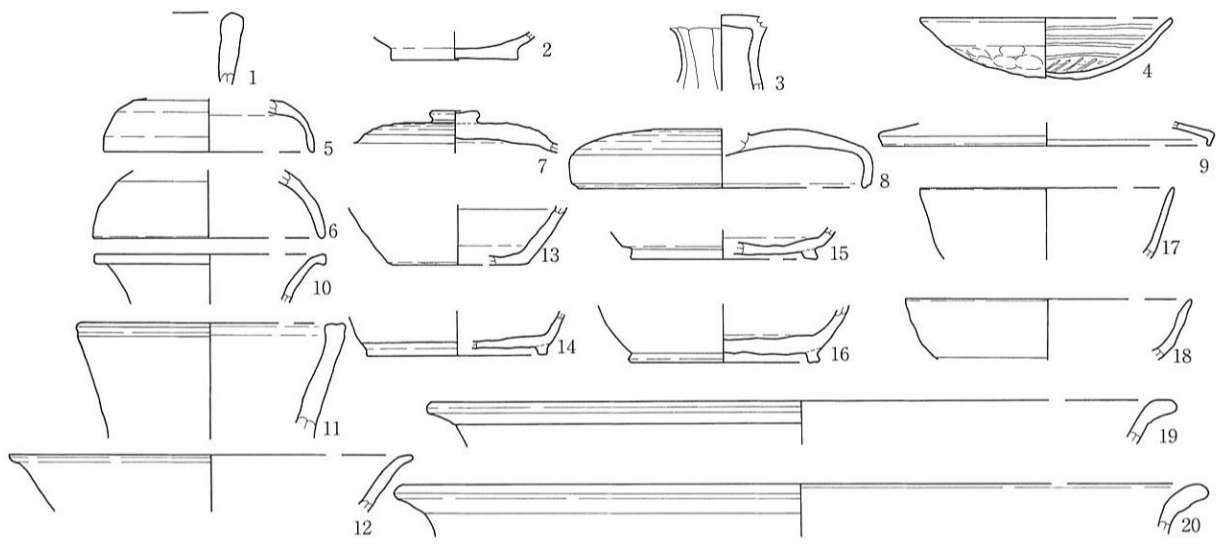
23は緑釉陶器の碗である。小型の製品で硬質に焼成されていることから、10世紀前半代の山城産製品であると考えられる。24は瀬戸の灰釉卸皿で、糸切底となることなどから15世紀代の製品であると考えられる。25から27は輸入陶磁器で、25は同安窯系青磁皿、26と27は厦門碗窯系白磁碗で、いずれも12世紀後半から13世紀代のものである。28から36は瓦器である。器種は28と29の小皿と、30から35の碗、36の鉢に分類される。時期的には形骸化した高台を付す35から、暗文までが消滅してしまった30の碗がみられることから、13世紀の後半から14世紀後半にかけてのものが含まれている。

4層出土遺物（図81-1～20 図版93・95）

飛鳥時代から平安時代前期までの遺物がみられる。このうち、4の瓦器碗は、溝952の深度確認作業中に検出したもので、本来この層準に帰属させるものではない。1は製塩土器の口縁部片である。2は緑釉陶器の底部破片で、硬質に焼成されていることや円盤状の高台となることから、9世紀後半を前後する時期の山城産のものであると考えられる。3は土師器の高杯脚部片で、柱部が短いことや、面取りが明瞭であることから、奈良時代のものであると考えられる。16から20は須恵器で、器種には蓋杯、高杯や薬壺の蓋、壺、甕、鉢の口縁部などがある。蓋杯の中には5・6などのように、飛鳥時代と考えられるものから、13・14のように平安時代前期までのもの含まれている。

5層出土遺物（図81-21～47 図版94）

須恵器、土師器、埴輪、不明土製品が出土した。時期は古墳時代から奈良時代のものまでで占められている。21から23は大型の円筒埴輪片で、21には円形竹管紋が押捺される。24は須恵質に焼成された用途不明の土製品である。25から46は須恵器で、26から41に示した蓋杯の各種形態から、飛鳥時代から奈良時代全般にわたる時期のものが含まれていることがわかる。44は瓶子の底部で、高台が付されていることから、平安時代にまで下がるものではない。47は土師器の甕で、奈良時代の特徴を有している。



図B1 5 E トレンチ 包含層 (4・5層) 出土遺物実測図

第6項 6Eトレンチ(図82~85.94-22 図版23-1・2、24-1・2.27.66-1・2 付図2)

真福寺遺跡側調査区のほぼ中央に位置するトレンチである。北辺と西辺は3Eトレンチと、南辺は4Eトレンチと、そして、西辺は灌漑用水路を介して2Eトレンチと隣接する位置関係となる。

遺構は、4層上面と基盤層上面で検出された。上層の遺構は、図82のような瓢箪形のピットが列をなすもので、一部は3Eトレンチにも連続する。時期は層序関係から中世以降で、性格は不明である。

基盤層上面で検出された遺構は北部に集中して検出され、種類には溝、掘立柱建物、ピット、土坑、轍状遺構がある。このうち掘立柱建物については、遺構番号の関係上、3Eトレンチの項で述べた。

なお、これより以南は、既述した開析谷が南西から北東に向かって最大幅35m以上にわたって広がるため、最終的には基盤層に刻み込まれた自然地形を検出したに止まる。また、谷埋積土の上層部とも兼称できる包含層4層上面は、この周辺部のみ鉄分の沈着が非常に著しく、人力掘削用具を寄せ付けなほかに固化した。これは厚さ0.1mほどの部分であったが、そのあまりの硬さに手慣れた作業員でさえもが忌避するような状態で、冬場の調査にも係わらず作業は一向に捗らなかった。

やっとの思いでこれを除去し、つづいて5層の掘削も完了させた。さらに、開析谷を埋積させる土層を除去し、ほぼ基盤層を露呈させた段階で、その中でも特に下刻作用が強く働いて形成された二股に分かれる溝状の地形を確認した。そして、その北側を掘削し、ほぼ溝底に達した段階で、壁に接するようにして3点のサヌカイト剥片を検出した。そのうちの一点は図94-22に図化したものである。

これらは非常に風化が進行していることから、縄紋時代以前のものとは推定されたが、剥離技法からみて後期旧石器時代にまで遡るものではないと判断された。したがって、開析谷が形成され、埋積作用が始まったのは、縄紋時代のある時点からのことであつたと考えられるようになった。



図82 6Eトレンチ 4層上面平面図

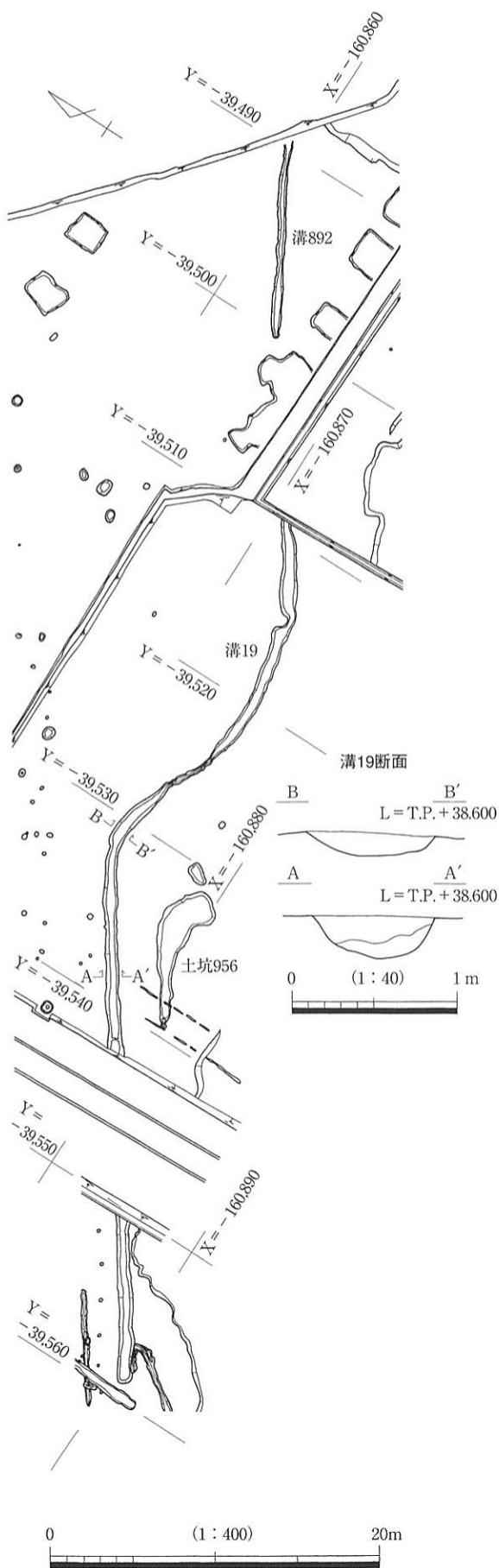


図83 6・2・3 Eトレンチ 溝19・892平・断面図

溝19 (図83・85 図版27. 66-1・2 付図2)

調査区北部の開析谷北側で検出された。既設用水路を挟んで2 Eトレンチから連続する溝であるため、トレンチを越えても同一遺構名を付与した。

溝はトレンチ内でゆるやかに逆「S」字状に蛇行し、トレンチ境を介して3 Eトレンチの溝892に断続する。断面の形状は、図示するような皿形を呈している。

埋土の質や色調は、いくつかの地点で土層断面を残し層序を検討した結果、黄褐色の粘質土に黒味を帯びた褐色系の土層が混じり合うというものであった。

これらの土層は、基本的に2層に分けられるが、場所によっては単層となる部分も存在した。

溝内からは若干の土器片が出土し、このうち図85-1と2に土師器と須恵器を各1点ずつ図化した。1は脚部のみが遺存する土師器の高杯である。2は図上で全形が窺える須恵器の杯身である。胎土は粗く、内面にヘラ記号を有するという特徴をもつ。

これらの土器は、その器形や特徴からみて飛鳥時代のものと考えられる。なお、同一遺構と考えた2 Eトレンチの溝19出土遺物とも时期的な齟齬はない。

土坑956 (図84 付図2)

トレンチ南端において確認した。検出地点は、遺構の集中する北部地域と開析谷を隔てた南側である。

図84に示すような平面形を呈し、坑底は凹凸が激しい。掘り込みは非常に浅く、埋土は砂混じりの灰褐色系シルトである。諸相から自然地形の可能性が高い。

土坑956 (図84 図版27. 66-1・2 付図2)

トレンチの西端寄りで検出した。その形状は図84に示すようなものである。断面形は浅い皿形を呈し、そこに堆積する土層は褐色系の粘質土を主体とし、これに黄褐色系の粘質土が含まれるというものであった。

出土遺物には、図85-3に示す甕の上上部がある。その形態から飛鳥時代前半代のものとみなされる。

なお、溝19の南側を約2.5m離れて並行するような位置関係にあることや、溝19が屈曲する部分で同じような弧を描くこと、また、埋土が近似していることや、出土遺物に時間的な差異が少ないことから勘案して、双方に深い関連性があったものと考えられる。

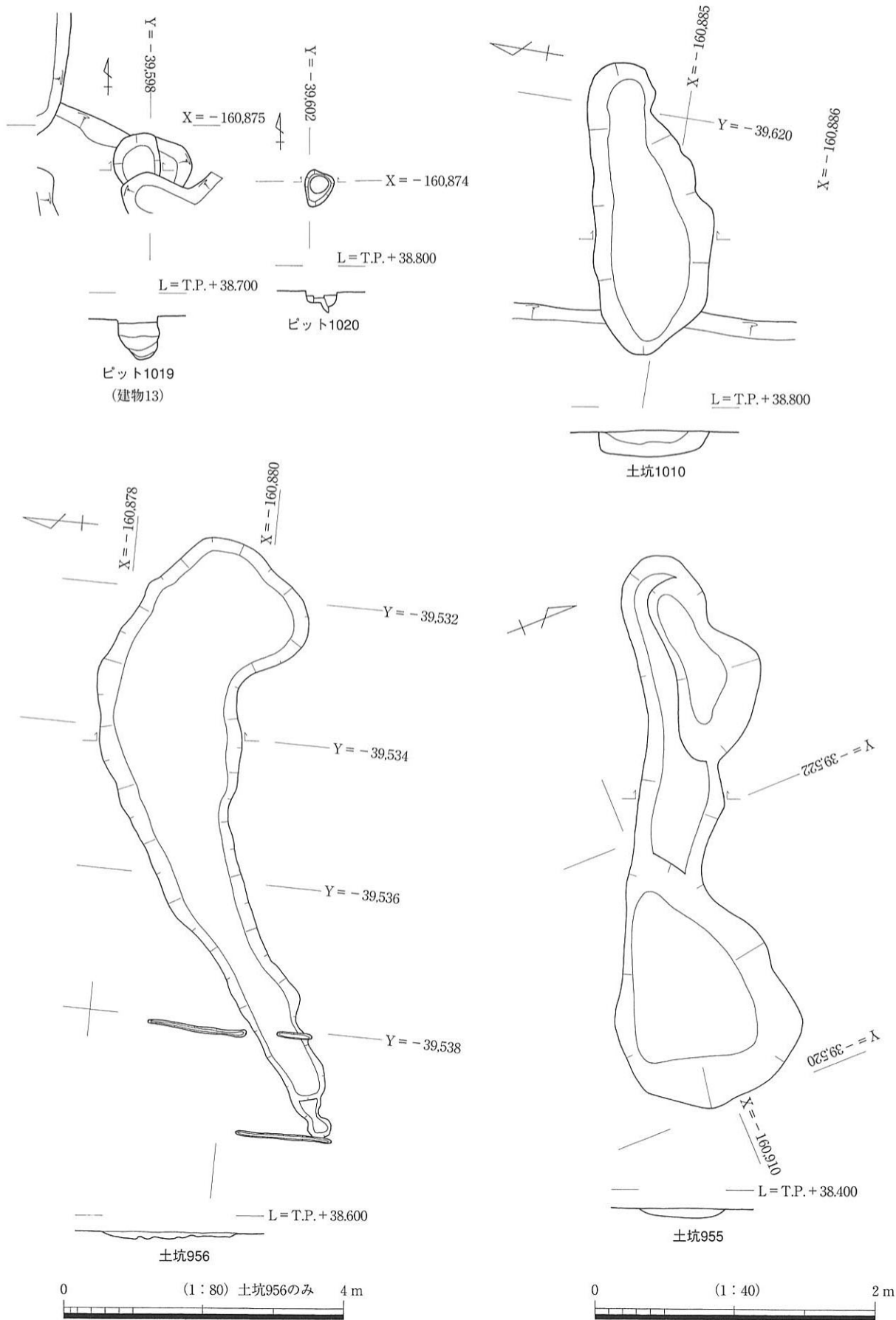


図84 6 E トレンチ 溝・土坑・ピット平・断面図

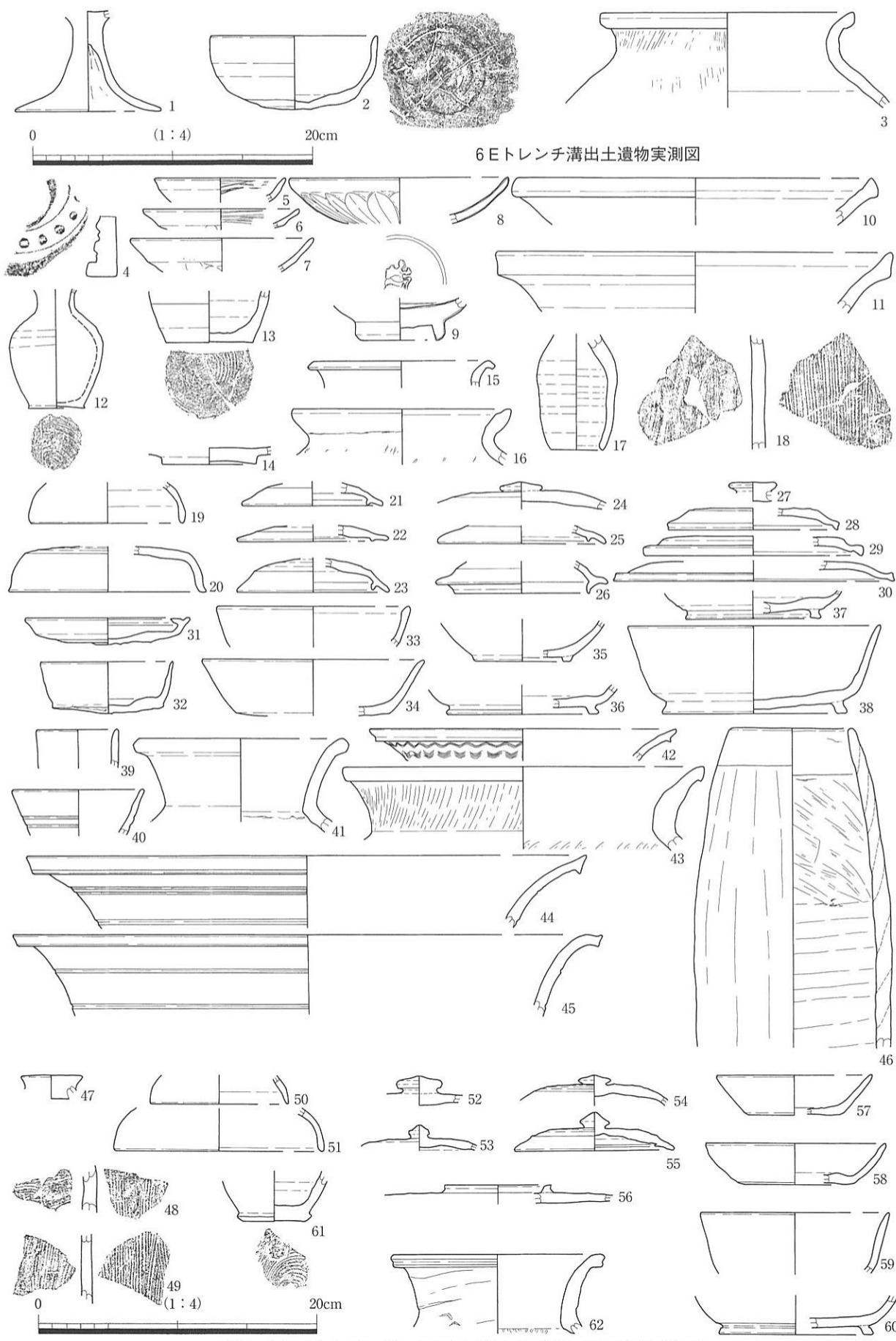


図85 6Eトレンチ 溝・包含層（2から4層）出土遺物実測図

包含層出土遺物（図85-4～62 図版89-2・12、90・93・95）

2層出土遺物（図85-11）

図85-11に示す東播系須恵器片口鉢1点のみを図化した。その形態から14世紀代のものとみられる。

3層出土遺物（図85-4～10・12～46 図版89-2・12、90-1・93）

古墳時代中期から室町時代までの遺物が出土した。種類には土師器、須恵器、輸入陶磁器、緑釉陶器、瓦器、瓦、用途不明の土製品がある。図85-4は軒丸瓦で、右回りの巴紋と連珠紋が観察される。尾が圏線状に連続していること、周縁が低いことから14世紀代のものと考えられる。5から7は瓦器椀と皿で、14世紀後半代のもので含まれている。8・9は鏝連弁紋をもつ鉢と、見込みに印花紋を押捺する碗である。双方とも龍泉窯系の青磁で、前者が13世紀第3四半期、後者が14世紀後半頃のものである。

10・12・13および、15から17と19から45は須恵器で、10は12世紀後半の東播系須恵器片口鉢、12と13は9世紀後半代の糸切底となる瓶子と壺、15と16は壺口縁部、17は飯蛸壺、19から30は蓋で大部分は蓋杯用であるが、26のみは台付長頸壺用のものと考えられる。31から38は先述の蓋杯に対応する身である。39と40は平瓶や小型の壺の口縁部、41から45は口径に大小のみられる壺の口縁部破片である。

以上の遺物は飛鳥時代前半から平安時代前葉にかけてのものを主体としているが、42についてはTK-73段階のもので、4Eトレンチの出土の図78-14とともに、5世紀代に遡る数少ない須恵器である。

図85-14は硬質に焼成された緑釉陶器で、底部は円盤状となることから9世紀後半頃の山城製品と考えられる。18と46は須恵質に焼成された用途不明の土製品である。18は5Eトレンチの5層と共通する特徴をもつが接合関係にはない。46は円筒状を呈するもので、須恵質に焼成されるが焼き上がりは甘い。外面に縦方向のナデ、内面下半は回転を利用しながら上方向に器面を平滑にしていっていった痕跡を止めている。上半部には斜め方向のナデが施され、そこには粘土紐の接合痕が明瞭に残されている。そして、最終的には口縁上端部の内外面をヨコナデによって仕上げている。

類品は陶邑地域に所在する原山4号墓や、陶器南遺跡出土品にみいだせるが、古墓はこの類品を用いて主体部を構築するという特殊なもので、資料の僅少さとも相まって用途を限定することは困難である。

このような特殊な遺物であるため、時期についてはたどる術もないが、3層から4層にかけて出土した破片が接合することから、本来4層に含まれていたものが本層中に巻き上げられた可能性が高い。この考え方が正鵠を得たものであるならば、4層から出土した土器の中に飛鳥時代のもので占められる割合が高いことから該期の資料となる可能性が強く、既出資料と近似した段階のものとなろう。

4層出土遺物（図85-47～60 図版88-3）

土師器、須恵器、用途不明土製品が出土した。図85-47は土師器の杯蓋に伴うつまみである。上端部が扁平となることから、平安時代にまでは下らないものと考えられる。

図85-50から62は須恵器である。器種には50から60の蓋杯、61の瓶子、62の壺がみられる。蓋杯はさらに身と蓋に分類される。蓋には50から56の7点がみられ、51のように古墳時代後期のものから、50や53から55のような飛鳥時代の杯Hや杯Gと組み合わせるもの、そして、52のような奈良時代のもの、さらには56のような平安時代初期のみ特徴的にみられるものまでが含まれている。

図85-48・49は用途不明の土製品である。焼成や調整技法は、先述の18や3Eトレンチ5層出土の図76-22と大差はない。時期的な問題については、下位の包含層から出土する傾向がより強いことを重視するならば、飛鳥時代のものとするのが可能とも考えられる。

61は瓶子の底部破片である。糸切底となるが、体部が膨らむため9世紀初頭頃に位置づけられる。

第7項 7 Eトレンチ (図86~88 図版25-1、68-3・4、69-3・4、77-2 付図2)

真福寺遺跡側調査区の北西隅に位置し、2 Eトレンチの北側と供用中の道路に挟まれた場所となる。

遺構は基盤層上面で検出され、その種類には溝、土坑、ピットなどがある。このうち他のトレンチに連続する溝25と溝392については、前項までに既述しているためここでは改めて取り上げない。

溝1005・1006 (図版25-1 付図2)

北と東を溝1006、南を溝1005とした。南北で深さは大きく異なるが、溝1005の北東隅に溝1006への排水口とみられる一段下がった窪みがあることから一連の遺構と考えた。既往の近畿自動車道側調査区で検出された溝2-62と溝2-63の延長部に相当し、両者を合わせると南北約15.0m、東西約50mの範囲を取り囲む溝となる。これは、字名にみられる「燈籠田」の西半分とまったく重なる区画でもある。

埋土は大きく3層に分けられ、最下層には明灰色の均質な粘質土が堆積していた。このことから滞水状態にあったことを窺わせ、また、その上面には人間によるとみられる生物擾乱が顕著に観察された。

出土遺物には図88-3から5に示すものがあり、3と5は瓦器、4は土師器である。これらの遺物から溝の時期は14世紀代と考えられ、前回の調査で得られた成果とも符合する。

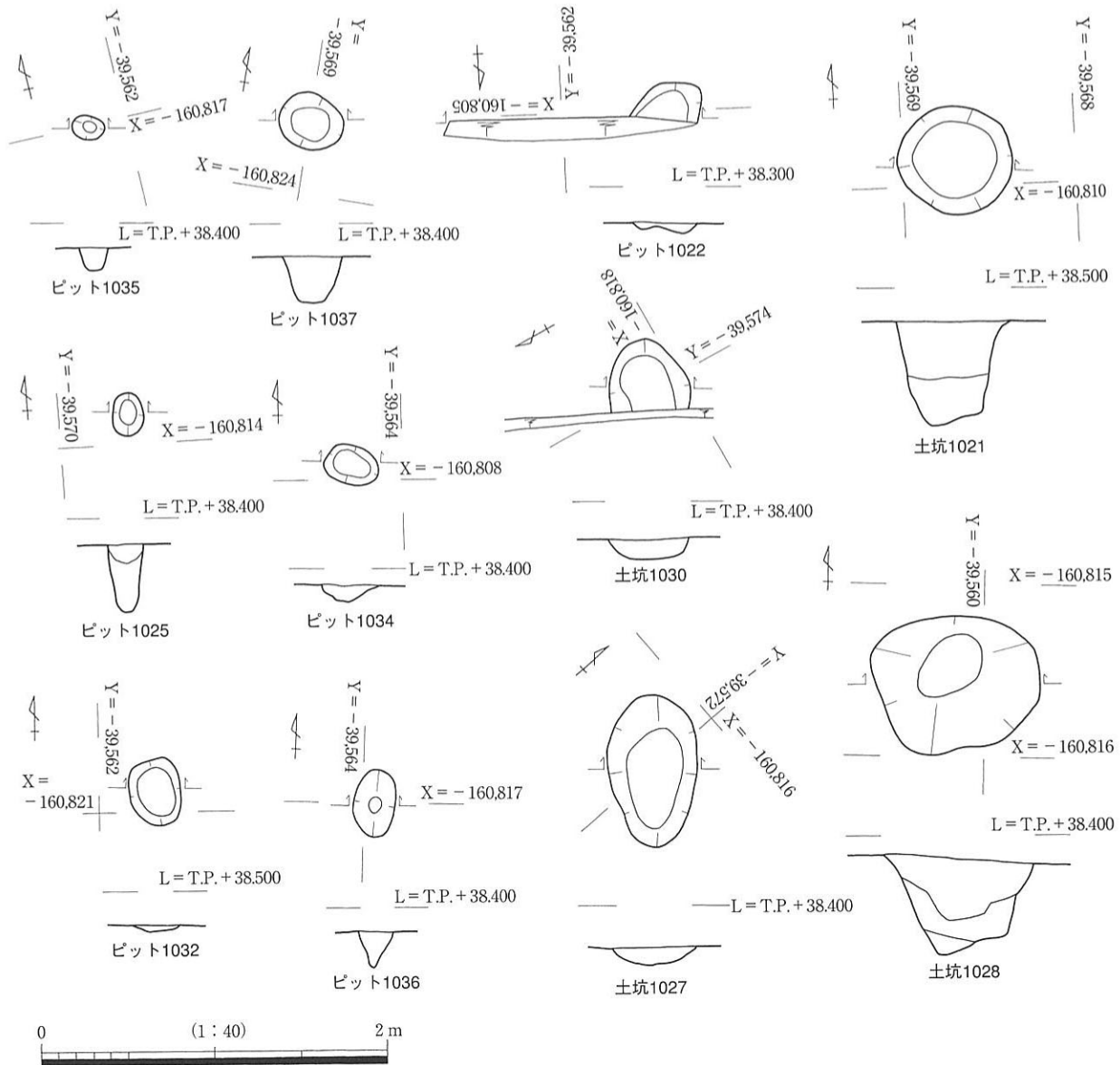


図86 7 Eトレンチ ピット・土坑平・断面図

土坑1024 (図87 図版69-3・4 付図2)

トレンチの西端で検出された。規模は長径0.8m、短径0.6mを測り、深さは0.4mである。平面は不整形を呈し、断面はほぼ垂直に掘り込まれている。埋土は粘性の強い黒褐色の粘質土で2層に分けられ、その層界附近では図87のような状態で一個体の甕が押し潰されたような状態で出土した。

甕は布留式段階に属するものであることから、遺構の時期は古墳時代前半期であると判断される。

土坑1033 (図87 図版68-3・4 付図2)

溝1006の埋土除去後に検出された土坑である。平面形は長辺1.4m、短辺1.2mの隅丸方形を呈し、深さは0.8mを測る。また、坑底には直径0.5m、深さ0.5mを測る円形の掘り込みが認められた。

埋土は粘性の強い黒褐色粘質土で、中位から古墳時代前半期の土師器を数個体検出することができた。

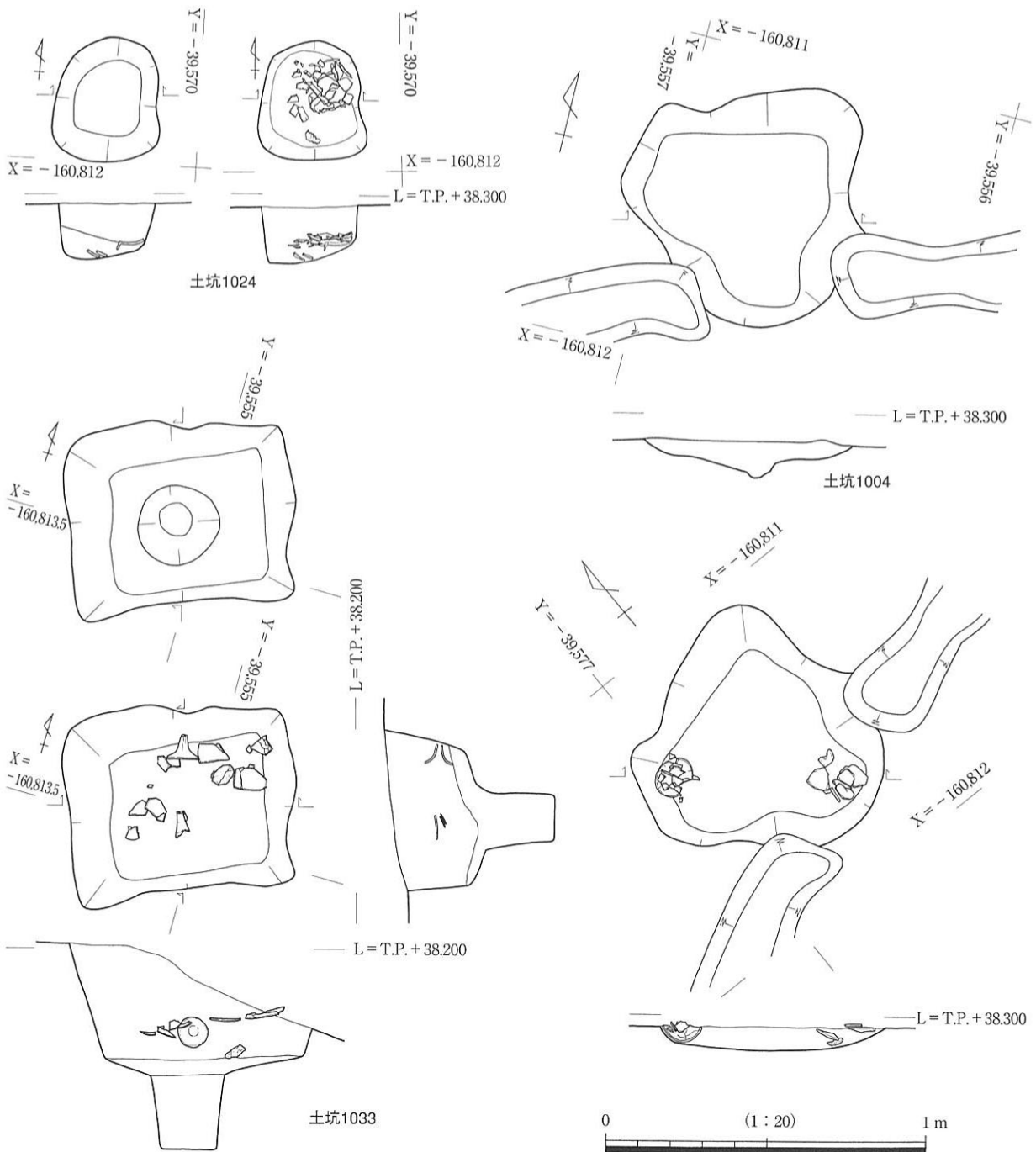


図87 7Eトレンチ 土坑1004・1024・1033平・断面および遺物出土状況図

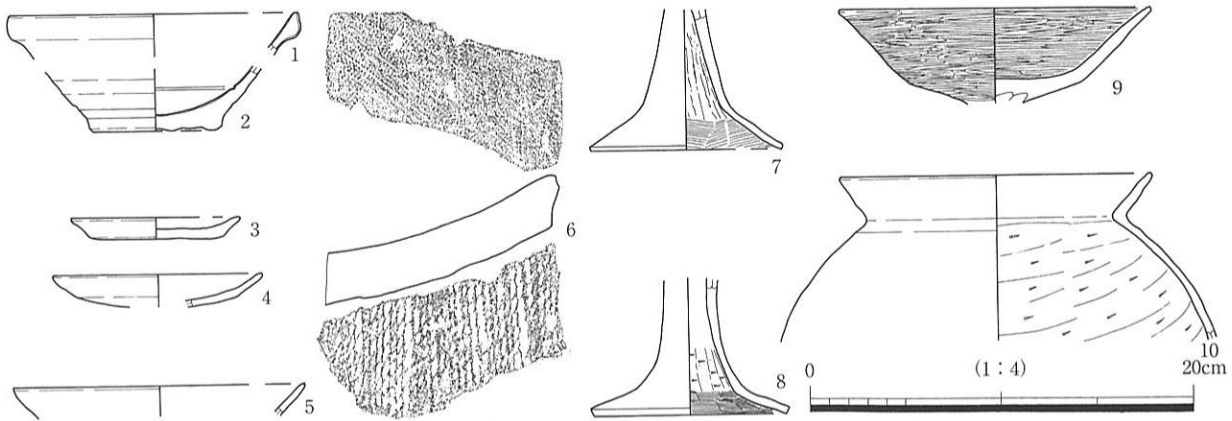


図88 8 E トレンチ 溝・土坑・包含層(2・3層) 出土遺物実測図

遺構出土遺物 (図88-3~10)

図88-3と4は、溝1006から出土した瓦器と土師器の小皿である。5は溝1005から出土した瓦器碗の口縁部、6も同溝から出土した裏面に縄目タタキが施された平瓦片である。これらの遺物のうち、瓦器碗は扁平な形態を呈していることから、おおむね14世紀代に位置づけられるものである。

図88-7から9は土坑1033から出土した土師器で、高杯の脚部2点と杯部1点を図化することができた。なお、杯は共伴したどちらの脚部とも接合しない。時期は布留式段階のものと考えられる。

図88-10は土坑1024から出土した甕である。破片の量は多いが、細片化して上半部までしか復原できない。口縁端部の形状が通有のものとやや相違しているが、布留式段階に納まるものである。

包含層出土遺物 (図88-2 図版77-2)

図88-2は3層から出土した13世紀第1四半期に属する厦門碗窯系白磁碗である。この他、図版77-2に示す鉸具と思われる鉄製品が出土したが、錆化が著しく図化に耐えない状態であった。

第8項 8 E トレンチ (図88-1. 89

図版25-2、53-1 付図3)

真福寺遺跡側調査区の南西隅に位置する。東は2 E トレンチと隣接し、西は以前に調査した近畿自動車道側調査区と接している。

遺構は基盤層上面で確認され、種類には溝や柱穴などがみられた。このうち、柱穴1019は建物13の北西隅柱に相当する。また、柱穴1011から柱穴1014と、柱穴1016と柱穴1018は、建物42を構成しているが、遺構番号の関係上、2 E トレンチの項で報告を行っている。

溝1010 (図89)

東西方向の溝である。埋土は2層に分けられ、図示するような堆積状況であった。

包含層出土遺物 (図88-1)

2層から図88-1に示す厦門碗窯系白磁碗が出土した。時期は12世紀後半代に属する。

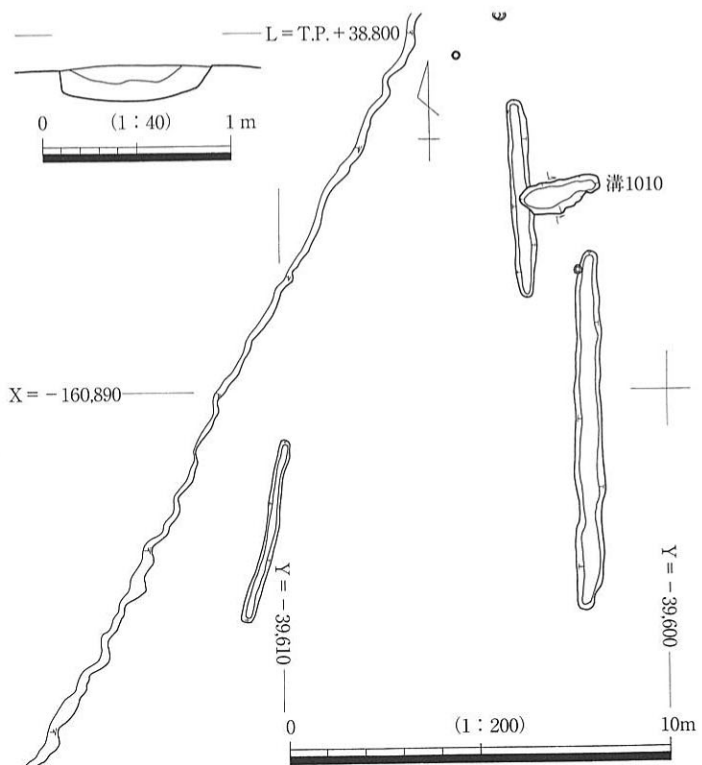


図89 8 E トレンチ 溝1010平・断面図

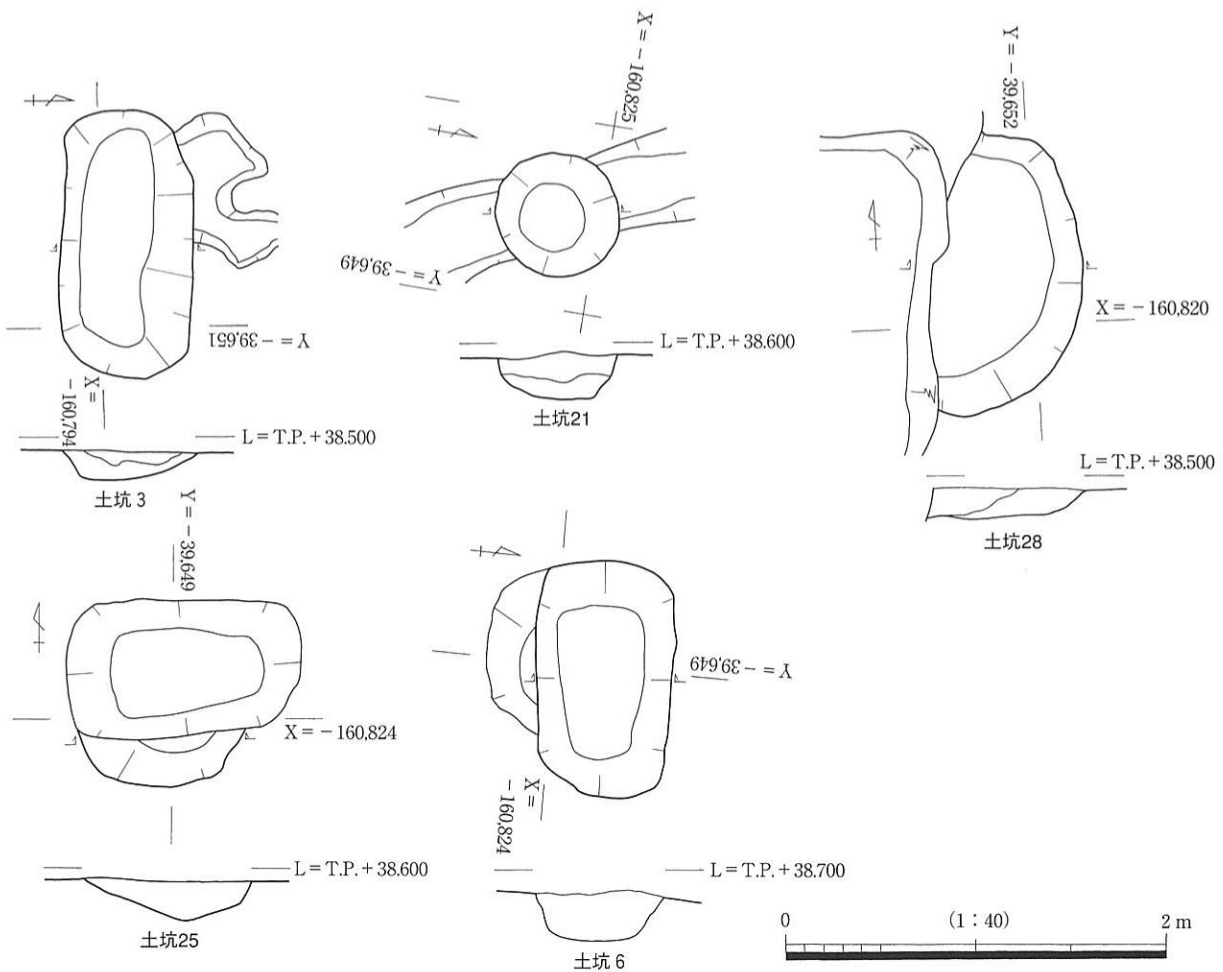
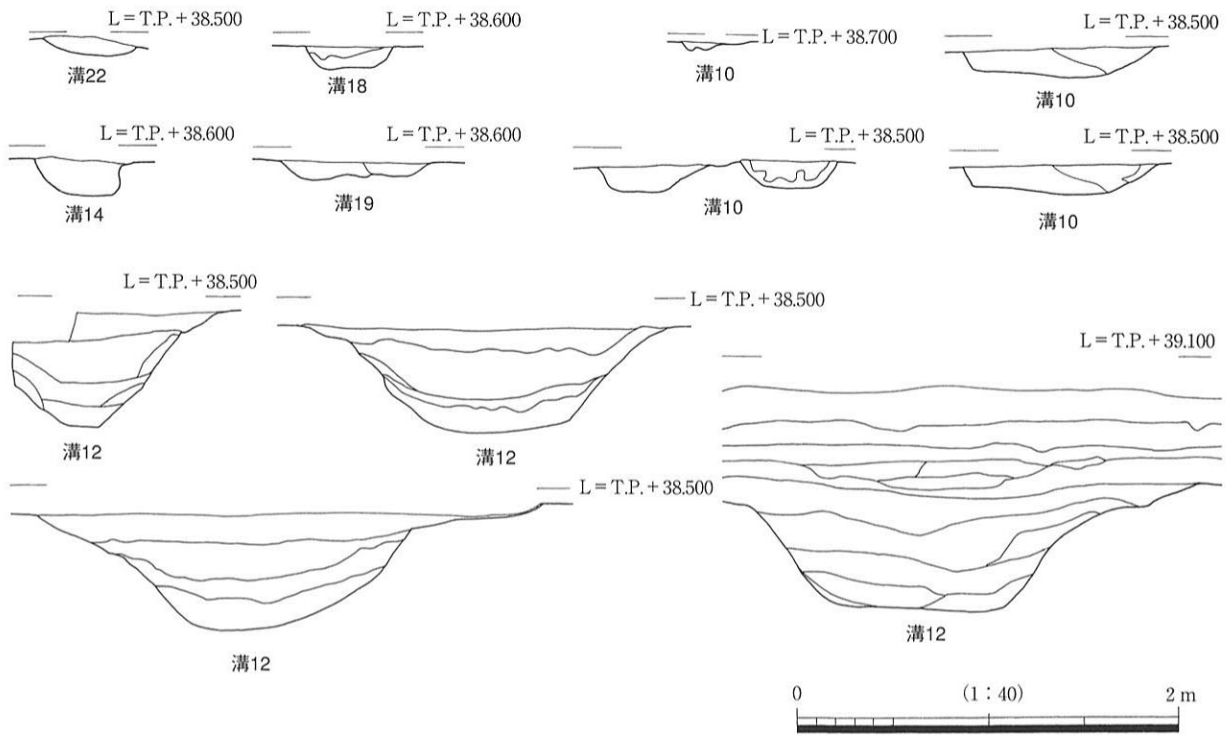


図90 1 F トレンチ 溝断面および土坑平・断面図

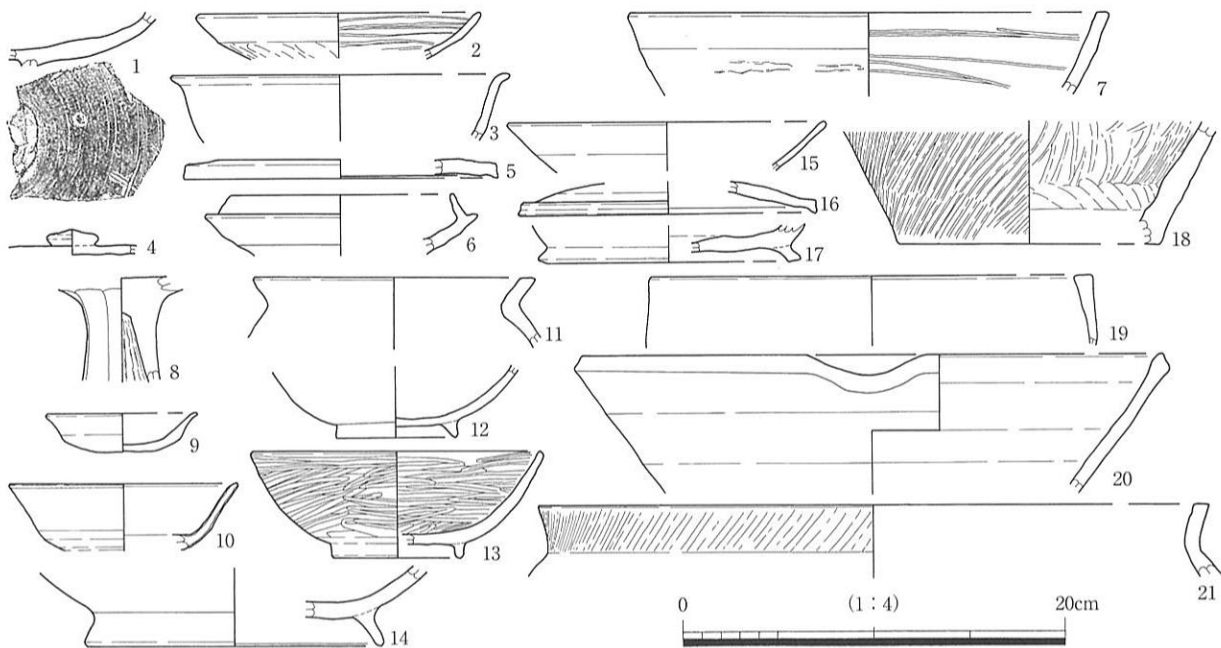


図91 1Fトレンチ 溝・井戸・落込および包含層（3・4層）出土遺物実測図

第9項 1Fトレンチ（図90・91 図版13-1、63-3・4、64-1 付図2）

真福寺遺跡側調査区西端に位置し、道を挟んだ北側は丹上遺跡側調査区の2Q・3Qトレンチがある。基本層序は丹上遺跡側調査区の2Q・3Qトレンチと大差はないが、各堆積層は薄い状況であった。遺構は基盤層上面のみで確認され、その種類には溝をはじめとして、土坑や落込などが検出された。溝12（図91-15~21 図版63-3、4）

トレンチ北端で検出された。調査区の北西隅で南側に向かって直角に曲がり、東側は近畿自動車道側調査区の陌線Ⅷと想定された溝2-64に連続する。規模は、幅2.0m前後、深さ0.5m前後を測り、断面形は、図90に示すような逆台形から偏平な「U」字形を呈する。埋土は黄灰色から灰褐色系の粘質土からなり、3層から4層に細分される。これらは、底部に向かうほど灰色味が増し粘性が高くなる。

出土遺物には図91-15から21に示す各種の土器がある。このうち16と17は上位から、18と20は下位からの出土である。15は瓦器碗で器形が偏平となることから、13世紀後半代以降に位置づけられる。16から18および20と21は須恵器で、16から18と21の4点は8世紀後半から9世紀代にかけての蓋杯や壺、甕である。20は東播系の片口鉢で、口縁部の形態から12世紀前半頃までに位置づけられる。

落込17（図91-11~14 図版13-1、92-6）

トレンチ北側に広がり、北側と西側を溝12によって削平されている。埋土は包含層の3層に近似するが、下層に4層相当層が存在せず、単なる斜面堆積とは考えられないことから落込として解釈した。

出土遺物には図91-11の土師器、12・13の瓦器碗、14の瓦器の鉢がある。瓦器碗は、高台が明瞭に作出され、内外面に非常に密な暗文が施されることから12世紀前葉までのものと考えられる。

この他にも溝が多数検出された。この中には埋土の様相などから、飛鳥時代のものと考えられる溝14や溝18などもあるが、錯綜が激しく、また、攪乱を被る部分が多いため詳細を知り得ない。

遺構出土遺物にはこの他にも8から10があり、8は溝11から出土した奈良時代後半の土師器の高杯、9は落込32から出土した瓦器小皿、10は近世の井戸に混入していた13世紀代の口禿口縁の白磁碗である。

また、包含層3層からは図91-1の須恵器高杯、2の13世紀代の瓦器碗、3の10世紀代の須恵器の碗が出土し、4層からは4の奈良時代の杯蓋、5の平安時代の杯蓋、6の古墳時代後期の杯身が出土した。

第3節 金属器・鑄造関連遺物

今回の調査では金属器の生産に係わる遺構・遺物の検出に努めた。その結果、遺構の検出には至らなかったが、多数の金属製品や鑄造に関連する遺物を採集することができた。

これらの中には、鋳滓や、溶かした金属が周辺に飛び散る際に生成される大小様々な金属粒なども含まれていた。後者については、その成分を明らかにするために比較的遺存状態の良好と思われるものを抽出して切断し、酸化のおよんでいない部位を露呈させて分析に付し、その結果を付章に掲げた。

製品は青銅製品が中心となり、一部に鉄製品が含まれている。その内容は表1に掲げるようなもので、銭貨を中心とし、装剣金具や仏像類に至る多種多様なものが含まれていた。

これらを、単なる遺失物や未知の堂宇に奉獻された装厳具の一部とみなす解釈も成り立とう。しかし以下に記す事象を以て、「河内鑄物師物」の営為の一つであったと積極的に評価する根拠としたい。

取瓶 (図92-4・5 図版96-1・2)

2点出土した。ともに3Eトレンチの包含層5層から出土したものである。双方の遺物自体が酷似していることや、近接する地点や層準より出土していることから同一個体である可能性が高い。

その構造は彎曲した甕の胴部破片に厚さ1cm程度の粗い真土を塗布するもので、内面には小豆色を呈する溶融物が厚く固着しており、一部には気泡が観察される部分も存在している。その隙間には部分的に緑青が観察されることから、銅製品鑄造のために使用されたものと理解できる。また、裏面には被熱

表1 銭貨一覧表

図版	種銭	遺跡	トレンチ	地区	層位	初鋳	分析番号	備考
97-2	和銅開珎	真福寺	3 E	E15 a 10	5層	708		日本 隸書体 新和同銅銭 3と4枚一組で自然流路から出土
97-3	和銅開珎	〃	〃	〃	3層	〃		〃 〃 〃 2 〃
97-4	□□□□	〃	〃	E16 a 1	〃	-	丹上-6	- 面径矮小化 郭抜け 縁僅かに遺存 模鑄銭?
97-5	□□元□	〃	〃	D16 j 1	〃	-	丹上-9	- 篆書体 書体より皇宗元寶と類推
97-6	□□元□	〃	〃	D15 i 9	〃	-	丹上-7	- 篆書体 書体より天聖元寶と類推
97-7	嘉祐元寶	〃	〃	E15 a 9	〃	1056	丹上-4	北宋 楷書体
97-8	開元通寶	〃	〃	D16 i 1	〃	621	丹上-8	唐 隸書体
97-9	□□元寶	〃	2 E	D15 f 5	〃	-	丹上-2	- 篆書体 銭種類別不可能
97-10	天聖元寶	〃	3 E	E16 a 1	〃	1023	丹上-5	北宋 楷書体
97-11	□□□□	〃	〃	D15 h 9	〃	-	-	- 面径矮小化 郭・縁抜け
97-12	□□□□	〃	〃	D15 i 9	〃	-	-	- 銭種類別不可能
97-13	□□元□	〃	〃	D15 h 9	〃	-	-	- 草書体 銭種類別不可能
97-14	□□□□	〃	〃	D15 i 10	〃	-	-	- 銭種類別不可能
97-15	□□□□	〃	〃	D15 f 10	〃	-	-	- 郭の一部のみ遺存 銭種類別不可能 模鑄銭?
97-16	□□通□	〃	5 E	D15 i 8	〃	621	唐	楷書体 背面下段「一」 破損のため現認可能は通のみ
97-17	□□□□	〃	3 E	D15 i 9	〃	-	-	- □□□寶か 銭種類別不可能
97-18	□□□寶	〃	〃	D15 i 10	〃	-	-	- 楷書体 寶のみ判読可能 銭種類別不可能
97-19	□祐□□	〃	〃	D16 i 1	〃	1093	北宋	草書体 3字欠損なれど書体より元祐通寶と類推
97-20	□□□□	〃	5 E	D15 h 8	〃	-	-	- □□元□か 銭種類別不可能
97-21	祥符元寶	〃	3 E	D15 h 10	〃	1008	北宋	草書体 保存処理のため現認不可能
97-22	□□□□	〃	6 E	E16 a 1	〃	-	-	- 銭種類別不可能
97-23	開□通寶	〃	〃	D16 i 4	〃	621	唐	隸書体 二字目不明瞭なれど書体より開元通寶と類推
97-24	□祐□寶	〃	5 E	D15 i 8	〃	1056	北宋	篆書体 背面上段「一」 書体より嘉祐元寶か通寶と類推
97-25	軋□重寶	〃	〃	D16 j 8	〃	758	唐	隸書体
97-26	□豐通寶	〃	6 E	D16 h 4	〃	1078	北宋	篆書体 一字目不明なれど書体より元豐通寶と類推
97-27	紹聖元寶	〃	5 E	D15 i 7	〃	1094	北宋	篆書体
97-28	皇宗通寶	〃	2 E	D16 e 6	〃	1039	丹上-3	北宋 楷書体 基盤層直上出土
97-29	皇宗通寶	〃	〃	D15 f 5	〃	-	丹上-1	北宋 楷書体
97-30	□□□□	〃	5 E	D15 h 8	3層	-	-	- 銭種類別不可能
97-31	元豐通寶	〃	〃	D15 i 8	〃	1078	北宋	草書体
97-32	元豐通寶	〃	6 E	D16 i 4	〃	-	北宋	草書体 表面重範のため面径肥大 裏面錯範
—	元豐通寶	丹上	1 R	C16 i 6	〃	1078	北宋	草書体 脆弱化激しく土塊ごと保存処理
—	開元通寶	真福寺	3 E	D15 g 10	〃	621	唐	隸書体 脆弱化激しく土塊ごと保存処理
—	宋通元寶	〃	〃	D15 i 1	〃	968	北宋	- 裏面を表とした保存処理のため現認不可能
—	□□元寶	〃	〃	D15 h 10	〃	-	-	- 銭種類別不可能 文字保存処理のため現認不可能
—	永□通寶	〃	〃	D16 h 4	〃	1411	明	楷書体 書体より永樂通寶と類推 脆弱化激しく土塊ごと処理
—	永□通□	〃	〃	D15 h 10	〃	1411	明	楷書体 書体より永樂通寶と類推 脆弱化激しく土塊ごと処理
—	□元通□	〃	5 E	D15 i 8	〃	-	-	- □□元□か 銭種類別不可能 土塊ごと保存処理

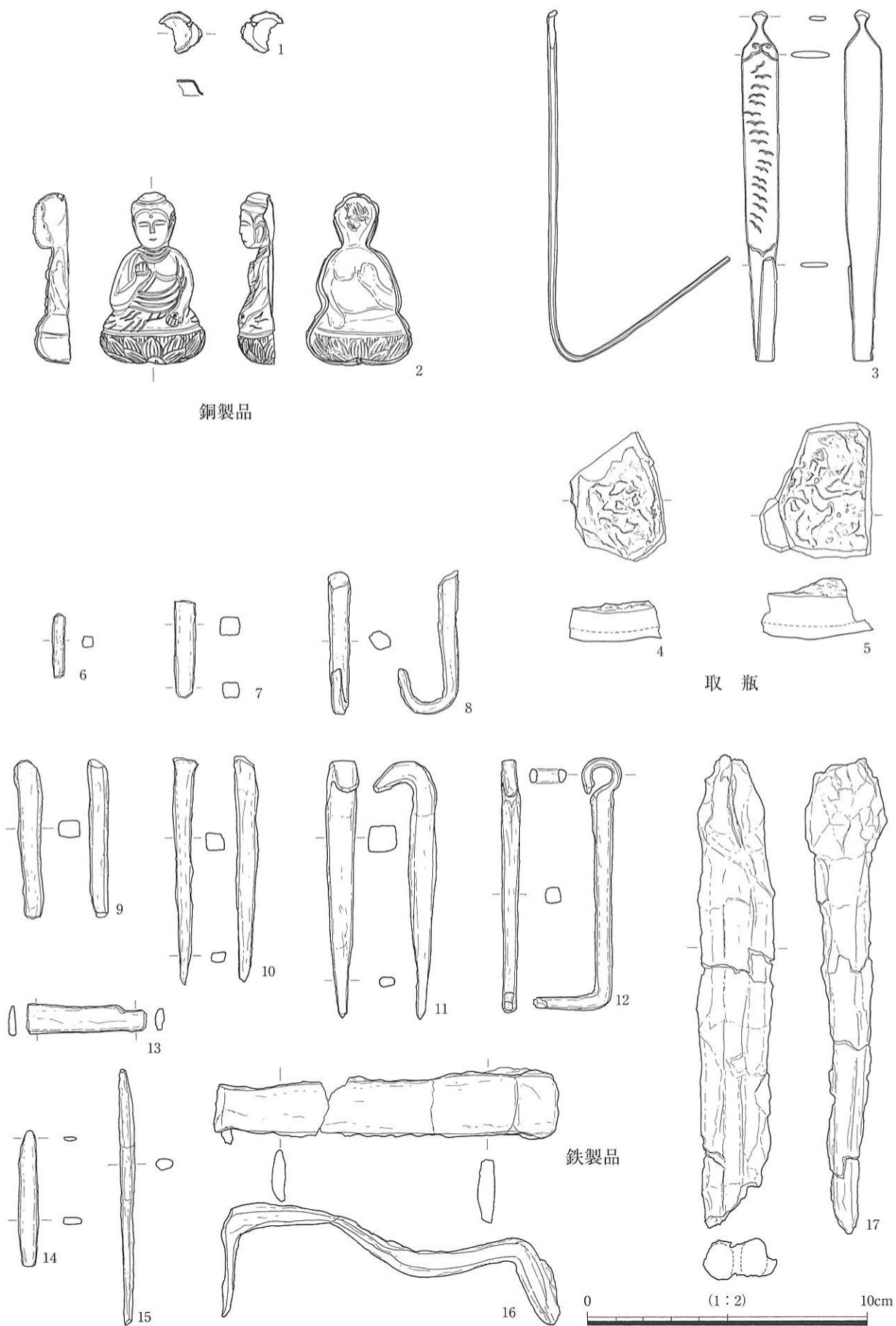


図92 金属器・鑄造関連遺物実測図

による変色部が認められ、灰色を呈する還元状態となる部位も観察される。

共伴遺物には飛鳥時代から平安時代前葉のものまでがあり、相当な時間幅を考慮しなければならない。しかし、南に位置する太井遺跡では本例に酷似する資料がまとまって出土しており、共伴する土器から奈良時代前半代までには稼働していたとされることから、これに近い時期の資料となる蓋然性が高い。なおかつ、今回の調査地周辺にも同類の技術的系譜をもつ集団が存在していたことを暗示している。

金属器（図92-1～17 図版96-1～4・97-1～32）

銭貨（図版97-1～32 表1）

和同開珎と各種渡来銭および、模鑄銭や鏹銭と呼称される類のものが出土した。図版97-2と3は和同開珎で、3 E トレンチの自然流路の底部から出土した。流路内堆積層は包含層5層に相当する。これらはすべて銅製で4枚が重なり合って鑄着しており、書体は判別できる限りでは新和同に分類される。

図版97-4から32は渡来銭類である。銭種とその特徴は表1に示すとおりで、唐代の621年に初鑄された開元通寶から、明代の1411年に初鑄された永樂通寶までがみられる。

これらはすべて包含層3層および基盤層上面から出土しており、共伴する土器類との時期的な整合性に矛盾はない。また、より下層に堆積する4層以下の包含層からは1点も検出されていないことから、これらの包含層が、渡来銭移入以前に形成されたことを証左している点においても有為である。

なお、長年土中に在ったため、錆化などにより相応の質量の減少は考慮せざるを得ないが、全体的に面径に対して非常に薄い傾向にあり、また、4や11のように著しく矮小化し銭文の判読も困難なものや、裏面の郭が抜けるもの、そしてまた、32のように錯範となるものなどが含まれており、単なる劣化とは断じ難い点を数多く指摘することができる。これらの諸相は模鑄銭や鏹銭と呼ばれる私鑄銭にまみられるものであることから、両者の関連性を調査するために金属成分の分析を行った。

詳細は付章に譲るが、注目される点を述べると、表1-7の嘉佑元寶と29の皇宗通寶は、銅が5%から6%なのに、鉄が70%近くから80%以上も含まれていた。また、表1-5・6・8・9・10・28については、銅の含有率が40%未満であるのに錫が15%以上含まれ、中には、4のように銅が1.5%以下なのに錫が50%以上含まれているものや、10のように銅が5%以下なのに錫が26%以上、鉛に至っては55%近くとなり、両者で全体の80%以上を占めるといものさえ確認されるという成果をもたらした。

なお、第2表の資料番号50・51・54の3点の鋳滓は、これらに近似した成分比率を示しており、これらの銭貨との関連性を考察する上において、極めて示唆に富む事実として特筆に値する。

不明金属製品（図92-1 図版97-1）

3 E トレンチの包含層3層より出土した。直径1.5cm程度の非常に薄い裁頭円錐形を呈する鉤状の銅製品で、鑄造または圧出しによる製品とみられる。凸部には鍍金が施されており、これを分析に付したところ、金以外に水銀が検出されたことから、その手法はアマルガム鍍金であったと判断される。

懸仏（図92-2 図版78-1・2、96-4）

3 E トレンチの包含層3層から出土した。鑄造技法を用いて、台座の上に座した仏の姿を白毫に至る細部まで陽出し、さらに、衣紋の一部と台座の連弁に太い毛彫を加えて紋様を際立たせ、最後に鍍金が行われている。金属の成分分析を行った結果、2割に満たない銅に8割弱の鉄を加えて用材となし、水銀成分が検出されたことから、その表面にアマルガム鍍金が施されていることが判明した。

仏は左手の仰掌上には薬壺とみられる持物を表現した契印を結んでおり、また、右手には施無畏印を手印として結んでいることから、薬師如来座像を像容として表現しているものと考えられる。

なお、頭部と台座の中央部には鑄造後に小さな穿孔が行われ、他の部位と結合させる仕口が作出されているが、頭部内面には図版96-4'のように靱殻が詰まったままの状態であることから、完成までには至っていなかったとの解釈も可能である。また、用いられる金属の成分比率が、鉄滓や一部の銭貨と近似することも、この地附近に存在したであろう工房の製作途上品である可能性を示唆する一助となる。

遺物の時期については、共伴遺物から15世紀以前の製作にかかるものであることは確実であるが、より詳細については、浅学が故に筆者の知識のおよぶところではない。

筭（図92-3 図版78-3・4、96-3）

3 E トレンチの包含層3層より検出された。釣針状に折れ曲がってはいるが、耳搔きと穂先の先端を欠損するのみで、ほぼ全形の窺える状態を保っている。材質は全面を緑青が覆うため、銅を主体とするものであることは確実だが、成分分析を行っていないため素銅なのか銅合金なのかは知り得ない。

引きのばした状態での全長は約10cm、幅1.2cm、厚さ0.3cm強である。耳搔の貝の内は紋様側を向け、頸から肩にかけての移行部はなだらかで明確な稜をなしてはいない。胴から雉子股にかけてのすぼまりもゆるやかで、そのまま竿に続き穂先へと至る。裏面は平滑に仕上げられ、肉はあまり付いていない。

胴の表面には毛彫による紋様が施され、その上位部は蕨手から眉形そして洲浜に至る部分までを左右に振り分けて一気に彫り込むが、そのまま側縁にまで達し小縁の表現はみられない。

下方は錆化のために不明瞭であるが、X線透過写真によると木瓜形ではなく、上位の眉形と洲浜を反転させたような紋様が側縁から直接刻み込まれているようで、上位と同様に小縁の表現はない。

これらの間には、鳥を抽象化したと思われる弧を二つ重ねたような紋様が一部で認識され、これもX線透過写真で確認した結果、枠内に蛇行しながら18ヶ所程度刻まれていることが判明した。

上記のような形態と紋様をもつことや、3層に包含される遺物の時期からみて、当該品は鎌倉時代末期から南北朝期にかけての、いわゆる古金工と呼ばれる一群に包括される製品であろう。

鋊（図92-16 図版70-3）

2 E トレンチで検出された土坑385の南西部より出土した。偏平な板状の鉄材の両端部を直角に折り曲げたもので、現状では中央が「S」字状に折れ曲がり、2つに折損している。

共伴遺物がないため所属時期を明らかにすることはできないが、遺構埋土の様相から飛鳥時代のものとなる可能性が考えられる。

鉄鉗（図92-17 図版77-4）

3 E トレンチ包含層5層の下位より出土した。全長17cm強を測るものであるが、錆化が非常に激しく、一部の形状からかろうじてそれと判断できる状態である。

ともに出土した遺物には、飛鳥時代から平安時代前葉にかけての土器類や先述の取瓶などがあり、このいずれかの時期に行われていた鑄造や鍛造などの金属製品加工に供された用具であると考えられる。

その他の鉄製品（図92-6～15 図版77-3）

鉄釘の残欠と思われるものや、鉤・鍵形鉄製品、板状・針状の鉄製品がある。鉄釘と考えられるものには図92-6・7・9・10・11の5点があり、それぞれ、3 E トレンチピット808、同トレンチ包含層4層、同トレンチ包含層3層、2 E トレンチ基盤層直上、同トレンチ包含層3層から出土した。

図92-8は3 E トレンチ包含層2層から出土した鉤形鉄製品、12は3 E トレンチ包含層3層から出土した鍵状の鉄製品、13と14は細長い板状の鉄製品で、それぞれ3 E トレンチの包含層4と、2 E トレンチの基盤層直上から出土した。図92-15は3 E トレンチ包含層3層から出土した針状の鉄製品である。

第4節 石器・石製品

本調査地から出土した包含層出土石器遺物として、ナイフ形石器2点、石鏃16点、スクレイパー3点、剥片1点、石核1点、石匙2点、楔形石器1点、両極剥片1点、石槍未成品1点を図示した。これらのものは複数の包含層より出土したもので、すべて遊離資料である。したがって、石器資料の時期を特定することは困難であるが、技術形態的特徴から推測し得るものについては文中に記すことにする。また、特に記述しない限りサヌカイト製である。

ナイフ形石器

図93-1は有底横長剥片を素材としたナイフ形石器であり、上端部を折損で失っている。素材の面構成は、右面は一枚のフラットなポジティブ面で構成され、左面は石核のポジティブ面と、剥片剥離作業による先行するネガティブ面によって構成されていたものと思われる。ブランディングはすべて右面を打面に連続して施されている。ブランディングによって左面の先行する剥片剥離作業に伴うネガティブ面はほとんど取り込まれており、左面下半分に一部残すのみである。

図93-2は有底横長剥片を素材としたナイフ形石器であり、上半部を折損により失っている。素材の面構成は、右面は一枚のポジティブ面で構成され、左面は石核のポジティブ面と剥片剥離作業によるネガティブ面と残された石核の素材作出以前の先行するネガティブ面の三枚の剥離面から構成されている。ブランディングは剥離単位がかなり大きい二枚と側縁端部に剥離単位の小さい連続しない剥離のみみることができ、上半部の折損はブランディングを行った際、生じたものと思われる。厚さ1.3cmとかなり厚く、刃部角も74.5度であり、刃部が鋭利なナイフ形石器であったという印象は受けない。

石鏃

図93-3は凹基無茎鏃であり、脚部の一方を欠損する。左面の一部には素材のポジティブ面を残しており、素材剥片を縦位に用いたものであると思われる。平面形は正三角形に近く、側縁は一部失われているので判断し難いが、一方の側縁上半部に若干の屈曲が窺える。基部の挟りは深く、逆V字形に仕上げられている。剥離調整は丁寧に施されており、反対側の側縁に抜けるほど細長い剥離も見受けられる。

図93-4は柱穴801より出土した凹基無茎鏃である。先端部を欠損する。平面形は縦長の二等辺三角形に近かったものと考えられ、側縁はほぼ直線状に仕上げられている。基部の挟りは逆V字形に仕上げられており、挟りの縁辺部に先行剥離面の凹みをそのまま利用したと思われる折損面状の剥離が一部残されている。脚端部の形状は直線状を呈する。

図93-5は凹基無茎鏃である。先端部と一方の脚端部を欠損している。平面形は縦長の二等辺三角形に近かったと思われ、側縁の調整は欠損により判断しかねるが、ほぼ直線状に仕上げられていたと考えられる。基部の挟りは深く、形状は逆V字形に仕上げられたと思われる。

図93-6は溝283北側の黒褐色土層より出土した凹基無茎鏃である。脚部の一方を折損し、もう一方の末端も折損する。左面の中央部に自然面が残されている。平面形は縦長の二等辺三角形に近いものと思われ、側縁はほぼ直線状に仕上げられているが、先端部にかけてすばまりをみせる。基部の挟りの形状は脚部の欠損によって判断しかねる。剥離調整は丁寧に施されている。

図93-7は凹基無茎鏃であり、破損を激しく受けている。両面に先端の折損部から派生した剥離痕が認められる。側縁の形状は直線的に仕上げられている。基部の挟りの形状は折損によって判断しかねる。

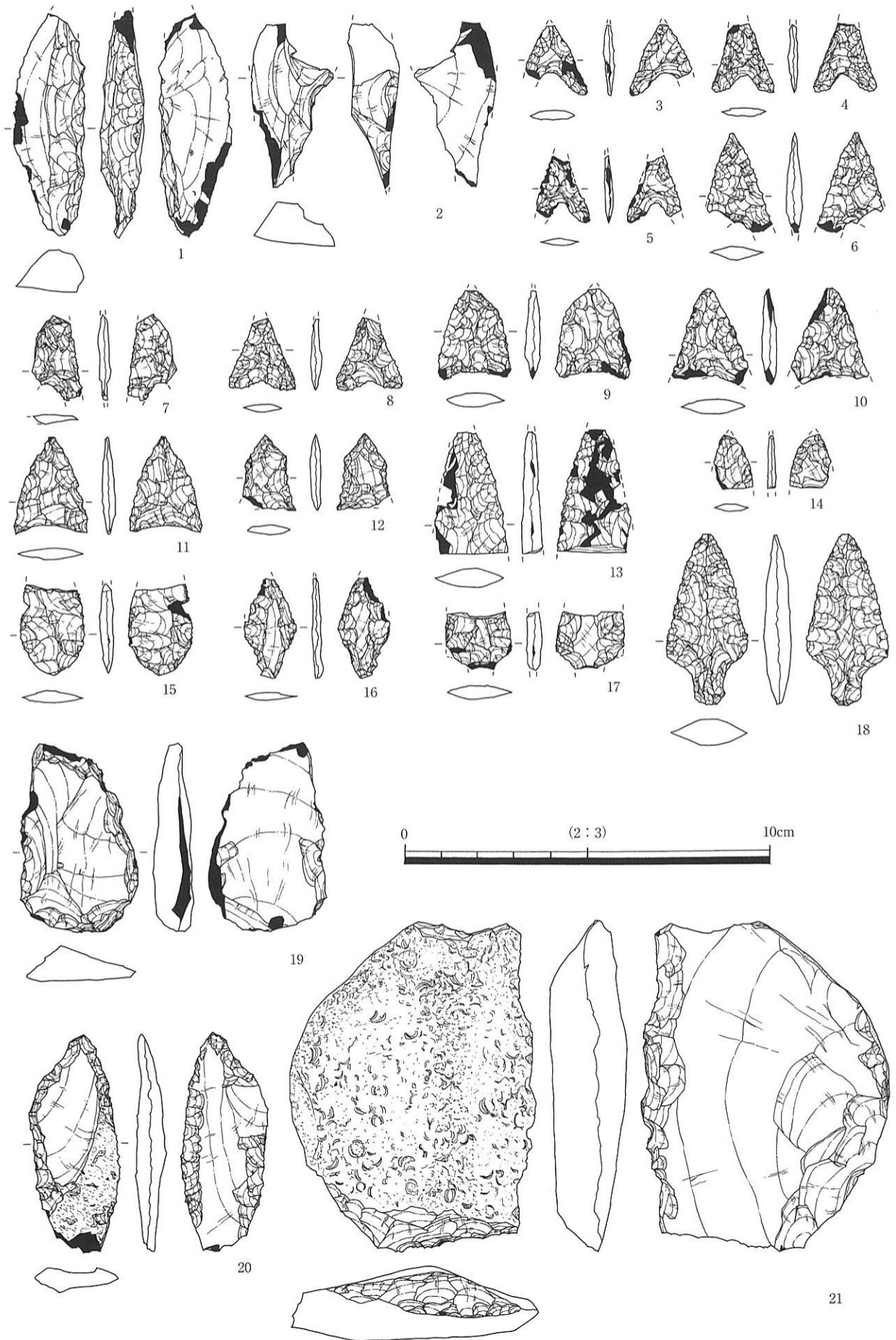


图93 石器实测图〔1〕

が、深く作りだされていたものと思われる。

図93-8は凹基無茎鏃であり、先端部を折損する。平面形は二等辺三角形に近いものと思われ、側縁はほぼ直線状に仕上げられている。基部の抉りは浅く仕上げられており、脚部が太く作りだされている。調整剥離の単位は大きい、丁寧に施されている。

図93-9は先端部と基部の両端部を欠損する平基無茎鏃である。平面形は鈍い正三角形を呈し、側縁の調整は一方では直線的に施され、もう一方では上半部に屈曲点をもつように施されている。基部の形状は両端部の欠損により判断し難いが、やや凹状になるように仕上げられていたと考えられる。調整剥離は比較的粗いが、側縁の屈曲点から先端にかけて細かな調整剥離が認められる。右面の一部には素材のネガティブ面を残す。

図93-10は凹基無茎鏃であり、脚端部の一方と末端および先端部よりの側縁縁辺部の一方を欠損している。左面に一部素材面を残し、素材剥片を縦位に用いたものと思われる。平面形は二等辺三角形に近く、側縁の調整は直線状に仕上げられている。基部の抉りは欠損によって判断し難いが、浅く施されていたと考えられる。剥離調整は、単位が大きい連続的に施されている。

図93-11は凹基無茎鏃であり、ほぼ完形品である。平面形は縦長の二等辺三角形に近く、側縁の調整は直線状に仕上げられている。基部の形状はやや凹状になるように作りだされている。

図93-12は上半部に屈曲をもち、平面形が五角形になるいわゆる五角形鏃である。縄文時代晩期の所産であると考えられる。基部の一方を欠損し、両面に素材面を残している。剥離調整はやや粗く施されている。

図93-13は破損が著しく、折損によって下半部を失っている石鏃である。側縁は直線的に仕上げられている。調整剥離は丁寧に施されており、一方の側縁に鋸歯縁状の剥離調整を確認できる。風化はあまり進行しておらず、鋸歯状の側縁をもつことから弥生時代中期以降の石鏃である可能性が高い。

図93-14は柱穴716より出土した石鏃である。破損により先端部のみが残っているため、平面形は不明である。一部素材面が残っており、剥片を横位に用いて作られたものであると考えられる。

図93-15は円基無茎鏃であり、上半部を折損している。池上・曾根遺跡をはじめ、弥生時代中期・畿内第Ⅱ～Ⅲ様式の諸遺跡で多くみられるタイプと同型式と考えられる。剥離調整は丁寧に施されている。

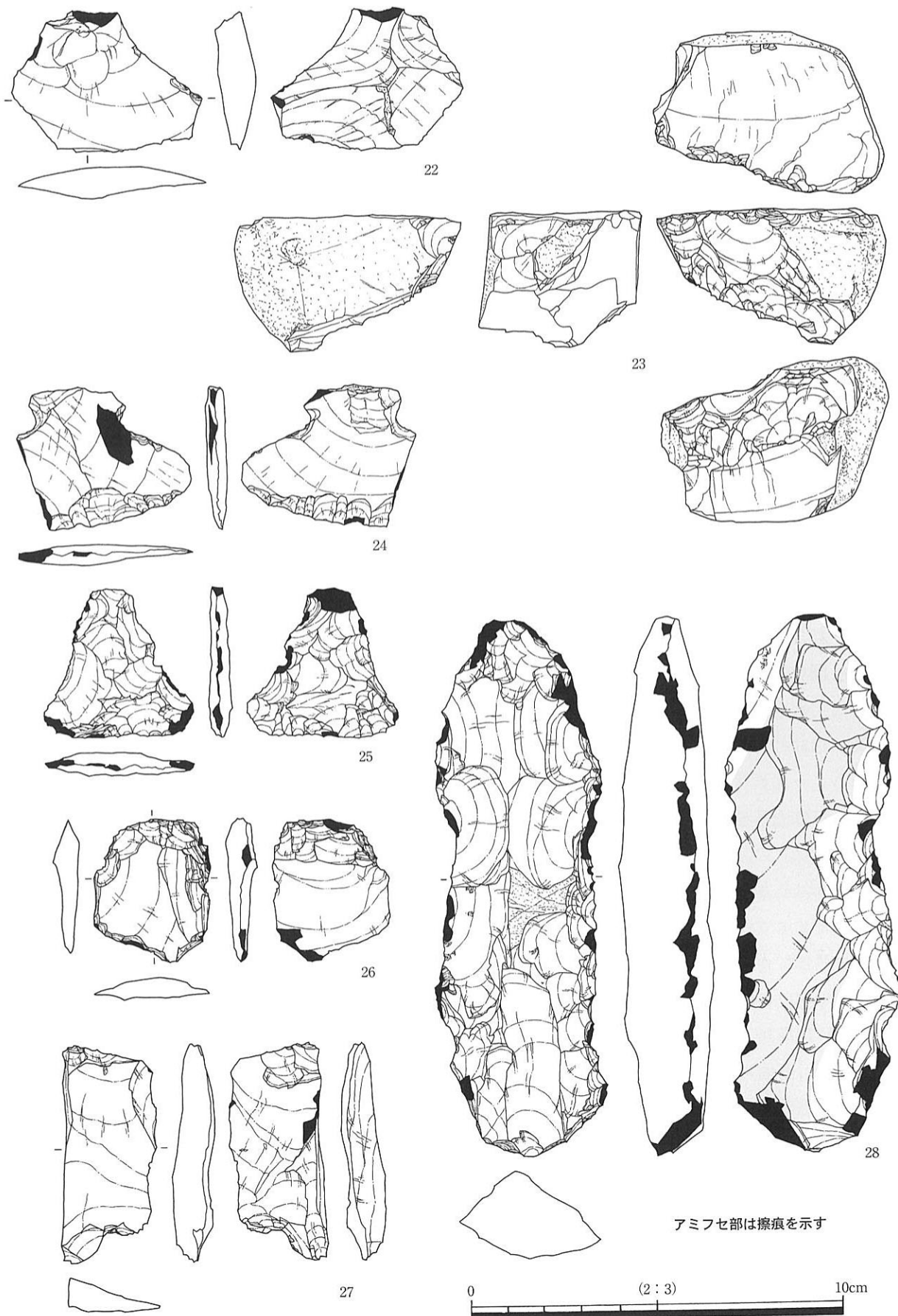
図93-16は凸基有茎鏃である。先端部と一方の側縁端部を欠損する。素材面を両面に残し、右面には素材のネガティブ面、左面には素材のポジティブ面が残り、素材剥片を横位に用いているのが分かる。側縁から茎部にかけての境目は不明瞭であり、くびれをもたないため、茎部が太い印象を受ける。調整剥離はやや粗く、階段状剥離が顕著に見受けられる。弥生時代中期後半以降のものと考えられる。

図93-17は溝108より出土した凸基有茎鏃である。上半部を折損し、茎部を欠損している。素材面を両面に残し、右面にポジティブな素材面、左面にネガティブな素材面を確認できる。側縁から茎部にかけての境目部分が欠損によってわずかに失われるが、明瞭に境目を作りだしていたと思われる。

図93-18は凸基有茎鏃であり、先端に衝撃剥離痕があるのみでほぼ完形品である。右面に一部にネガティブな素材面を残している。側縁から茎部にかけての境目は明瞭であり、側縁は直線的に作られている。畿内第Ⅳ様式に伴う特徴的な形態であり、調整剥離は非常に丁寧である。

削器

図93-19は縦長剥片を用いた削器である。上端部と、刃部と考えられる側縁端部を欠損している。素材剥片の打点は右面端部にみられる剥離面と左面の調整によって除去されている。素材の面構成は、右



アミフセ部は擦痕を示す

0 (2:3) 10cm

図94 石器実測図〔2〕

面が一枚のポジティブ面で構成され、左面が五枚のネガティブ面で構成されており、左面上端部において一部自然面を残す。剥離調整は右面を打面にほぼ全周にわたって施され、内部には進行していない。下端部にツブレ状の階段状剥離によって急角度調整が施されており、搔器としての機能も考えられるが刃部としては鈍い調整であるため、刃部は欠損している左面の右側面に作出されたものと考えられる。

図93-20はピット31より出土した削器である。横長剥片を素材とし、下端部を欠損する。素材として用いた剥片は右面が一枚のポジティブ面で構成され、左面が一枚のネガティブ面と自然面で構成されている。左面のネガティブ面は本資料の素材剥片と同様の剥片を作出した時に生じたものと考えられる。左面左側縁に刃部が作りだされている。剥離調整は両面になされており、右面においては右側縁に残る素材面のバルブ部分と下端部以外と、左面では右側縁下半部と左側縁下端部以外にはほぼすべて連続的に施されている。素材剥片の打点は左面の調整剥離によって除去されている。

図93-21は大型の横長剥片を用いた削器である。右面が一枚のポジティブ面、左面がすべて自然面で構成された素材剥片を用いており、自然面を打面に用いている。刃部は右面側縁と左面下端部に作りだされている。調整は大きめの剥離で右面の両側縁、左面の上下端部に施されている。左面下端部の調整は急角度に施されており、搔器としての機能も考えられる。

剥片

図94-22は縄文時代対応層と思われる地山直上の谷状地形暗褐色粘質シルト層出土の剥片である。上端部を欠損し、打面調整が確認できる。左面に一部自然面を残している。

石核

図94-23は石核であり、石理の多い赤色チャートを用いている。左面～右面右側と側面の一部に自然面が残る。上面のフラットなポジティブ面の剥離の後、この面を打点に用いて裏面上半の剥離を形成している。そして、この裏面上半の剥離形成の後、下面のフラットなネガティブ面を打点に裏面下半の剥離形成を行っている。剥離の状況から、石理に沿って分割された礫を用いたものであると考えられる。

石匙

図94-24は横形の石匙であり、体部の一部を欠損している。素材剥片は右面が一枚のポジティブ面、左面が三枚のネガティブ面によって構成される横長剥片を用いており、莖部上端部に打点として用いた自然面を残している。刃部は比較的大きめの単位の剥離調整によって両面調整が施されており、外側に向かって外彎する丸みをもった刃部が作りだされている。抉入部は粗い剥離調整によって作出されている。

図94-25は莖部と左右の刃部先端を欠損する石匙である。莖部を失っているため、つまみ部および、抉入部の作出による調整剥離の有無は不明であるが、側縁が莖部から刃部へと広がるように作りだされている横形の石匙であろう。平面形は正三角形に近い。単位の大きい剥離調整によってほぼ全周を成形しており、右面にポジティブ、左面にネガティブな素材面を一部残している。刃部調整は右面に連続的に施し、左面はまとまりのない調整剥離がなされており、一部階段状剥離を残している。刃部は直線状に作りだされている。

楔形石器

図94-26は楔形石器である。上端、下端は刃部状を呈しており、両面の上半部に階段状剥離、左面の下半部に細かな剥離が生じている。左面には両側縁から生じた二枚のネガティブな素材面が残っている。右面の主要剥離面はバルブが発達せず、リングも不明瞭であるため、両極打法によるポジティブな剥離面と考えられ、このポジティブ面を打面に左面下半部の細かな剥離が生じている。

両極剥片

図94-27は両極打法によって作出されたと考えられる剥片である。平面形は縦長の長方形を呈しており、上端部両面には複数の剥離面が生じている。断面三角形であり、側面に折断面状の剥離がみられる。下端部は両極打撃によって折損したと思われ、不定形な形状を呈する。右面のポジティブな主要剥離面と左面のネガティブな剥離面はバルブが発達せず、リングが反転しているため、両極打法によって生じたものと考えられる。

石槍未成品

図94-28は溝556より出土した石槍未成品であり、側縁部を所々欠損している。大形の横長剥片を素材としており、右面には素材のポジティブ面、左面には一部自然面を残している。このため、本資料の厚みは素材として用いた剥片の厚みとほぼ変わらないものと思われる。調整剥離は非常に粗く、単位の大きい剥離によって施されている。剥離によって厚みを減じることができておらず、断面形は三角形に近い状態のままである。剥離調整は左面、右面の順で行われており、素材剥片のネガティブ面である左側から調整剥離が施され、右面の右半部の調整剥離を行った時点で調整剥離を止めている。右面上端部と左面中央左部には打撃痕が残る。右面に擦痕が認められ、調整剥離の境界が不明瞭になっている。擦痕は右面中央部のみ認められ、また左面にはほとんど擦痕は認められない。このため、この擦痕が研磨によって生じた可能性が考えられる。また、磨製石剣を製作するための研磨とは厚みと調整の状況から考えにくく、東大阪・八尾市山賀遺跡や富田林市喜志遺跡の打製石剣未製品に類似するような打製石剣製作途中の平面研磨とも考えられよう。しかし、この擦痕が研磨であるのならば、研磨方向および研磨面がより明瞭に残存していても良いものであるが、非常に不明瞭な擦痕であるため、ローリングによって生じた可能性も残している。より精密な分析が求められる。以上のことから、はっきりした本資料の所属時期は遊離資料のため不明であるが、その技術形態的特徴より弥生時代前期から中期あたりの所産と思われる。

表2 石器一覧表

図番号	図版番号	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	トレンチ	地区	出土遺構	出土層位	登録No	備考	
93-1	98-1	ナイフ形石器	サヌカイト	(62)	20	12	11.5	2 E	D16 i 6	建物30柱穴80	包含層 3層	233		
2	2	〃	〃	(45)	(22)	12	8.2	3 E	D15 i 10		〃 4層	1244		
3	3	石 鏃	〃	(19)	(17)	3	0.4	6 E	E14 a 4		〃 3層	2212		
4	4	〃	〃	(19)	18	3	0.5	3 E	D16 e 3				1553	
5	5	〃	〃	(18)	(15)	2	0.2	4 E	不明		包含層 1層	1687		
6	6	〃	〃	(27)	(18)	4	1.2	2 E	D16 j 6		〃 3層	231		
7	7	〃	〃	(24)	(14)	3	0.7	〃	D16 c 8		〃 4層	617		
8	8	〃	〃	(20)	(18)	3	0.5	1 F	不明		不明	145		
9	9	〃	〃	(25)	20	5	1.8	3 E	D16 f 1		包含層 4層	1291		
10	10	〃	〃	(27)	21	4	1.4	〃	D16 h 1		〃	1027		
11	11	〃	〃	27	(15)	3	1.4	4 E	E15 e 1		黄褐色シルト	1835		
12	12	〃	〃	21	(20)	3	0.8	3 E	D15 i 10		包含層 4層	1026		
13	13	〃	〃	(34)	(11)	6	3.5	〃	D15 h 10		〃	1036		
14	14	〃	〃	(15)	18	2	0.2	〃	D16 d 2		建物31柱穴71		1535	
15	15	〃	〃	(25)	15	4	1.5	4 E	E15 f 9		包含層 1層	1840		
16	16	〃	〃	(28)	(18)	3	0.8	2 E	D16 h 7		〃 2層	215		
17	17	〃	〃	(16)	22	5	1.2	8 E	D17 j 7		溝1008		2354	
18	18	〃	〃	47	32	8	5.4	6 E	E16 e 2		包含層 3層	2225		
19	19	削 器	〃	(52)	23	11	17.8	3 E	D16 g 4		〃 2層	1317		
20	20	〃	〃	60	68	8	9.3	2 E	D16 i 7		ビット31		287	
21	21	〃	〃	91	52	21	142.2	5 E	D15 h 7		包含層 5層	2170		
94-22	22	剥 片	〃	(38)	61	11	16.9	6 E	D16 j 3	谷状地形	暗褐色シルト	2281		
23	23	石 核	チャート	37	61	41	112.7	2 E	D16 j 6	包含層 3層	233			
24	99-24	石 匙	サヌカイト	(39)	(46)	5	8.4	5 E	E15 b 5	〃 2層	1997			
25	25	〃	〃	41	40	6	8.0	6 E	D16 j 4	〃 3層	2208			
26	26	楔形石器	〃	39	31	8	7.7	3 E	D15 j 9	〃 5層	1167			
27	27	両極剥片	〃	59	26	10	12.6	4 E	E15 d 9	〃 3層	1862			
28	28	石槍未成品	〃	145	46	24	167.5	3 E	E15 a 1	溝556		1193		

註：各種法量の単位は長さがmm、重量がg、() 付の数値は残存値を表す。

第V章 ま と め

以上、今回の丹上遺跡・真福寺遺跡の調査成果について述べた。広大な面積を3年間にわたって発掘調査を行ってきた結果、それに比例して得られた資料も膨大なものであった。

ここでは、本文中に詳述したこれらの遺構や遺物を整理し、当該地域の特質を述べてまとめとしたい。

まず、出土遺物には、後期旧石器時代の国府型ナイフ形石器から、江戸時代にかけての陶磁器類など多種多様なものがみられた。中でも、多岐にわたる鑄造関連遺物の出土は、「河内鑄物師」の存在を具体的に示す資料として、本遺跡周辺の地域的特質を如実に表しているといえる。

遺構では、48棟にもおよぶ掘立柱建物を検出したことが注目される。これらは飛鳥時代前半代のもの30棟と、平安時代前半代を中心とするもの18棟とに大きく2分される。

飛鳥時代の掘立柱建物群は、それぞれに小異はあるが西偏する主軸をもつことと、柱の掘方が特徴的な埋め土となっていることで共通している。これらは、建物同士が直接重複関係にあるのがみられるため、複数時期にわたって建築されたものであることは確実である。しかし、それらから出土する遺物は飛鳥第Ⅱ期を大きく前後するものではなく、時間差を反映するまでには至っていないことから、その存続期間は比較的短いものと考えておきたい。

また、それぞれの群構造については詳細な検討を行ってはいないが、倉庫と考えられる建物8と建物12を中心とし、それぞれを1単位として考えるならば、これらに大型建物の建物19と建物35が主屋として互いに対をなし、つづいて梁間2間、桁行4間の建物と、一回り規模の小さな梁間2間、桁行3間の建物が2棟ないし3棟付随し、さらに両間1間ずつの建物が伴うという図式が成立する。そして、これら2単位が、2時期に渡って建て替えられたと考えるならば、検出された棟数にほぼ合致する。

つづいて、この解釈によって建物配置をみると、両単位とも倉庫を南西端に、主屋を北東端に配置することとなり、それらの間に一回り小型の建物群を配する位置関係になるとの見解が成立する。

この見方には一定程度の整合性がみいだせそうである。ただし、井戸が1基しか検出されていないことから、これを共用していたとの前提条件が必要であることを問題点として書き止めておく。

なお、建物の主軸が西偏していることについては、この附近の地形に則して建物を建築した結果、このような方向となったとする考え方と、第Ⅱ章で述べられているように、歴史地理学の研究成果からその存在が指摘された斜向地割りに規制されたものとする二つの考え方ができる。

今回の調査区周辺は、地形の傾斜と推定地割りの方向が重なる部分に相当するため、検証する要素に乏しいが、一つの参考資料として丹上遺跡の近畿自動車道側調査区で検出された飛鳥時代の溝と斜向地割りの関係について記しておく。丹上遺跡で検出された溝は、並列して検出された溝2-115と溝2-116とされるもので、その南側約320mには推定古道がこれにほぼ並行してのびている。両者間の距離を古代の規準尺に用いられることのあった一町約106mで割るとほぼ三町に相当することとなり、この距離の関係と平行する位置関係となる事実とを単なる偶然の一致とするには躊躇せざるを得ない。

従って、その中間地点に展開する今回の建物群が、単に地形の傾斜に則って建てられたものではなく、この斜向地割りに規制を受け主軸を西偏させている可能性があることを完全には否定できない。

ちなみに、集落の南北を区画するように掘削されている飛鳥時代の溝群もこの斜向地割りに平行している。調査当時、2条が対をなすようにして並走する様相は、道を彷彿とさせるのに充分であった。

つづいて、平安時代前半代の建物群18棟については、本文中においてその平面形や、主軸の方向、埋め土の様相、重複関係など個々の様相について詳述した。建物が直接重複関係にあり、新旧関係が判明しているものを列挙するならば、建物25は建物24より、建物26は建物28より、建物27は建物46より、建物29は建物28や建物36より、建物33は建物32より、建物34は建物36より、建物40は建物24や46より新しい。これに出土遺物の時期や他の特徴を加味するならば、以下の5群に群別が可能となる。

まず、1群は建物45と建物46の2棟からなる。根拠は、平面形態が近似していることや、重複関係からこの2棟が最も古い段階のものと判断されることからである。出土遺物がないため詳細時期は不明であるが、飛鳥時代の建物群とは明らかに異なり、また、重複関係から2群よりは確実に先行する。

つづく2群は建物24・建物25・建物28・建物31・建物36の5棟から構成される。これらは平面形が近似すること、主軸がほぼ真北となること、整然と配置されていることが特徴である。埋納された状態や、破片となって出土した須恵器瓶子が9世紀初頭のものであることから、該期の建物と考えられる。

そして3群は建物32・建物34、建物40の3棟よりなる。これらの時期は、重複関係から4群に先行することは確実だが、出土遺物がないため詳細は不明である。しかし、相互の建物の平面形態に強い類似性が認められること、平面的位置関係が他群との併存を認め難い状況となることから別群と捉えた。

さらに4群は建物27、建物29、建物33の3棟より構成される。これらは柱筋を揃えて建築されていることが特徴である。建物29からA類の黒色土器や緑釉陶器など、10世紀初頭までの遺物が出土している。

最後に5群は建物22、建物26、建物30の3棟で成り立つ。他の建物と直接的な重複関係にないことで、確実性に欠けるが、建物30から10世紀前半代までにかけての黒色土器A類や土師器が出土したこと、すべて総柱の建物構造であることから最後に位置づけた。なお、2Eトレンチで検出された建物18と45は2棟のみが離れた位置で検出されたことや、比較する資料に乏しいためこの中に含めてはいない。

これらの建物は8世紀末頃から10世紀前半代までの約150年間に順次建て替えられているが、中でも2期の建物群は上記のような特徴をもつことで異彩を放っている。東側については削平が激しく遺構の分布状況を完全には把握できないが、報文中に示した中軸線で折り返すと、建物36の東側柱列と対称の位置に小ピット2基があることに気づく。これを建物36と左右対称に配された建物の痕跡と捉えるならば、南側に開く「コ」の字形に整然と配置された建物群を復原することができる。出土遺物の中にも瓦や凝灰岩片が含まれ、平瓦の出土が目立つことから瓦棟の建物であった可能性もある。そして、周辺からは石製巡方のほか墨書土器や風字硯が出土し、官人や識字層の存在を窺わせる。また、当時相当な奢侈品である越州窯系青磁をはじめ緑釉・灰赤などの瓷器類も出土しており、一般集落とかけ離れたその内容は、この建物群が地方官衙に類する施設であったことを暗示しているのかも知れない。広大な面積を調査したにも係らず、該期の井戸がないのも日常の生活が営まれなかった故であろうか。

そして、12世紀以降、調査地周辺は一変して農地に変容する。近辺には鑄造工房が存在したようで、それに係わる多量の遺物が出土した。製品も数多く検出され、その内容も多岐におよぶ。それらの製品には鑄造技術以外に彫金技法や鍍金技術までもが用いられており、ともすれば鑄造技術の卓越性のみが強調される「河内鑄物師」の中に各種技術を駆使できる職能集団が存在していたことを推定せしめる。

また、銅貨の中には、他の銭貨と比較して規格的にも材質的にも不具合な製品が含まれていた。このような貨幣が出土した背景は推して知る可しであり、私鑄銭とも係わる問題を提起することとなった。

以上、成果をまとめた。遺跡の劃期は飛鳥時代、平安時代、鎌倉時代にある。水の得にくい地理的条件を克服し、開発が進められた背後には、狭山池の動向が深く関与していることも忘れてはならない。

付 章 丹上・真福寺遺跡鉍滓・金属分析報告

株式会社 第四紀地質研究所 井上 巖

目 次

- 1 実験条件
 - 1-1 分析法
- 2 蛍光X線分析 (XRF) 結果
 - 2-1 Fe (鉄) - Cu (銅) の相関について
 - 2-2 Cu (銅) - Sn (錫) の相関について
 - 2-3 Cu (銅) - Pb (鉛) の相関について
 - 2-4 不明金属製品と懸仏について
 - 2-5 炭素主体物質について
- 3 蛍光X線分析 (EDS) 結果
- 4 まとめ

図 目 次

- 第1図 Fe (鉄) - Cu (銅) 図
- 第2図 Cu (銅) - Sn (錫) 図
- 第3図 Cu (銅) - Pb (鉛) 図

表 目 次

- 第1表 金属化学分析表
- 第2表 鉍滓・金属化学表
- 第3表 金属化学成分分類表
- 第4表 炭素主体化学分析表
- 第5表 製品化学分析表 (EDS)

付 表

- 1 銅銭化学分析表

1 実験条件

1-1 分析法

化学分析は日本電子製エネルギー分散型蛍光X線分析装置J S X-3200 (XRF)と日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光X線分析装置(EDS)をセットしたものと2種類行った。

鋳滓はダイヤモンドカッターで切断し、平滑な面、製品は直接製品表面をX線照射範囲が約15mmφの試料台にのせ分析した。

実験条件は、バルクFP法(スタンダードレス方式)、分析雰囲気=真空、X線管ターゲット素材=Rh、加速電圧=30kV、管電流=自動制御、分析時間=200秒(有効分析時間)である。

金属を対象とする場合には分析対象元素をP, S, Ti, V, Cr, Mn, Fe, Cu, Zn, As, Ag, Sn, Sb, Au, Hg, Pbの16元素を対象とし、第1表 金属化学分析表を作成した。

金属を含む鋳滓および金属対象とする場合には、分析対象元素をNa, Mg, Al, Si, P, S, K, Ca, Ti, V, Cr, Mn, Fe, Cu, Zn, As, Ag, Sn, Sb, Au, Hg, Pbの22元素とし、第2表 鋳滓・金属化学表を作成した。

炭質物を多く含む物質については鋳滓および金属分析の対象元素にC(炭素)を加えた23元素とし、第4表 炭素主体化学分析表を作成した。

分析値は含水量=0と仮定し、100%にノーマライズされた型式で主要および微量元素を重量%で表示した。

主要元素の重量%で第1図 Fe-Cu図、第2図 Cu-Sn図、第3図 Cu-Pb図の3組の組み合わせで図を作成した。

日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光X線分析装置(EDS)では、製品の表面を電子顕微鏡で直接観察し、金属面を選択して分析した。

実験条件は加速電圧:15kV、分析法:スプリント法、分析倍率:200倍、分析有効時間:100秒、分析指定元素はTi, Mn, Fe, Cu, Zn, As, Ag, Sn, Sb, Au, Hg, Pb12元素で行った。(分析元素数に限界があり、12元素とした)分析結果により、第5表 製品化学分析表(EDS)を作成した。

2 蛍光X線分析(XRF)結果

金属を対象とする分析対象元素はP, S, Ti, V, Cr, Mn, Fe, Cu, Zn, As, Ag, Sn, Sb, Au, Hg, Pbの16元素で、第1表 金属化学分析表に示す通りである。分析結果に基づいて第1図 Fe-Cu図、第2図 Cu-Sn図、第3図 Cu-Pb図を作成し、付表1 銅銭化学分析表に示す銅銭の分析値をあわせて記載した。

分析結果に基づいて製品と鋳滓はその成分により銅主体、鉄主体、鉄・銅混合、錫主体の4タイプと金属を少量しか含まないケイ素主体の5タイプに分類された。

このうち金属を少量しか含まないケイ素主体は第1図～第3図では除外した。

2-1 Fe (鉄) -Cu (銅) の相関について

第1図に示すように製品と鋳滓はその成分によりCuが70~100%の領域にあるものが銅主体、Feが70~100%の領域にあるものが鉄主体、Cuが25~50%、Feが0~60%の領域にあるものが鉄・銅混合、Cuが0~25%、Feが0~60%の領域にあるものが錫主体の4タイプに分類される。

銅主体の領域には真福寺遺跡出土の丹上-10の不明金属製品裏面側が含まれるが、銅銭は一つも含まれない。この領域には貞観永寶と乾元大寶を除く付表-1の銅銭が含まれる。

鉄・銅混合の領域には先述の丹上-10の不明金属製品表面側、真福寺遺跡出土の丹上-11の懸仏裏面側、丹上-3の皇宗通寶が含まれる。

錫主体の領域には丹上-2の□□元寶、丹上-5~9の銅銭が集中し、鋳滓との関係で云えば丹上-50、51、54が組成的に近い。

鉄主体の領域には丹上-1の皇宗通寶、丹上-4の嘉祐元寶、丹上-11の懸仏表面側が含まれる。

2-2 Cu (銅) -Sn (錫) の相関について

Znが10~35%、Cu 0~40%の領域には丹上-2、3、5、7~9の銅銭、丹上-50、51、54の鋳滓が集中する。丹上-6の錢種不詳銅銭はSnが50%+と高い含有量を示し、異質である。

2-3 Cu (銅) -Pb (鉛) の相関について

鉄・銅混合鋳滓はPbが15~45%、Cuが10~60%の領域にあり、分散する。

錫主体はPbが5~20%、Cuが0~40%の領域に分布するが、丹上-3の皇宗通寶を除くとCuが0~25%の領域に集中する。丹上-5の天聖通寶はPbが55%+と高く、異質である。また丹上-2の□□元寶もPbが40%+と高く異質である。丹上-10の不明金属製品、丹上-11の懸仏は共にPbの含有量が3%以下と低い。

2-4 不明金属製品と懸仏について

丹上-10の不明金属製品の表面はAu (金) が7%、Hg (水銀) が0.7%検出され、また、懸仏の表面もAu (金) が1.4%、Hg (水銀) が0.18%検出され、表面が金で鍍金されていることが推察される。

2-5 炭素主体物質について

第4表 炭素主体化学分析表に示すように丹上-41と44は黒色で表面に光沢のある物質はC (炭素) の含有量が70~80%と高く、Feも20~25%で鉄を含む炭質物である。

3 蛍光X線分析 (EDS) 結果

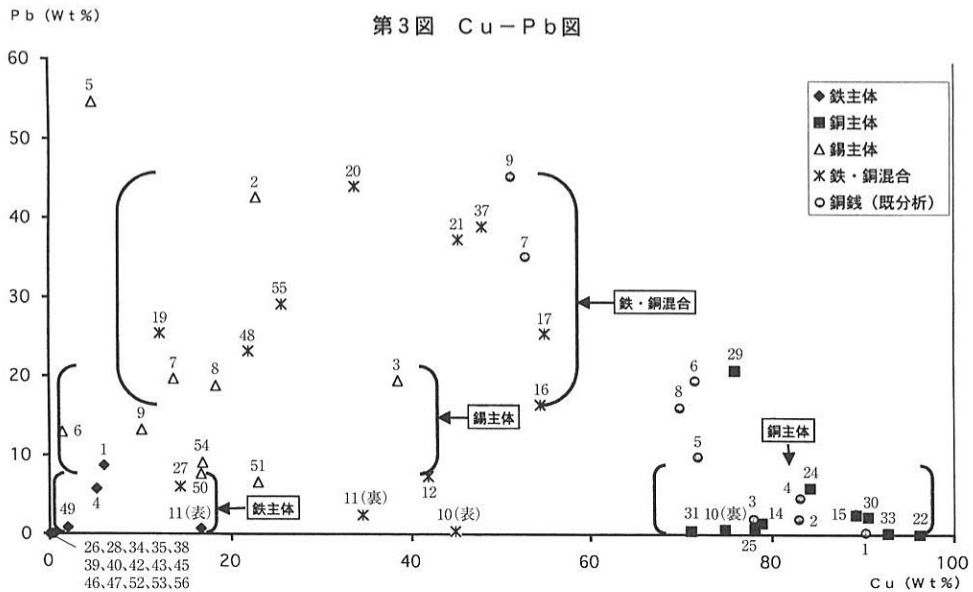
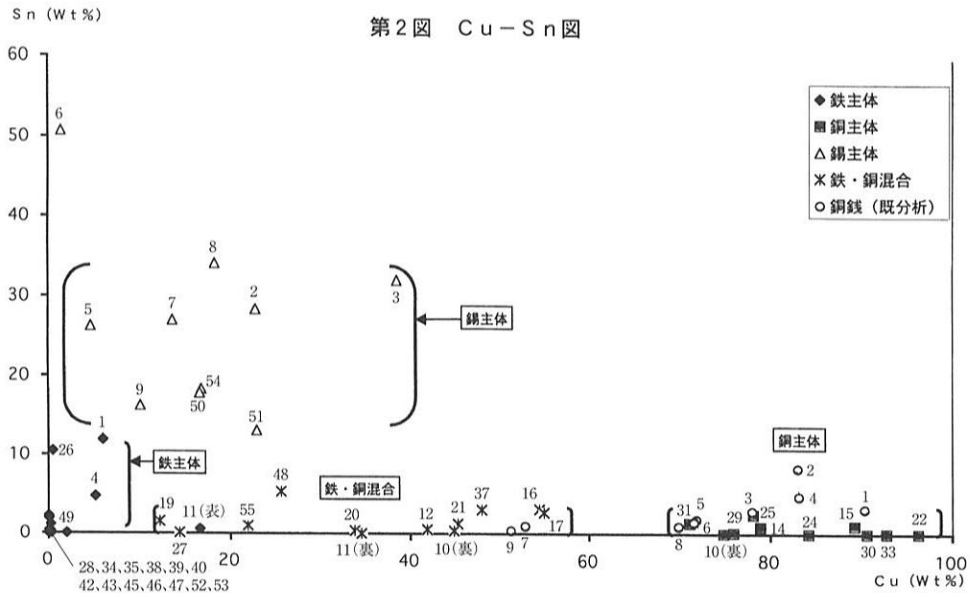
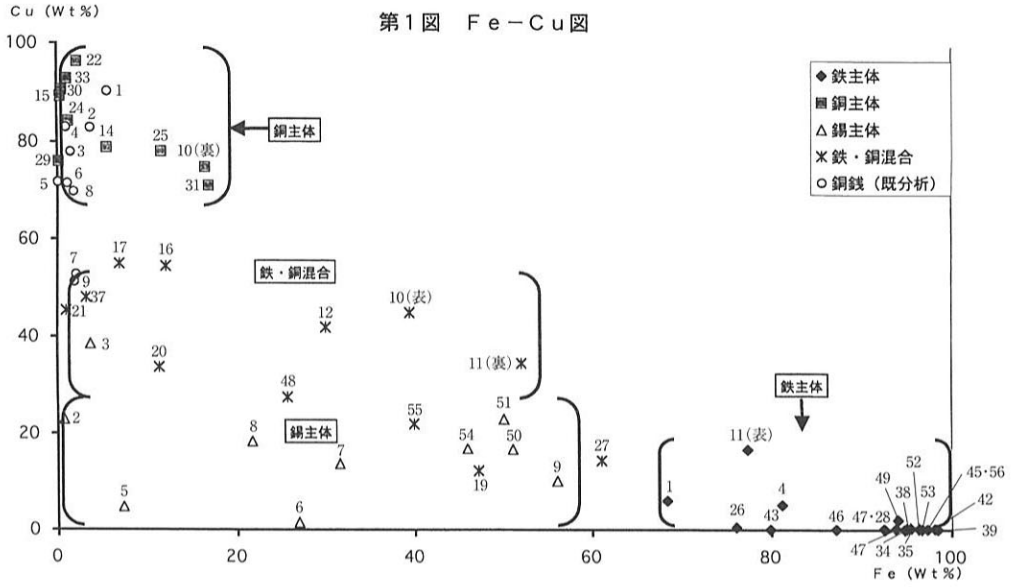
第5表 製品化学分析表 (EDS) に示すように、丹上-10の不明金属製品の表面の保存のよい状態のところでは、Au (金) が37.65%、Agが24.47%、懸仏の表面もAu (金) が15.11%、Agが5.93%検出され、表面が金で鍍金されていることがわかる。

4 まとめ

- 1) 分析した金属は銅主体、鉄主体、鉄・銅混合、錫主体、ケイ素主体の5タイプに分類された。
- 2) 銅主体の領域はCuが70%以上で、製品ではなく銅滓が集中し、丹上遺跡・真福寺遺跡出土製品の中では丹上-10の不明金属製品がこの領域に入るもの。付表1の銅銭の多くはこの領域に入る。
- 3) 鉄主体の領域はFeが70%以上で、製品ではなく鉄滓が集中し、丹上-1の皇宗通寶と、4の嘉祐元寶と丹上-11の懸仏がこの領域にある。
- 4) 鉄・銅混合の領域はCuが10~60%、Feが0~60%、Pbが15~45%で、Pbの含有量が高い銅滓が集中する。この領域に入る丹上遺跡・真福寺遺跡出土の製品はない。しかし、付表1の貞観永寶と乾元大寶の2個の銅銭は類似する組成を示す。
- 5) 錫主体の領域はCuが0~40%、Feが0~60%、Snが10~35%で、丹上遺跡・真福寺遺跡出土の銅銭(丹上-2、3、5、7~9)と丹上-50、51、54の鉄滓が集中し、銅銭と鉄滓との関連性が窺われる。丹上-6の銭種不詳銅銭はSnが50%+と高く、異質であり、丹上-5の天聖元寶はPbが50%+と高く、また丹上-2の□□元寶もPbが40%+と高く両者は異質である。

補注：主要製品分析資料番号と図・写真との対照については、以下の通りである。

資料名	遺跡名	製品名	トレンチ名	層位名	写真番号	図番号	備考
丹上-1	真福寺	銭貨 皇宗通寶	2 E		97-29	—	基盤層直上出土
丹上-2	〃	〃 □□元寶	〃		97-9	—	〃
丹上-3	〃	〃 皇宗通寶	〃	3層	97-28	—	
丹上-4	〃	〃 嘉祐元寶	3 E	〃	97-7	—	
丹上-5	〃	〃 天聖元寶	〃	〃	97-10	—	
丹上-6	〃	〃 □□□□	〃	〃	97-4	—	模鑄銭
丹上-7	〃	〃 □□元□	〃	〃	97-6	—	篆書体 天聖元寶カ
丹上-8	〃	〃 開元通寶	〃	〃	97-8	—	
丹上-9	〃	〃 □□元□	〃	〃	97-5	—	篆書体 皇宗元寶カ
丹上-10	〃	不明金属製品	〃	〃	97-1	92-1	
丹上-11	〃	懸 仏	〃	〃	96-4	92-2	



第 1 表 金属化学分析表

試料名	P	S	Ti	V	Cr	Mn	Fe	Cu	Zn	As	Ag	Sn	Sb	Au	Hg	Pb	Total	備考		
丹上-1	3.1804	1.0808	0.0433	0.1228	0.0000	0.0508	68.4129	6.0177	0.0325	0.0000	0.0000	11.9228	0.4323	0.0000	8.7037	100.0000	製品	皇宗通宝		
丹上-2	3.5473	1.8543	0.0000	0.0000	0.0000	0.0121	0.7950	22.8377	0.0495	0.0000	0.0000	28.3955	0.0000	0.0000	0.0000	42.5788	100.0002	製品	皇宗通宝	
丹上-3	3.4400	1.2793	0.2745	0.0000	0.0000	0.0243	3.7146	38.5121	0.0493	0.0000	0.0000	32.0514	1.2435	0.0000	0.0000	19.4111	100.0001	製品	皇宗通宝	
丹上-4	1.9636	0.6227	0.0832	0.2157	0.0091	0.0749	81.1709	5.1802	0.0000	0.0000	0.0000	4.7380	0.0194	0.1055	0.0373	5.7774	100.0000	製品	嘉祐元宝	
丹上-5	5.3333	1.3980	0.0862	0.0361	0.0000	0.0736	7.3099	4.7248	0.0265	0.0000	0.0000	26.7786	0.0000	0.0000	0.0000	54.6359	100.0001	製品	天聖元宝	
丹上-6	4.7428	1.1457	0.2352	0.0744	0.0000	0.3334	26.8787	1.4601	0.0138	0.0000	0.0000	50.7105	1.4499	0.0315	0.0000	12.9239	99.9999	製品	銅錢	
丹上-7	4.6918	1.1052	0.5334	0.0041	0.0419	0.2032	31.4756	13.7039	0.0037	1.1781	0.0000	26.9780	0.4083	0.0000	0.0000	19.6728	100.0000	製品	銅錢	
丹上-8	4.0809	1.7103	0.2105	0.0419	0.0000	0.1016	21.6539	18.3702	0.0018	0.0000	0.0000	34.0842	0.1429	0.0465	0.0000	18.7462	99.9999	製品	銅錢	
丹上-9	2.5501	0.6703	0.1892	0.0731	0.0000	0.1183	56.1258	10.1743	0.0500	0.0000	0.0000	16.2528	0.5674	0.0000	0.0000	13.2288	100.0001	製品	不明金属製品	
丹上-10(表)	1.0259	1.1607	0.0095	0.0271	0.0058	0.0000	39.4191	44.9020	0.0000	0.0000	0.0000	4.3125	0.3574	0.0000	0.0000	0.7234	0.3485	99.9999	製品	
丹上-10(裏)	4.7216	1.1974	0.2440	0.0040	0.0281	0.0000	16.4829	74.8470	0.0868	1.5565	0.0000	0.0000	0.0000	0.1797	0.0000	0.0000	0.6522	100.0002	製品	不明金属製品
丹上-11(表)	1.8042	0.7210	0.2128	0.0325	0.0000	0.0748	77.3869	16.6495	0.0358	0.2874	0.0000	0.0000	0.0000	0.3632	0.1827	0.0000	0.0000	0.0000	製品	德弘
丹上-11(裏)	7.6570	1.7713	1.1537	0.0113	0.0215	0.1155	52.0881	34.5340	0.0277	0.0474	0.0000	0.0000	0.0000	0.0932	0.0220	2.4572	99.9999	製品	德弘	
丹上-12	1.2332	0.5153	0.1420	0.0000	0.0000	0.0000	29.9313	41.8865	0.0572	18.3578	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	7.3541	100.0000	銅洋	
丹上-13	17.1531	4.1047	1.8481	0.0000	0.0598	0.8949	16.6264	4.1324	0.0000	0.1584	0.0000	55.0003	0.0000	0.0207	0.0000	0.0000	0.0012	100.0000	銅洋	
丹上-14	4.9630	2.7100	0.0708	0.0000	0.0000	0.0130	5.4863	78.8873	0.0357	4.7560	0.0000	0.8835	0.6429	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	銅洋	
丹上-15	1.2692	0.5900	0.0359	0.0000	0.0000	0.0038	0.3601	89.2251	0.0259	4.5991	0.0000	1.0631	0.2798	0.0000	0.0000	2.5459	99.9999	銅洋		
丹上-16	3.1329	1.5367	0.0476	0.0178	0.0559	0.0000	12.1016	54.4614	0.0259	8.1969	0.0000	3.1648	0.4981	0.3247	0.0573	16.3782	99.9998	銅洋		
丹上-17	1.3275	0.7952	0.0136	0.0000	0.0000	0.0000	6.9068	54.9679	0.0244	7.2629	0.1839	2.7049	0.3790	0.0604	0.0000	25.3736	100.0001	銅洋		
丹上-18	27.4748	7.5371	2.8880	0.0401	0.0000	0.1965	55.0741	5.1556	0.0534	0.1868	0.0000	0.0000	0.0000	0.1305	0.0378	25.4200	99.9997	銅洋		
丹上-19	3.3316	1.5052	0.5568	0.0150	0.0345	0.1324	47.2196	12.2109	0.0160	0.0598	5.1474	0.0000	0.3481	0.0000	0.1249	0.0000	43.9952	100.0000	銅洋	
丹上-20	3.3316	1.5052	0.5568	0.0150	0.0345	0.1324	47.2196	12.2109	0.0160	0.0598	5.1474	0.0000	0.3481	0.0000	0.1249	0.0000	43.9952	100.0000	銅洋	
丹上-21	2.7464	2.0761	0.0000	0.0015	0.0000	0.0405	0.9850	45.3295	0.0318	9.6713	0.0000	1.2685	0.3115	0.1799	0.0159	0.0000	99.9999	銅洋		
丹上-22	29.5375	9.4917	3.0327	0.0729	0.0369	1.4640	55.2266	0.5560	0.0425	0.1202	0.0000	0.0000	0.0000	0.1657	0.0000	0.2434	100.0001	銅洋		
丹上-23	1.8520	0.9603	0.0506	0.0429	0.0000	0.0000	0.0037	11.5977	78.1036	0.0946	4.0428	0.0000	0.0000	0.0656	0.0343	0.0000	5.9429	99.9999	銅洋	
丹上-24	1.6737	2.6341	0.0000	0.0642	0.0000	0.0000	19.6776	0.5138	0.0577	0.0783	0.0000	10.5079	0.0000	0.0551	0.0284	0.0000	100.0001	銅洋		
丹上-25	9.3556	2.6341	0.0000	0.0642	0.0000	0.0000	19.6776	0.5138	0.0577	0.0783	0.0000	10.5079	0.0000	0.0551	0.0284	0.0000	100.0001	銅洋		
丹上-26	8.5645	1.8980	0.6285	0.0000	0.0000	0.0000	61.1024	14.3867	0.0000	7.2759	0.0000	0.0872	0.0000	0.0000	0.0000	6.0567	99.9999	銅洋		
丹上-27	4.7857	0.4524	0.1617	0.0030	0.0030	0.9182	92.5483	0.0000	0.0401	0.0857	0.0000	0.0000	0.0000	0.0977	0.0666	0.0000	100.0001	銅洋		
丹上-28	0.1119	0.3654	0.0000	0.0000	0.0114	0.0084	0.1476	75.9787	0.0000	2.0133	0.3285	1.1081	0.1688	0.0000	0.0000	20.7678	99.9999	銅洋		
丹上-29	2.5984	1.2196	0.0302	0.0000	0.0042	0.0000	0.5439	90.5818	0.0000	2.6045	0.0000	0.0000	0.1565	0.0000	0.0000	2.2609	100.0000	銅洋		
丹上-30	6.9157	1.5399	0.9948	0.0000	0.0000	0.6865	16.8757	71.0650	0.0000	1.062	0.0000	1.3613	0.0000	0.0000	0.0000	4.550	100.0001	銅洋		
丹上-31	17.8230	4.5155	2.2068	0.0000	0.0000	0.8357	18.1557	25.0249	0.0000	3.0717	0.0000	0.0000	0.0000	0.0335	0.0015	0.0000	0.1471	100.0000	銅洋	
丹上-32	3.0634	1.4237	0.0000	0.0512	0.0000	0.0199	1.1151	92.7637	0.0000	1.3809	0.0000	0.0000	0.0000	0.0379	0.0494	0.0000	100.0000	銅洋		
丹上-33	2.2620	0.5413	0.3367	0.0472	0.0000	0.0000	94.7259	0.0760	0.0203	0.0000	0.0000	1.9033	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	100.0000	銅洋		
丹上-34	12.8568	3.0289	1.1010	0.1660	0.0000	0.0000	95.0776	0.0372	0.0149	0.0000	0.0000	2.2309	0.0000	0.0202	0.0300	0.0000	100.0001	銅洋		
丹上-35	3.6769	0.9745	0.2201	0.0412	0.0092	0.0552	3.2647	47.9865	0.0000	1.6513	0.0000	3.0774	0.0000	0.1290	0.0000	38.9141	100.0001	銅洋		
丹上-36	2.6766	0.8131	0.0972	0.0125	0.0125	0.0000	94.9296	0.2643	0.0118	0.0441	0.0000	1.1421	0.0000	0.0086	0.0000	0.0000	99.9999	銅		
丹上-37	4.0316	2.9290	0.0661	0.0000	0.0000	0.0000	92.4455	1.1194	0.0000	0.0042	0.0329	0.0000	0.1104	0.0000	0.0237	0.0000	99.9999	銅		
丹上-38	1.9441	0.6961	0.0000	0.0138	0.0356	0.1373	94.6876	0.1968	0.0196	0.0567	0.0000	0.3233	0.0269	0.0552	0.0123	0.0000	99.9999	銅		
丹上-39	4.8566	0.2156	0.0729	0.1688	0.0078	0.0000	98.1317	0.2045	0.0215	0.0513	0.0000	0.0000	0.0000	0.0715	0.0564	0.0000	100.0000	銅		
丹上-40	5.2172	1.4676	10.6456	0.6886	0.1499	1.6794	79.8715	0.0795	0.0320	0.0418	0.2226	0.0000	0.0000	0.0000	0.0278	0.0000	100.0000	銅		
丹上-41	1.5448	0.6339	0.0000	0.0000	0.0398	0.0000	97.1593	0.3300	0.0000	0.0418	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	100.0000	銅		
丹上-42	4.4385	1.8326	0.0000	0.0552	0.0518	0.0000	96.3407	0.2845	0.0320	0.0256	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	100.0000	銅		
丹上-43	3.1874	1.5581	0.0000	0.0496	0.0126	0.0000	93.7974	0.1714	0.0000	0.0000	1.3739	0.0000	0.0000	0.0496	0.0000	0.0000	100.0000	銅		
丹上-44	6.3593	1.6362	0.2113	0.0191	0.0027	0.2565	27.4633	25.6161	0.0000	3.4478	0.5093	5.3490	0.0000	0.0000	0.0000	29.1293	99.9999	銅		
丹上-45	1.2340	0.6716	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	93.9935	2.0188	0.0000	1.0080	0.1475	0.0000	0.0000	0.0876	0.0297	0.8092	99.9999	銅		
丹上-46	4.5833	1.3207	0.2889	0.0048	0.0729	0.0548	51.0942	16.6844	0.0192	0.3057	0.0000	17.8550	0.0000	0.0019	0.0099	7.7042	99.9999	銅		
丹上-47	3.2922	0.8243	0.1415	0.0000	0.0028	0.0000	95.3667	0.3239	0.0013	0.0003	0.0074	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	6.6147	99.9999	銅		
丹上-48	0.5688	0.3089	0.0359	0.1964	0.0523	0.0000	96.6199	0.0813	0.0135	0.0129	0.0000	2.0347	0.0000	0.0602	0.0152	0.0000	100.0000	銅		
丹上-49	4.9511	1.0624	0.3370	0.0000	0.0000	0.0827	45.9389	16.8448	0.0274	3.3194	0.0000	18.3449	0.0000	0.0000	0.0000	23.1960	100.0000	銅		
丹上-50	5.1030	2.3216	0.2116	0.0000	0.0147	0.1150	39.8729	21.9408	0.0295	6.1811	0.0000	1.0138	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	100.0000	銅		
丹上-51	1.3817	0.4328	0.0000	0.0077	0.0238	0.0120	97.2970	0.1231	0.0000	0.0915	0.3722	0.2206	0.0000	0.0378	0.0000	0.0000	100.0002	銅		

第2表 鉍·金屬化學表

試料名	Na	Mg	Al	Si	P	S	K	Ca	Ti	V	Cr	Mn	Fe	Cu	Zn	As	Ag	Sb	Au	Hg	Pb	Total	備考
丹上-1	0.0000	0.2583	5.4094	5.6719	2.1253	0.8743	0.4123	0.2978	0.0425	0.1124	0.0000	0.0455	60.3638	5.0949	0.0275	0.0000	0.0000	7.0118	0.0000	0.0000	11.2824	100.0002	製品 草宗通宝
丹上-2	0.4612	0.0882	2.1672	4.8544	2.6518	1.6544	0.0000	0.2855	0.0000	0.0000	0.0000	0.0114	0.6780	21.2781	0.0461	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	26.4494	100.0002	製品 □五宝
丹上-3	0.0000	0.0000	3.4774	10.2408	1.4023	0.8565	0.7166	0.4320	0.2458	0.0000	0.0000	0.0212	3.2345	32.8104	0.0419	0.0000	0.0000	1.5949	0.0000	0.0000	28.8744	100.0000	製品 品宗通宝
丹上-4	0.0752	0.0079	3.1072	5.9249	0.9094	0.4321	0.1890	0.1880	0.0812	0.2056	0.0087	0.0694	73.8750	4.5355	0.0000	0.0000	0.0000	0.2302	0.0919	0.0325	4.6794	100.0001	製品 嘉祐元宝
丹上-5	0.0561	0.0000	3.0704	8.4273	3.6020	1.0125	0.5174	0.8628	0.0818	0.0313	0.0000	0.0653	6.4778	4.1628	0.0233	0.0000	0.0000	0.9303	0.0000	0.0000	23.2160	100.0002	製品 天聖元宝
丹上-6	0.0000	0.0908	3.8765	17.0675	1.9977	0.4255	0.6864	0.8362	0.1933	0.0573	0.0000	0.2588	20.7371	1.0918	0.0103	0.0000	0.0000	2.0365	0.0234	0.0000	41.9665	100.0001	製品 銅錢
丹上-7	0.0000	0.0520	3.4294	17.7580	0.8706	0.3517	1.1048	0.6414	0.4436	0.0922	0.0341	0.1629	25.0211	10.4445	0.0028	0.8773	0.0000	1.0826	0.0000	0.0000	23.1382	99.9998	製品 銅錢
丹上-8	0.0489	0.0000	3.7625	9.8780	2.0837	1.2656	0.7764	0.7907	0.1898	0.0353	0.0000	0.0091	18.4640	15.3732	0.0015	0.0000	0.0000	1.6706	0.0382	0.0000	30.2180	100.0001	製品 銅錢
丹上-9	0.0865	0.1934	3.1595	10.9018	0.4525	0.2790	0.5339	0.3707	0.1729	0.0647	0.0000	0.1034	48.4770	8.4387	0.0414	0.0000	0.0000	0.9245	0.0000	0.0000	10.8278	99.9999	製品 銅錢
丹上-10(表)	0.0000	0.4039	0.0719	6.7904	0.0000	0.0000	0.0739	0.3043	0.0101	0.0258	0.0056	0.0000	37.0970	41.1298	0.0000	1.4327	0.2095	0.3364	0.3691	0.6524	0.3142	99.9999	製品 不明金屬製品
丹上-10(裏)	0.0000	0.0222	3.6506	17.0786	1.1258	0.5104	0.8345	0.5002	0.2255	0.0036	0.0256	0.0000	14.6366	59.3653	0.0687	1.1467	0.0000	0.0488	0.1325	0.0000	0.4805	100.0001	製品 不明金屬製品
丹上-11(表)	0.0000	0.1389	1.4101	7.0403	0.5484	0.4861	0.2521	0.4101	0.2056	0.0315	0.0000	0.0701	71.0184	14.7102	0.0317	0.2517	0.0000	0.0000	1.1947	0.1600	0.5993	99.9998	製品 懸仏
丹上-11(裏)	0.0000	0.0000	5.1009	26.7872	1.0353	0.4590	2.5330	0.6014	0.9939	0.0094	0.0181	0.0902	38.8287	21.8065	0.0175	0.0279	0.0000	0.2671	0.0550	0.0130	1.4456	99.9999	製品 懸仏
丹上-12	0.0779	0.3747	2.4068	4.9485	0.3594	0.3565	0.1529	0.2272	0.1354	0.0000	0.0000	0.0000	28.0904	38.4718	0.0525	16.5885	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	6.6458	99.9998	銅滓
丹上-13	0.2752	1.8911	7.7631	45.6940	0.8954	0.4646	4.3780	27.9033	0.7377	0.0000	0.0263	0.3834	6.9844	1.5966	0.0000	0.5883	0.0000	0.3470	0.0077	0.0000	0.0005	100.0000	銅滓
丹上-14	0.0000	0.1636	2.3754	4.1764	0.8954	2.4406	0.5980	0.1347	0.0715	0.0000	0.0000	0.0126	5.3285	72.7037	0.0328	4.2274	0.0000	0.8240	0.0000	0.0000	2.3700	100.0001	銅滓
丹上-15	0.0472	0.4144	1.6885	3.2787	0.6992	0.4849	0.1445	0.0289	0.0358	0.0000	0.0000	0.0056	0.3520	84.6230	0.0246	4.2815	0.0000	0.3071	0.0000	0.0000	1.1995	100.0001	銅滓
丹上-16	0.0000	0.2460	1.5731	7.6763	1.6888	1.2318	0.2409	0.3413	0.0465	0.0165	0.0525	0.0000	11.2891	49.5945	0.0236	7.3082	0.0000	0.2897	0.0511	0.0000	2.9329	99.9998	銅滓
丹上-17	0.2665	0.0930	1.2220	5.5069	0.3278	0.5895	0.1478	0.1483	0.0139	0.0000	0.0000	0.0000	6.5560	51.4811	0.0228	6.7151	0.0000	0.0559	0.0000	0.0000	23.4385	100.0000	銅滓
丹上-18	0.4074	0.1590	9.9911	56.4443	1.5206	0.7015	4.6564	0.7864	1.5223	0.0207	0.0000	0.0829	21.0282	1.3597	0.0140	0.0467	0.4414	0.0328	0.0095	0.3058	17.7524	100.0001	銅滓
丹上-19	0.0000	0.1006	9.9936	18.0512	1.6079	0.7930	0.4485	0.8743	0.4453	0.0119	0.0273	0.1022	35.8872	8.7932	0.0115	4.1103	0.0000	0.2474	0.0361	0.0000	36.4146	100.0001	銅滓
丹上-20	0.7074	0.2800	3.4755	11.6943	0.9792	0.9960	0.8765	0.6734	0.2857	0.0000	0.0000	0.0185	9.8585	28.7019	0.0507	4.2778	0.0000	0.1038	0.0000	0.0000	35.0355	100.0001	銅滓
丹上-21	0.0000	0.0000	1.1089	5.0135	1.8285	1.8734	0.0000	0.2638	0.0000	0.0014	0.0000	0.0387	0.9411	43.0192	0.0302	9.1032	0.0000	0.1694	0.0000	0.0000	0.9409	100.0001	銅滓
丹上-22	0.0000	0.1029	1.5793	4.3478	0.1922	1.1157	0.2138	0.0718	0.0000	0.1287	0.0053	0.0125	18.1843	90.6538	0.0251	0.0238	0.2100	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	100.0001	銅滓
丹上-23	0.0000	0.4573	12.7296	55.5115	2.6934	1.4782	4.3279	1.1240	1.4800	0.0350	0.0169	0.5595	19.0570	10.1295	0.0098	0.0273	0.0000	0.0378	0.0000	0.0000	5.5047	100.0000	銅滓
丹上-24	0.0000	0.0000	1.4036	4.5412	1.0434	0.8023	0.2278	0.0072	0.0503	0.0418	0.0000	0.0000	1.2186	79.5738	0.0546	5.1174	0.0000	0.1097	0.0000	0.0000	0.2742	100.0002	銅滓
丹上-25	0.6691	0.7710	5.6865	26.7863	2.2881	1.0778	2.8366	8.4067	0.3036	0.0508	0.0000	0.1353	49.1811	0.2821	0.0316	0.0425	0.0000	0.7391	0.0448	0.0599	0.7246	100.0000	銅滓
丹上-26	0.0895	0.2169	8.8044	29.5965	0.7275	0.3483	1.5536	0.2950	0.5029	0.0000	0.0000	0.0000	40.4628	7.9649	0.0000	3.8036	0.1756	0.2975	0.0000	0.0000	3.1614	99.9999	銅滓
丹上-27	0.3692	0.3361	7.9704	20.4352	0.3477	0.1820	1.1850	0.2906	0.4164	0.0152	0.0027	0.7325	67.4297	0.0000	0.0249	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	100.0000	銅滓
丹上-28	0.0000	0.0355	0.9857	1.1871	0.0000	0.3613	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0112	0.0083	0.1453	74.4379	0.0000	1.9649	0.3243	0.1666	0.0000	0.0000	2.0249	99.9999	銅滓
丹上-29	0.0000	0.0000	2.3538	4.1611	1.8639	1.0761	0.1986	0.0235	0.0293	0.0000	0.0040	0.0000	0.5288	85.1596	0.0000	2.4010	0.0000	0.1163	0.0000	0.0000	0.0000	100.0001	銅滓
丹上-30	0.1947	0.9811	9.3794	24.2384	1.3189	0.3728	1.5197	1.4361	0.8278	0.0000	0.0000	0.5135	13.0570	44.6996	0.0000	0.0579	0.3639	0.1404	0.2205	0.0000	0.2482	99.9999	銅滓
丹上-31	0.5407	0.4564	10.3469	44.8902	1.3267	0.6452	4.9678	3.2507	1.1819	0.0384	0.0000	0.4187	8.8947	10.5483	0.0000	1.1300	0.0000	0.1666	0.0000	0.0000	2.0641	100.0001	銅滓
丹上-32	0.1106	0.2422	1.7012	3.8341	2.3314	1.2629	0.2847	0.2129	0.0000	0.0505	0.0000	0.0000	1.0682	87.0410	0.0000	1.2599	0.0000	0.2339	0.0000	0.0000	0.1342	100.0000	銅滓
丹上-33	0.7518	0.5468	3.3587	10.5840	0.2780	0.1915	0.8253	0.3184	0.0000	0.0454	0.0000	0.0000	80.9746	0.0606	0.0162	0.0000	0.0000	0.0301	0.0393	0.0000	0.0000	99.9998	銅滓
丹上-34	0.5738	0.5134	2.3841	9.5299	2.8388	0.0890	0.5258	1.9094	0.9931	0.0384	0.0203	0.0000	83.4083	0.0308	0.0123	0.0000	0.0000	0.0126	0.0000	0.0000	0.0000	100.0000	銅滓
丹上-35	0.4400	0.2694	12.1428	37.8515	1.2798	0.5652	1.9365	0.2893	0.8288	0.0119	0.0000	0.0000	43.4392	0.0344	0.0097	0.0347	0.7929	0.0613	0.0126	0.0000	29.3619	99.9999	銅滓
丹上-36	0.1854	0.1926	5.1213	15.4871	0.3849	0.3215	1.5839	1.4511	0.1883	0.0336	0.0077	0.0456	2.6897	38.0522	0.0000	1.2557	0.0000	0.7347	0.0980	0.0000	0.0000	100.0000	銅滓
丹上-37	0.1400	0.0761	0.9978	2.1138	0.5056	0.3463	1.1302	1.8336	0.0212	0.0028	0.0000	0.0000	94.5516	0.0710	0.0000	0.0400	0.1024	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	100.0000	銅滓
丹上-38	0.2235	0.0000	1.2785	1.1772	3.7930	2.8416	0.1729	0.0989	0.0665	0.0000	0.0000	0.0000	89.5893	0.1135	0.0000	0.0114	0.3070	0.1977	0.0614	0.0000	0.0000	99.9999	銅滓
丹上-39	0.0000	0.0000	1.2778	1.5669	1.6737	0.6460	1.1802	0.4268	0.0005	0.1373	0.0354	0.1346	91.7838	0.1877	0.0164	0.0235	1.8038	0.1658	0.0000	0.0000	0.0000	100.0000	銅滓
丹上-40	0.0000	0.1733	1.3921	3.5412	0.2627	0.1150	0.0000	0.1045	0.0727	0.0167	0.0077	0.0000	93.6608	0.1907	0.0183	0.0529	0.0000	0.0514	0.1115	0.0000	0.0000	100.0000	銅滓
丹上-41	0.7035	0.4126	4.9794	18.3778	0.5865	0.4989	3.8177	2.6845	9.6669	0.6185	0.1262	1.2600	55.8155	0.0461	0.0124	0.0296	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	100.0000	銅滓
丹上-42	0.0000	0.0569	0.7460	0.9676	1.3023	0.5711	1.2346	0.2556	0.0000	0.0000	0.0408	0.0000	93.9618	0.3041	0.0000	0.0385	0.8393	0.2558	0.0000	0.0000	0.0000	100.0000	銅滓
丹上-43	0.0000	0.0000	0.7461	0.0000	4.3305	1.7866	0.3762	0.0000	0.0015	0.0553	0.0520	0.0000	85.5734	0.0606	0.0043	0.0331	5.7858	0.9309	0.1978	0.0000	0.0000	100.0000	銅滓
丹上-44	0.0000	0.0000	0.7098</																				

第3表 金属化学成分分类表

試料名 鉄主体	P	S	Ti	V	Cr	Mn	Fe	Cu	Zn	As	Ar	Sn	Sb	Au	Hg	Pb	Total	備考	
丹上-39	0.8670	0.4123	0.0202	0.0030	0.0000	0.0000	98.4505	0.0757	0.0000	0.0042	0.0329	0.1104	0.0000	0.0237	0.0000	99.9999	鉄	備考	
丹上-40	0.8566	0.2156	0.0729	0.0168	0.0078	0.0000	98.1317	0.2045	0.0196	0.0567	0.0000	0.3223	0.0000	0.0123	0.0000	99.9999	鉄		
丹上-42	1.3817	0.4328	0.0000	0.0077	0.0238	0.0120	97.2970	0.1231	0.0000	0.0915	0.0372	0.2296	0.0000	0.0378	0.0000	100.0002	鉄		
丹上-43	0.5688	0.3089	0.0359	0.1964	0.0523	0.0000	96.6199	0.0813	0.0135	0.0256	0.0000	2.0347	0.0000	0.0602	0.0000	100.0000	鉄		
丹上-44	2.2176	1.0059	0.0837	0.0000	0.0000	0.0000	95.3657	0.3239	0.0013	0.0003	0.0074	0.0000	0.0000	0.0388	0.0008	100.0000	鉄		
丹上-45	3.2922	0.8243	0.1415	0.0000	0.0228	0.0000	95.0716	0.0000	0.0149	0.0000	0.0000	2.2309	0.0000	0.0202	0.0300	100.0001	鉄		
丹上-38	2.6766	0.8131	0.0972	0.0000	0.0125	0.0000	94.9296	0.2643	0.0118	0.0441	0.0000	1.1421	0.0000	0.0379	0.0494	100.0000	鉄		
丹上-34	2.2620	0.5413	0.3367	0.0472	0.0000	0.0000	93.9935	0.0760	0.0203	0.0000	2.0188	0.0000	0.0876	0.0257	0.0000	100.0000	鉄		
丹上-47	3.1874	1.3581	0.0000	0.0496	0.0126	0.0000	93.7974	0.1714	0.0000	0.0857	0.0000	0.0000	0.0000	0.0138	0.0573	100.0000	鉄		
丹上-28	4.7857	0.9857	0.4524	0.0167	0.0030	0.0182	92.5483	0.1194	0.0000	0.0343	5.7489	0.1338	0.0000	0.1055	0.0248	100.0000	製品	嘉祐元宝	
丹上-40	4.0316	2.9290	0.0601	0.0000	0.0000	0.0000	87.1758	0.0629	0.0044	0.0000	0.0000	4.7380	0.0000	0.0715	0.0564	100.0000	鉄		
丹上-46	4.4385	1.8326	0.0000	0.0552	0.0518	0.0000	87.1758	0.0829	0.0000	0.0000	0.0000	4.7380	0.0000	0.0715	0.0564	100.0000	鉄		
丹上-4	1.9636	0.6227	0.0833	0.2157	0.0091	0.0749	79.8715	0.1695	0.0215	0.0133	0.0000	0.0000	0.0000	1.3637	0.1827	100.0000	製品	懸仏	
丹上-43	5.2172	1.4676	0.1046	0.6886	0.1499	0.0748	77.3869	16.6495	0.0358	0.2874	0.0000	0.5643	0.0000	0.0551	0.0284	100.0001	製品		
丹上-11 (表)	1.8042	0.7210	0.3367	0.0325	0.0000	0.0748	76.0968	0.5138	0.0577	0.0783	0.0000	10.5079	0.0000	0.0551	0.0284	100.0001	製品		
丹上-26	9.3556	2.6341	0.4115	0.0642	0.0000	0.1967	76.0968	0.5138	0.0577	0.0783	0.0000	11.9228	0.0000	0.0551	0.0284	100.0001	製品	皇宗通宝	
丹上-1	3.1804	1.0808	0.0433	0.1228	0.0000	0.0508	68.4129	0.6177	0.0325	0.0000	0.0000	11.9228	0.0000	0.0551	0.0284	100.0001	製品	皇宗通宝	
丹上-1	0.9447	0.2457	0.0000	0.1307	0.0054	0.0127	26.8757	1.4601	0.0138	0.0258	0.0887	0.0000	0.0000	0.0242	0.0159	99.9999	銅洋	備考	
丹上-22	3.0634	1.4237	0.0000	0.0512	0.0000	0.0199	1.1151	92.7657	0.0000	1.3809	0.0000	0.0355	0.0015	0.0000	0.0000	100.0000	銅洋		
丹上-30	2.5984	0.2196	0.0302	0.0000	0.0042	0.0058	0.5439	90.5818	0.0000	2.6045	0.0000	0.0000	0.1565	0.0000	0.0000	100.0000	銅洋		
丹上-15	1.2692	0.5900	0.0359	0.0000	0.0000	0.0058	89.2251	0.0259	0.0259	0.4991	0.0000	1.0631	0.0000	0.0000	0.0000	99.9999	銅洋		
丹上-24	1.8520	0.9603	0.0506	0.0429	0.0000	0.0000	1.2516	84.2181	0.0578	5.2338	0.0000	0.0000	0.0656	0.0343	0.0000	99.9999	銅洋		
丹上-14	4.9630	2.7100	0.0708	0.0000	0.0000	0.0130	5.4863	78.8873	0.0357	4.7560	0.0000	0.8835	0.6429	0.0000	0.0000	100.0002	銅洋		
丹上-25	1.6737	0.7981	0.0000	0.0000	0.0000	0.0937	11.5977	78.1036	0.0946	0.0428	0.0000	0.0000	0.1688	0.0480	0.0642	99.9999	銅洋		
丹上-29	4.7216	1.1974	0.2440	0.0040	0.0281	0.0000	16.4829	74.8470	0.0868	1.5565	0.0000	0.0000	0.0000	0.1797	0.0000	100.0002	製品	不明金属製品	
丹上-31	6.9157	1.5399	0.0948	0.0000	0.0000	0.0665	16.8757	71.0650	0.0000	1.0662	0.0000	1.3613	0.0000	0.0000	0.0000	100.0001	銅洋		
丹上-6	4.7428	1.1457	0.2352	0.0744	0.0000	0.3334	26.8757	1.4601	0.0138	0.0000	0.0887	0.0000	0.0000	0.0242	0.0159	99.9999	銅洋	備考	
丹上-8	4.0809	1.7103	0.2105	0.0419	0.0000	0.1016	21.6539	18.3702	0.0018	0.0000	0.0000	34.0842	1.0429	0.0465	0.0000	18.7462	99.9999	製品	銅銭
丹上-3	3.4400	1.2793	0.2745	0.0000	0.0000	0.0243	3.7146	38.5121	0.0493	0.0000	0.0000	32.0514	1.2435	0.0000	0.0000	19.4111	100.0001	製品	皇宗通宝
丹上-2	3.5473	1.8543	0.0000	0.0000	0.0000	0.0121	0.7250	22.8377	0.0485	0.0000	0.0000	28.3955	0.0000	0.0000	0.0000	42.5788	100.0002	製品	□元宝
丹上-7	4.6918	1.1052	0.5334	0.0041	0.0419	0.0000	2.0332	13.7039	0.0037	1.1781	0.0000	26.9780	0.4083	0.0000	0.0000	19.6728	100.0000	製品	銅銭
丹上-5	5.3333	1.3980	0.0862	0.0361	0.0000	0.0736	7.3099	4.7248	0.0295	0.0000	0.0000	26.2786	0.0972	0.0000	0.0000	54.6359	100.0001	製品	天智元宝
丹上-54	4.9511	1.0624	0.3370	0.0000	0.0000	0.0827	45.9389	16.8442	0.0274	3.3194	0.0000	17.8550	0.0000	0.0019	0.0099	9.0920	100.0000	鉄	
丹上-50	4.5833	1.3207	0.2889	0.0048	0.0729	0.0548	10.1743	10.1743	0.0500	0.0000	0.0000	16.2528	0.5674	0.0000	0.0000	13.2288	100.0001	製品	銅銭
丹上-9	2.5501	0.6703	0.1892	0.0731	0.0030	0.1183	56.1258	10.1743	0.0442	1.9169	0.0000	13.1001	0.0000	0.0000	0.0000	6.6147	99.9999	鉄	
丹上-51	4.0729	0.9545	0.2440	0.0194	0.0000	0.0185	22.9225	22.9225	0.0442	1.9169	0.0000	13.1001	0.0000	0.0000	0.0000	6.6147	99.9999	鉄	
丹上-16	3.1329	1.5367	0.0476	0.0178	0.0000	0.0000	12.1016	54.4614	0.0259	8.1969	0.0000	3.1648	0.4981	0.3247	0.0573	16.3782	99.9998	銅洋	
丹上-17	3.6769	0.9745	0.2201	0.0412	0.0092	0.0552	3.2647	47.9865	0.0000	1.6513	0.0000	3.0774	0.0000	0.1280	0.0000	38.9141	100.0001	銅洋	
丹上-19	1.3275	0.7952	0.0136	0.0000	0.0000	0.0000	6.9068	54.9679	0.0244	7.2629	0.1839	2.7049	0.3790	0.0604	0.0000	25.3736	100.0001	銅洋	
丹上-21	5.3537	1.5423	0.5568	0.0150	0.0345	0.1324	47.2196	12.2109	0.0160	5.8569	0.0000	1.5419	0.0000	0.0514	0.0483	25.4200	99.9997	銅洋	
丹上-21	2.7464	2.0761	0.0000	0.0015	0.0000	0.0405	0.9850	45.3295	0.0318	9.6713	0.0000	1.2685	0.3115	0.1799	0.1026	37.2554	100.0000	銅洋	
丹上-48	6.3593	1.6362	0.2113	0.0191	0.0027	0.2565	27.4633	25.6161	0.0000	3.4478	0.5093	5.3490	0.0000	0.0000	0.0000	29.1293	99.9999	鉄	
丹上-55	5.1030	2.3216	0.2116	0.0000	0.0147	0.1150	39.8729	21.9408	0.0295	6.1811	0.0000	1.0138	0.0000	0.0000	0.0000	23.1960	100.0000	鉄	
丹上-12	1.2332	0.5153	0.1420	0.0000	0.0000	0.0000	29.9313	41.8865	0.0572	18.3578	0.0000	0.5226	0.0000	0.0000	0.0000	7.3541	100.0000	銅洋	
丹上-20	3.3316	1.5062	0.3248	0.0000	0.0058	0.0000	39.4191	44.9020	0.0598	1.3892	4.3125	0.3574	0.0571	7.0617	0.7334	0.3485	99.9999	製品	不明金属製品
丹上-27	8.5645	1.8980	0.6285	0.0000	0.0000	0.0000	61.1024	14.3867	0.0000	7.2759	0.0000	0.0872	0.0000	0.0000	0.0000	2.4572	99.9999	製品	銅銭
丹上-11 (裏)	7.6570	1.7713	1.1537	0.0113	0.0215	0.1155	52.0881	34.5340	0.0277	0.0474	0.0000	0.0000	0.0000	0.0932	0.0220	6.4567	99.9999	製品	懸仏
丹上-23	29.5375	9.4917	3.0327	0.0729	0.0389	1.4640	55.2366	0.5560	0.0425	0.1202	0.0000	0.0000	0.0000	0.1657	0.0000	100.0001	銅洋	備考	
丹上-13	17.1531	4.1047	1.8481	0.0000	0.0590	1.4640	55.2366	0.5560	0.0425	0.1202	0.0000	0.0000	0.0000	0.1657	0.0000	100.0000	銅洋		
丹上-18	27.4748	7.5371	2.8880	0.0401	0.0000	0.8949	16.6264	4.1324	0.0000	0.1584	0.0000	55.0003	0.0000	0.0207	0.0000	100.0000	銅洋		
丹上-32	17.8230	4.5155	2.2068	0.0000	0.0000	0.1965	55.0741	3.1556	0.0534	0.1868	0.0000	0.0000	0.0000	0.1305	0.0378	1.2253	100.0000	銅洋	
丹上-36	12.8568	3.0289	1.1010	0.0160	0.0000	0.8557	18.1757	25.0249	0.0000	3.0717	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	28.3668	100.0001	銅洋	

第4表 炭素主体化学分析表

||
||
||

第5表 製品化学分析表 (EDS)

試料名	Ti	Mn	Fe	Cu	As	Ag	Sn	Sb	Au	Hg	Pb	Total	備考
丹上-1	0.19	4.89	86.77	6.75	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	1.40	100.00	製品 皇宗通宝
丹上-2	0.00	0.56	0.30	22.50	1.30	0.00	27.54	0.00	0.61	0.00	47.18	99.99	製品 □□元宝
丹上-3	0.01	0.61	7.94	17.89	0.82	0.00	57.04	0.00	0.00	0.00	15.69	100.00	製品 皇宗通宝
丹上-4	0.17	1.64	21.14	4.90	1.25	0.00	54.87	0.00	0.00	1.73	14.30	100.00	製品 嘉祐元宝
丹上-5	0.00	0.45	5.46	2.99	1.50	0.00	30.56	0.00	0.00	2.49	56.55	100.00	製品 天聖元宝
丹上-6	0.04	1.67	17.10	3.27	1.79	0.00	66.90	0.00	0.00	0.00	9.23	100.00	製品 銅銭
丹上-7	0.38	1.75	26.83	10.12	5.49	0.00	40.81	0.00	0.00	0.00	14.62	100.00	製品 銅銭
丹上-8	0.00	1.72	22.11	14.91	2.92	0.00	41.61	0.00	0.00	0.00	16.73	100.00	製品 銅銭
丹上-9	0.32	6.06	83.26	5.62	2.12	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	2.61	99.99	製品 銅銭
丹上-10(表)	0.02	0.74	13.03	21.05	2.20	24.47	0.52	0.33	37.65	0.00	0.00	100.01	製品 不明金属製品
丹上-10(裏)	0.17	1.50	21.85	69.94	5.92	0.62	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	100.00	製品 不明金属製品
丹上-11(表)	1.21	0.36	9.57	49.96	17.62	5.93	0.00	0.25	15.11	0.00	0.00	100.01	製品 懸仏
丹上-11(裏)	0.00	5.10	70.53	13.32	5.90	0.93	0.84	0.00	0.00	0.00	3.38	100.00	製品 懸仏

付表-1 銅銭化学分析表

試料名	Cu	Sn	Pb	Zn	Sb	As	Fe	Ag	銅銭名
銅銭-1	90.28	3.20	0.28	0.00	0.00	0.03	5.60	0.00	和銅開珎
銅銭-2	82.96	8.38	1.99	0.00	2.66	0.00	3.74	0.00	和銅開珎
銅銭-3	77.98	2.88	2.04	0.00	1.68	13.68	1.48	0.00	万年通宝
銅銭-4	83.10	4.78	4.65	0.40	0.98	4.98	0.98	0.00	神功開宝
銅銭-5	71.80	1.83	9.92	0.00	0.45	15.02	0.00	0.23	隆平永宝
銅銭-6	71.50	1.48	19.50	0.00	0.00	0.00	1.10	0.00	長年大宝
銅銭-7	52.84	1.00	35.14	0.00	1.24	7.64	2.10	0.00	貞観永宝
銅銭-8	69.84	0.95	16.05	1.03	1.72	8.80	1.81	0.00	延喜通宝
銅銭-9	51.25	0.39	45.26	0.00	0.73	0.30	1.92	0.00	乾元大宝

中口 裕：1974、『銅の考古学』、雄山閣考古学選書4

圖 版

